ロード・オブ・ザ・リング

『指輪物語』完全読本

リン・カーター［著］
荒俣 宏［訳］



この一冊で
『指輪物語』（ロード・オブ・ザ・リング）
のすべてが
わかる！ 決定版！



闇の冥王がいま、蘇ろうとしている——
世界を救うのは、選ばれし宿命の九人の勇者！
キャラクターと世界観
の全てを完全攻略！！

最新刊

角川文庫　定価600円◎本体571円

ロード・オブ・ザ・リング

「指輪物語」完全読本

リン・カーター=著
荒俣 宏=訳



角川文庫 12354

TOLKIEN

A Look Behind the Lord of the Rings

by

Lin Carter

Translated by Hiroshi Aramata
Published in Japan
by
Kadokawa Shoten Publishing Co,. Ltd.

『指輪物語』のなかに愉しみをみつけた人や、あるいはこれからみつける人たちすべてに、この本を捧げる。

そしてとりわけ、この本に接することをずっと前から心待ちにしていてくれた、ジョン・クロッソンに。

序——勇気を与えてくれたファンタジーの復活

本書は、二〇〇二年三月に日本で公開される近年稀(ま)れに見る大河ファンタジー映画『ロード・オブ・ザ・リング』に霊感を与えたJ・R・R・トールキン教授の『指輪物語』三部作について、その物語と背景を詳細に探った解説書である。

とはいえ、本書が書かれたのは今から三十年余も昔のことで、いわばトールキンが力わざをもって世間の目をファンタジーに注目させた「指輪物語の華々しい現役時代」にあたる。それから今日までの長い道のりにあって、トールキン自身が亡くなったり、ファンタジーの勢いが翳(かげ)ったりと、さまざまな浮き沈みがあった。

だが、よく考えてみると、トールキンの作品と主張とは、この三十年近くのあいだにあらゆるジャンルへ広く浸透し、わたしたちが現実と幻想世界の両方を建設的に行き来するためのトレーニングを積ませる力となってきたように思う。

昨今の文学界はゲームやテーマパークといった、他のエンターテインメント分野と連動しながら、ファンタジーを大きな戦略の中軸に据えている。じつはトールキンの三部作がアメリカの若者層のあいだで爆発的に売れるまで、世にいわれる「ファンタジーの復活」という現象は

生まれなかった。コンピュータ・ゲームの「ドラゴン・クエスト」や「ファイナル・ファンタジー」の世界は、トールキンが拓いた道の上に成立したといってもいいのである。

ご存じのように、その昔、物語は神話や民話など大部分がファンタジーの形式にしたがっていた。しかし近代になるにしたがい、リアリズムがファンタジーよりも上位に立つようになった。一九六〇年代ぐらいまで、世界の文学は実存主義やリアリズム、あるいはハードボイルドの黄金時代であって、夢物語のような空想の物語、ファンタジーは、せいぜい「子供の読みもの」として存在が許されるという惨状にあった。信じられない話かもしれないが、これはほんとうのことである。

ところが『指輪物語』の大ヒットによって、事態は一変した。ファンタジーが現代的意味をもつ新しい文学と捉え直され、空想や想像力がリアリズムと対置される位置に上った。当然ながらファンタジーに対する見方は改められた。ファンタジー復活の理論的リーダーとなったトールキンは、本書でも著者リン・カーターが論じているように、「この文学形式にはもう一つの世界を創る力と機能がある」と宣言し、想像力を「創造力」とほぼ同義に定義し直した。二一世紀的にいえばバーチャル・リアリティの意義ともいい替えられるのだが、ファンタジーはいわば人間の意識を変えるための「入口」として、現代人をストレスや拘束感から解放する役割を発揮したのだった。

そして『指輪物語』出現ののち、一九七〇年代から二〇〇二年までの約三十年間に、おびただしい数の傑作ファンタジーが生まれた。また、古いファンタジー作家の作品や、忘れ去られ

た民話や古譚（こたん）にも次々に光が当てられるようになった。これに加えてパソコンの発達とともに「ロールプレーイング・ゲーム」が流行したときも、『指輪物語』の枠組や小道具が「架空世界の創り方」の模範として流用されたのだった。

『指輪物語』が世界的に認知されて以来三十年、架空の世界を物語るファンタジーは、架空どころか、ふつうのリアリズム小説よりもはるかに身近な新しい「準現実小説」になってしまった。そう、トールキンはファンタジー世界の創造を、控えめに「準創造」と呼んだのだが、準創造どころか、「新創造」「超創造」にまで高められたのである。

そして、すべての始まりとなった『指輪物語』が、三十年余を経てファンタジーが日常化した現代に、すばらしい三部作の映画となって帰ってきた。『指輪物語』が生んだ二十世紀末の子どもともいうべきローリング女史の『ハリー・ポッター』シリーズが驚異的に迎えられ、その映画化も大成功をおさめた直後、というタイミングもじつにみごとである。

『指輪物語』は、そのテーマから見てみると、「大人になったハリー・ポッター」の物語と評することのできるような作品である。ハリー・ポッターは、小中学校の教科書や初歩のマニュアルを通して、いわば「義務教育」としての無邪気な魔法を学ぶ。その魔法は教科書のように安心できる「道具」であるから、修めるというよりも学習するだけの技術でよかった。

しかし、『指輪物語』はちがう。魔法の力が実社会で通用し強大な既得権益となったとき、それがいかに人を狂わすか、いかに人の心を傷つけるかを語っている。人は、手にいれた力を捨てられない。やがてはその力に振り回されると分かっていても。そして、不幸はここに始ま

る。

それはちょうど、中学校を卒業して実社会に出たときに少年たちが見る大人たちの不条理な権益社会——それも権力を握っている人々の横暴が幅をきかせている世界——に相当している。『指輪物語』の主人公フロドは、その災いの源を捨てに行く役割を引き受ける。これはまるで、既成のシステムにしがみついてきたために世界が苦境におちいった現在の情況そのものだ。世界を再編し改革するには、既成権力を解体し放棄しなければいけない。

『指輪物語』は、そういう今だからこそ本当に読まれる必要のある物語として新たに注目を集めたのではないだろうか。

このたび新装再刊されるこの「ロード・オブ・ザ・リング『指輪物語』完全読本」では、原書が執筆された一九六九年当時のブームを語る原著者序文に代えて、訳者によるこの新しい序文を用いた。また内容の順序も部分的に入れ替え、現在の読者の良き手引きになることをめざした。

二〇〇二・一・一七　訳者しるす

ロード・オブ・ザ・リング 『指輪物語』完全読本 目次

原著者ノート

わたしは多くの方々から、助力と協力と激励とを得た。それらの人々の助けが、わたし個人の力だけであったならとても望めなかったろう水準にまで、本書を引きあげてくれた。この企画に忍耐と関心をもって接してくれた版元イアン・バランタイン氏に対し、感謝の意をあらわしたい。また、詩人W・H・オーデン氏には数々の教示と助言、ならびに資料の提供を受けた。わたしの良き友であり、ときには共同執筆者ともなってくれるSF作家L・スプレイグ・デ・キャンプ氏には、氏が一九六七年にトールキン宅を訪れた際に受けたトールキン教授の近況と近著に関する私感を、ここにご披露いただいた。『ニーカス』誌の共同編集者であり、現在アメリカ・トールキン協会の選侯（セイン）（『指輪物語』に用いられる用語のしゃれ。「会長」の意）をつとめるエドマンド・R・メスキィス氏には、この企画について当初から関心と激励とをいただき、さらに協会の機関誌である『トールキン・ジャーナル』全巻を寄贈いただいた厚意に対して、そして英国におけるトールキン教授の出版社であるジョージ・アレン&アンウィン社レイナー・アンウィン氏には、必要な資料を提供いただいたことに対して、それぞれ感謝の意をあらわしたい。また、種々の方面でご助力いただ

だいたトールキン協会の多くの会員諸氏、そしてここに名前を挙げられなかった多数の方がたにも、心から感謝したい。

わたしはこの場をかりて、本書がけっして『指輪物語』に関する〝公式論文〟や〝公認論文〟たるを意図するものではないことを、明確にしておきたい。本文のなかではっきり断った、わたし以外の人々の着眼や見解を直接引用している個所を除けば、この本の内容にかかわる責任は——もちろんいかような事実誤認、解釈や強調の誤りをも含めて——ひとえに著者自身にある。本書の内容に、版元であるバランタイン・ブックスの意図が反映していたり、あるいはその点でトールキン教授自身の考えが影響を及ぼしている、とみなされることはわたしの本意でない。

ニューヨーク州ロングアイランド、ホーリスにて

リン・カーター

ロード・オブ・ザ・リング 『指輪物語』完全読本

1　トールキン教授の生活と時代

わたしは多くの土地をさすらった、わたしがこの世に生まれ落ちることによって失った、なつかしい領域と、わたし自身にそっくりな生きものたちとを、捜しもとめて。

バーナード・ショオ

問題なのは人格ではなく、作品である。

ギュスターブ・フローベール

『指輪物語』の作者はJ・R・R・トールキンという。イニシャルを開くとジョン・ロナルド・ロウエル——最後のロウエルがかれのファミリーネームだ。トールキンという名はドイツ

系の名で（教授はドイツ人の子孫なのだが、この事実はW・H・オーデンのいう〝北方もの〟に寄せるかれの生涯変わらない関心を解明する手がかりになるかもしれない）、発音のほうは〝タルキーン〟とか〝トールキン〟とか、人によって微妙に違う。

両親とも、英国はワーウィックシャの北西部にあるバーミンガム出身であるが、トールキン自身は一八九二年一月三日にブルームフォンティンで生まれている。南アフリカ連邦（現在は南アフリカ共和国）の中心部にある一都市だ。父であるアーサー・ロウエル・トールキンが亡くなったのは、かれがまだとても幼かったときだった。母親が子供たち（トールキンには兄弟がひとりいる）を故郷の町に連れて帰ったので、トールキンはバーミンガムで育てられることになった。当時人口百万を優に超えるイングランド最大の地方自治体に数えあげられていたその町で、かれはエドワード六世学校に入学した。

バーミンガムは手工業と工業の世界的中心地であり、煉瓦造りの荒びた家々が並ぶ陰気な街路の上に、煤けた煙を吐きだしている、鋼鉄生産プラントや工場がたくさんあるところだ。わたしは折りにふれて思うのだが、かれが少年時代を過ごしたその陰気で暗い町は、『指輪物語』に出てくるモルドール――荒あらしく灼けつくような砂漠と、草も生えず、動物も住まない平原とでできている恐怖と暗黒の邪悪な土地をイメージしたときのトールキンに、何らかの影響を及ぼしたのではないだろうか。けれどももっと確実なことがある。一八九〇年代後半から一九〇〇年代初期に存在したバーミンガム近郊の緑もかぐわしい原野や丘が、かれの想像から生まれたホビット族の住む静かで平和な土地「ホビット庄」のイメージをふくらませる枠組みを提

供したことだ。そうしたかかわり合いについて、わたしたちはトールキン自身の言葉を聞くことができる。一九六六年三月二日にヘンリー・レズニク（「サタデイ・イーヴニング・ポースト」紙の記事を引き受けた文筆家）と教授とのあいだでおこなわれた大西洋を挟む電話インタビューの際、トールキンは、〝北方もの〟をどういうふうにして書きだしたかと質問された。そのときかれは、次のように答えている。

　そう、わたしの両親はイングランドのバーミンガムで生まれたのですがね、わたしはどうしたわけかあそこ（南アフリカのブルームフォンティン）で生まれてしまいました。しかし、その巡りあわせはこんな結果を生んだのです、つまり、わたしのごく幼いころの記憶はアフリカのそれだけれども、やはり自分にとっては異質な記憶だった、それだものだから故郷へ帰ったときわたしは、イングランドの郊外の風景に対して、なつかしさと、それから初めてそこにたどり着いた人が抱くようなごく個人的な驚き（ワンダー）とを同時に感じたのです。イングランドの田園に帰ったのは、三歳半か四歳のときでした――それはすてきな眺めでしたよ。で、あなたがしきりに知りたがっておられる〈中つ国（ミドルアース）〉の源（みなもと）が、それなのです。あるがままの大地、とりわけ人間の手が加わらない自然の大地、そこに見いだしたわたしの驚きと歓びが、それなのです。[1]

レズニク氏がこのインタビューを基に書きあげた文章（『J・R・R・トールキンのホビッ

ト型世界』一九六六年七月二日付け「サタデイ・イーヴニング・ポースト」紙掲載）のなかで、かれは前述した引用の要旨をまとめ、次のような一文を結論としている――「かれの三部作に出てくる『ホビット庄』はイングランドの田園にその源を持つ、と著者みずから認めて」おり、これによってトールキンは自身の文学上の目的に合致する田園イングランド、すなわち「生涯の主だった関心のひとつ」を創りあげたのだ――と。

バーミンガムはワットとダーウィンの故郷だ。したがって、その町は単に産業革命の発祥地というだけにとどまらず、科学探究の中心地でもあったわけだ。有名な物理学者オリバー・ロッジ卿(きょう)はその町で教壇に立ったし、天王星発見で名高い天文学者ウィリアム・ハーシェル卿も、やはり何年かをバーミンガムで過ごした。

しかし科学と産業は別にしても、バーミンガムが美術史にゆかりのない町というわけではない。なぜなら、その町の大聖堂のためにみごとなステンドグラスを制作した名高いラファエル前派の画家エドワード・バーンジョーンズ卿もまた、バーミンガムを故郷としているからだ。

一九〇四年、トールキンが十二歳のときに母が亡くなった。この時点から以後、かれは兄弟ともども、とあるローマ・カトリックの司祭に育てられることになった。トールキンはエドワード六世の学校を出て、オクスフォードにあるエクセター・カレッジに入学したが、学位を取らないうちに第一次大戦が勃発(ぼっぱつ)した。二十三歳のとき、トールキンはランカシャーのフュージリア連隊に入隊した。

翌年一九一六年、かれはイーデス・ブラット嬢と結婚する。のちに彼女は三人の息子と一人

の娘の母となった。

フュージリア連隊では一九一五年から一九一八年まで軍務に就いたが、ドイツの崩壊と停戦条約の成立をまって故郷に戻り、カレッジに復帰した。一九一九年に文学修士（オクソン）[2]の称号を得た。

若いころトールキンは言語の魅惑にとり憑かれ、それが昂じて新しい言語を作るのが道楽にさえなった。学位を取ってから、教師の職に就くまでの二年間ほどを、名高いオクスフォード英語辞典の編集助手として過ごした。一九二〇年にはリーズ大学の英語学准教授になった。かれの最初の主だった学術論文は、二年後に出版される。『中世英語語彙』（一九二二）がそれだ。一九二四年から二五年にかけては、リーズで英語学教授の地位にいた。この間にかれは、E・V・ゴードンとともに、無名ながらチョーサーの同時代人が書いたとされる十四世紀の代表的な詩編『ガウェイン卿（円卓の騎士の一員でアーサー王の甥）と緑の騎士』の校注本を出版した。ちなみに、わたしがこの文を書きつづっている現在（一九六八年後半）、トールキンはその詩編を現代語に翻訳する作業にかかっている。

一九二五年にかれはリーズを離れ、オクスフォードのペムブローク・カレッジに移った。それから二十年間、ロウリンスン大ならびにボスフォース大のアングロサクソン語教授としてそこにとどまりつづけた。この時期のかれは、自分で創りあげた空想の言葉が通用するにふさわしい土地や国々をこしらえあげることに忙しかった。そして間もなく、そうしたものを実際に使って物語を書きはじめるのだ。一九二六年、トールキンはペムブローク・カレッジの評議員

となった。さらに後年マートン・カレッジのエマースン学会評議員に推され、いうまでもなくかれの母校であるエクセター・カレッジの名誉評議員にも就任した。

ペムブロークでも、歳月は実り多いものだった。アングロサクソン語の講義の合い間をみて、一九三四年には『文献学者としてのチョーサー』を出版し、さらに二年後に『ベーオウルフ、怪物と批評』を公けにしたが、両論文とも反響は大きかった。このころになると、かれは英国でも高い評価を得る文献学者にのし上がっている。文献学というのは、辞書によると、文字で書かれた記録の研究や、その記録の正統性ならびに原本型式（オリジナル）の確認、そして文献の意味の決定をめざす学問のことで、言語学の一分野に属している学問である。トールキンを虜（とりこ）にした言語の魅惑を考えにいれれば、それはかれの仕事としてごく自然な分野だったといえる。

ベーオウルフの研究につづいたのは、まったく別種の仕事だった。一九三七年、トールキンが四十五歳のときに、『ホビットの冒険、あるいは行きて帰りし物語』という児童向けのささやかな本を出版したのだ。これには少し、わけがある。

おそらく一九三五年ごろから数年のあいだ、かれは息子や娘に、みずからこしらえ上げた空想の世界の物語を話して聞かせることに、愉（たの）しみをみつけだしていた。かれが〈中つ国（ミドルアース）〉と呼ぶこの空想の世界（北欧神話の用語を借用しているのだが）と、その言語や風景、英雄たちとその歴史などが、すこしずつかれの関心を占領するようになったのだ。これらの物語を素材にした児童書をはじめて書きだしたのは、オクスフォードの同僚たちに強く勧められたのがきっかけだった。

この仕事にかかっているあいだ、トールキンは当然のことながら、もう一人のオクスフォード学監が残した聖なる足跡をたどりつづけることになった。その学監というのは、トールキンが六歳のときに世を去ったオクスフォード・クライスト・チャーチの数学講師だった。不恰好で恥ずかしがり屋で、おまけにドジスンという厄介な名前をもったこの学監は――ある暑い午後ゴッドストウに向けて川をのぼった折りに、さる友人の三人の娘を歓ばせようと一編の物語を紡ぎあげたとき、文学の歴史にしかるべき位置を占めた。正確な日付けは一八六二年七月四日――断言してもいいが、これは人類の歴史のなかで二番めに栄えある七月四日なのだ。なぜなら後に書物として著され拡張されて、三人の娘のうちのひとりにプレゼントされた一編の即興童話、今日『不思議の国のアリス』として全世界数百万の子供たちに知れわたっている物語が、生まれたからだった（『アリス』のオリジナル版は、ドジスンが手製本のかたちでアリス・リデルという娘に贈ったものである）。

不滅のアリスは、いうまでもないことだが、子供たちに読んで聞かせているうちに出来あがった児童文学の名作として唯一の例ではない。トールキンが九歳だった一九〇一年のクリスマス・シーズンに、スコットランドの劇作家で名前をバリーという人物が、近くに住むディヴィーズ家の子供たちを連れて、ありふれた児童劇を観に行ったことがあった。劇場の席に坐っているあいだに、かれはふと、ちょうど今若い友人たちのために書きはじめている妖精物語を題材に使えば、この程度の劇は自分にだって創れるにちがいない、と考えついた――こうして『ピーター・パン』の構想はできあがった。

同様のことが、トールキン十二歳の一九〇四年五月のある夕方、英国銀行の有能を謳われた

秘書の上にも起きている。かれはかなり長いあいだ、幼い息子アラステア（〝ねずみ〟の愛称で呼ばれた）を歓ばせる子守唄がわりの物語をつくっていたが、その日とつぜん物語のなかに豪胆なヒキガエルを登場させた。あとになって〝ねずみ〟が休暇で家を離れたとき、その物語は、挿絵入りの長い手紙のかたちで先が続けられた。後世『たのしい川べ』として知られる児童文学の最初の何語かが、こうして紙のうえに書きつけられた。

また時代をすこし前にもどして、場所も大洋を横切ってシカゴに移すと、ニューヨークはシラキューズに生まれた四十四歳の紳士で、四人の小さな息子をもつ人物が、みずからの手になる魔法の冒険物語を読んで、子供たちを楽しませた。ボーム氏は、ビジネスマンとしては大成することがなかった。アイルランド風ミュージカル・コメディ執筆から、雑貨店経営や新聞出版まで、かれは驚くほど多方面の仕事に手を伸ばした。そしてむしろ意外な感じさえするのだが、九冊の著書を残していた。そのうちの一冊は商店ウィンドウを飾る美術に関する本、そして別の一冊（かれの処女作）は、鶏の産卵飼育に関する七十一ページそこそこの短い論文だった。

だが、かれの十冊めの本は今までとはいささか違っていた。『オズの魔法使い』がそれだった。

最終的に『ホビットの冒険』として成立した本は、トールキンが四十五歳のときに出版された。当時やはりオクスフォードで教鞭（きょうべん）をとっていたC・S・リュイスは、トールキンを説得し

て原稿を出版社に送らせた。ジョージ・アレン&アンウィン社のロンドン店が出版を引き受けることになった。結果は、不成功ではなかった。
「ニュー・ステイツマン&ネーション」誌は、こう論じている——「小鬼や妖精や竜たちを相手にした冒険を語る、かれのまったく独創的な物語は……広大な別世界の生活の一端をきわめて詳細に知らされるような印象を……与える。完全に現実的で、しかも事実めかした独自の超自然博物誌をそなえた、別世界を」。記事はさらに、新しい妖精族ホビットが小鬼やトロルや妖精といった昔からある種族と同じように本当らしく感じられるのは、本書の勝利である、と指摘している。またロンドンの「タイムズ」誌は「初期英国風土への魅惑的な飛行」と呼んで、その作品を「稀れに見る愉しい本」と推奨している。「オブザーバー」誌のほうは熱狂ぶりをもっとエスカレートさせて、「遠く遥かな昔の広びろとした世界に展開する、小人や妖精や恐ろしい小鬼やトロルたちの冒険談をみごとに描いた、トールキン教授会心の一作……伝説に残る魔物たちの長編物語……旅と魔法の冒険にまつわるエキサイティングな詩譚……息を呑むクライマックスへ盛りあがる」と評している。
　母国イギリスにおける『ホビットの冒険』の成功は、海のこちら側アメリカでも同等以上の反響を喚びおこした。ボストンのホートン・ミフリン社が出したアメリカ版は、たちまちのうちに、その年の児童文学ナンバーワンとして「ヘラルド・トリビューン」賞を獲得した。それ以来アメリカ版は版を重ね、三十年のあいだにたくさんの部数を売りつくすことによって、『メアリー・ポピンズ』や『ドリトル先生』や『床下の小人』と充分に肩を並べる、現代児童

文学のもっとも愛される古典のひとつになった。

　アメリカの妖精物語中で最高最大の人気を誇る『オズの魔法使い』は、出版されてから最初の五十年間というもの、批評家や歴史家や児童書の書評家に、頑固にしかも世界的に無視されつづけ、紹介さえもされず、図書館や学校筋からも軽んじられた（オズを愛したのは、それを心の底にしまいこんだ何百万の子供だけだったのだ）のに反して、トールキンの『ホビットの冒険』は、古今の名作児童文学のなかでも傑作の誉れ高く、また高い評価を得た作品のひとつとして〝選定図書〟名簿の常連に顔を連らねている。そればかりか、出版としても信じられないほどの成功をおさめている。一九六七年十月現在、バランタイン・ブックスで出したペーパーバックだけでも百万部を軽く売りつくしているからだ。

『ホビットの冒険』のあと、トールキンは一九三八年に評論を一編あらわしている。最初セント・アンドルー大学のアンドルー・ラング（英国の作家、民俗学者、童話作家）記念講演で発表された『妖精物語について』（邦訳『ファンタジーの世界』福音館刊）が、それだ（一九六五年に出た単行本『樹と葉』に再録された）。そのほかいくつかの学術論文がつづけて発表されている。そしてトールキンは、一九四五年にペムブロークを去って、オクスフォードで英語学と英文学を講じるマートン教授の職についた。それから一九五九年に退官するまで、その地位にとどまった。『ホビットの冒険』が出版された一九三七年から一九五四年のあいだに、教授が出版したたった二つの物語は、『ニグルの木の葉』という掌編（一九四七年に「ダブリン・レビュー」誌に掲載された）と、単行本として体裁のととのった短いけれど味わい深い中編童話『農夫ジャイルズの冒険』である。こちらの

ほうは一九四九年にイギリスで出版され、翌年ホートン・ミフリン社からアメリカ版が出た。これらの作品はその後、バランタイン・ブックスが出した『トールキン小品集』にまとめて再録されることになる。

けれど『ホビットの冒険』を完成させたことで、〈中つ国〉に対する教授の関心はすべて消え失せてしまったわけではなかった――いや、むしろその逆だ。「ホビットを書きあげたあと、一九三七年の出版を待つまでもなく」（『指輪物語』のバランタイン版に付した教授みずからの序文を眺めるかぎりでは）、かれは空想世界に関する新しい物語に着手した――今度はもっと真面目に取り組んだ大人向けの物語だ。もっと広くてもっと力強いカンヴァスに、かれは絵の具を塗った――かれの生涯における次の十三年間をたっぷり費やすことになった、新しい本に。

かれは『指輪物語』を書きだしたのだ。

原注

（1）同人誌「ニーカス」18号（一九六七年晩春）に掲載されたレズニク＝トールキン・インタビュー原文より。

（2）学位のあとにかっこで示した〃オクソン〃とは、オクスフォード大学を構成す

る二十一のカレッジのどこかで得た学位を意味する。簡単にいえば、オクソニエンシス――つまり「オクスフォードの」という意味のラテン語から来た言葉である。文学修士以外にも、トールキンはいくつかの称号を得ているが、そのなかにはダブリンのユニバーシティ・カレッジから贈られた文学名誉博士の号も含まれる。かれは純粋な博士号をもたないから、かれにふさわしい呼びかたは〝博士〟ではなく、トールキン〝教授〟ということになる。時に〝博士〟と呼ばれる場合もあるけれども、これは正しくない。トールキンはまたF・R・S・L、すなわち英国学士院文学部門会員の頭文字を冠せられることもある。

2　中つ国と『ホビットの冒険』

出(いで)よ、我れと。
智あるがゆえにロンドンに倦(う)んだ紳士淑女よ。
出よ、我れと。
我れらの知る世界すべてに飽いた者たちよ。
我れらここに新しき世界を
持てればなり。

ロード・ダンセイニ『驚異の書(ブック・オブ・ワンダー)』序文

『ホビットの冒険』（瀬田貞二訳、岩波書店）と『指輪物語』（瀬田貞二・田中明子訳、評論社）の舞台、中つ国(ミドルアース)は、歴史をさかのぼること遥か、想像もつかないほど昔——神話のなかにその行為や出来事がかすかながら残されている先史時代の英雄譚(たん)よりも、まだまだ古い太古——の、われらが地球である。

トールキン教授の語るところでは、ホビット庄とその周辺に横たわる西方地域は、現在の北西ヨーロッパを表わしているが、同時にかれは、このコメントをあまり真面目に受け取らないでほしいといっている。この三部作が、後期アトランティス史の忘れられた時代や、それに類した仰々しい古代史の神学風な光景を描いていると考えてはいけないのだ——そんなものはオカルティストに任せておこう。

トールキンは単に物語を語るだけだ。物語るという純粋な愉(たの)しみ以上には、さしたる目的もない。かれの物語のテーマや筋立てをたどって、北欧神話や文学にその源を持つ事例をたくさんみつけだすことは可能だけれど、かれが用意した中つ国の空想地図にヨーロッパと中近東の地図をダブらせて読者に示すつもりなぞ、かれにはさらさらない。たとえば、ファンタジー作家ロバート・E・ハワードがキンメリア人コナン[1]の血沸き肉躍る物語（日本では〈コナン英雄譚〉シリーズとして早川書房、東京創元社から翻訳出版されている）のための舞台としたハイボリア時代の世界を、読者が現在のヨーロッパと比較するのとは、事情がちがうのだ。

中つ国はいったい何を意味するのかという直截(ちょくせつ)な質問に対して、トールキンがぶっきらぼうに答えたように、「それは単に〈世界〉を意味する言葉の古い一例でしかない。それだけのことだ。辞書を見たらいい。それはほかの惑星のことではない」のだ。そしてかれのいったことはまったく正しい——事実、ミドルアースという言葉は、ウェブスターのユニヴァーサル完全版辞典、一九三六年版第二巻に、〝世界〟を意味する死語として載っている。

トールキンは多かれ少なかれ、〝人間の土地〟を表わすためにこの言葉を使っている。ちょ

うど北欧神話が〝ミズガルズ〟という言葉を使うのと同じ感覚でだ。けれどミズガルズは〝中つ国（ミドルアース）〟を意味してはいない。ウェブスターの記載によれば、ミズガルズ（アイスランド語のmidhgardhrから出ている）は文字通り〝中庭〟、すなわち天国と地獄の中間にあって人間の住まう中庭、を意味している。トールキンは〝中つ国（ミドルアース）〟という言葉をみつけるために深遠な調査をする必要がなかった。それは初期英文学のたくさんの作品——たとえば一三六〇年ごろ書かれた『頭韻文によるアーサー王の死』と呼ばれる長詩のような作品に、豊富に使われているからだ。以下の一節もまた、『詩人トマス』という十三世紀のバラッドにあらわれる——。

　彼女（ひめ）言へらく、「トマス、早や今は陽にも月にも、はたまた樹々に生（すま）う木の葉にも暇（いとま）告げよ。この十と二月（ふたつき）のあいだ汝（なれ）はわれとともに行くべきにして、また大地（ミドルアース）は汝を見ることなからん」

トールキンが描く〈第三紀〉の中つ国は、中世のヨーロッパと大した変わりがない。国土のほとんどが大きくて古い森から出来あがっており、森には黒い生きものが棲（す）み、そこここに人間の住む小さな区域——小さな農場や鋤鍬（すきくわ）をいれた畑や小さな町——が、野生の黒い領域のただなかに浮かぶ島々のように静かで素朴な田園社会を点々とかたちづくっている。中つ国は、すこしずつ外縁を探検してその野生地を拓（ひら）き、大海のただなかに位置する失われたヌメノールや北方にのびる誇り高きアルノール、また南方の地に君臨するゴンドールなど、そもそもこの

地から発した遠い昔の気高く高度な文明をかすかに記憶しながら、やがて文明の日盛りへ昇ろうとしつつある世界なのだ。

　けれどそこには、次のような違いがあるとはいえ、ひとつの中世社会を形成してもいる。すなわち、歴史がはじまる前の神話期ギリシアのように、人間はまだ、人間以外の生きものと世界を共有していたのだ。ギリシア神話に出てくる英雄たちが、木精（ドリアド）や水精（ニンフ）やトリトンやフォウヌやサテュロスやケンタウロス、そしてこの世ならぬ血を受けたさまざまな魔物たちが未だに棲みついた風景のなかを動きまわったのと、ちょうど同じように。

　中つ国にあって、人間はたとえばドワーフ小人のような生きものと世界を共有する（世界から見れば、極西から海を渡って来た祖先を持つ人間など、まだ新参者でしかない）。ドワーフ小人は襤褸（ぼろ）をまとった小さな種族で、頭巾（ずきん）のついた外套（がいとう）をまとい、長いふさふさしたあごひげをたくわえ、がに股脚（またあし）をした、不愛想で頑固で頑丈な人びとだ。かれらは外の世界の光よりも、かれらが掘った地下の広間にある穴や洞が好きだ（オズ物語に出てくる〝恐るべき谷間〟のむこうにある小人王国のルゲド王と臣下たちに、よく似ている）。かれらはまた、エルフ小人ともこの世界を分有している――エルフといっても、エリザベス期の空想に描かれた、バターキャップの草のなかで眠り露の水浴を楽しむ華奢（きゃしゃ）で小さな小鬼とは違い、この世ならぬ美しさと智慧（ちえ）と純粋さをもった利発な不死の種族であって、かれらの記憶は、善も悪もまだ中つ国に生まれ出る前の〈遠き日々〉にまでさかのぼる。それからエントという生きものもいる。これはおそらくいちばん昔から存在した種類だ。不気味だけれど親切な〝樹飼い〟が、そうだ。齢（よわい）は

山やまよりもまだ古い。そして、いうまでもなくホビット族がいる。穴をすみかにする、質素だけれど愛想のいい小さな種類で、大地と日常のものに密着した生活を送る、腕のいい庭師たちだ。お好みはタバコと花火、そして誕生日のパーティーと系譜。けれど高貴な英雄的行為や魔法の力や不思議な闘いにはちっとも興味を示さない。またそこには、あらゆる種類の醜くて恐ろしい生きものがいる。ドラゴン、トロル、オーク（これは悪鬼だ）、そのほか獣じみた獰猛な生きものや魔物たち。

『ホビットの冒険』と三部作そのものの両方で中心的な役割を果たすホビット族は、トールキン教授自身の創造になる種族だ（ドワーフやエルフやトロルなど北欧神話から借りてきたものとは違うが、しかしどんな神話にでてくるものとも似ていないエントと同じく）。かれらは、近くに住む種族とはほとんどといっていいくらい交流せず、心地よく肥沃だけれど人に知られぬ故郷の土地に、長年住みついている。『ホビットの冒険』も『指輪物語』（この物語の源泉ということになっているのは、『西境の赤表紙本』と呼ばれる空想のホビット族年代記だ）も、かれらホビットを主役にしている。何人かのホビットが日当たりのよい小さな土地の隠棲生活を棄てて、〈第三紀〉の歴史をかたちづくる大事件に重要な役割を果たすようになるまでの経緯を語る。かれら自身は冒険好きではないけれど、時の変化によって自分たちに押しつけられた役割を演じ切る。なぜならばかれらの土地ホビット庄の孤絶した平穏さが、脅かされたからだ。

世界は暗黒の時代に堕ちていた。それよりも前のデュネダイン期にあっては、偉大な人間の

王たちが海を渡ってヌメノールからこの土地へやって来て、大きな王国を築きあげた。エルフ小人はかれらの教師で、エルフたちの古い智慧や伝説を人間に分け与えた。その時代こそ輝ける黄金の時だったのだ。ところが今はエルフ小人も中つ国から退きはじめ、ゴンドールの誇り高き王たちもおぼろな伝説の霧に隠れてしまった。そして黒い力が東から興った。すでに――三部作に対しては面プロローグともなる『ホビットの冒険』のなかでさえも――読者は黒い力の結集を嗅ぎだせるはずだ。〈偉大なグリーンウッドの森〉と呼ばれた大森林も邪悪な力に屈して、今は〈マークウッド〉すなわち〈闇の森〉という呪わしい名前に変わり、健脚を誇る旅人にとってももはや健康な道すじとはいえなくなった。オーク鬼やトロルたちが群れをつくってふいに現われるようになり、以前には様子をうかがいに来たこともなかった場所にまで、堂々と出没するようになった。そして野生のワルグ（野生の森の縁を越えた彼方に住む邪悪な狼たちが、こう呼ばれる）も、原野をうろつくのだ。

以上がトールキンの物語の冒頭に用意された設定である。

ホビットの冒険

あらゆる種族のうちでも、ホビット族くらいトールキン自身が気に入った創造物はない。かれらはこの厖大な冒険譚を通じて主役を演ずる。『ホビットの冒険』の冒頭を飾るページのなかで、トールキンはこの種族を次のように描写している――。

ホビットは小人です（小人でした、といいましょう。いまは見られませんから）。ドワーフ小人よりも小さくて（ドワーフ小人は、白雪姫に出てくる七人の小人たちの仲間です。ドワーフにはひげがはえていますが、ホビットにはありません）、リリパット小人よりは大きいのです（リリパット小人は、ガリバーの話に出てくる小人国の小人です）。ホビット小人には、魔法の力がありません。といっても、わたしたちのようなまぬけな大きい人間どものこのこやってくれば、象のようなその音を一キロさきからききつけて、こっそり、時をうつさず、すがたをかくすぐらいなことは、あさめしまえです。ホビットは、たいていおなかがふとっています。そして、目もあざやかな（たいてい緑色と黄色の）服を着ています。靴ははきません。それは、足の裏が皮底のようにじょうぶになっていて、おまけにふかふかした茶色の毛がびっしりはえているからです。茶色の毛は頭にもふさふさとはえています（頭のほうの毛はちぢれています）。手足の指は、茶色で長くて、よく動きます。ひとのいい顔つきで、笑う時はこぼれるような笑顔になります（ことにごちそうを食べたあとはにこにこです。ごちそうは、なるべく一日に二度食べます）。

（瀬田貞二訳）

ホビット庄にあるバックの里に住むビルボ・バギンズ氏は典型的なホビットだ。ある意味では尊敬にあたいする郷士で、スミアルにひとりで住み、なにごともあるがままで満足している。

スミアルというのは一種の穴、丘の横にあいた〝ホビット穴〟のこと。そこには丸い前扉があって、把手（とって）がそのまんま中に付いており、あけると、タイル張りの化粧壁や絨毯（じゅうたん）を敷いた床のある円筒形をしたトンネルがつづいている。床はすべて同じ高さにあるけれど（だから昇りも下りもない）そこから枝分かれした小さなトンネル部屋が、たくさんある。そういう部屋は、寝室や地下蔵や食糧庫や物置や台所などをはじめ、いろいろな目的に利用されている。

バギンズ氏が見知らぬ人物――いっしょに冒険に出掛ける仲間をさがしているガンダルフという放浪の魔法使い――から声をかけられたときも、かれは玄関の階段に腰を降ろしてパイプをふかしていた。この物語にはじめて登場してくるガンダルフは、どことなく魅力にあふれた人物だ。かれは〝先のとんがった高い青色の帽子と、長い灰色の外套（がいとう）と、腰の下まで伸びている長くて白いあごひげを取り巻くまっ赤なスカーフと、大きな黒い長沓（ながぐつ）をはいた、小さな年老いた〟人物であって、杖（つえ）にすがりついて歩く。ビルボはこの老魔法使いから、暖かくて心地よいホビット穴を棄ててホビット庄の彼方（かなた）にひろがる野生の土地へ行き不快な冒険を経験せよといわれるが、とても気がすすまないので、何とかはっきり断ろうとする。慇懃（いんぎん）だけれども厄介な老人を追い返すために、かれは次の日大あわてでお茶の会をひらいた。

お茶の時間がやってきたとき、ドアの音に応（こた）えて玄関口に出たビルボは、老魔法使いのかわりに長くて青いあごひげを金色のベルトの下にたくしこんだドワーリンという名のドワーフ小人を、そこにみつける。それから時を置かずに、とても年寄りに見えるバーリンという名の小人がやってくる。バーリンはフンディンの息子で、白いあごひげをたくわえ赤い頭巾を被（かぶ）って

いた。それからキーリとフィーリという青頭巾と銀ベルトと黄色いあごひげをもつ小人が二人でやって来る。その次に残りの一群が押しかけてくるわけだ――ドーリ、ノーリ、オーリ、オインそしてグローイン、ビフール、ボフール、ボンブール、それから昔は山麓の王であったトロールの息子トラインのそのまた息子にあたる偉大なトーリン・オーケンシールドも、やって来た――ぜんぶで十三人のドワーフ小人、さらにその人垣の最後にガンダルフがにやにや笑いながら立っていた。

すっかり気分をこわしたビルボは、この悪い状況をなんとかしようとして、できるかぎり愛想よくふるまった。ドワーフ小人たちは食糧庫から出してきたご馳走に舌つづみを打つけれど、お茶が終わってからみんなで楽器を取りだし、心をとらえる荒あらしい歌をうたって、ホビット穴を音でいっぱいにしてしまう――。

寒き霧まく山なみをこえ、
古き洞穴の地の底をめざして、
われらは夜明け前に旅立たねばならぬ、
青く光る魔の黄金をさがし求めて。

（瀬田貞二訳）

夢見るような思いで、この荒あらしく不気味な歌に聞き入ったビルボは、これまでにほとんど感じたこともなかった血の騒ぎをおぼえ、奇妙に心をときめかせる。「ドワーフたちがうた

うにつれて、ホビットは、たくみのわざと魔法によって作られた美しいものを愛する気持ちが、からだの中をたぎるのを感じました。それは、ドワーフ小人たちの心に巣くうのぞみで、美しいものをはげしく、ねたましくしたう心でした。そると、なにやらトック家の血すじが、心のおくにめざめて、深い山々へいってみたい、松風や滝の音がきいてみたい、洞穴を歩きまわり、杖でなく剣を身につけてみたいという、気持ちがしてきました」（瀬田貞二訳）

　こうしてかれは旅立ち、小馬の背に揺られ十三人の気味わるい小人と年取った魔法使いを道連れにして、山脈の小径を越え、恐ろしい竜や思いもよらない危険にぶつかることになる。どうやら、トーリンの祖父さんの時代に北から来たドワーフ小人が、「はなれ山」の下に住みつき、そこを掘ってトンネルをつくり、さらに大きな広間をこしらえて、そこに金銀財宝を集めて途方もない宝蔵を築きあげたということらしい。けれどその宝物は、スマウグという竜を呼び寄せた。なぜなら（だれもが知っているとおり）竜は、宝物をみつけたりそれを掴んだり、果ては長い年月にわたってそれを護ることが、何よりも好きだからだった。そしてこともあろうに〝もうこれ以上はないほど貪欲で、強くて、しかも邪悪な竜〟スマウグは、ドワーフ小人たちに襲いかかり、かれらを蹴散らし、あるいはそのほとんどを殺してしまう。生きのこった者たちは遠く逃げていったけれど、山の下につくった大きな広間を失った悲しみを忘れなかった。そこでかれらは、ホビット庄でも穏やかさと平和を深く愛することで有名なホビット、ビルボ・バギンズ氏と、正義をめざす冒険が大好きな放浪の魔法使いガンダルフの手を借りて、竜を殺し山脈地域を奪い返そうと思いたったのだ。

こうして波乱万丈の物語が語りはじめられる。かれらは霧ふり山連山を越え、騒々しくて喧嘩(けんか)っぱやいトロル小人の一団の攻撃をからくも遁(のが)れたあと、気のいい、歌好きなエルフ小人の群れと行き会う。そして最後には荒地の縁にたどり着く。そこには西の最後の館たる「エルロンドやかた」がある。エルロンドは〃エルフ小人の王みたいに高貴で美しい貌(かお)をしており、兵士のように強くて、魔法使いのように賢くて、ドワーフ小人の王のように尊敬できる〃人物であった。

エルロンドやかたでしばしの休息をとった一行は、遍歴の旅をつづける。霧ふり山脈を越える小径をたどっているときに、旅人たちはゴブリン鬼(2)の一群に襲われる。おかげでビルボは仲間たちと離ればなれになり、のちにその重要な意味がはっきりすることとなるとある出来ごとに遭遇する。事実、もしもこの小さな出来ごとがなかったなら、『ホビットの冒険』の物語全体は、教授がいうとおり〃たかだか歴史のやがて忘れ去られるべき脚注〃となる程度で終わったはずなのだ。

はるか遠くまでさまよい、しばらく道を失ったビルボは、連山の下にある洞穴にまよいこんだ。そしてそこで——闇のなかを手さぐりしているうちに——ひとつの指輪をみつけ、それを無造作にポケットへ滑りこませる。しばらく後になって、冷たく黒い湖のまんなかに浮いた岩のうえで、かれはゴクリ（映画ではゴラム）と自称するいやらしい堕落した小さな生きものに巡り会う。このおぞましい小さな生きものは、もう何年も、闇と冷気のなかで魚を捕って生までむさぼり食いながら、独り暮らしをつづけていた。かれが持つひとつの歓びというのは、み

ずから〝誕生日の贈り物〟と呼ぶ魔法の金の指輪を秘密の宝ものにしていることで、この指輪をはめると姿が消えるのだった。ゴクリが愛したのはただひとつ、この〝宝もの〟なのである。そしてもちろん、ビルボがたまたま拾いあげてポケットに滑りこませた指輪こそが、それだった。

もしもビルボが差していた輝かしいエルフの剣がなかったなら、ゴクリはすぐにもかれを襲っていたろう。そこで時間かせぎに、ゴクリは謎かけでビルボに挑みかかる。しかしビルボはトリックを使って、その謎かけに勝ちをおさめる。狡猾な小怪獣ゴクリは、もしビルボが自分に解けない謎を出せたら、そのときは洞穴を出る道へ案内してやろう、と約束する。ただし、逆にかれがビルボを負かしたら、殺して食ってしまう積もりだった。最後の場面でビルボはポケットをまさぐり、拾ったまま忘れていた指輪にぶつかって、こう叫ぶ——「このポケットにあるものは、何だ？」（瀬田貞二訳）。ゴクリは想像することさえできない。こうしてビルボは不幸な生きものに約束を守らせる。けれどゴクリの肚は黒く、腐りはて、しかも裏切りを秘めていた。こっそり闇にまぎれて抜けだし、かれの〝宝もの〟である誕生日の贈り物をしまっておいた隠し穴へ行ってみる。ところが、宝ものがなくなっているではないか。ビルボにいっぱい喰わされたことを知ったゴクリは、ホビットを八つ裂きにしようと元の穴に這いもどっていく。しかしビルボは逃げ、その指輪がかれの指に偶然はまりこんだとたん、体まで見えなくなってしまう。失くした〝宝もの〟のことをぶつぶつ口に出して泣いているゴクリの声を横で聞きながら、ビルボはこれが魔法の指輪であることを理解する。かれはその護符を使ってゴクリ

の手をくぐり抜け、「どろぼう、どろぼう、どろぼううう！　バギンズめ！　にくむ、にくむ、いつまでも、にくむぅ！」（瀬田貞二訳）と泣き叫びながら追いかけてくる復讐に燃えた小さな怪物を置いて、山を遁れでた。

ビルボは仲間と合流するが、奇妙な罪の意識を感じて、かれらに指輪の話を打ちあけない。ところがガンダルフは、ビルボの不器用な作り話にだまされはしなかった。その年取った魔法使いは〃力の指輪〃のことをすべて知りつくしている。この冒険旅行はまもなく打ちあげになったために、みんなでそれについて詳しい話し合いをする時間が持てなかったけれど、ガンダルフだけは後年になっても指輪に関心を持ちつづけ、ビルボから目を離さなかった。

ほんとうに、ここから終幕に至る『ホビットの冒険』の展開は渦のように急激に過ぎていくので、出来ごとの顚末を手みじかに要約することしかできない。旅人たちは、「はなれ山」まであと一歩に迫ったとき、野蛮なワーグの攻撃を受ける。また、ゴブリンを相手に苦戦を強いられるが、親切な鷲のおかげで山から救いだされ、北の森で最大を誇る暗くて神秘的な「闇の森」にはいっても巨大な蜘蛛との恐ろしい対決に勝ちをおさめる。

かれらは山に近づいた。そこでビルボが様子をうかがい、竜のすがたを垣間見る。「そこに、スマウグが寝ていました。大きな赤金色の竜は、ぐっすり眠っていました。ごうごういう音が口と鼻からふき出し、煙がぽっぽっと流れ出ていますが、火は、眠っているあいだ弱まっています。大きなからだの下にも、手足の下にも、とぐろを巻いた長い尻尾の下にも、さらに竜のまわり一たいにも、暗くて見えない床の方まで四方八方に、宝石類の山が無数にかさなり、そ

れらのめずらしい石や宝石、細工した金や純金や銀の山づみのむれがみな、赤い光に赤くそまっています。スマウグは、はかり知れないほど大きいコウモリのようにつばさをたたんで、からだの一部を横ざまにむけて寝ていましたので、ホビットは、その胸と長い白っぽい腹を見ることができました」（瀬田貞二訳）

　ビルボは魅せられて、その途方もない怪物をみつめた。竜のやや軟かい下腹が硬い貴石で保護されているのを発見した――〝ダイヤモンドの胴衣〟といってもよかった。けれどもまた、貴玉に護られていないスマウグの左胸のくぼみには大きな当て衣があることも知った。

　スマウグが睡りから目ざめると、ビルボはかれと対話をはじめる。ところが、すがたを見せぬ相手を見ることができないために、竜は怒りだした。かれは吼え、「かれの両眼の光がまっ赤ないなずまのように、床から天井まで広間じゅうをかっと照らし」た。竜は小人たちの到来に嘲いを返す。「ふくしゅうとな。山の下の王は、死んだ。して、ふくしゅうをもくろむほどの勇気のあるそのあとつぎは、どこにいるのか？　谷間の町の領主ギリオンも死んだ。おれは、あの町の者どもを、ヒツジのむれにはいったオオカミのようにくらいつくした。おれに近づこうとする勇気のある、ギリオンの孫どもは、どこにいるのか？　おれは、どこでもだれでも殺してやる。おれにはむかう者はない。そのかみの戦士たちさえ、うちたおしたのだ。きょうこのごろはあれほどの戦士たちはいまい。しかも、あの時おれは、ひわひわとして、若かった。今おれは年おいて、強いのだ」そういいながら、目を輝かすのだ。「おれのうろこは十重のたて、また歯はつるぎ、爪はやり、尾の一ふりは雷をおこし、つばさはあらしをよび、はく息は、

すなわち死だ！」（「　」内、瀬田貞二訳）
鞭打つような怒りに気を昂ぶらせた竜は、山を離れて、近くにある人間の町を襲う。トールキンはその場面を活き活きと描写する――。

ひゅうひゅうという音がきこえました。赤い光が、むれだつ岩のとがりをなぜました。竜が、やってきました。
一同には、荷物をひきこんで、トンネルへにげこむだけが、やっとでした。そこへスマウグが北の方から音をたてて飛びながら、炎で斜面をなめ、あらしのように大きなつばさをはためかせて、おりてきました。竜のあついいぶきは、岩戸の前の草を枯れちぢませ、あけ残しておいたすきまから吹きいって、かくれふしているドワーフたちをあぶりました。炎の舌がめらめらあがるたびに、黒い岩の影がちらちらおどりました。それから、竜が通りすぎて、くらやみがもどりました。小馬たちがおそれのいなきをあげて、つなを切り、あばれて走り去りました。竜は身をひるがえしておそいかかり、小馬たちのあとを追って行ってしまいました。
（瀬田貞二訳）

スマウグを殺すのは、人間のひとりでバルドという射手だ。竜の左胸のくぼみにある無防備の場所、ちょうどビルボが目をつけたその点に、かれは黒い矢を射とおす。
こうしてトーリンは山の下の王になる。そして、宝物のなかから思いおもいの分け前を要求

する色々な人びとと多少のいさかいを起こしたあげく、一時は人間とエルフに山を取り囲まれ、その囲みを破るためにいとこのダインを呼び寄せなければならなくなるが、その危機をよく乗り越え、祖先の残した宝物を取り返すことに成功する。

けれど結果的にこの最後のいさかいは、多かれ少なかれ相互の譲歩があって初めて成り立った。こうして物語の登場人物たちはそれぞれの道をたどることになる。ビルボは宝の分け前——と、それから指輪をたずさえ、最愛のホビット庄に戻る。

この『ホビットの冒険』は、これだけでも充分に満喫できる読みものだけれど、三部作そのものに対しては単行本一冊分の〝前書き〟という役割を担っている。この一冊が舞台を設定し、『指輪物語』のなかでもっと詳しく描かれるテーマのために必要な背景を、かたちづくる。そしてもちろん『指輪物語』は、指輪とその探索と、さらに加えてひとたびそれが大いなる力の指輪——光の勢力と闇の勢力とのあいだにたたかわれる途方もない死闘の鍵を握る護符〝一つの指輪〟——であることが発見されたときに、それをめぐって起こる闘いと冒険とを、心ゆくまで語りつくす物語なのである。

原注

(1) コナンの物語にあっては——ついでながら、トールキンはハワードのこの作品群を読んでいて、けっこう楽しめるものだといったことがある——〝スティジア〟の土地は先史時代のエジプトと同一視されるように作られている。同様にして〝ベンダーヤ〟はインド、〝アズガード〟はスカンジナビア半島、〝ヒルカニア〟はロシア、などなど。これらアメリカのパルプ雑誌「ウィアード・テールズ」を初出とするコナン物語は、その徹底したどぎつさと血まみれぶりにおいて——その絢爛(けんらん)さと完璧(かんぺき)な娯楽性において——パルプ小説の頂点をきわめるものといえる。

(2) トールキン教授はそうした生きもの、つまりモンドールの卑しい下僕を『ホビットの冒険』のなかではゴブリンと呼んでいる。いっぽう『指輪物語』では同種類の生きものを指すのにエルフ語の〝オーク〟を使っている。

3 『旅の仲間』の物語

山の空気は黄昏（たそがれ）にこそ清（すが）しい。
二羽ずつ群れた鳥が帰る。
こうした情景に然（さ）る深遠な意味が宿る。
しかしそれを言いあらわそうとする瞬間に、言葉はふいに意味を失う。

アーサー・ウェイリイ訳『道教（タオイズム）』

本編『指輪物語』三部作の第一巻は『旅の仲間』と題されている。ビルボがホビット庄に戻って六十年経ったところから、物語は始まる。今はもうすっかり年老いたホビットのかれは、百十一歳めの誕生日をこれ以上はないほど突飛な方法で祝うことにしよう、と思いたつ。つまり指輪の魔力で消えることだ。ビルボは最後の休日を楽しむために旅立つ決心をするが——事

実は永久にいなくなるつもりなのだ——「死ぬ前にもういちど荒地を見たいのだ。それにあの連山も」と、ガンダルフに告げる。かれはすでに若いフロド・バギンズを養子にしており、バッグの里の土地と指輪をゆずり渡す。そういうわけで、まったく息を呑むように盛大な誕生パーティーのただなか、ビルボは急に立ちあがって、もうホビット庄には戻ってこないむねの決心を、古い友人や隣人たちに宣言する。それから指輪を取りだして指にはめると、人びとの前から掻き消すようにいなくなった。

ところで、この計画には最初からガンダルフがいちまい嚙んでいて、老ホビットがほんとうに指輪をフロドにゆずり渡すように手を打っていた。なぜならガンダルフは、この見るからに役に立ちそうもない護符のことで最近ますます頭を痛めていたからだ。かれは、それがひどく有名な指輪——大昔に邪悪な王が創った「一つの指輪」、つまり偉大なサウロンの指輪ではないかと疑っていた。けれど目下のところは、かれとしても事態を見まもっているより仕方がなかった。

こうして数年後、ガンダルフはみずからの疑惑を養子のフロドに打ちあけなければならない状態におちいった。世間に奇妙なものが姿をあらわすようになり、暗い困難な日の到来が噂にのぼりはじめたからだ。もともと、「闇の森」の暗く陰気な茂みに集っていた邪悪な力は、世の中の善のために力を尽くす「白い会議」と呼ばれる強大な魔法使いの一群やエルフの王たちに、追い出しを喰わされていた。ところが邪悪はなかなか根絶やしにできない。闇の力が、その故地であるモルドールの東方にあらわれた。そして今や、闇の力は増大の一途をたどってい

た。たくみに武装したトロルの一団も見かけられるようになった。竜が出てきたという噂もあった。「黒い塔」が再建され、ふたたび邪悪な力の足場ができあがった。東にも南にも戦争が起こり、恐怖がひろがりだしている。

ガンダルフはめずらしく自分のほうからホビット庄を訪れ、養子のフロドに以上のような疑念を打ちあける。かれがいいだして、指輪がほんとうに恐ろしくて偉大な「力の指輪」かどうかテストすることになる。いくつかの「力の指輪」が遠い昔につくりだされたのだけれど、そのうちの三つがエルフに、七つがドワーフに、九つが地球の人間に、そしてもう一つが冥王みずからに授けられていた。このうちビルボがみつけ、今フロドが所有している指輪というのは、まさにそれ――一つの指輪だったのだ。

一つの指輪は、すべてを統べ、
一つの指輪は、すべてを見つけ、
一つの指輪は、すべてを捕えて、
くらやみのなかにつなぎとめる。
影横たわるモルドールの国に。

(瀬田貞二・田中明子訳)

そうなのだ、これは遠いむかし闇の勢力が世界の覇権をかけて人間とエルフに闘いを挑んだとき、闇の王サウロンの力の源となった「一つの指輪」なのだ。むかしサウロンを討ち負かし

たのはエルフ王ギル＝ガラドと西国のエレンディルだったが、二人ともその闘いのさなかに死んだ。けれどエレンディルの息子イシルドゥアは、サウロンに押しつぶされたときこの闇の王の手から指輪を切りとった。その後まもなくして、イシルドゥアがオーク鬼に待ち伏せされて家臣をすべて殺されたとき、指輪は失われた。かれが大河アンドゥインに飛びこんだとき、指輪はその指から抜け落ちたのだった。オーク鬼はかれをみつけて矢で射殺してしまった。もう指輪も出てこない。また、失われたものが二度と現われないとはいい切れない。サウロンは討ち払われ、その魂も遠くへ遁れ、力を貯めながら何年か表にあらわれなかったけれど、「闇の森」でふたたび形を結びはじめたかれの影は、今モルドールへ還ってきていた。しかも指輪は、アンドゥインの堤に生きる手先が器用で足音をたてずに走れるホビット族の血縁者、デアゴルという人物に拾われた。デアゴルは釣をしていてそれをみつけた。けれど友だちのスメアゴルがみていた。スメアゴルは欲に目がくらみ、ついに友人のデアゴルを殺してそれを奪う。かれは指輪に魅惑され心がゆがんだのだ。指輪を手にいれて長くもっていると、誰もがなる病だった。目にみえない力を武器として手に入れたスメアゴルは邪悪になり、盗癖がつき、そのうちに独りごとを口走ったり「ごくり、ごくり」と耳ざわりな音を出して喘ぐようになる。その結果、いっしょに暮らしていた村人たちはかれに敵意を向け、かれを呪い、ホビット穴からスメアゴルを追い出してしまう。かれは自分をゴクリと名付け、川をのぼって連山に迷いこみ、のちにビルボと出会うことになる暗い連山の穴までやって来る。

そのゴクリだが、ビルボに奪われた指輪をしつこく追いかけ、それを探しだそうという欲望をもちつづけ、探索の結果ついにモルドールの辺境にまで入り込んだのだ。この事態を前に、ガンダルフもすべてをフロドに知らせざるを得なくなる。いっぽう新しく立ち上がりはしたものの、指輪を失って大きく力の弱まった黒い力は、これまでホビット族とホビット庄の様子を調べあげていた。「黒の乗手(ブラック・ライダー)」はホビット庄の辺境地帯に出没しはじめ、かれらの恐ろしい主人に代わって、指輪を取り戻すために群れをなしてホビットの土地に侵入してくるのも、すでに時間の問題だった。

フロドは危機を感じ、平静を失う。もし、このままホビット庄にとどまっていれば、仲間うちから邪悪な敵に力を貸す裏切り者を出しかねない。かれは指輪をガンダルフに譲ろうとするが、魔術師は恐ろしげな声をあげて辞退する。「だめじゃ!……その魔力が加わればわしの力はあまりにも強大な怖るべきものになる。そして指輪のほうはさらに大きな、さらに致命的な力を得て、わしに臨(のぞ)むのじゃ……誘惑せんでくれ! なぜならわしは冥王その人のようになりたくないからじゃ。しかし、指輪がわしの心を誘うとすれば、憐(あわ)れみからじゃ。弱きを憐れみ、善をなす力がほしいからじゃ。わしを誘惑せんでくれ! わしにはそれを受け取る勇気はない。それを使わないで、ただ保管しておくことさえ無理じゃ。それを思うさま使ってみたいという気持ちは、わしの力では抗しきれないほど大きくなるじゃろうから」(瀬田貞二・田中明子訳)

指輪を黒い敵の目から隠しておくといっても、長い期間はむりな話だ。しかし、それを破壊してしまうことならできる。だが不運なことに、指輪は、もともとそれが作られた炎の燃えさ

かるかまどに投げこまないかぎり、どうやっても破壊できない。しかもそのかまどは闇の領域モルドールの地そのものにあるのだ。ガンダルフはフロドに向かって、エルロンドやかたの立つリベンデル（裂け谷）に至る道を旅して行くこと、そしてホビット庄にはとうぶん戻らないようにすることを、勧告する。そこへ行けば「白い会議」が良い知恵を授けてくれるだろうから、とかれは教えた。

そういうわけで、ある闇夜のこと、フロドは指輪をたずさえ、サムワイズ（サム）・ギャムジー、メリアドク（メリー）・ブランディバック、そしてペレグリン（ピピン）・トゥックという三人の若いホビット仲間と一緒に、ホビット庄を離れていった。この危険に満ちた旅は、まず四人をホビット庄の辺境にある森林地帯へとみちびくが、その土地でかれらは「黒の乗手」の待ち伏せに遭い、あやうく難をのがれたそのあとで親切なエルフの一族と巡り会う。それからまた、陽気で、歌好きで、いつも幸せな、トム・ボンバディルという名の人物のおかげで、邪悪な樹の攻撃からも救われる。人間でもホビットでも、ドワーフでもエルフでもないトムは、純粋な善の人格化であって、時そのものと同じように古い。たとえば、かれは次のようにいう――。

わたしは年寄りだ。最年長、それがわたしの正体だ。いいかね、皆の衆、トムは川や木よりも先にここにいた。トムは最初に降った雨の粒、最初に実ったどんぐりの実を憶えている。……エルフたちが西方へ渡り始めた時、トムはすでにここにいた。……かれは星々

の下の暗闇が恐れを知らなかった頃のことを知っている――外の世界から冥王が来る以前のことだ。
（瀬田貞二・田中明子訳）

古代の塚のなかで、塚の重みをうけて動けなくなったホビットたちが、トムに救われる恐ろしい場面のあとで、かれらはブリーにたどりつき〝躍る小馬亭〟という名の宿屋でひと息いれる。しかしそこで、こちらを窺（うかが）っている奇妙な人間がいることに気づく――。

壁に近い暗がりにすわっている、変わった様子の日焼けした男が、やはり熱心にホビットたちの話に聞き耳を立てているのに気がつきました。かれは背の高いふたつきの大ジョッキを前に置き、珍しい彫りものを施した柄の長いパイプをふかしていました。前に伸ばされた両脚には、かれによく似合うしなやかな皮の長いブーツを穿（は）いていましたが、それはかなり穿き古したもので、その上泥がこびりついていました。旅に汚れた厚地の濃い緑のマントをぴったり身にまとい、これほど部屋が暖かいのに、顔が隠れるくらい目深に頭巾をかぶっていました。それでも、ホビットたちをじっと見守っている時のかれの目の輝きを、フロドは見てとることができました。
（瀬田貞二・田中明子訳）

宿の主人（おやじ）は、あの異邦人について「あの人は放浪の民――わしども野伏（のぶせ）といっとりますが……本当の名前はなんというのか、わしも耳にしたことがごぜえません。しかしこのあたりでは、

馳夫（はせお）ちう名前で知られております」（瀬田貞二・田中明子訳）と教えてくれる。この主人はまた、ガンダルフからの手紙をフロドに渡してくれるが、その手紙には次のように書いてあった。「旅の途中で、わしの友人の一人に会われるかもしれぬ。かれは人間で、やせていて、色浅黒く、背が高い。馳夫と呼ばれることもある」（瀬田貞二・田中明子訳）。かれの本当の名はアラゴルンというのだ。その手紙はまた、なにやら謎めいた詩の断片をひとつ引用しており、その一部は次のように読めた。

灰の中から火はよみがえり、
影から光がさしいづるだろう。
折れた刃（やいば）は、新たに研がれ、
無冠の者が、また王となろう。

（瀬田貞二・田中明子訳）

こうして野伏のストライダー、すなわち〝馳夫〟を案内役に、旅の仲間はリベンデルめざして旅だつ。目的地にはガンダルフが待っているはずなのだ。〝馳夫〟（あるいは自称をアラゴルンという）は旅の仲間に古い伝説を話してくれる。ギル＝ガラドとエレンディルについての話、それから白い娘エルウィングと結婚し、後に西方世界と呼ばれるようになる旧土ヌメノールの王たちをもうけたエアレンディルの古譚を。途中で「黒の乗手」の一群に襲われ、魔法の一撃を受けたフロドが失神してしまうことを除けば、旅の仲間はどうやら無事にリベンデルへたど

り着けた。そこにはガンダルフが待っていて、アラゴルンこそは太古に海を渡ってやって来た偉大な王の一族で「西の民」と呼ばれるドゥネダインの血を引く者であることを、フロドに打ちあける。

指輪の問題を話しあうために、リベンデルで会議が召集される。そこへエルフ小人の使節がやって来る――そのなかには「背が高く、体はまっ直」なエルフの偉大な王子グロールフィンデルの顔もあった――「髪は輝く金髪、顔は美しく若々しく恐れを知らず、喜びに満ちていました。目もとは晴れやかながら鋭い光をたたえ、声はまるで楽の音のよう。額には知恵が宿り、手には力がひめられていました」（瀬田貞二・田中明子訳）。そこにはまた、『ホビットの冒険』でビルボの道連れとして登場したドワーフ小人のひとりグローインと、かれの息子ギムリもやってくる。それから、緑と茶色の服を着こんだレゴラスという名の不思議なエルフもやって来る――かれの父で「闇の森」の北に住むエルフの王スランドゥイルからの伝言を、たずさえてきたのだ。ほかの者たちとはすこし離れたところに腰かけたのは、美しく高貴な貌をもち、黒髪と灰色の目の、しかも誇り高く厳しい目付きをした背の高い人間だった。南から来たボロミアである。半エルフのエルロンドは、魔術師サウロンと力の指輪のこと、それからはるか昔世界が〈第二紀〉と呼ばれていたころに指輪が作られたその経緯について、話しはじめる。

かれはヌメノールについて語りました。その栄華と没落を語り、あらしの翼に運ばれて、大海原のかなたから人間の王たちが中つ国に帰還したことを語りました。やがて丈高きエ

レンディルと、力すぐれたその息子たち、イシルドゥアとアナリオンは偉大な統治者となり、アルノールに北方王国を作り、アンドゥインの河口をさかのぼったゴンドールに南方王国を作りました。しかしモルドールのサウロンを攻めるところとなって、ここにかれらはエルフと人間との最後の同盟を結び、ギル＝ガラドとエレンディルの軍勢はアルノールに呼び集められました。

（瀬田貞二・田中明子訳）

そしてエルロンドはかれの信じがたい年齢を明らかにする。というのも、エルフ小人は不死だけれど、半エルフにすぎないハーフエルヴィンたちですら驚くほど長生きができるからであった。

「わたしの記憶は上古の時代にまでさかのぼる。エアレンディルがわが父である。わが父は没落前のゴンドリンで生まれた。わが母は、ドリアスのルシアンの息子、ディオルの娘、エルウィングである。わたしは西方世界の三つの時代を見てきた。多くの敗北と、多くの空しい勝利を見てきた。わたしはギル＝ガラドの伝令を勤め、かれの軍勢とともに進軍した。わたしは、モルドールの黒門の前でくり広げられたダゴルラドの戦いにも加わった。この戦いはわが方の勝利となった。ギル＝ガラドの槍アイグロスと、エレンディルの剣ナルシルには、何者も抗しがたかったから。わたしはオロドルインの山腹で戦われた最後の合戦もこの目で見た。その戦いで、ギル＝ガラドは死に、エレンディルは倒れ、名剣ナル

シルはかれの体の下で二つに折れた。しかしサウロン自身もこの戦いで打ち倒された。イシルドゥアが父の剣の柄元に残ったやいばのかけらで、サウロンの手から指輪を切り取り、これをわがものにした」[1]（瀬田貞二・田中明子訳）

エルロンドは、その戦いのあと西方世界の人間が衰えていったことを告げる。アルモールの一族も減り、敵に一掃されてしまっていた。しかしながら南では、ゴンドールの領域は長らく耐えて、失われたヌメノールがその昔滅びる以前の偉大な時代にあった当時を思い出させるように、豪華に発展しているのだった。

御前会議はつづく。フロドはエルロンドの娘アルウェンに目をやった。この世ならぬ澄み渡った美しさをもつ女性だ。かれはさらに第二紀に関するたくさんの物語を聞く。グローインの話によれば、冥王がドワーフたちに使節を送り、おたがいの友情をもとめ多くのことを約束し終えたらしい。それから、影の土地モルドールの門道に近いゴンドールのことがあれこれ話題になった。黒い門を護るように立つゴンドール、そしてその土地が第二紀以降どのようにして栄えたかという話を。

人々は高い塔を建て、堅固な砦を築き、多くの船の出入りする港を作った。そして、人間の王たちの翼ある冠は、多くの国の民から敬い畏れられた。かれらの首都はオスギリアス、星々の城の意味である。オスギリアスの都の中を大河が流れていた。そしてまたかれ

らは、東の方、影の山の肩に、ミナス・イシル、すなわち『月の出の塔』を建てた。また、西の方には、白の山脈の麓に、ミナス・アノル、すなわち『日の没りの塔』を建てた。王の宮廷には、一本の白の木が生えていた。イシルドゥアが大海原のかなたより持ち来ったかの木の種から育ったものである。この木の種はその前にはエレスセアから来たのである。さらにその前はといえば、もともとは、この世界の太初の時代に先だって、さいはての西方世界より、もたらされたものである。

（瀬田貞二・田中明子訳）

ここで、南から来た人間ボロミアが立ちあがり、かれの話を始める。かれはゴンドール出身であり、南方世界が東の蛮族とモルドールの黒い土地の勢力とを抑えて西方世界の防壁の役目を果たしている様子を話した。だが、モルドールは今、力を強めつつある。冥王は、東夷どもや残忍なハラド国と同盟を結んでいた。ゴンドールは依然としてその力に抗しているが、それももう長くはつづかない。同盟はすでに破られている。ゴンドールの防壁のうしろに隠れていた者たちも、声援だけはたくさん送ってくるけれど、いざという場合の助けにはほとんどならない。たったひとつ、ローハンの国からだけ、援軍がゴンドールに向けて馬をすすめてくる可能性はあった。しかしボロミアは、兵士を捜すためにでなく知識を得るために、エルロンドのやかたに来たのだった。夢のお告げがゴンドールの大侯たちにもたらされる。折れた剣はイムラドリスでふたたび発見されるにちがいない、というお告げだ。それから心を掻き乱す夢も出現した。東方世界を覆う空がまっ暗になり、わずかに西方にうすい光が消え残っている光景の

出てくる夢だった。ミナス・ティリスの王デネソールは、〝イムラドリス〟が今エルロンドの住んでいる土地に付けられた古名だったことを知って、助言をもとめるべく息子ボロミアをエルロンドへ遣わしたのだ。このとき馳夫アラゴルンが立って、手にした剣をテーブルに投げだした。わたしの剣は折れている、と叫びながら。このアラゴルンこそ北部ドゥネダインの首領イシルドゥアの末裔だったことが、明かされる。その剣は、最後の戦いでエレンディルが斬りつけたときに折れたものだ。そのときから今日まで、やがて指輪がみつけだされる折りには剣が元通りにもどるだろうという予言を信じる嫡子たちは、それを家宝として受け継いできた。では、エレンディルの家がゴンドールで昔日の栄光を復活させる日が来たのだろうか、とアラゴルンは朗々とした声で問いかけた。

白い会議はつづく。偉大な魔術師にしてガンダルフの一党を統べる首領格といってもよい白いサルマンが、指輪の魅惑におぼれ冥王の力を羨やむあまり、堕落して叛逆者になったことを、こんどはガンダルフが報告した。指輪は破壊されなければならない。だが、グロールフィンデルもガンダルフもエルロンドも、この重荷をあえて背負いこもうとはしない。それでは、指輪を運ぶ運命を担わされる者はだれなのか？

だれ一人答える者はありませんでした。正午の鐘が鳴りました。それでもだれも口を開きませんでした。フロドはみんなの顔にちらちらと目をやりましたが、フロドの方に向けられた顔はありません。出席者たちは全員、深い物思いに沈んでいるかのように、いちょ

うに、目を下に落としたまま坐っていました。かれは急に非常な不安にとらえられました。まるで、何か判決が下されるのを待っているような気持ちでした。その判決がとっくに予知されているものの、一方では結局宣告されずにすむのではないかと空しい希望をつないでいるように。裂け谷のビルボのかたわらに心安らかにとどまり、憩いたいという抗いがたい願いがかれの心をみたしました。おしまいにかれはやっとの思いで口を利きました。そして自分の声を聞いて、まるで別の意志が自分の小さな声をかりてしゃべっているのではないかといぶかしく思いました。

「わたしが指輪を持っていきます」と、かれはいいました。「でも、わたしは道を知りませんが……」

（瀬田貞二・田中明子訳）

これで決まった。けれどフロドは仲間もなしに恐ろしい重荷を背負うわけにいかない。かれと共に旅して、途みち待ちかまえる危険からかれの身を守る仲間がつくられる。この遍歴に九人がおもむくことになる。エルフ小人のレゴラス、弓を武器にしている。ドワーフ小人ギムリ、広い刃をもつ斧をたずさえ鎧を着こんでいる。杖をもち腰に魔剣グラムドリングを吊るした灰色のガンダルフ。アラゴルン、小人の鍛冶屋に直させ、今は「西の焔」という意味のアンドゥリルなる新しい名前をつけられたエレンディルの剣を下げている。それからゴンドールのボロミア、ピピン、メリー、サム、いずれも剣をもっている。そして指輪を運ぶフロド。老ビルボは、かれにドワーフの鎧を一着と「つらぬき丸」という名の剣を与える。

かれらは出立し、暗い森を抜け沼を渡る。邪悪なワルグたちに襲われ、かれらはモリアの洞窟に通ずる道に逃げこむ。そこはかつてドワーフ小人の偉大な王国があったところだ。その暗い地下通路で、かれらはオーク鬼の待ち伏せに遭い、巨大な裂けめに渡された狭い橋へ逃げのびる。自由をもとめオーク鬼の群れを斬り拓きながら。巨大なトロルでさえ、かれらを停められなかったが、やがてかれらの前にもっとも恐ろしい敵が現われる。「ああ！　ああ！」と、レゴラスは絶望して泣き声をあげる。「バルログが来た！」ガンダルフが諦め顔で肩を落とす。「バルログか」と、かれはつぶやく。「今こそ分かった」かれはよろめき重おもしく体を杖のうえにあずけた。「なんたる不運！　それにわしはすでに疲れ果てておる」

年老いた魔術師は立ちあがって、仲間に橋を渡らせる。「逃げろ！　これはあんたたちの一人としてかなわないっこない敵じゃ。わしはこのせまい通り道を守らねばならぬ。逃げろというのじゃ！」(「　」内、瀬田貞二・田中明子訳) そして――。

バルログはもう橋までやってきました。ガンダルフは橋の中ほどに立って、左手に持った杖によりかかっていました。しかしもう一方の手にはグラムドリングが冷たく白く光っていました。ガンダルフに面と向かって、敵はふたたび立ち止まりました。そしてその周りを包む黒い影が二つの巨大な翼のようにさし伸ばされました。それは鞭を振り上げました。たくさんの革紐がヒュー、ヒューとうなり、ピシッ、ピシッと鳴りました。その鼻孔からは火が噴き出されました。それでもガンダルフはしっかと踏み止まっています。

「きさまは渡ることはできぬ」と、かれはいいました。オークどもはじっと立ちつくし、死の静けさがあたりをみたしました。「わしは神秘の火に仕える者、アノールの焔の使い手じゃ。きさまは渡ることはできぬ。暗き火、ウドゥンの焔はきさまの助けとはならぬ。常(とこ)つ闇に戻るがよい！　きさまは渡れぬぞ」

（瀬田貞二・田中明子訳）

奈落にかかる狭い橋で、かれらは戦う。バルログはグラムドリングの冷たい炎に対してまっ赤に燃える剣を突きたてる。しかし赤い剣は粉ごなにくだかれ、溶けた鉄片になってしまう。ガンダルフは後方によろめくが、もういちど足の踏んばりを取りもどして、「きさまは通すことができぬ！」と繰り返す。バルログが鞭を鳴らしながらついに橋までやって来る。「あの人一人では無理だ！」アラゴルンはふいにそう叫び、「エレンディルにかけて！……加勢しますぞ、ガンダルフ！」と呼びかけながら、駆けもどっていく。「ゴンドールにかけて！」（「」内、瀬田貞二・田中明子訳）。ボロミアが轟(とどろ)くような叫びを発し、老魔術師を助けにかれのあとから飛びだす。

おりしもその時、ガンダルフは杖をかかげて、高く叫ぶと、はっしと目前の橋を打ちました。杖はこっぱみじんにくだけて、かれの手から落ちました。目の眩(くら)む白い焔(ほのお)の幕が燃えあがりました。橋が鋭い音をたてて割れました。バルログのちょうど足許で橋は折れ、バルログがのっていた石はがらがらと奈落(ならく)に落ちこんでいきました。橋の手前は虚空(こくう)に突

き出された岩棚のようにわずかに震えながら残りました。
恐ろしい叫び声とともに、バルログは前につんのめり、その影は奈落に落ちこんで見えなくなりました。しかし、バルログは落ちて行きながらも鞭を振り回し、革紐が魔法使の膝を打ってからまり、かれを突き出た橋のきわまでずるずると引っぱりました。魔法使はよろめいて倒れ、石にしがみつきましたが、それも空しくずるずると奈落へと滑り落ちました。「逃げろ、ばか者ども！」と、かれは叫んで、見えなくなりました。

（瀬田貞二・田中明子訳）

こうして灰色のガンダルフは消える。そして暗闇が落ちる。哀れみと恐怖に泣きながら仲間たちはよろめくようにして前進する。今は一団の指揮権を握ったアラゴルンに励まされて。かれらはついに、広びろとした陽光のまばゆい外に出る。かれらは逃げ落ち、ロスロリアンの地に隠れがをもとめる。それで親切な女王ガラドリエルはしばらくかれらに庇護をあたえる。別れるとき、女王は泉から汲んだ純粋な水をつめた水晶のビン、「ガラドリエルの玻璃瓶」を旅の仲間に手わたす。必要になったときは助けになるというのだ。

ガンダルフがいなくなった今、仲間は賢い指導者を失った。仲間のあいだに分裂が生まれ、エルフ対ドワーフの古い敵対心を思い出してお互いに口論をはじめた。ボロミアはアラゴルンの指揮に反撥し、指輪をゴンドールに持っていくのが先決だ、と主張する。ひとりで考えるためにフロドが群れをはなれたとき、ボロミアはそっとかれを探しだして、はじめは甘言で、最

後には力ずくで指輪を奪いとろうとする。今まで友だちだとばかり思ってきた人間の顔に輝いた歓喜を見て恐ろしくなったフロドは、そこを逃げだす。今こそかれは、指輪がほんとうに潜ませている重荷がどんなに大きなものかを理解した。指輪を運ぶ者にごく近い者たちの心に、羨やみや誘惑を喚び醒ますのだ。かれはサムひとりにともなわれて荒地に走りこみ、黒い土地の境界にたどりつく。そこは、かれらがどうしても進んでいかなければならない土地だ。

いっぽう旅の仲間は、フロドを探すために結束を崩し、もう二度と再結集することもなくなる。そしてこの遍歴もほどなく大部分が終了するはずだった。巨大な戦争が始まろうとしているからである。

原注

（1） 第十章で説明するように、トールキンの遺作『シルマリルの物語』のプロット（第二紀を舞台とした『指輪物語』の前編）は、主として最後の同盟とサウロンに対する戦いに関係していると思う。クライマックス場面は、火の山オロドルインの山腹で最後の戦いをおこなっているあいだにサウロンの手から指輪が落ちるシーンだ。指輪はそのとき火口に投げ捨てられるべきだった。そうならなかったのはイシルド

ウアの失敗で、これがそもそも『指輪物語』のプロットを作る死闘の発端となった。

4　『二つの塔』の物語

神々はお元気か？　エルフたちは？
ヨツンヘイムじゅうが呻き、神々は評議に集う。
石の扉のそばではドワーフたちがさんざめく、
岩を司る方々よ……この先を知ろうとお望みか？
『古エッダ』「巫女の予言」

三部作の第二巻めは『二つの塔』と呼ばれる。この本は、前作『旅の仲間』の終幕に直接つながる場面から始まる。フロドとサムを探して、旅の仲間は幾手にも分かれた。自分の悪業を悔いたボロミアは二人の若いホビット族ピピンとメリーを助けにやってくる。もっともかれら二人のホビットは仲間から外れて森をさまよっていた。オークの群れがかれらに襲いかかったとき、ボロミアは角笛を鳴らし勇敢に闘う。かれの最後の反抗は確かに目をみはるものだった

けれど、その勇敢さにもかかわらず矢を射こまれて死んでしまう。
こうしてゴンドールの代表にしてデネソールの嫡子はこの世を去った。が、同時に遍歴での裏切り行為を埋め合わせることにはなった。

ほかの者たちもまた戦闘場面にぶつかった。ピピンとメリーは消えてしまう。おそらく、オークに連れ去られたせいだろう。少しでも手掛かりをと思って死体をあらためているうちに、死体のなかに見慣れぬ甲冑(かっちゅう)と珍しい衣服を着けた者がいるのをみつける。その兜(かぶと)は見たこともない紋章――白い手とSの字形の絵文字(ルーン)――を帯びている。それはどうやら、善悪両面の心をもつ西方世界の魔法使いにしてガンダルフが属する派の首領格でもある白のサルマンを表わしているにちがいなかった。サルマンが力への欲望に負けて堕落し、その暗い目的のために指輪を持つ人物を捜しているのだ、とかれらは正しく推測する。

人間アラゴルン、ドワーフ小人ギムリ、そしてエルフ小人レゴラスの三人が、今残った旅の仲間の全員だ。かれらはより良い思いつきもないまま、ピピンとメリーを虜(とりこ)にしたオーク鬼たちの後を追う。やがてロヒアリムの土地にはいり、そこでローハンの兵士たちと出くわした。兵士たちは怪訝(けげん)な顔でかれらを停め、尋問する。ロヒアリム族は背の高い屈強な騎手で、白っぽい亜麻色の髪をもち、彩色をほどこした盾と光り輝く鎖かたびらに身を固めている。戦争と戦争についての噂がどこへ行っても付いて回り、しかも日に日に敵の力が強まっていく不穏で不安なこの時期に、見知らぬ旅人が歓迎されるはずはない。アラゴルンはローハンの紋章をつけた隊長のエオメルという人物に話しかける。兵士に近づいて、自分たちが味方であることを

納得させると、エオメルは、かれら騎手たちが襲って壊滅させたオーク鬼の一団の話をした。この一団こそは、アラゴルンの追ってきた群れだった。しかし騎手たちは、その一団にホビット族を見かけなかったとも伝えた。エオメルは旅人たちに馬を与え、報告のために王の許(もと)へと帰っていった。いっぽうアラゴルンと仲間たちは行方不明になった二人のホビットを捜して古いファンゴルンの森に向かって旅をつづける。

ここで場面はメリーとピピンに移る。かれらはオークの手から逃げ、ロヒアリム軍がサルーマンの手勢とぶつかって敵を蹴散(けち)らす前にファンゴルンの森——ひじょうに大きくて古い、しかも悪評高い森だ——に難を遁(のが)れたのだ。暗い森を迷い歩くうちに、かれらは「木の鬚(トリーベアード)」と呼ばれる奇妙だけれど親切な存在に巡り会う。この「木の鬚」は、もうほとんど忘れ去られたエント族という民族に属しており、「樹々の番人」である。賢くてユーモラスで、哲学的で言葉のおそい、親切なエントの老人は、小鬼みたいな若いホビットを見て、とても奇妙な印象を受ける。しかしホビットたちもこの老人に、それ以上の奇妙さを感じる。

> 二人が見たのはまこと世にも珍しい顔でした。その顔の持ち主は、トロルといってもいいような、大きな人間のような姿をした者でした。背の高さは少なくとも十四フィートはありましょう。頭部は長頭で、頸はないも同然の猪首で、非常にたくましい体つきでした。体にまとうものは、緑がかった黒ずんだ木の皮の類か、この者の地肌なのか、どっちとも判じかねました。ともかく両の腕は胴からさほど離れていないところでは、皺(しわ)も寄らず、

滑らかな茶色の皮膚で被われていました。大きな足には指が七本ずつありました。長い顔の下半分は引きずるような灰色の顎鬚（あごひげ）で覆われていて、そのもじゃもじゃ鬚は根元はほとんど小枝のよう、先端は細くなって苔のようでした。しかしその時、ホビットたちは、目のほかにはほとんど注意をはらっていませんでした。この二つの深い目は今や二人をゆっくりしかつめらしくしかし見透かすように眺め回していました。色は茶色で、見ようによっては緑の光を湛えていました。

（瀬田貞二・田中明子訳）

ゆっくりだけれど考えぶかい「木の鬚」の言葉を聞いてみると、かれが真面目で厳（おごそ）かでしかも途方もなく古い存在だということが明らかになった。かれこそは三部作を通じてもっとも完（かん）璧（ぺき）な独創性をもち、しかもまったく魅惑的な登場人物のひとりであり、第一巻のトム・ボンバディルと並ぶ想像力の産物である。かれは若いホビットを家に連れてゆき、ご馳走をふるまう。かれらは、捕われの身になっていたときに聞いたオークたちの立ち話から、サルマンが邪悪な存在に変わったことを「木の鬚」に知らせる。それは折りしも「木の鬚」が疑いはじめていた事実と一致していた。ところが白い魔法使いはモルドールのサウロンに味方するだけにとどまらず、その土地に自分自身で新しい勢力を築こうとしているのだ。「木の鬚」は滅多なことで怒らない人物だけれど、サルマンに対しては心底から怒りを燃えたたせる。なぜならオルサンクの王はファンゴルンの境界にある樹々を切り倒し、森のなかにオークたちを侵入させたたからだ。ファンゴルンのこの森は、「木の鬚」がみずから所有するところなのだ。そこに生える

樹々はかれの庇護のもとにある。かれは仲間のエント族とともに、まるで庭師が植物に対してするのと同じように、樹々の世話を焼いたり必要を満たしたりしている。だから「木の鬚」は仲間たちを呼び起こし、サルマンの塔アイゼンガルドに進軍したのだった。

いっぽう二人のホビットの行方をさがすアラゴルンとその仲間は、いつのまにか同じファンゴルンの森にはいりこんでいた。夜のなかで、かれらはとある老人の姿を垣間見る。その老人は帽子を被っているので、表情がはっきりしないが、影のなかから確かにこちらを窺っていた。この人物がサルマンかもしれない、とかれらは恐れ戦くけれど、そっちに向かって声をかけたとたん、老人は姿を消してしまう。次の日、かれらが捜索を再開すると――。

> アラゴルンはじっと目を注いで、背を曲げた姿がゆっくり進んでくるのを見ていました。もうあまり離れてはいません。年寄りの乞食のような姿で、荒削りの杖によりかかり、大儀そうに歩いてきました。頭は垂れ、目は三人の方を見てはいません。他の土地であれば、かれらもこの老人に親切な言葉をかけたでしょう。しかし今は三人とも押し黙ったまま立っていました。銘々が不思議な予想を抱いたのでした、秘めた力――あるいは脅威であるかもしれない――をもったものが何か近付いてくるような。　（瀬田貞二・田中明子訳）

灰色をしたかれの襤褸衣の下に、かれらは白い衣服を垣間見る！　これは間違いなく恐るべきサルマンだ。老人は立ちどまり、あいかわらず表情を隠しながら、あいまいで妙に優しい偽

りの言葉でかれらに話しかける。気の短いギムリがサルマンの名を突きつけてかれに挑みかかると、

老人の身のこなしは速く、ギムリはおくれました。老人はぱっと躍り上がって大きな岩の頂きに跳び移りました。岩上にあって、かれの姿は突然むくむくと背が伸び、三人を圧してそそり立ちました。頭巾も、灰色のぼろも脱ぎ捨てられました。白い衣が輝きました。かれは杖を持ち上げました。するとギムリの斧がその握った手から飛び出し、音立てて地面に落ちました。アラゴルンの剣は動かぬ手に凍ったように握られたまま突然赤々と燃え出しました。レゴラスは一声大きく叫んで、空中高く矢を射放ちましたが、その矢はぱっと焔をあげて消え失せました。

「ミスランディア！」と、かれは叫びました。

……三人は一様にかれをみつめました。その髪は日にきらめいて雪のように白く、その長衣は白く輝いています。秀でた眉の奥の目は明るく輝き、陽光のように炯々と光りました。その手には力がありました。驚きとも喜びとも恐れともつかぬ気持ちで三人は突っ立ったまま、いうべき言葉も見つかりませんでした。

（瀬田貞二・田中明子訳）

たしかにそれはガンダルフだった。ガンダルフが恐ろしい試練のあとにもう一度生きている者たちと旅をするために戻ってきたのだ。恐ろしさに震えつづけながら、かれらは、ガンダル

フに語りだした。バルログの一撃がガンダルフを巨大な深淵に落とす隙に自分らだけ九死に一生を得たあのとき以来、奈落にかかる狭い橋から落ちたガンダルフがみんなの前から姿を消して以来、今までに起こった出来ごとすべてを。いっぽうガンダルフのほうは、生ける者たちにはほとんど知られることのない暗い領域での奇怪な体験について、多くを語らなかった。

「長い長い間わしは落ち続けた。そしてあれもわしとともに落ちて行った。あれの火がわしを取巻いた。わしは焼かれた。それからわしらは深い水の中に飛び込み、あたりはすっかり闇となった。水は死の潮流のように冷たかった。心臓まで凍るかと思われた……とはいえ、それにも行き着く底はあるのじゃ。光も知識も届かぬ所にな。……そこへ、わしはついに着いた。底の底、いやはての石の土台の上じゃ。あれも依然としてわしから離れなかった。あれの火は消えておった。しかし、今度はぬるぬるしたものになりおった。その力たるや締めあげる蛇よりも強かった。

わしらは生ある者の大地からはるか下の方で闘った。そこでは時が数えられぬ。あれは絶えずわしに摑みかかり、わしは絶えずあれに切りつけた。そしてついにあれは暗いトンネルの中に逃げ込んだ。これらのトンネルはドゥリン一族によって作られたものではないのじゃよ。グローインの息子ギムリよ。ドワーフたちの掘った最も深いトンネルのはるかはるか下には名前も持たぬ者たちがいて、この世界を浸食しておる」

（瀬田貞二・田中明子訳）

ゆっくりとした、夢見るような声で、ガンダルフはさらに、敵であるバルログをどのようにして追いかけ、無限の階段をたどってモリアの深みを通りぬけ山の絶頂にまで追いあげていったかを、打ちあけた。そこで、白い雪に輝くまぶしい太陽に見護られながら、かれは改めてバルログと闘ったというのだ。

わしは敵を投げ落とした。敵は高みから落ち、転落しながら山腹にぶつかり、ために山腹のその場所はこぼたれた。次いで暗闇がわしを襲った。わしは思考からも時間からもさ迷い出て、はるかな道を彷徨(ほうこう)した。その道のことは話すまい。

裸のままわしは送り返された——ほんのしばしの間、わしの務めを仕終えるまでのことじゃ。

（瀬田貞二・田中明子訳）

ガンダルフはそのことをはっきり語っているわけではない（トールキンもまた多くを語っていない）、しかしガンダルフが死んで彼岸におもむき、力を強め純化されすべてを新たにし、前よりも力強い存在となって中つ国に復活したことは、それとなく示されている。かれはもう灰色のガンダルフではない——今は白いガンダルフなのだ。そしてもういちどこの世界を去る前に、やらなければならない大仕事がたくさん待っている。

かれはまずローハンに馬を進めた。ガンダルフが駆るのは、並ぶもののない偉大な駿馬シャ

ドウファックス、すなわち「飛蔭」だ。かれらは、夢に耽りきりになっている老いたマーク（翻訳では「辺境国」）の王セオデンを、みつける。かれの壮年らしい力強さは消えうせ、心は召使いグリマ・ウォームタングのあやつる巧みな虚言のおかげで、疑惑に毒されていた。この召使いはそれとない非難やほのめかしを張りめぐらして主人を罠に落としこみ、この国の権力を握ろうと謀んでいる。かれらは言葉を尽くして説得するが、ガンダルフには余分な時間がない。かれは自分の強大な力を示し、魔術を解き放ってグリマを床に叩き伏せる。そのあと年老いた王を明かるく澄みわたった城外に連れだし、セオデンに新しい力と活力を注ぎこみ、適切な言葉によってかれの心から霧や影を吹き払ってやった。

　セオデンは手勢を集め、馬を進めた。ヘルムの深森でかれらはオークの罠にはまる。そこで烈しい闘いが繰りひろげられるが、その闘いでレゴラスもギムリも目ざましい奮闘を見せる。二人に勝利を運んだのはガンダルフだ。かれらは馬を疾駆させ、サルマンと対面するために、アイゼンガルドまで駆けつけた。なぜならグリマが、白い手の代理人という仮面を剝ぎ正体をあらわしたからだった。セオデンは領地からグリマを追い出した。そういうわけでかれらは裏切りの魔法使いが立てこもる魔法の砦オルサンクへたどり着くのだが、そこはすでに包囲された要塞であることを発見する。

　なぜなら「木の鬚」とエント族がサルマンの力を破り、手下たちを殺したり追放したりし、かれの企てをすべて無に帰させたからであった。魔法使いはただひとり（実はグリマ・ウォームタングも一緒だったことが、あとで分かる）砦に立てこもっているとのことだ。ガンダルフ

は白い魔法使いと対面することにした。しかし人当たりの柔かいサルマンの舌は、残忍で復讐（ふくしゅう）に燃えるマークの王をさえもうすこしで丸めこみそうになる。けれどガンダルフは裏切りの魔法使いを叩き伏せ、今やこの自分が高位の段階に昇ってサルマンの魔法の杖を折り、魔法使いの教団から追放したことを認めさせた。が、そのとき藪（やぶ）から跳び出す蛇みたいに躍りかかったグリマは、ガンダルフに石を投げつけた。ガンダルフがそれに当たるはずはない。しかも歓ばしいことに、その石はサルマンの大切にしていたものであったことを知る。それはパランティアといって、偉大な力をもつ魔法の水晶であり、オルサンクとバラド＝ドゥアの黒い塔（これがタイトルにある「二つの塔」だ）をその昔固く結びつけていた道具だったのだ。

ピピンは「木の鬚」に別れを告げたあと一夜の野営を張ったとき、不用意にも水晶のなかをふと覗（のぞ）きこんでしまい、一時的にサウロンの魂の虜（とりこ）になってしまう。しかしかれは、その恐ろしい経験から大きな傷手を負うこともなく、しかも幸運なことにそれが敵の役に立つものだという事情にもほとんど気づかなかった。

ガンダルフは、ゴンドールの首都ミナス・ティリスの稜堡に攻撃が仕掛けられないうちに、その土地へ着きたかった。そのために旅の仲間の先頭に立って馬を走らせた。

次に場面はフロドとサムに移る。折りしも二人はモルドールの辺境に沿って道を進んでいる最中だ。山なす土地を横切っている途中に、かれらはコソコソ立ち回っているゴクリと出会う。不運なこの生きものがあまり哀れっぽいので、これはずる賢く信用のならない生きものだからと強く忠告するサムを置いて、フロドはついついゴクリに同情してしまう。しかしながらフロ

ドには考えがあった。スメアゴルはやさしい同情をもって迎えてやるのだ。かれは、今のいままでこの不運な小生物がどんな苦しみと悲しみを味わってきたかを、すこしは知っていた。ゴクリにしてみれば、他人に嫌悪以外の感情をもって（いくらかの哀れみをもって）扱われたのははほとんど何十年ぶりだった。かれはフロドの親切に心から感謝し、ホビットたちを沼のむこうまで案内してくれる。

この場面――ほんのささいな親切と信頼に、ゴクリが哀れなくらい熱心な反応を返す場面――は、これ以上ないほど感傷的で、しかも美しく描かれている。

さて、モルドールへ通じる黒い門の前で、一団はミナス・ティリスから来た兵隊と行きあった。この軍団はゴンドールの大老の後継者、ファラミアに率いられている。かれらはその軍団と情報を交換し、やがて別れを告げると、連山の地下を走る暗いトンネルをたどって黒い土地に進入していった。しかし、光ひと筋射さないこの洞窟は、異常な大きさと邪悪な性質とを併せもつ恐ろしい化けもの蜘蛛シェロブの、暗く不潔な栖だった。ここでサムはふと、エルフ女王の泉から汲んだ水のはいっているガラス瓶のことを思いだした。女王ガラドリエルは、その玻璃瓶を手わたすときにこう告げてくれた――「他の光がことごとく消え去った時、これがそなたの明かりとなりますように」（瀬田貞二・田中明子訳）かれは玻璃瓶を持ちあげる。その純白の輝きがシェロブを遠い自分の栖の暗がりへと追いたてた。かれらは、道をふさぐ厚くねばついた蜘蛛の巣の垂れさがるあいだを切り開きながら、前進を再開した。

それから蜘蛛がもういちどかれらに襲いかかってくる。死を賭けた闘いが不潔な闇のなかで

繰りひろげられる。ゴクリが一転してサムに跳びかかる。かれはこのサムがどうしても好きになれなかったのだ（たぶん屈強なホビットがかれを信用せず、不幸な小生物に信頼を置いたフロドに反対したためだろう）。しかしゴクリは逆にひどい目に遭って逃げ落ちる。サムはフロドを助けようと目を向けるが、主人が蜘蛛の毒牙（どくが）にやられて死んだようになっていることを知って、信じ難い恐怖に襲われる。泣きながら、サムは必死の勇をふるってシェロブに体当たりする。ガラドリエルの玻璃瓶がまばゆいほどの輝きを発して燃えあがった。サムの剣が目のくらんだシェロブを斬り裂く。傷を受けた怪物は、孤独でひそかな栖へ這（は）いもどっていく。

　そしてサムは――哀れで単純で、信頼のおけるサムは――次にどうすべきかを決めなければいけない。指輪という重荷を引き受けて、フロドが生きているうちに達成できなかった探索を完成するために、自力で前進しなければならないのか――いや自力で前進できるだろうか？それは、つまりかれがこの場所を発（た）ち、不幸なフロドの死体を放り出してこの不潔な土地で永眠につかせることを意味する。ああ、しかしかれはそうすることが自分の任務だと承知していた。かれは最後の「旅の仲間」なのだ。その責務が、サムの屈強の肩にのしかかっている。力が残っているかぎり、先に進まなければならない。かれはすすり泣きながら、フロドの死体から優しく指輪を抜きとり、地下通路の端へと向かう。

　そばを通りかかった巡回中のオーク鬼が、ホビットの死体にぶつかる。かれらは首をかしげる。いったい誰の死体で、どういうわけでこんなところにあるのだろうと。かれらはそれを運び去る。サムは、その一行から遠くないところにとどまっていた。指輪をはめ、体を透明にし

たかれは、一行のすぐ後を追おうとする。しかし、オーク鬼の砦に近づいたとき、二人のオークの立ち話から恐怖のあまり眩暈がしてしまうような情報を盗み聞きしてしまう。
　こいつはもう死んだのだから、なにも死体をルグブルズの上官のところへ運ぶ必要はないだろう、と一人のオークがいい張るのだ——。

「あいつはもう死肉にすぎねえからな。あんな代物をルグブルズでどうしようってのか、おれには見当もつかねえ。鍋ん中にはいった方がましじゃねえか」
「このばかもん」シャグラトが罵りました。「お前大そう利口そうな口利いてたが、お前の知らねえことがたくさんあるのよ。他の者なら大てい知ってることでもな。気をつけねえと、お前の方が鍋行きかシェロブ行きになるぜ。死肉だと！　奥方のことでお前の知ってるのはそれだけか？　奥方が糸でからめあげるのはな、肉が目的よ。奥方は死んだ肉は喰わねえ。また冷たい血も吸わねえ。あいつは死んでなんかいないぜ！」
（瀬田貞二・田中明子訳）

　恐怖に圧倒されながら、サムは、蜘蛛の毒がフロドを一時的に麻痺させたに過ぎなかった事実を実感する。フロドの死体をどうするか心を決めかねているうちに、ふとオークの立ち話を耳にすることがなかったら、かれはきっとフロドの体を残したまま旅に出ていたろう。そうなっていたらあの怪物が、かれの剣で受けた傷とガラドリエルの玻璃瓶の刺し通す光で受けた傷

にうち克って活力をとり戻したときに、フロドを毒牙の下に曝すところだったのだ。いや、もし毒蜘蛛が復活しなかったら、不幸なホビットの運命はもっとひどいことになっていたろう。シェロブの暗い栖に、麻痺した体を餓死するまで横たえていたはずだ。
かれは悩む。心を千々に乱して。今、どういう行動をとればいいのだ？ 遍歴を完成させるためには、指輪をもって旅をつづけなければならない――とはいっても、生きているけれど言葉も話せず体も動かせないまま残忍な敵の手に落ちた不幸な主人を放りだして、どうして旅に出られるだろうか？
サムが見まもるなかで、フロドの体はオークの砦に運び入れられ、門扉が金属音をたてて閉まった。

5　『王の帰還』の物語

あらゆる神々が
そこにいる。そして名も知れぬ世界のあらゆる力が。巨大な、帝
王のごとき亡霊、英雄、人間、そして動物たちが。はたまた茫漠た
る闇を司る魔王が。
シェリー『鎖を解かれたプロメティウス』第一幕第一場

三部作の最終巻は『王の帰還』だ。巻を開くと、ガンダルフとピピンが、包囲されたゴンドール王国めざして風のように馬を駆っている。かれらは首都ミナス・ティリスに到着する。ゴンドールの大老デネソールの面前に案内される。ガンダルフは反抗的な若いホビットに向かって、狡猾で頭のきれるデネソールと話すときには言葉にくれぐれも注意するよう忠告する。この王はセオデンよりも古く誇り高い家系の出で、なるほど正式な王冠をいただいてはいないけ

れど、失われた王国の大老という以上の強大な力を有し、王並みの権威を誇っているのだ。ガンダルフは、まもなくここへやって来るアラゴルンのことを事前にデネソールに知られたくない気持を、持っていた。アラゴルンこそは、ゴンドールの失われた王の子孫として、長らく空いていた王位を要求するはずの人物だからだ。それからかれは、ボロミアのことを話すときにも切りだし方を工夫するよう、ピピンに警告した。「わしのいったとおりやるんじゃ！　権力ある支配者にその跡継の死の知らせをもたらすという際にはじゃ、もしやって来れば当然王位を要求するであろう者の到来を喧伝（けんでん）することは断じて賢明とはいえんぞ」（瀬田貞二・田中明子訳）

ガンダルフが予感したとおり、デネソールは若いホビットをつかまえて、旅の仲間のことやボロミアの死について根掘り葉掘り質問を開始した。けれどこの苦しい会見にもようやく終幕が訪れる。ある奇妙な衝動につき動かされて——おそらく厳しく誇り高く生気のない老貴族に対する哀れみと賞讃の入りまじった感情にだろうが——ピピンは大老に忠誠を誓い、その奉仕が受け入れられたからだった。

そのあとピピンは、近づく戦争にそなえる兵士たちの評議にほとんど顔を出さなくなる。さかんに町のまわりを徘徊（はいかい）しては、新しい友だちをつくることに熱中する。そうこうしているうちに短い平和な幕間も終わりを告げる。戦端は開かれ、嵐が近づき、辺境地方の偉大な将軍たちがゴンドールの守護に手を貸すために兵とともに到着する。ああ、しかし兵の数はあまりに少ない。もしもローハンが来なければ、どうなるのだろう？

さて、話をアラゴルンとギムリとレゴラスにもどそう。かれらは、ガンダルフがゴンドールに向けて馬を走らせたあとも、同じ場所に踏みとどまった。かれらはあいかわらずサルマンの砦オルサンクの廃墟近くにいる。けれど、かれらもロヒアリムを呼び集めるために、セオデンとともに出発することになる。この集合場所に、騎手たちもやってきた。北から来たアラゴルンの民も、最大の戦いに参加する。かれらは、リベンデルの半エルフにしてエルロンドの娘でもあるアルウェンから贈られた高価な貢ぎものをたずさえてくる――その貢ぎものとは、再興されたゴンドール王の皇旗であった。

ピピンがデネソールに誓いをたてる部分と意図的に対比させた場面も出てくる。もうひとりの若いホビット、メリーがマークの王セオデンに同盟の誓いをして、ローハンの地主になる場面だ。ともかくもアラゴルン、ギムリ、そしてエルフ族レゴラスの三人は、みんなが集まったところでローハンの騎士たちとともに仲間をつくる。アラゴルンはパランティアの水晶を覗きこんだ。魔法石のほんとうの持ち主であるイシルドゥアの嫡子として、それは当然の権利だった。その結果、ゴンドールの門に戦争の気配がただよっていること、嵐が起こる時かれはそこに居あわせるに違いないことを、知らされる。ロヒアリムの召集が完全に終わるのを待っていれば、かなりの時間が無駄になってしまう。そこで三人の仲間は危険を覚悟して、死者の谷を突きぬける悪評高い近道をとる。呪われた山、黒いドゥイモルベルグの麓に落ちた影のなかに足を踏みいれるのだ。この領域でかれらが味わった奇妙な経験について、トールキンは多くを語っていない。大昔そこに住んでいた古い民族は、古い罪に責めさいなまれているという。し

かしアラゴルンの到来は、かれらをその罰から救う意味をもっているようなのだ。かれと仲間たちが現われると、古代の死者の暗い群れが一緒になって馬を進めはじめる。

ゴンドールでは突然戦争が始まった。黒い妖術が闇のとばりを広げる。朝の太陽は輝きを忘れ、いいようのない恐怖が守備兵の力を萎えさせる。敵の大群がミナス・ティリスの壁を包囲する。ここで、闘いは闇をついて行なわれる。勇者たちの心が疑問にかき曇り、グループのあいだに小競りあいが持ちあがる。デネソールがガンダルフと口論をはじめる。デネソールはまた、自分の息子で、しかも黒い土地の境いめで出会ったフロドに旅立ちを許した兵団の将軍ファラミアとも、いいあらそいを開始する。デネソールはフロドが持っていたものをそれとなく知っていた。かれはそれがゴンドールに持ちこまれなかったことを嘆くのだ。危険におちいった領土を護るのに、その魔力を借り受けられたはずだからだ。デネソールと息子のファラミアはおたがいに激しく罵りながら袂を分かつ。

闘いは進展する。モルドールの軍団が外壁を破って侵入する。バラド＝ドゥアの王にして、古くはアンガマールの玉座位にあった空飛ぶナズグルの幽霊騎手が、黒い軍団を指揮している。ガンダルフはこの将軍を「サウロンの手にある恐怖の槍」と呼ぶ。光ひとつ射さない暗闇のなか、烈しい戦闘のまっただなかで、人々の心臓は低く鼓動する。しかしドル・アムロスの白鳥騎士が敵陣の両翼を破り、力あふれるシャドウファックスこと駿馬「飛蔭」にまたがるガンダルフも、恐るべきナズグルの攻撃を一筋のめくるめく光線によって討ちはらう。モルドール軍は敗れ、陣形が崩れる。だがゴンドールの守備兵にも計り知れない犠牲が出て、ほとんど希望

を残していない。おまけにローハンの援軍がまだ着かないのだ。

戦いで倒れた者のなかには、デネソールの息子のうち最後まで生きのびてきた唯一の大老の後継者、ファラミアも含まれていた。かれは雄々しく闘ったが、敵の剣に倒れる。ほとんど致命傷を負ったかれは味方に運ばれ、安全な都市のなかに移しいれられる。

　イムラヒル大公はファラミアを白の塔に運んで来て、いいました。「殿よ、ご子息は数々の大きな功(いさお)を立てられた後、ここに戻られました」そしてかれは見たことをすっかり語って聞かせました。しかしデネソールは立ち上がってわが子の顔を眺め、じっと黙したままでした。それからかれはこの部屋にベッドをしつらえてファラミアを寝かせ、みんなに出て行くように命じました。しかしかれ自身はただ一人塔の頂の下にある奥まった部屋に上って行きました。そしてちょうどこの時間にこの部屋の方を見上げた大勢の者が、狭い窓からしばらくの間ちらちらと明滅するうす青い光を目にしたのです。光はやがてぱっと輝いて消えました。デネソールはふたたび階下(した)に降りて来ると、ファラミアのところに行き、物もいわずそのそばに坐っていました。しかし大侯の顔は土気色(つちけいろ)で、息子の顔より死顔めいていました。

（瀬田貞二・田中明子訳）

包囲はつづく。ただひとつの希望はローハンの到着だった。ロヒアリムはゴンドールの古い盟友であって、両国の人民は力を合わせてたくさんの危機を克服してきた。しかし、そのロー

ハンは来ない。やがてすべてが手遅れになる。そこへモンドール軍が町の防備を破るべく強大な武器を持ちだしてくる。カタパルトが矢のように飛び、烈しい投石が雨のように降りかかる。尽きることを知らない黒い兵士の群れが、まるで底のない源から湧きでるかのように、裂けた防壁を越えて流れ込む。勇気が完全な絶望に席をゆずった。

砦のなかでは、デネソールが瀕死の息子のそばにひざまずいたきり、自国の防衛戦に加わろうともしない。指揮命令は、体力と智力のかぎりを尽くして奮戦するガンダルフが司ることになる。しかし、今は何もかもが失われたようだ。町のいちばん外縁部に火の手が上がる。人々は防壁から逃げだし、都市を無人にしてしまう。デネソールは報告を伝えにきた伝令に罵詈を浴びせる。

「なぜに？　なぜ逃げるのか？　ばかどもめ」と、デネソールはいいました。「あとになるより早く焼けたほうがましだ。いずれわれらは焼けねばならぬのだからな。お前たちは大篝火のところに戻れ！　予か？　予はこれからわが火葬の場に行くぞ。予の火葬の場にな！　デネソールとファラミアには墓はいらぬ。墓は無用だ。香油もて保存した長い緩慢な死の眠りはいらぬ。われら両人はこの地に一艘の船が西方よりやってきた以前に異教の王たちがしていたようにわが身を焼くわ。西方世界は衰微してしもうた。さっさと戻って焼けうせろ！」

（瀬田貞二・田中明子訳）

巨大な槌がゴンドールの大門を砕いた。大門は轟きを発して崩れた。その裂けめを抜けて、顔を持たぬ恐怖の存在たるナズグル王が馬を進めてくる。この敵将の侵入を知った味方は、一目散に逃げだしてしまう。敵が押しよせるその道筋に立って、地獄へ戻れと正面から相手に命令を叩きつけるガンダルフを除いて、全員が持ち場を放棄した。ナズグルの王は笑う。

「年老いた虚け者よ！」と、かれはいいました。「老いた虚けよ！　わが時が来た。お前は死を目にして死を知らぬのか？　さあくたばって、空しく呪うがいい！」そういうと同時にかれは剣を大上段に振りかざしました。焔が刀身を走りました。

ガンダルフは動きませんでした。おりしも正にこの時、城市のどこかずっと奥の中庭で雄鶏が時を告げたのです。甲高く、はっきりと、時を告げました。魔法であれ戦いであれ、少しも頓着なしに。ただ死の暗闇の遥か上空にある空に曙光とともにやってきた朝を喜び迎えたにすぎなかったのです。

そしてあたかもそれに答えるかのように、はるか遠くから別の音が聞こえてきました。……北の国の大きな角笛が激しく吹き鳴らされていました。ローハン軍がとうとうやって来たのです。（傍点著者）

（瀬田貞二・田中明子訳）

一方、ペレンノールの原野では、ローハンの軍団がモルドール兵を蹴散らしていた。軍団の

先頭に立って馬を駆るのは、古代伝説に語られる偉大な兵士を彷彿(ほうふつ)とさせるセオデン王だ。敵に打ちかかった最初の剣も、かれの手にしたものであり、黒い王の黒と紅の軍旗を切り落としたのも、かれの手だった。白いガンダルフと対面した大門から、ナズグル王は悲鳴を残して消え去った。そして、不気味な空飛ぶ軍馬の呪わしい翼のあいだにまたがり、ナズグルの恐ろしさをロヒアリムに思い知らせようと攻撃をしかけてきた。さしものマークの老王も、かれの怒りの前に生命を落とす。しかしローハンの一騎士が、倒れた王のそばに立ってナズグル王の不気味な魔力に対抗した――かれこそは若い騎士ダーンヘルムだ。しかしこの騎士が実は、父とともに闘うために若者に変装したセオデンの娘エオウィンだったことが、すぐに明白となる。

この女性騎士は巨大な翼つきの怪物を討ち倒すが、モルドール軍の黒い将軍といわれたナズグル王には返り討ちにあってしまう。渾身(こんしん)の力を込めた一撃が彼女の盾を割り、彼女の片腕を砕いたのだ。しかしそのとき、ナズグルの王は思いもかけない凍るような一撃を受けて、よろめいた。ダーンヘルムの後についてはるばるローハンから馬を飛ばしてきた若いホビット、メリーが助太刀に駆けつけたのだ。そしてかれの剣が、戦勝に歓喜した瞬間に隙を見せた黒い将軍を傷つけることに成功した。ナズグルの王は防御を失って思わずよろめく。その瞬間をついて、エオウィンが地面から攻撃をかけた。彼女の剣がついに相手の命を奪う。残忍な剣が敵の手から落ち、砕け散った。かれは地響きをあげて倒れるが、空の兜(かぶと)と鎖かたびらだけを残して、その姿はなくなってしまう！　この鎧兜(よろい)を着こんだ亡霊は、指輪の王の強大な意志によって喚びだされるまで住んでいた影の領域へ、逃げ帰ったのだ。

こうして若いエオメルは、戦勝を知らせるために馬を飛ばす。瀕死のセオデンは、このエオメルをマークの王だと賞賛する。悲しみに暮れる勝利軍は、死んだセオデンの亡骸（なきがら）を戦場から運びだした。モルドールの将軍格ゴスモグは、総くずれになった暗黒王軍の指揮権を握り、戦闘を続行させる。戦いは長期間にわたり、しかも激烈をきわめた。そのために闘いも終わりに近づくころには、勇敢な若い王エオメルさえも戦意を失いはじめる。ところが、遠く河のかなたから近づいてくる一艘の巨大な快速艇がある。騎士たちは一斉にどよめく。野蛮なウムバーの海賊がモルドール軍の加勢に駆けつけた、と叫んで。

すべてが水泡に帰したかに見えた。エオメルは丘の頂きまで馬を乗りすすめ、黒船の大群を見降ろしながら辛い敗北の感覚を味わう。かれは歌う——。

迷妄（めいもう）から出、暗黒から出て、日の上るまで
陽光に歌いながら私は来た、剣を鞘（さや）に納めることなく。
希望の果てるまで胸の裂けるまで、私は馬を進めた。
今は怒りの時、今は滅びの時、赤き夜の来る時。

（瀬田貞二・田中明子訳）

しかし運命の流れは方向を変えた。こうして敵軍をみつめ、黒船に向かって震える剣を突きつけているあいだも、驚きと歓喜がかれを捉えていた。なぜなら、最前列をすすむ船から、巨大な軍旗が風をはらんで翻ったからだ。そこには白い樹の絵柄が輝き、七つ星とエレンディル

の護符が他を圧して浮かび上がった――もう数え切れぬほど長い年月にわたって、中つ国の将軍が絶えて戦場に持ちこむことのなかった紋章だ。

こうして、イシルドゥアの嫡子でありアラソルンの息子でもあるアラゴルンが、傍らにギムリやレゴラスを随え、かれの一族である北の騎手ドゥネダインの大群を率いて到着した。疲れ切り、なかば敗北を疑わなかった守備兵は、この思いがけない援軍の到来に胸が膨らむのを感じる。

ロヒアリムの喜びはほとばしる笑いとなり、いっせいに打ち振る剣の閃きとなりました。そして城中の喜びと驚きは喇叭の吹奏となり、打ち鳴らす鐘の響きとなりました。しかしモルドールの軍勢は周章狼狽してなすところを知りませんでした。……そして暗澹たる恐怖に襲われました。運命の潮の流れはかれらには不利な方向に変わり、命運尽きる時が間近にあることを知ったのです。

（瀬田貞二・田中明子訳）

エオメルとアラゴルンの大軍は敵のまっただなかに斬りこみ、戦闘のただなかで出会って固く手を握りあう。

そして勝利はかれらのものになる。

しかしデネソールがいた――かれらはこの男を恐れた。わが子ファラミアを失ったと信じる（死にかけてはいるけれど、実際のところかれはまだ死んでいないのだ）デネソールは、理性

や事実の光も射しこめない暗い悪夢に沈みこんでしまう。火葬の薪(まき)に火がつけられる。その上に息子が運び上げられる。ガンダルフは狂った支配者を押しのけ、炎の上から若者を引き降ろす。ファラミアは熱に浮かされながらも、まだ生きていた。しかしデネソールはみずからの身を火葬の焔のなかに投げこみ、生涯を終える。

まもなくデネソールのこの狂乱ぶりを解き明かす原因を、ガンダルフが発見する。闇の支配者がもうひとつのパランティアを持っており、オルサンクにあった魔法石と同じようにこの城内で〈物見の石〉として活用していたのだ。暗い夜になど行きずりの者が秘密の部屋の窓に明滅する奇妙な光を目にしたとき、デネソールはきっとその魔法石を覗きこんでいたにちがいない。暗黒王はゴンドールを弱体化するために、この魔法の水晶を使ってデネソールの理性を蝕(むしば)んでいたにちがいない。ガンダルフは、メリーと、それから傷ついて横たわるエオウィンとが眠っている癒(いや)しの館へ、ファラミアを連れていく。だが、かれらは若い支配者を救うことを諦(あきら)めねばならなくなった。ただひとつ、伝説に「王の葉」と呼ばれている治療薬だけが、今はかれを救える薬だった。ガンダルフの命令を受けて、アラゴルンはひそかに都市に侵入し、ファラミアの体にかれの暖い手とある種の薬草とを置いた。その結果、ファラミアは楽になり、熱も下がりはじめた。そのすぐあと、都市に噂が流れる。王が復活したと。

すべてが平穏に還り、武器は油砥石(あぶらといし)で研がれ、鎖かたびらが繕われるころ、西方世界の全軍団はペレンノールの原野に集まり、モルドール軍に挑むために黒い門へ向けて軍馬を騎(の)りすすめる。サウロンの使節がこの挑戦を受けて不気味な門から姿を現わし、フロドを捕えてあると

いう事実をほのめかして嘲笑するのだ。しかしガンダルフは指輪の所持者を救うためといえども、降伏を申し出たりはしない心構えでいた。
場面はモルドールの辺境部に変わる。今は指輪の持ち主となったサム（フロドの体から指輪を取ったのだ）は、指輪の魔力を借りて体を透明にし、オークの砦に侵入したが、そこでフロドが生きていることを発見してしまった。かれはシェロブの牙から受けた毒のために、一時的に体が麻痺していただけだったのだ。そのフロドも、今はすっかり回復していた。フロドは、サムの思いがけない出現に戸惑いながらも砦から脱出することに成功した。敵の領内で、エルフの武器をたずさえたサムに出会うとは、フロドにしてみれば思いがけないことだった。かれらは荒れ果てた砂漠の国を、苦労して進んだ。さいわい、道を塞ぐものはない。渇きと疲労の恐ろしい苦しみと地獄の試練の果てに、かれらはとうとう滅びの山にたどりつく。この山こそ、いちばん初めに指輪が造られたところだ。長かった旅も、今終わろうとしている。
フロドはかれに負わされた重荷のおかげで深く傷つき、心すさみ、また指輪にまとわりついた不気味な魅惑のために疲弊しつくし、もはや自分を見失っていた。かれらは火口の縁まで山腹をよじ登る。そこには「滅びの亀裂」から燃えあがる真紅の輝きが見え、かれのまわりで明滅しだした。そのときフロドは、長いあいだ身につけてきたその「もの」を棄て去れないという素振りを見せて、身を震わせたようだ。そんなかれにサムが声をかける、さあ火口まで近寄って指輪を火のなかに投げこむのです、と。しかしフロドはそれに従わない。鋭く澄みきった声で、かれはいう、「わたしがここに来てするはずだったことを、もうしないことにした。そ

のことをするつもりはない。指輪はわたしのものだ！」（瀬田貞二・田中明子訳）

そして――。

何かがサムの背中に激しくぶつかったかと思うと、下ざまに両脚を払われて、かれは投げ出され、石の床に頭を打ちつけました。その上を黒っぽい姿が跳び越して行きました。かれはそのまま横になって、一瞬この世が真暗になっていきました。

……サムは起きあがりました。目がくらくらしました。そして頭から流れてきた血が目の中に滴り落ちてきました。かれは手探りで前に進みました。それから奇妙な戦慄すべきものを目にしました。奈落の縁に立ったゴクリが、狂する者のように目に見えない敵と取り組み合っていたのです。かれの体は前に揺れ、後に崩れ、今にも奈落に落ち込むほど縁に寄ったかと思うと、次は引きずられて退り、地面に倒れるとみれば起き上がり、また転ぶという具合でした。そしてその間じゅうかれはシーシーと声をもらしましたが、一言ももものをいいませんでした。

下方の火は怒って目覚め、赤い光がぱっと炎を上げて燃え立ち、洞窟の中は残るくまなく強烈な輝きと熱で充たされていました。その時不意にサムはゴクリの長い二つの手がその口許に引き寄せられるのを見ました。白い牙がきらっと光り、それからブッンと音がして歯が噛み合わされました。フロドが一声叫びをあげました。そしてそこにかれがいました。奈落のきわに膝をついて、ゴクリの方は、まさに狂った者のように踊りながら、まだ

指が突きささったままの指輪を高くかざしていました。それは今、まことに生きた火から作りなされたもののように光り輝いていました。

「いとしい、いとしい、いとしい！」とゴクリは叫びました。「いとしいしと！　ああ、いとしいしと！」こういいながら、わが捕獲品を眺めて楽しもうと、目をあげたちょうどその時、かれはつい足を伸ばしすぎて、平衡を失い、一瞬奈落の縁でぐらり、その体が揺らいだと思うと、次の瞬間には甲高い悲鳴をあげて落ちていきました。深い奥から、「いとしいしとおお」と、泣き叫ぶかれの最後の声が聞こえ、そしてかれはいなくなりました。

（瀬田貞二・田中明子訳）

どたん場で弱気にとりつかれたフロドは、指輪の誘惑に対抗できなくなった。しかし後を追ってきたゴクリがかれを襲い、指輪もろともフロドの指を噛み切ってしまう。そしてゴクリと指輪とは滅びの山の火口深く消えるのである。

山が唸りを発した。焔が躍りだし、サムは傷つき正気を失ったフロドを吊りあげ、外に這いだす手助けをする。モルドールは雷に合わせて領地全体を揺らし、振動をはじめる。塔が倒れ、連山が崩れる。指輪、一つの指輪、偉大な力の指輪が破壊された。そして同時に、サウロンの力の大きな部分が消え失せる。疲労しきり、身も心もぼろぼろとなり、力と胆力の全てを使い果たしたあげくに、フロドとサムは遥かなリベンデルで待っている仕事をなし遂げるための数限りない危険をのり越えた。

コルマルレンの原では、西方世界の将軍たちがモルドールの鉄の軍団を相手に恐るべき死闘を繰りひろげていた。最後の瞬間、大地が足許で揺れ、連山の頂き高く、巨大な黒い煙が焔に明滅しながら空中に昇っていった。丘は唸りをあげ、身を震わせ、大門の塔もすべて崩れ落ちる。

ガンダルフは声高に、サウロンの支配が終わったこと、指輪の持ち主が遍歴を果たし終えたことを宣言する。

そして大将たちが南の方(かた)モルドールの地をまじろぎもせず見つめるうちに、雲のとばりになお黒く、巨大な人の影のようなものが上って来たように思えました。それは一切の光を徹(とお)さないほど黒く、頭に稲妻の冠を頂き、空をいっぱいに占めていました。下界を見降ろして高く大きく頭をもたげると、それは途方もなく大きな手をみんなに向けて嚇(おど)すように突き出しました。その恐ろしさは総毛立つほどでしたが、それでいてもはや何の力もなかったのです。なぜなら、それが一同の上に身を屈(かが)めたちょうどその時、大風がそれをさらって運び去り、消え去ったからです。そのあとはしーんと静まりました。

大将たちは頭を垂れました。そしてかれらがふたたび面(おもて)を上げてみると、こはいかに！敵軍は逃走中で、モルドールの勢力は風に飛ぶ埃(ほこり)のように四散していきました。

（瀬田貞二・田中明子訳）

ガンダルフは巨大な鷲グワイヒァにまたがり、モルドールへ翔んで、噴火した山の火焔から疲れきったホビットを奪い返した。二人のホビットは冷たい大気のなかに舞いあがるが、それっきり気を失い、ゴンドールのイシリエンの涼しげな香わしさのなかで目を醒ますまで、何も憶えていない。旅に出たとき以来の襤褸をまとったまま、かれらは大会衆の面前に案内される。輝かしい甲冑に身を固めた背の高い騎士たちが目の前で慎みぶかく頭を下げるのを見て、かれらは眩しさのあまり目がくらんでしまう。トランペットが鳴り響くと、かれらは偉大な城主の前に用意された高い玉座まで進まされ、そこで新王アラゴルンの祝福を受ける。そのあとゴンドールの宮廷詩人が二人の武勲を称える歌をうたう。

しばらくは歓楽とくつろぎがかれらを和ませ、傷を癒してくれた。今やゴンドールの最後の支配者となったファラミアは体力を取り戻しており、死んだセオデンの娘で勇敢な女衛士のエオウィンを愛するようになる。そして豪華絢爛たる雰囲気と光輝のなかで、アラゴルンがみずからの王国に入来し、戴冠の式を終えた。新しい帝国に各国の貴族が訪れた。そのなかにはガラドリエル女王とセレボーラもいた。また、領主エルロンドと娘のアルウェンもはるばるやって来た。そしてアルウェンは夏至の日にゴンドールの新王と華燭の典をあげることとなった。

ついに旅の仲間に別れのときがやって来る。それぞれが故郷をめざそうとする。フロド、サム、そしてメリーは以前通った土地を数多く再訪しながら、気ままな帰り旅を楽しむ。しかし

何ヶ月も留守にしていたあいだに起こった恐ろしい変化が、かれらを出迎えた。庄は、なにやら陰気な土地に変わっているではないか。野蛮な無頼漢や堕落して盗賊に身を落とした者どもが庄の実権を握ったのだが、勇敢な旅の仲間はトロルやオークを相手に闘い、ペテン師や乱暴者の嚇しにも動じない。そして庄の「錆落とし」が、早急に、しかも完璧に行なわれる。ただし最後に、荒廃した庄を真に司っていたのがオルサンクの自堕落な魔道士サルマンその人だったことを知って、ホビットたちは愕然とする。かれは魔力を抜かれてしまうが、その狡猾さと邪悪さを失ってはいなかった。フロドはこの男を、泣きわめく召使いグリマ・ウォームタングともども追放する。しかし残忍な主人の仕打ちにとうとう我慢しきれなくなったウォームタングは、とつぜん爆発した熱い憎悪に突き動かされ、あっという間もなくサルマンに飛びかかると、背中に短剣を突き刺した。フロドは残忍な仕打ちを受けてきたこの小男を憐れむけれど、復讐に狂ったサルマンの仲間を押し止めぬ先に、大弓がしなり、ウォームタングは絶命して倒れ伏した。

こうして、庄を浄化し平和と豊かさを取りもどし、敵に踏みにじられた住人たちに昔の自尊心を思い出させる手助けをする、長くて憂鬱な仕事が始まった。これは、苦労も多く心さえ重くする仕事だが、最後にやっと片が付いた。サムは村の恋人と結ばれ、もの憂く暑い毎日が過ぎていく。しかし、すべてが終わったわけではない。

フロドは、邪悪な魔力をもつ毒ある護符を長いこと携えるという苦悩から受けた、永遠に消えない心の傷を背負う。時によると病気がちになり、その傷のおかげで少しずつ衰えていく。

自分がすくなくとも中つ国のこの地にいる限り、健康を取りもどせないことは明らかだった。そんなとき、半エルフのエルロンドの娘アルウェンから、贈りものをもらうことになった。今やゴンドール王の妃となり、海のむこうの古いエルフの地（なぜなら第三紀が終わった今、エルフたちは人間の世界から身を引きだしているからだ）に戻るよりも、このまま中つ国に残ることを選んだ彼女は、「祝福された土地」にある自分の所有地を、かれに譲ってくれたのだ。完璧な静けさに包まれたその聖なる土地で、自分がほんとうに健康を回復できることを、フロドは知る。そこでかれは灰色の入江にむかってもう一度旅立つ。そこから、海のかなたにあるエルフたちの遥かな土地へは、エルフ族の船が運んでくれる。旅のお伴はエルロンドとガラドリエル、そして何人かの仲間。海にむかって馬をすすめる。灰色の入江でかれらは、中つ国での仕事を終えたガンダルフに出会った。最後の別れも交わされた。フロドと老ビルボとガンダルフは、サムに別れを告げて、旅立った。そしてサムが庄と家族のもとに帰っていく。

　帆が引き上げられました。風が吹き、船はゆっくりと長い灰色の入江を下りながら遠ざかって行きました。フロドの持っているガラドリエルの玻璃瓶（はりびょう）の光がちらちらと明滅し、やがて見えなくなりました。それから船は外洋に出て、西方に進んで行きました。そして遂（つい）にある雨の夜、フロドは大気にみなぎるかんばしい香りをかぎ、水を渡ってくる歌声を聞きました。するとその時、ボンバディルの家で見た夢の中でのように、灰色の雨の帳（とばり）がすっかり銀色のガラスに変わり、またそれも巻き上がって、かれは白い岸辺と、その先に

はるかに続く緑の地を、　たちまち昇る朝日の下に見たのでした。

（瀬田貞二・田中明子訳）

かくして長い物語はここで終わる。

6　トールキンの基本的なアイディアの源

グンナル、たとえ黄金といえども、汝(なんじ)に歓(よろこ)びをもたらしはすまい。
指輪はやがて汝の命を奪うであろう。
『古エッダ』「グズルーンの歌」第一部、第二十節（翻訳『エッダ』では二十一節）

しかして彼(か)の者そが指輪を得るとき、
それ、彼(か)の者をして世界の王者たらしめん！
リヒアルト・ヴァグナー『ジークフリート』第三幕

古エッダ(エルダー)

今からおよそ十年前、一九五九年の後半に、わたしは偶然から、トールキン教授が中つ国に

かかわる長い物語を創造する際に用いた原資料に巡りあった。
　このとき、『指輪物語』のハードカバー版がはじめてアメリカで刊行されてからようやく三年目、当時三部作はまだ無名に等しかった――たとえばわたしのように剣と魔法をあつかったヒロイック・ファンタジーの熱烈なファンを中心とした小規模だが本格的な読者層には、すでに発見されていたにしても、すくなくとも一般読者層に対しては無名だった。もっとも、三部作なり作者なりに関する真摯な論評の類は、ほとんどといっていいくらいまだ世に出ていなかった――エドマンド・ウィルスンが「ネーション」誌に発表した主要論文――それもきわめて否定的な論調だったのだが――は、数少ない例外のひとつだ。ペーパーバック版がトールキンとかれの作品を一躍人気ものにするには、まだ間があった。最初の大衆向け出版が行なわれて、驚くほど広汎な読者を三部作に魅きつけるのは、まだ六年も先だったのだ。
　わたしはそのとき『古エッダ』[1]をひろげて探しものを調べていた。探していたのは、わたしがぼんやりと記憶していたとある詩文で、当時書きだしていたファンタジー小説の一章に付す引用文としてその正確なテキストを使いたかったのだ。
『古エッダ』は、わたしにとって世界で最も面白い本のひとつといえた。それを何年か前に見つけて、その全文を二度も読み返したものだ――ただ、あいにくそれは『ホビットの冒険』を読んだり、トールキンのことを話に聞いたりする以前のことだった。トールキンが述べているドワーフ小人の名――たとえばドゥリン、ドワーリン、ダイン、ビフール、ボフール、ボンビール、ノーリ、トライン、ソリン、スロール、フィーリ、キーリ、フンディン、グレイン、ド

ーリ、オーリなど——を記憶している読者なら、わたしが味わった発見の興奮の度合いが、よくお分かりになるだろう。うろ憶えにしていた詩を探して『古エッダ』の第一編に目を通していたわたしは、第十連(スタンザ)で凍りついたように目を止めた。

9　かくして神々は評議のための座を索(もと)めた。
聖なる座が設(しつ)らえられ、評議は開かれた。
プリミルの血とブラーインの脚からドワーフ族を生みだすのが誰か、
それを見つけるために

10　あらゆるドワーフのうちでも力に勝るモートソグニルが創られ、
次に**デュリン**が生まれた。
たくさんの種族が人間そっくりに創られた、
デュリンのいうには、地中の小人(ドワーフ)たちが。

11　ニューイとニジ、ノルズリとスズリ、
アウストリとヴェストリ、アルスィオーヴ、**ドワーリン**
ナールとナイン、ニピングと**ダイン**、**ビフール**、**ボフール**、**ボンブール**、**ノーリ**、アーンとアーイナル、アーイ、ミュヨズヴィトニール

12 ヴェイグに**ガンダルフ**（！）、ヴィンダールヴ、**スラーイン**、セックに**トリンスロール**、ヴィトとリト、ナールにニューラーズ――これはもう話したレギンとラーズスヴィズ――名録は正確に。

13 **フィーリ**、**キーリ**、**フンディン**、ナーリ、ヘプティ、ヴィーリ、ハーナル、スヴィーウルフラール、ホルンボリ、フレーグとローニ、アウルヴァング、イァリ、エイキンスキャルディ

14 **ドワーリン**の群れにいた小人の一族、名録にはロヴァルまで挙げなければならない。かれらは岩を棄て、湿った土地を抜け砂の原に棲をもとめた。

15 ドラウプニルとドールグスラシルがいた。それにハール、ハウグスポリ、フレーヴァング、**グローイン**、**ドーリ**、**オーリ**、ドゥーフ、アンドヴァリ、スキルヴァル、ヴィルヴィル、スカーヴィズ、アーイも。

（ここでは『指輪物語』の論題に合わせるため英訳テキストを重訳してある。固有名詞の原発音もふくめた原典直訳としては、翻訳版『エッダ』を参照されたい。）

以上、まさに七つの詩文からトールキンはドワーフ小人の十六種族の名を借りて来たのだ――

―もちろん、『古エッダ』ではドワーフの一員として挙げられているらしいガンダルフみずからについても、いうまでもない。脚注によれば、かれの名は〝魔法の妖精（エルフ）〟を意味し、結局エダイク・ガンダルフはエルフとドワーフの混血であるようだ、と指摘してあった。

わたしは自分の発見に心を奪われるあまり、『エッダ』とトールキンの本を目の前に並べて坐（すわ）りこみ、楽しい名前狩り（ネーム・ハンティング）のゲームを開始した。その結果、すぐに別の〝発見〟が現われた。『エッダ』にあるトーリンという小人（ドワーフ）は、トールキンの作品にはトーリン・オーケンシールドとして登場する。先ほど引用した第十三連の最終行にあった小人（ドワーフ）の名エイキンスキャルディが、実は本来の古北欧語で「樫の盾（オークンシールド）」を意味していることが分かった。つまりトールキンは二種類のドワーフの名をひとつに組み合わせて登場人物を創りあげたのだ。わたしの探索は他の巻にもおよび、さらに多くの発見をもたらした。その大部分を、わたしは「ゼロ」(2)誌に連載した長編エッセイ『トールキン覚え書き』のなかに書きとめておいた。

トールキンが借り受けたドワーフの名は、長大な宇宙誌であり予言詩でもある『巫女（みこ）の予言』（英題『ヴォルスポ』）に現われる。ちなみに「巫女の予言」は『古エッダ』の第一編に当たる。『エッダ』は北欧文学作品としてはきわめて古い時代に属する――俗に北欧神話の旧約聖書と呼ばれるのも無理はない。構成的にきわめて類縁関係が深いといわれる『旧約聖書』と同じように、『エッダ』もまた三十五編から成る巨大で順序のととのわない物語集なのだ。大多数は詩文で書かれているけれど、一部分は散文のところもある。歴史と英雄伝説、詩に俚諺（りげん）、宗教神話に系譜、純粋な寓話（ぐうわ）に神学、そして宇宙誌を網羅した種々雑多なコレクションなのだ。

『古エッダ』はその本源的な資料であり、北欧神話の源泉である。近代文学における北欧神話はどれも、いかなる形式やスタイルで書かれようと、それこそL・スプレイグ・デ・キャンプ&フレッチャー・プラットによるハロルド・シェイ物語のひとつ『不完全な魔法使い』に出てくる「轟(とどろ)くトランペット」の一節から始まって、遠くリヒアルト・ヴァグナー作曲になるオペラ『指輪』大系に至るまで、この一作品を母胎として生まれでたものだ。

　これらの物語がどのくらい古いか、だれも知らない。最近の学説によれば、おそらく十三世紀中葉ごろノルウェーの植民地だったアイスランドで最初に書き記されたもののようだ。唯一現存している写本は、今も〝王の古写本〟としてコペンハーゲンの王立図書館に保管されている。口誦(こうしょう)のかたちでは、おそらくあの「アーリア人大移動」時代――北方民族の先祖たちがヨーロッパをさすらう遊牧民として分立していた、まだ不明瞭(ふめいりょう)で不充分な文献しかなかった時代――にまで、遡(さかのぼ)るはずだ。この普及過程は、ドイツ人歴史家によって「暗黒時代の国家移動(フォルカーヴァンデルンク)」として言及されている。この歴史的な移動と冒険から伝説と英雄が生まれ、数代にわたる語り手に飾りたてられ、スカンジナヴィア半島に定着する前の暗い混乱時代にあったノルウェー人やドイツ人の祖先たちに受け継がれていったようだ。

『古エッダ』のほかの巻を調査しているうちに、わたしは、トールキンが北欧神話の全体から結構多くの素材を借り受けていることを発見した。そこで、さらに後期のノルウェーやドイツ文学を漁(あさ)って、トールキンがそこからも資料を引き出していないかどうか確かめることにした。やはり、かれは使っていた。わたしの発見は、トールキンとかれの作品の源泉について書かれ

た他の評論にかつてなかった、まったく独自なものだ。本書の冒頭で紹介したヘンリー・レズニクの「サタデイ・イーヴニング・ポースト」紙の記事を読んで、次のような洞察に触れたのは、何年もあとの話なのだから。

トールキンがノルウェーやドイツの神話に永らく親しんでいたことは、あのひどく寒々とした威嚇的な中つ国の風景を生みだす霊感となった。かれは、生涯を通じた二大興味──田園的英国と北方神話──を意識的にみずからの文学的な用途に振りむけたことを、隠そうとしない。「わたしは『指輪物語』のなかで」と、トールキンはいう、「神話を現代化し、信じられるものにしようと試みた」と。

「神話を現代化しようとした」──トールキンがなし遂げたことを正確に理解しはじめたと、自分で思うようになったのは、それから何ヶ月も経たないときだった。もちろん『指輪物語』を読む教養人なら、作者が幾つかの馴染み深い概念を、ヨーロッパ全般の民話や文学や神話から引き出していることに気づくだろう。すなわち、エルフや竜やトロルやドワーフ──これらはすべてトールキンの作品に出てくる──などは、グリムやアンデルセンの物語にもやはり出てくるのだ。トールキンはかれらを創造したのではない、借り受けただけだ。しかし三部作をはじめて覗くと、ほかには馴染みのあるものを何ひとつ探しだせない。トールキンが古いノルウェーやドイツの神話伝承の総体をいかに引き出し、その素材をみずからの目的に照らしてど

う再構成したかを理解しはじめるのは、本を閉じて長い黙考にひたるときからのことだ。

ジークフリート伝説

『古エッダ』にあって最も偉大な挿話のひとつは、途方もないニーベルンゲンの財宝を手にした〝竜退治(ドラゴン・スレイヤー)〟ジークフリート伝説だ。これは世界的に有名な物語として、アーサー王――グゥイネヴィア――ランスロット譚(たん)やトロイア戦争と比較される。物語は『エッダ』から出て、六種類ほどの後世版と再話を経ているが、本来のかたちは次のとおりだ。まずヴェルスンガ族シグルズ(固有名詞の発音は翻訳『エッダ』に従う)が竜ファーヴニルを殺し、邪悪なドワーフであるアンドヴァリの宝物あるいは財宝を手に入れる。かれはヴァルキューレの一人シグルドリーヴァを魔法の眠りから解きはなし、グンナル王の代わりに彼女に求婚する。そして彼女はグンナルの王妃となる。グンナルはその功績をめでてシグルズにグズルーンをめあわせる。後にグンナルとヘグニはニーベルングの財宝を奪うためにシグルズを殺害する。

物語の最初の形式は後の異本類にふたたび現われる主要な要素を明示している――トールキンが引き出した要素もそれなのだ。たとえばアンドヴァリの財宝のなかに「黄金の指輪」があり、死にかけた竜が殺害者シグルズにこう予言している(『ファーヴニルの歌』二十節)――「それから指輪はいつかおまえの害になるだろう」と。物語の後のほうでは、『グズルーンの歌』二十節に語られているとおり、夫シグルズの亡骸(なきがら)にすがって泣くグズルーンが言う――。

「グンナル、黄金はあなたに何の歓びも齎しはすまい。
やがて指輪があなたの生命を奪うでしょう」

所有する者に害を及ぼす魔法の黄金の指輪を概念として成長させた種こそ、これだ。竜退治の物語は、時を経るにしたがって変化し、尾鰭が加わった。十三世紀にはスノリ・ストルルスンが『古エッダ』の再話を完成し、これが後に『新エッダ』あるいは『散文エッダ』と呼ばれるようになった。このスノリは血の気が多く野望にも燃えたアイスランドの首長の息子で、かれ自身も見果てぬ夢を追うあまり、友人や親類や自分の子供さえ犠牲にした完璧な異端児だった。野心と裏切りと謀略の不気味な年代記であるかれの生涯は、一二四〇年に義理の息子に殺されて、終わる。しかしかれの『散文エッダ』だけは、旧約聖書の書き抜きを嵌めこみトロイア史詩を不器用につなぎ合わせて（たとえば北欧の神オーディンはプリアモス王の孫として描かれる、などなど）北欧神話を再話しようと試みたための混乱と不都合があるものの、古詩のスタイルに則した傑作である。

竜退治のスノリ版では、『古エッダ』の英雄シグルズはシグルドと呼ばれ、同じ本に登場するそのほかの人物名もわずかだが違っている。このエッダ物語要約版は『散文エッダ』のなかの「スカルドスカパルマル」（スカルドの詩）という一章に収められている。偶然なことに、わたしが今ここに示したドワーフたちのカタログが、スノリの前作『ギュルヴィたぶらかし』

第十四章にも直接引用されている。『散文エッダ』は幾つかの古い写本のなかに保存されている。そのうちのひとつ、スノリの原写本を直接複写したと思われる稿本（一三二〇年に書かれたウプサラ古写本）がウプサラ大学図書館に現存する。

　スノリが義理の息子に暗殺されてから約三十年後に、『ヴェルスンガ英雄譚(サーガ)』が世に出た。一二七〇年ごろ無名のアイスランド詩人によって書かれたその作品は、『古エッダ』に材を得た散文体の再話だ。この無名の作者は、おそらく今日われわれが保存する完全な「エレメンツ」版写本よりもはるかに完璧な本から物語を引いたにちがいない。なぜなら、どちらかというと断片的な物語が、ここでは緊迫を保ち途切れなく続く語り口によって肉付けされているからだ。この版本(ヴァージョン)では、主人公の竜殺し(ファフニールスペーン)シグルドが折れた剣を相続する。かれはそれを小人の鍛冶屋(かじ)レギンに鍛え直させ、直った剣を改めてグラムと名付ける。シグルドはその剣で竜ファフニールを殺し、宝物を手にいれる。しかしかれは、心中深く裏切りの心を抱き殺害を企てるレギンを信用しすぎてしまう。かれは戦いの天女ヴァルキューレのひとりブリュンヒルデを魔法の眠りから目覚めさせ、立ち去る前に夫婦のちぎりを結ぶ。しかし、魔法薬によってブリュンヒルデのことをすっかり忘れたかれは、グンナルの妹グンドルンを妻に迎え、グンナルに手を貸してヴァルキューレ族を破る。そしてこの出来ごとが、結果的にシグルドとその他の人々に死をもたらす。

　しかしこの物語のもうひとつの形が、大幅に咀嚼(そしゃく)されて偉大なアングロ・サクソン叙事詩『ベーオウルフ』のなかに現われる。ベーオウルフが怪物グレンデルを殺したあと、ひとりの

首長がかれの偉業(いさおし)を称(たた)え、さらに比較のうえでもかれを褒めちぎろうと、もうひとりの竜殺しの英雄に関する古歌を歌う場面だ。『ベーオウルフ』では、あのシグルズ＝シグルドはシグムンドと呼ばれ、ファーヴニル殺しを描く俗謡(バラッド)が『ベーオウルフ』第十三章に登場する。やがて分かることだが、トールキンはこの『ベーオウルフ』から幾つかの有益な要素を見つけだした。

名高いドイツ国民叙事詩『ニーベルンゲンの歌』は、この伝説のほとんど最終形といっていい形式を提示する。以下に、この最終形の展開を記そう。ジークフリートはクリームヒルトの美しさを聞き伝えて、ヴォルムスへ馬を飛ばし、彼女に求婚する。かれはシィルブングとニーベルングという二人のニーベルング族を殺し、かれらの黄金財宝を自分のものにする。そのあと妖精(ようせい)アルベリッヒから〝見えなくなる兜(かぶと)〟タルンカッペを手に入れる。かれはまた一匹の竜を殺し、その血を全身に浴びてどんな武器にも対抗できる屈強の体になるが、たった一個所(かしょ)リンデンの葉が肩に貼りついて、不死の体をつくる竜の血を浴びそこなった部分が残ってしまう(ギリシア神話の英雄アキレウスが三途(さんず)の川スティックスの水に浸って、全身鋼鉄のような体になるが、たった一個所母親がかれを水に浸すときに摑(つか)んだ踵(かかと)だけは水に触れなかったという物語に、よく似ている――中世のドイツ詩人たちは果たしてギリシアの叙事詩『イリアス』を読んでいたのだろうか)。ヴォルムスの王ギュンテルと策謀家ハーゲンは無敵の英雄を口説いて、ヴァルキューレのひとりブリュンヒルデを王の花嫁になるように説得する役目を、引き受けさせる。かれはその役目に従ってビリュンヒルデをギュンテルの妻としたあと、みずからもクリームヒルトをめとる。二人の女王はいさかいを起こし、ジークフリートは、かれの体の弱

点を発見したブリュンヒルデの煽動に乗ったギュンテルとハーゲンによって殺害される。クリームヒルトはニーベルングの財宝を受け継ぎ、のちにエッツェルと結婚する。そこで彼女はエッツェルに迫って、ギュンテルとハーゲンをかれの王国に誘い入れることを約束させる。二人が王国に着くと、彼女は罠をしかけて二人を殺し、こうしてジークフリート殺しの復讐を果たし終える。

物語の発展状況をここまでたどってくれば、トールキンの使用し得た要素の幾つかは、すでに言及されたことになる。竜退治、竜の宝と、それを所有する者に運命を下す呪い、見えなくする護符、そのほか。しかしこの物語は、発展の最後の段階をもうひとつだけ経ることになった。

リヒアルト・ヴァグナーがオペラによる史詩『ニーベルンゲンの指輪』を一八五〇年ごろ作曲しはじめたとき、かれは良き友フランツ・リストの助言を得て、このドイツ国民叙事詩を直接相手とした。ヴァグナーの途轍もない四部作はそのまま史詩神話の素材から作られているが、しかしヴァグナーみずからの考案による幾つかの変更をも含んでいた。かれが目差したのは、『ニーベルンゲンの歌』と『ヴェルスンガ英雄譚』とのあいだに見られた多数の相反する要素を合一させることだった。この目的を実現するために、かれは物語全体を書き直さなければならなかった。しかしヴァグナーは生まれながらの天才だった。偉大な古詩の素材と取り組むことで、かれの天賦の才を誇る手からは物語の最後の形が生まれた。

『指輪』大系の完全な歌詞集は一八六三年にはじめて出版された。大系それ自体は一八七六年

の八月十三日から十七日までバイロイトで完演され、竜退治の伝説はその窮極の形を結び終えた。ヴァグナーの構成は次のとおりだ。

『ラインゴールト』では、妖精アルベリッヒがラインの娘たちから、彼女らが川底で護っている黄金の塊りのことを知らされる。もしもその黄金で指輪を作れば、所有者には魔法の力が授かるというのだ。ラインの娘たちが欲深いかれの魔手から遁れたとき、かれは激昂して黄金を奪い、妖精の鍛冶屋ミメを嚇してそれを魔法の指輪に作り直させる。

いっぽう神々の王ヴォタン（ノルウェー神話のオーディンをチュートン化したもの）はファゾルトとファフナーという二人の巨人を説き伏せて、王のためにヴァルハラを建てさせる。建築の報酬に女神フレイアが差し出される約束で。巨人たちが仕事を終えると、智恵者ロゲは愚かな巨人たちの強欲につけこんで、女神の代わりに指輪を持っていくよう言いくるめる。かれはいう。

「黄金の指輪が出来あがれば、それを差し上げよう。
比類ない魔法と力を。
それを持つ者は世界を手にいれる」

巨人たちは約束の変更を承諾し、ヴォタンとロゲはアルベリッヒを訪れる。ところがアルベリッヒは指輪の力によって妖精の王になっている。かれらは策を弄してアルベリッヒに取りい

り、人の姿を変える指輪の力を見せてもらうことになる。妖精は罠にはまってヒキガエルに姿を変えられ、姿を見えなくさせる兜ターンヘルムや妖精の財宝ともども指輪を差し出さざるを得なくなる。かれは不承ぶしょう相手に屈服するが、次のような呪いを魔法の指輪にかける。

「呪いがわれに指輪を与えたがゆえ
わが呪いは指輪とともにあれ！
その黄金が計り知れぬ力を与えたがゆえ、
今やその魔力はいやが上にも
死を解き放てかし！」

こうして、ヴォタンは指輪の呪いに落ちはじめ、それを手離すことをいやがるようになるが、神々は財宝を巨人たちに引き渡す。すると二人の巨人は、やはり恐ろしい魔力を感じて、どちらがその持ち主になるかについて口論し、とうとう決闘にまで発展する。ファフナーは兄弟のファゾルトを殺して、その指輪を奪う。

ヴァグナー四部作の第三部『ジークフリート』では、ミメが若いジークフリートのために折れた剣ノトフングを鍛え直そうとする。しかし仕事に失敗すると、ジークフリートは折れた剣の破片同士を自力で接合する。ノトフングを武器として、ジークフリートは竜の姿をとったファフナーを殺す。その際、かれは重い鱗（うろこ）を貫いて相手を殺そうとはせず、やわらかくて防御の

ない胸に剣を打ちこむのだ。

偶然に竜の熱い血を浴びて、ジークフリートは自分が鳥の言葉を理解できるようになったことを発見する。かれは、ファフナー殺しを見ていた鳥の話を盗み聞いて、自分が洞窟の奥に進んでターンヘルムと魔法の指輪そのものを見いだす運命にあることを知る。

ジークフリートがその洞窟でニーベルングの財宝と二つの魔法の品を手にいれているあいだに、アルベリッヒとミメが洞窟にたどりつき、殺されている竜をみつける。そこで二人はどっちが指輪を得るかで口論をはじめ、もうすこしで殺し合いになる。しかしジークフリートが略奪品をもってふたたび姿を現わした隙に、アルベリッヒは逃げだす。ミメは英雄から指輪を奪おうとして襲いかかるが、逆にジークフリートに殺される。そのあとジークフリートは魔法の火に囲まれた城からヴァルキューレ族のブリュンヒルデを救いだし、偉大な物語もようやく結末へたどりつく。

トールキン三部作に見られるジークフリート物語の要素

リヒアルト・ヴァグナーの手で最終的な形に到達したジークフリート伝説のなかには、わたしたちの目を奪う構成上の要点がいくつかある。

1　宝物を護る竜。

2　所有者に大きな力を与えるが、同時に恐るべき呪いをもたらす魔法の金の指輪。
3　宝物とともにある「見えなくさせる護符」。
4　胸にある無防備の場所を狙って、竜を殺すこと。
5　ふたたび接ぎ合わされる折れた剣。
6　二人の妖精、あるいは二人の巨人が指輪をめぐっていさかいを起こし、ついに片方を殺してしまうこと。
7　指輪を所有する邪悪な小妖精が、その魔力のために気が狂ったり悪業をなしたりした挙句、指輪のために生命を落とすこと。
8　指輪の呪いが死ばかりでなく、ある種の道徳的堕落、あるいは燃えるような所有欲を も、所有者すべてにもたらすこと。

『指輪物語』と『ホビットの冒険』の粗筋を記したわたしの文章を読まれた読者なら、この八つのプロット的要素がそっくりトールキンの物語にも存在することを、すぐに理解できると思う。そのとおり、かれは魔法の指輪と「見えなくさせる」兜とをひとつの護符に組みこんだが、これはかれが行なった唯一のジークフリート離れといえる要素だ。『ホビットの冒険』のなかで、邪竜スマウグはファフナーと同様に、胸の一部にあった無防備部分を狙われ死んでしまう。『指輪物語』にあっても、「折れてはいるがやがて接ぎ合わされる」剣の物語は、ちゃんと出てくる。アラゴルンが、自分はナルシルというエレンディル所有の折れた剣を護っているのだと

告白する場面に、現われる。剣は接ぎあわされ元通りになって、「西方世界の炎（西の焔）」という意味のアンドゥリルなる新しい名前を得る。トールキンは、主人公が鳥の言葉を学び、一羽の鳥から助言を受ける場面を、用いている。『ホビットの冒険』の第十五章で、カークの息子である大鴉（おおがらす）ロアークはスマウグが殺された知らせをトーリン・オーケンシールドにもたらす。トールキンはまた、二人の小妖精（ようせい）アルベリッヒとミメが指輪をめぐって闘い、一方を殺してしまう場面の引き写しを行なっている。というのは、はじめゴクリが指輪を手にいれるが、それはかれがまだスメアゴルと名のっていたころで、指輪を護るために兄のデアゴルと争い、ついに殺してしまうからだ。全民の父（オールファザー）であるヴォタンが、神々の父である身もかえりみずに指輪の誘惑に負ける場面もまた、三部作には繰り返されている。強大な魔法使いガンダルフが〝それを持つと誘惑に負けてしまいそうだから〟という理由で、指輪の引き取りを拒む場面だ。

トールキン教授が以上述べた主要な再話のそれぞれを書くにあたって、ジークフリート伝説を研究したことはほとんど疑い得ない。これは、かれが同じ伝説に関する版本のうち一種類の本にのみ現われるような要素なりアイディア、あるいは場面をよく用いていることから知り得る。たとえば、指輪をもとめてミメとアルベリッヒとが繰りひろげる戦いは、あの形としてはヴァグナーの物語にしかみつからない。『エッダ』における妖精の名のカタログは、ヴァグナーのなかには見当たらないが、かれはそれ故に両方の資料を検討しなければならなかったのだろう。ただし『ベーオウルフ』から借り受けた名は、詩のなかにしか出てこない。

原注

（1）『古エッダ』の所蔵本、すなわちこの小文で、わたしが実際に使用し言及した版本は、『詩（ポエティック）エッダ』と呼ばれている（これは別名で——また一部の学者間では『エッダ・サエムンダール』とも呼ばれることがある。わたしはたまたま『古エッダ』という題が気に入ったので、以後本書はすべてこの題に従う）。ヘンリー・アダムス・ベロウズ訳本は、スカンジナヴィア古典叢書（そうしょ）のうち、二十一巻めと二十二巻めを占め、ニューヨークではアメリカ＝スカンジナヴィア協会の手で刊行された。一九五七年に第四版発行。ちなみに、本章に刺激されて本腰を入れて「巫女（みこ）の予言」を読みくだそうと考えたトールキン狂には、トールキン崇拝にかけては右に出る者のないというW・H・オーデン氏が最近『古エッダ』の第一編を新詩体で訳し直していることを、知らせておこう。オーデン氏は『エッダ』から得たほかの抜粋（ばっすい）部分も英訳して近々出版する計画をもっている。

（2）『トールキン覚え書き』の連載第一回は一九六一年十一月号に掲載され、連載エッセイの最終稿は一九六二年九月号に収められた。また基本的には同趣旨の連載記事を大胆に圧縮した稿が、『とにかくトールキンというやつは何者だ？』と題され「トライアンフ」誌、一九六六年十一月号に掲載されている。

7　名前をつけること

かくして神々は集いの座、聖なる座をもとめ、評議を開いた。
かくしてかれらは白昼と薄明とに名をつけた、
朝(あした)に名をつけ、また欠けていく月に、
夜に宵に、数えるべき年に、名を与えた。

『古エッダ』、「巫女の予言」第六節

トールキン教授が『古エッダ』第一編から有名な妖精の名のカタログを引用して、幾人かの登場人物の名の源泉としたことを発見したとき、わたしは最初その借用がさらに深い意味をもっているということを理解していなかった。

こうした文献引用はけっして珍しいことではない。ファンタジーをはじめ色々な分野の作家たちが、友人や同僚作家を喜ばせる個人的な冗談の種にするために、その物語に用いる新しい

名前の体系を創り出すことに力を注いできた。有名なアメリカ作家でポオ流の恐怖小説を得意としたH・P・ラヴクラフトは、この仕掛けをしばしば利用している。一例を挙げれば、かれは友人であり文通相手だった作家オーガスト・W・ダーレスの家系にまつわる知られざる史実を利用した。自作の短編のいくつかで、太古の伝承を伝える架空の書のひとつを著した想像上の著者〝ダーレット伯爵〟というのを創造したとき、この名は小さな個人的な楽屋落ちとなったからだ。

この名に含まれた冗句は〝ダーレス〟と〝ダーレット〟とのあいだにみつかる発音の類似を使った、だれにも分かる洒落(しゃれ)ばかりではない。ダーレスが実際にフランスの名門の血を引いており、もともとは姓を〝ダーレット〟といっていたものが、フランス革命の折りに先祖がフランスからバヴァリアに亡命した結果いまのダーレスに変わったこと、しかも〝伯爵〟は歴史のその時点までダーレス家が保持していた称号だったことは、しかしラヴクラフトの親しい仲間ではない読者にとって、知るよしもない事実だろう。わたし自身も、オーガスト・ダーレス自身に説明を受けるまでは見当もつかなかった。もちろんアメリカ市民であるダーレス氏が貴族の称号を保持できるはずはない。

ラヴクラフトは別の作品のなかで、自分自身についてもこの手の冗談を実行している。たとえばかれの古い姓であるワード・フィリップスを、無名の伝承を記録する呪うべき文献を残した架空作者のひとりに使っている。文通相手のなかには、これと比較できる冗談を、しかもラヴクラフト自身を種に使って実行している者がいる。のちに『サイコ』などたくさんの本や脚

本で名をあげた人物ロバート・ブロックが、まだ若い駆けだしの時代、怪奇小説専門雑誌「ウィアード・テールズ」の寄稿家だったころ、『書斎内の自殺』と題したラヴクラフト風〃ク・リトル・リトル神話〃に属する作品を書いた。そのなかでかれは、「バスト神（エジプトの神性）の神官、狂気のルーヴェ＝ケラフ」の書いた原初の魔術に関する呪わしい文献を引用した――ルーヴェ＝ケラフ、もちろんラヴクラフトの洒落である。(1)

わたしはトールキンについて、かれも他の作家同様この種の悪戯をやりたい誘惑に駆られただろうと推測した。個人的な楽屋落ちのほかに、実は学識豊かな幻想小説家のなかにもしばしば、ちょうどトールキンが自作の妖精の役作りのために『古エッダ』からその名前を借用したのと同じやり方で、自分の本にその専門知識を活かそうとしたがる人物が出るからだ。同じようにC・S・リュイスも、その傑作『ナルニア物語』のなかで、すばらしいライオンの神に〃アスラン〃という名を与えた――これは〃ライオン〃を意味するペルシア語アルスランから来ている。

そこでわたしは、他の作家たちが行なったことをトールキンもやっているに違いない、と考えた。今たいへんな人気を誇り多産でもあるアメリカのSFファンタジー作家ポール・アンダースンは、みずからもデンマーク人の血を引いているが、かれのみごとな幻想小説『折れた剣』の初版を一九五四年（これはトールキンの三部作の第一巻が初版でイギリスに流布しだしたころに当たる）にアベラード・シューマン社から出版したとき、アンダースンは背景になる伝承としてノルウェーの英雄譚と神話の材料を借用した。『折れた剣』は、妖精の貴族イムリ

ックに替え子された人間の子が、妖精の土地フェアリで育てられる物語だが、このなかでアンダースン氏は、わたしたちが『指輪物語』の源泉として論じてきた北欧神話の本体から多くの要素を使用している。物語にはタルンカッペという名が出てくる。またヴォルスポの妖精録から引いた妖精たちも何種類か出てくる（トールキンが〝デュリン〟と呼んだ〝ディリン〟と〝ドワーリン〟を含む）。トロル、ドワーフ、エルフ、竜、そして折れた剣の着想そのものもだ。といって、もちろんこれはアンダースンがトールキンから要素を借り出したことを意味するわけではない。そんなことは日付の点を取っただけでも、不可能と分かる。『折れた剣』は出版の一年か二年前には出来あがっていたわけだから、トールキン三部作のどれかが世に出る以前に創られたことになる。つまりポール・アンダースンは、教授が借用したのと同じアイスランド神話から材料を借り出したわけだ。

トールキンの源泉に関する問題を突き詰めていけばいくほど、かれが単に妖精の名を引き出す以上の用途を『エッダ』に見いだしていた証拠が、ますます出てきた。たとえば、暗い魔法の森マークウッドは、『エッダ』に何度となく語られる（翻訳『エッダ』ではミュルクヴィズとしてある）。『古エッダ』の第八編『ロキの口論』第四十二連には、次の一文がある。

しかるにムスペルの子らマークウッドに馬をすすめるとき、
汝は武器もなく、惨めな姿で待つだろう。

『エッダ』の第十五編『ヴェルンドの歌』（翻訳『エッダ』では第十編め）の第一連は、次のようだ。

南から来たる娘ら、マークウッドを遁（のが）れ進む、
たおやかにして若き娘らの運命に、追われて

闇の森ことマークウッドへの言及は、『エッダ』だけで合計十七回ほどにのぼる。そしてわたしが所有する版の脚注には、その言葉を「暗く陰気で不思議な森を指す種族用語」と説明している。

マイクル・ストレートが『トールキン教授の不思議な世界』（「ニュー・リパブリック」誌一九五六年一月十六日号）と題した論文のなかで、次のように書いている。トールキンはかれの中つ国神話を創造するにあたって、「ウェールズ、ノルウェー、ゲール、スカンジナヴィア、ドイツの民話に熱中すること」で仕事の準備を果たしたのだ、と。要約すれば、かれは伝説、言語、文化、信仰に関するヨーロッパ共通の遺産の一部を作りあげている要素や素材に、みずからドップリと耽（ふけ）ったのだ。そしてこの指摘は、充分に真実だった。なぜなら、偉大な『エッダ』以外の源泉を調査していくにつれて、そのどこにもトールキンの用いた要素が現われてきたからなのだ。

妖精（ドワーフ）スライン（ヴァルランドの海賊王として）は、たとえばフロムンド・グリープソンの英雄譚に登場する。そのなかでかれは、魔法の剣ミスティルテインをふるって雄々しく闘う。魔

法のかかった刃を手にしたかれは、それをふるっている限り殺されることはない。そして狡猾なフロムンドが計略を用いてかれから剣を奪うまでに、かれは百四十四人の戦士を殺してしまう。デュリンとドワーリンはまた『ヘルベル伝説』と『ヘイスレク伝説』にも現われる。そこでは主神オーディンがかれらに命じてオーディンの孫スヴァフルラーメ王のために神秘な剣ティルフィングを鍛えさせる。この厄介な仕事を心ならずも引き受けさせられて恨みを抱いた妖精たちは、刃に向けて恐ろしい呪いをかける。これから後この刃が鞘を払うときは必ず人が死ぬのだと。デュリンとドワーリンは後にふたたび『賢者ヘイドレク王の英雄譚』に出てくるが、そこにはやはりマークウッドも登場する。マークウッドはほとんどの資料にも語られており[2]、ウィリアム・モリスの長編『ウルフィングの家』にさえ見いだせる。

　ガンダルフもまた、かなり知られた存在である。かれが最初に姿を現わすのは『エッダ』にでてくる小人のカタログで、そこでは小妖精の血を半分引いている種族とされているようだ。しかしもうひとりの〝ガンダルフ〟は、十四世紀の北欧神話『タッター・ノーナゲスト英雄譚』(N・カーショウ『遥か昔の物語とバラッド』、ケンブリッジ、一九二一年を参照)においてちょっとした役割を演じている。そして問題をいっそう混乱させるものとして、〝熊のガンドルフ〟(原文のまま)という役柄が、ウィリアム・モリスの長編『この世の果ての泉』第四編第二章にわずかながら登場してくる。

　わたしにこれ以上はないほど楽しい探索の時を過ごさせてくれたばかりでなく、原典さがしに最高の面白さを感じさせてくれたのは、エアレンディルとフロドその人だった。

エアレンディルは、トールキン三部作で実際に活躍することはなかったが、妖精族の先祖に属する英雄である。アラゴルンは第一巻第十一章で、自分の身の上を幾らかホビットたちに話して聞かせる。「白きエルウィングが、エアレンディルの妻となった。エアレンディルはついに、この世の霧の中から船出して、その額にシルマリルを輝かせ、天なる海に去ったのだが、このエアレンディルからヌメノールの王たちが出て来た。それが、西方王朝だ」（瀬田貞二・田中明子訳）。トールキンは、追補編A-I（イ）でもこれに関する記述を行なっている。シルマリルの魔力を得て、かれは最西端の地域に足を踏みいれる。そこで妖精と人間両方の外交官として交渉するが、さらに強力な人々の支援を得て、その力を用いモルゴスを滅ぼす。しかし「エアレンディルは人間の住む地へ戻ることを許されず、シルマリルをとりつけたかれの船は星として、また大いなる敵あるいはその召使たちの圧制に苦しむ中つ国の住人にとっての希望のしるしとして、天つ海原を航行させせられることとなった」（瀬田貞二・田中明子訳）。妖精たちはかれを〝航海者エアレンディル〟と呼ぶ。しかしかれは『指輪物語』に限ると重要な役どころを担ってはいない（ただし三部作の前編でトールキンの遺作となった『シルマリルの物語』が出版されたあかつきには、当然ながらそのなかで主役格の役割を与えられるだろうけれど）。

こうしてエアレンディルは星になった。しかもたまたま――チュートン神話に関する初期の権威ヴィクトル・リュードベリによれば――われわれの知る星の名のうちチュートン語源のものは数が少ないが、そのうちのひとつにエアレンディル、あるいはオーヴァンデルがあり、明けの明星（金星）を示すとされ、何代にもわたってブリテン島のサクソン人に用いられていた

名前だったという。このエアレンディル＝オーヴァンデルの物語を『散文エッダ』にまで遡ると、わたしたちはオーヴァンデル――あるいはその物語で使われるいい方に従えばオーヴァンデル――が、トル神のヨッンヘイム探索にかかわる面白い逸話の部分に現われることを発見する。かれは大男でしかも勇敢な狩人であって、魔女グロアの夫であり英雄スウィプダグの父であり、巨人コラーと怪物セラの敵であり、さらに名高い巨人殺しでもありトル神の友でもある。かれは、トル神が巨人国へ出向く旅の途中で巡り会うが、たまたま川を渡るときにオーウァンデルは駕籠にかつがれ渡川の手助けを受ける。オーウァンデルの体のうちでヨッンヘイムの凍てつくような大気に晒された唯一の個所は、運悪く駕籠から飛び出したかれの大きな足の指だった。その指がすっかり凍りついたとき、友情厚いトル神はそれを折りとるが、声ひとつあげず眉ひとつ動かさなかった英雄を称えて、その指を天国に投げ上げた。天国ではそれが正しくも「オーウァンデルの足指」と呼ばれる星になった。この名はのちに「オーヴァンデル」に縮められ、さらに後世、サクソン人がキリスト教に改宗したとき（リュードベリは真面目な顔で報告しているのだが）、かれらはこの星をキリストのシンボルとみなすようになり、オーヴァンデルあるいはエアレンディルとすこしずつ変化していって、古英語で「光輝」を意味する抽象的な言葉になった。エクセター古写本には、このシンボリズムを利用した古い讃歌の断片が保存されている。

Eala Earendel

engla beorhtast
ofer Middangeard
monnum sended

これを訳せば次のようになる——。

おお　オーヴァンデル
最も輝かしき天使らの輝き
地球（ミドルアース）を越えて人間のもとへ遣わされし汝（なんじ）。
（ヴィクトル・リュードベリ『チュートン神話』第三巻）

この点についてエアレンディルなる題材は、トールキンが古い星の名から救世主のシンボルを見つけ、また天使を認め、それをエルフ族の救世主兼英雄に転換させるまでの経緯を物語る興味ぶかいエピソードのひとつとなる。しかし物語はここで終わらない。わたしはさらに調査を進めて、オーヴァンデルが『散文エッダ』にまで遡り得ることをみつけだした。偉大な射手であり星の英雄としてそこに現われるかれは、古代アーリアに源を発する世界的な神性である。かれはさらに聖なる狩人オリオンとしてギリシア神話に登場する。またほんのわずか異なった名のもとに、『リーグ・ヴェダ』のようなヒンズー神話叙事詩のなかにも姿を現わす。そして

──『散文エッダ』からまもなく拡散して──スノリの死後語られたスカンジナヴィアの物語に名高い役柄を担って登場する。
かれはたとえば、最初のデンマーク人史家であるばかりでなく最も注目に値する中世史家のひとりとみなされるサクソ・グラマティクスの作品にも見いだされるのだ。この史家は一一五〇年ごろから一二〇〇年ごろまで生き、故国の歴史を書いた有名な（しかも今でも読むに耐える）『イェスタ・ダノルム』を残している。サクソの史書のうち最初の九巻は、九五〇年までの王や英雄に関する逸話伝承のたぐいを組み込んでおり、わたしたちに今関係があるのもこの部分だ。『イェスタ・ダノルム』は、シェイクスピアが『ハムレット』を書く際に資料として用いた本という意味も含めて、今日なお重要な書物といえる。サクソ・グラマティクスによって語られた元の物語では、ハムレットは〝アムレト皇子〟という名で登場し、殺されたかれの父はここではホーヴェンディルになっているが、これはいうまでもなく耳になじんだ名オーヴァンデルにほかならない。こうして、もしも読者がその気になれるなら、『指輪物語』と『ハムレット』とサンスクリットの『リーグ・ヴェダ』およびギリシア神話のオリオンに結ばれた直接的な鎖をたどることもできる。
さらにもう一歩飛躍がある。なぜなら、オーヴァンデルは〝オーウェンディルス〟という名で中世ロマンスにも用いられ、それをまたアメリカの小説家ジェイムズ・ブランチ・キャベルが借りだしているからだ。キャベル（一八七九──一九五八）は一般読者には『ジャーゲン』（一九一九）の作者としてよく知られているが、この『ジャーゲン』はジョン・S・サムナー

のアメリカ悪徳追放協会により猥褻(わいせつ)文書として厳しく弾圧され、『ユリシーズ』や『北回帰線』などの発禁本と並ぶ有名な訴訟事件を惹(ひ)き起こした。しかしキャベルは『ジャーゲン』のほかに五十冊を超す本を書いた。しかも『ジャーゲン』はかれの小説中もっとも有名ではあるが(いやむしろ悲しむべきことに、これだけが絶版ではないのだが)、博識を示す都会風で磨きあげられた皮肉なファンタジーの一部――たとえば『高位の場所(ハイ・プレース)』や『銀の駿馬(シルバー・スタリオン)』『イヴに関する幾つかのこと』、そして個人的にわたしが最も愛する『戯れごとの極み(クリーム・オブ・ザ・ジェスト)』のような作品――に較べれば、面白さにおいてはるかに劣るといわざるを得ない。

　キャベル作品のほとんどは長大な大河小説『マニュエル伝』のなかに組みこまれる。そのなかでキャベルは、心霊的な聖職階層(ヒエラルキア)を支配するきわめて込み入った連鎖(たとえばユダヤ＝キリスト教の神がそのなかに位置を占めるが、それはただジャーゲンの母親が『黙示録』のなかにあれほどびくびくと記してあった〝死後の世界〟に、死んでもちっとも行けないことで大騒ぎを起こしたことから、不死の創造者コシュチェイが彼女の口を封じるために不承ぶしょうその神を創らねばならない破目になったからだ)をともなった、驚くほど複雑な宇宙を構築している。キャベルの宇宙にあっては、いったいだれが最高の存在なのか区別をつけかねることもあるが、最も多く出てくる最高者は、小説家フェリックス・ケンナストン(キャベル自身を意味する)の夢の分身だ。〝スコティアのシギル〟と呼ばれる魔法の護符を使って、夢のなかのケンナストンは「放浪の創造者」ホーヴェンダイルとなるのだ。この夢の分身ホーヴェンダイルは、同時にケンナストンが後に文章に書くことになる物語を産みだし、いつも脇役だったり

当て馬だったりするが、展開していく物語のなかでひとつの役割をも果たすことになる。ホーヴェンダイルは『マニュエル伝』に属する幾つかの作品に登場するが、主役となるのは『戯れごとの極み（クリーム・オブ・ザ・ジェスト）』においてである。

キャベルは〝オーヴェンディルス〟という名を後期フランスの宮廷ロマンスのなかで見かけたか、あるいは『イェスタ・ダノルム』で〝ホーヴェンディル〟を発見したのだろう。キャベルはこれまでに述べてきた全てのファンタジー作家にあって、最も博識な人物のひとりだ。それにサクソ・グラマティクスは、いかにもキャベルが読みそうな文学上の珍品の一種なのだ。しかしかれが〝ホーヴェンダイル〟という名をどこから最初に採ったにせよ、かれはすでに述べた原典類を実際に当たっていた。おそらくあの普遍的なオリオン＝オーヴァンディル＝エアレンディル＝オーヴェンディルスを、その数多い化身[3]を通じてたどっていったのだろう。その源泉がどちらにあったにせよ、ホーヴェンダイルという名はキャベル宇宙の中核に食いこんだ。このときのかれは、『マニュエル伝』を完結させた数年後に、『ハムレットには叔父がいた』（一九四〇）のような小品にみずから筆を染めるようになることなど、夢にも思わなかったわけだ。かれの目当てはサクソ・グラマティクスに目を向けて、サクソがやったとおりのハムレット――つまりヴァイキング・サーガのひとつとして、シェイクスピアが元の筋に加えたもの[4]をすべて無視して――を再話することだった。もちろんかれは、ハムレットの父としてサクソに用いられているホーヴェンダイルの名を、使わなければならなかった。すると当然、この同一名の二重使用はキャベル愛好家に少なからぬ困惑を与えた。かれらはこの一致に隠された意

味を見抜いて、この小説と『マニュエル伝』との結びつきを確立することができず、途方に暮れたのだ。

エアレンディルについてはここまでにして――こんどはフロドのほうだが？　実はわたしは、自分の調査がこの段階に達するだいぶ以前に、トールキンは『ベーオウルフ』二十八章にある〝フロダ〟という名を単純に気に入って、これといった目的もなく気軽に借用したのだろう、と勝手に思いこんでいた。しかし星の英雄にかかわる全データを掘り起こし、トールキンを経てチュートン神話にまで遡って（さかのぼって）いるあいだに、わたしは、サクソが書いた『イェスタ・ダノルム』の一部に、はるかに可能性のある源泉をみつけだした――その一部とは〝フロデ〟なる王の歴史を書いた部分だった。『イェスタ・ダノルム』第二巻のなかに、ハディングの息子フロデが惨めで一文なしの王国を受け継ぐところがある。とある旅人がフロデに、はるかな土地に恐ろしい蛇に護られる黄金の財産がある、と語って聞かせる――「とぐろをまき、何重にも体を重ねあわせ、尾をうずまきみたいにくるくる回し、その何重にもなった螺旋（らせん）を震わし毒をたらす蛇に」と、サクソはそれを表現する。宝を護る蛇、あるいは竜への言及は、トールキンが描いた『ホビットの冒険』に出てくる竜退治の場面を思いださせる。それもそのはずで、サクソは、フロデが、まるで射手バルドがスマウグを殺すのと同じように（また同時に、ジークフリートがファフニールを殺すように）竜を殺すことを言明している。「かれの腹のいちばん下がわに、汝の剣を突きこみ得るところがある」と、サクソの主人公はいう。そしてフロデは偉

大な伝説に従い、下腹部のうちの無防備になった部分を改めて蛇を殺してしまう。『イェスタ・ダノルム』こそトールキンによって用いられた名辞の源泉であったろうと信じられる証拠として、フロデ王に関するサクソ・グラマティクス記載の逸話が、まだ二つほどある。たとえば、フロドが魔法の鎧を着るのとちょうど同じように、フロデもまた、着る者を奇跡的に見えなくさせる名高い鎖かたびらを体に着けるのだ。フロデは、まったくフロドと同じく、〝黄金の指輪〟と切っても切れない関係にある。なぜなら、サクソのノロエナ協会版に付した序文のなかで、フレデリック・Y・パウエルは次のように指摘する。つまりこのフロデという王は国中で恐れられ正義の守護者とみなされたために、「国の三ヵ所に黄金の腕輪を掛けておいても長年にわたって盗賊に奪われる心配がなかった」のだ、と。そして『イェスタ・ダノルム』第五巻に決定的な指摘として、フロデ王にはしばらくガンダルフに似た謎の人物、齢といっても定かならざる予言者で、[5] サクソに従えば「人間の寿命以上に生きのびている男イグ」が友好を結んでいたことが、出てくる。

しかし語るも不思議なのだが、最も驚くべき符合がここに現われる。詩譚『黒いハルフダンのサーガ』から、わたしは二人いっしょに冒険に出るガンダルフとフロデを見つけたのだ。サーガはヴィングルマークの王ガンダルフが若いハルフダンと戦いをまじえ、勝利に輝くその若い戦闘王の前から遁れるまでを物語っている。後になってハイシングとヘルシングと名のついたガンダルフの息子たちが大軍を駆ってハルフダンの領地に攻めこみ、かれを追い出してしまう。かれは力を集め、捲土重来を期してオイエレン湖近くのエイドという土地でガンダルフの

息子たちを征服する。

ハルフダンの歴史は、実質的に同じ形式でスノリ・ストルルスンの『ヘイムスクリングラ』にも語られている。スノリはまたハルフダンの息子ハラルド・ハーファガーの歴史を手がけ、ハラルドがどんなふうにガンダルフ王と息子のハケから挑戦を突きつけられたかを物語ってもいる。ガンダルフとフロデが直接顔を合わせる興味ぶかいくだりが、『ヘイムスクリングラ』の第一部に出ている。[6]

ハルフダンが黒い死により死したのち多くの首長が、かれの残した領土に手をつけた。そのなかではガンダルフ王が最初だった。それからホグネとフロデ、エイスタインの息子たち、ヘデマークの王。

トールキンの神秘的な神性であるヴァラール、あるいは世界の守護者は、北欧神話にある〝ヴァルディール〟を反映している。この通称は、リュードベリが『チュートン神話』（第三巻、第三章、七五四ページ）のなかで挙げたある種の世界守護神に、意識して用いられている。

それから妖精女王ガラドリエルは、伝説に語られる妖精女王でロスロレインの貴婦人によく似たゲルダに一部を負っているようだ。「アスガルズを覆う暗雲にもかかわらず、アルフヘイムは明かるく平穏にあふれていた。輝かしいアルフの女王ゲルダはその光り輝く貌をもて永遠の陽光をその地に降りそそいだ。妖精たちは彼女を愛し、彼女の周囲ではしゃぎ、いつも楽し

い声を絶やさなかった。そしてその声は、岩場を流れる小川の速い漣に似て国中に響きわたった。するとゲルダは、樹々のはざまを渡る風が応えるように、低く甘い声で応えるのだった」

（A・E・キーリー『アスガルズの英雄たち』より）

ガンダルフがゴンドールに向かう際に騎ったマークの王の所有する巨大な駿馬シャドウファックス（翻訳では「飛蔭」（とびかげ））は、もうひとつの例だ。馬の名はガルファクシまたはゴールドファクス（〝金のたてがみ〟の意）、すなわち北欧神話に出てくる巨人フルングナーの持ち馬にちなんだものだし、同時に『古エッダ』の第三編にある「ヴァフズルーズニルの歌」第十二節に語られる駿馬スキンファクシ（〝輝くたてがみ〟の意）にも負っており、同書にはその馬について次のような記載がある――。

英雄が騎るにふさわしい駿馬のなかの駿馬

わたしはトールキンが『古エッダ』から引いた名を、ほかにもいくつか見つけた。グローインの息子ギムリはフロドの旅の仲間の一員だが、この〝グローイン〟という名が「巫女の予言」の小人カタログに挙げられている。しかしギムリの記載はない。ところがこの名は、こともあろうに「巫女の予言」の第六十四連に魔法の山の名として出てくるのだ。この部分の脚注は、〝ギムリ〟の名を〝火〟あるいは〝貴玉〟と定義している。〝フレア〟（三部作の追補編Aで説明されているように、マークの王が属する家系の開祖）は、あきらかに北欧神話の女神

〝フレイア〟から出ている。マークの王のひとり〝グラム〟は、『古エッダ』第二十一編にある「レギンの歌」に語られるシグルズの剣の名から来ている。そして、呪いを運ぶ指輪がそれを持つ者に「重たく」感じられるという描写は、『古エッダ』第九巻でフレイアが四人の小人から得る魔法の首飾りブリジンガメンの物語に負うものかもしれない——。

ブリジンガメンはわたしをつまずかせる……
ブリジンガメンは美しい、けれどわたしには重い

この首飾りには呪いがかかっており、トールキンの「一つの指輪」と同様、持つ者に災いをもたらす。しかし歴史と名前をもった魔法の指輪のアイディアは、北欧神話ではきわめて普通に用いられている。たとえば有名なドラウプニールの指輪に関する歴史を見るとよい。これはシンドリとブロクなる二人の小人によって造られたもので、北欧神話のたいていのコレクションに収められているはずだ。

もうひとつ、サウロンの下僕であるオーク鬼のことを思い出してほしい。わたしがはじめてトールキンの源泉をたどりだしたころ、この名前は純然たる創作か、あるいはアラビアンナイトに出てくる〝ロック〟の並べ替えか、さもなくば『狂えるオルランド』に登場するオルクと呼ばれる海の怪物から借りたものだろうと考えていた。しかし偶然の機会が、ジョン・ミルトンの聖書叙事詩『失楽園』第十一巻八三四—五行のなかの一行に、わたしを導いてくれた——。

絶海の荒んだ小島、
あざらしとオークの栖、うみねこの鳴き声

この一行がきっかけとなって、わたしのオーク探索は始まった。するとミルトンの〝オーク〟が（フランス語では orques オルクだが）鯨かまたは鯱の一種を指していることが分かった。この意味は、あきらかにアリオストが『オルランド』のなかでその言葉を使ったときに考えていたものと一致する。けれどそのオークがどうしてトールキンに出てきたのだろう？

わたしは『ベーオウルフ』第十一章の一一一―四行に目を向けて、次の一文を発見した。

かれから、あらゆる種類の怪物が生まれた。エチンとエルフ、そしてオークが、なかでも恐ろしい生きものだった。
はるかな昔神々に刃向かった巨人族もそうだ。神々はかれらの罪に仕返しをした。

わたしが『ベーオウルフ』を原典で当たったとき、その詩の第二行に該当するアングロ・サクソン語型にとりわけ興味をいだいた。

eotenas ond ylfe ond orcnêas.

したがってトールキンは、アングロ・サクソン語からオークという言葉を引いて来たのだ――――これは源泉探しの方法に大きな光明をもたらす発見となった。[7]

たとえばローハンの辺境国とゴンドール、そしてアナリオンの嗣子たちにからんで出てくる名前の多く――エオル、エアニル、そしてエアナーなど――を、最初わたしは『ベーオウルフ』の物真似程度にしか考えていなかった。そこで大多数の源泉探索を志した人びとと同様に、わたしもこれらには目を向けなかった。トールキンが古代アングロ・サクソン叙事詩に出てくる人物に付けられた名――〝エオフォー〟や〝エオーメンリク〟など――を単にモデルとして使用しただけだろう、と思いこんでいたからだ。

ここでしばらく、センゲルの息子たるセオデン王とその領土マーク（翻訳では「辺境国」）について考えてみよう。いま〝セオデン〟はどうやら北欧神話の主神〝オーディン〟を思わせ、もうひとつの名〝デネソール〟はやはり北欧神話の神〝トル〟を彷彿(ほうふつ)させる。しかし問題をもうすこし掘り下げてみたい。〝マーク〟とはそもそも何を意味するのか？　辞書をたどっていくと、古英語 mearc あるいは〝辺境(マーク)〟の意味につきあたる。その定義を眺めると、「中世の自由民共同体で共用に付された土地区画」とある。簡単にいえば、これは新造語ではなく、トールキンの庄(シャイアー)が土地区分を表わす英単語であるのと同様、すでに廃たれてしまった「土地区分を表わす」古語以外のなにものでもないのだ――ちなみに庄(シャー)という単語は、ワーセスターシャーやリンカンシャーといった地名のなかに今も生きている。

辞書を手にしながら、わたしは、庄の称号である〃ダイン〃が古いスカンジナヴィアの称号〃テイン〃の変形に過ぎなかったことを知った。そしてトールキンの登場人物〃エオル〃(Eorl)が、これまたスカンジナヴィアの称号イアール(jarl)——これはのちに英語の伯爵（アール）になった——によく似た響きを持つように思えた。

ここまでは上手く運んだ。けれど古い言語に対するトールキンの専門家としての興味とアングロ・サクソン語に関するかれの研究とを頭に入れてかかれば、かれの方法全体に対してなお一層接近することができるはずだ。〃セオデン〃という名は、北欧語やアングロ・サクソン語に響きが似ているどころではなく——実は〃セオデン〃そのもの(スペルではðēodenと綴（つづ）る)がアングロ・サクソン語に存在する。それは「一族の首長、支配者、領主、王」[8]を意味する。

ではセオデンの父センゲルはどうだろう？　センゲルもまたアングロ・サクソン語なのだ。その場合は「領主（プリンス）」を意味し、『ベーオウルフ』のなかに使われている。それからエオルは、伯爵（アール）に対するデンマーク語の原形に音が似ているだけでなく——それもまたアングロ・サクソン語にある。エオルは「戦士、指導者、首長、貴族」を意味するのだ。ローハンに関するそれ以外の名も、ほとんどはアングロ・サクソン語の意味をたどり得る。あとは語源さがしの忍耐と、良い古英語辞書があればいい。

わたしはホールの『コンサイス』辞書を相手に楽しい時をすごし、そこで〃グリマ・ウォームタング〃という名がgrimena(〃芋虫〃の意か？)という単語に霊感をうけたふしのあることを発見した。狭いトンネルと描写された丘腹にあるホビットの家は、スミアルと呼ばれるが、

これもアングロ・サクソン語で「薄い、細い、狭い」を意味する smael から出ているようだし、暗黒の王国モルドールはアングロ・サクソン語のモーソー（morðor）という、『ベーオウルフ』では「殺人」を示し、他に「罰、苦悶、悲惨」の意味を持つ単語を母胎としていることも、分かった。

トールキンの巨大な樹の守番であるエント族については、どうだろうか？　エントというのはアングロ・サクソン語で「巨人」のことだ。ホビットの言葉〝マソン〟は「ほんとうには必要でもないが、棄てたくはないもの」と意味づけられるだろうけれど、これもアングロ・サクソン語の maðem と関連している。そしてこの単語は「宝物、宝石、装飾品、贈り物」などを示している。獰猛な荒野の狼に付けられた名――『ホビットの冒険』においてトールキンはアングロ・サクソン語の wearg という単語を借り出している――は、「狼、呪われた者あるいは邪悪な者」の意味だ――これはおそらく「狼」や「無法者」を意味する古いアイスランド語 vargr と同系列のものだろう。

アングロ・サクソン語の調査は、教授が登場人物名として、あるいはおそらく地名やかれの中つ国語の実例[9]として実在の古語を利用した手法を、いろいろと明らかにしてくれるだろう。かれの使用法について完璧なリストを編みあげるよりも、ここではわたしの指摘の正しさを証明する上で有益な実例をいくつか提示することにしよう。実際に検べてみようと思われる読者は、ここで例示した以上の実例をかならずみつけだせるはずだ。

原注

（1）おそらくラヴクラフトが自作中にしばしば言及していた「アトランティスの高僧クラーカシュ＝トンにより記録されたコモリウム神話大系」という文章に、霊感を得たのだろう。ちなみにこれは、ラヴクラフトの友人で、最近物故したカリフォルニアの詩人兼彫刻家、しかも文学や絵画もよくするクラーク・アシュトン・スミスが描いた、古代大陸ハイパーボリアを扱った連作にちなんだ洒落（しゃれ）である。

（2）この点については、デュリンの場合にも同じことがいえる。かれはポルトガルのロマンス『ガウラ国のアマディス』にまで登場する。しかしその場合、かれは〝デンマークのデュリン〟と呼ばれる放浪の騎士であって、小人として出てくるわけではない。

（3）キャベルはみずから、ウェールズの〝明けの明星〟伝説を『マニュエル伝』に属するロマンスのひとつに、巧妙に挿入している。その理由はおそらく、わたしのような文学上の探偵を歓（よろこ）ばせるためだろう。『地球のすがた（フィギュアーズ・オブ・アース）』の二七三ページで、マニュエルと名のる登場人物がわざとらしく、「かれは、あの足の指が明けの明星だというホーヴェンダイルかね？」と尋ねる。キャベルの小説はそうした神話的な民間伝承のおぼろげな断片に満ちあふれている。たとえば『ジャーゲン』は、七曜の神（パンデリスやセレダなど）のようなロシア民話から得た不明確な役柄にスポットを

当てている。

（4）かれはこのアイディアに魅惑された唯一の人間ではなかった。ゲーテはサクソ・グラマティクスのなかの物語にふかく傾倒して、もうすこしで自作の『アムレト皇子』を創りだすところだった。もしそれが実際に書かれていれば、きっとシェイクスピア版と奇妙な対照を創りあげたことだろう。

（5）しかしわたしは、〝フロド〟が『ベーオウルフ』に出てくる〝フロダ〟から来ていると考えた最初の推測を、誤りとは思わない。〝フロダ〟という名の出てくる文章は、次のように読める。

若い金髪の娘フレアヴァルは、
フロダの朗かな息子とちぎりを結んだ。
なぜならフロトガーが遺言を残して……

これは、ベーオウルフに鬼のグレンデルを闘わせる希いを申し出た本人である、デンマーク領主フロトガーの娘が、フロダ王の息子にしてヒーソバーズの王インゲルドと結婚した事実を暗示している――ちなみにフレデリック・ヨーク・パウエルが指摘したように、このフロダは、サクソに出てくる賢明で正義感に満ちた律法の施行者と同一人物である。

（6）黒いハルフダンとかれが行なったガンダルフ王との闘いに関する物語については、ノロエナ叢書第七巻『ヘイムスクリングラ』の六―九ページを参照するとよい。

またハラルド・ハーファガーの歴史と、ハラルド対ガンダルフの闘い、およびフロデその他については、同じく一六一―一七ページを参照のこと。

(7) もちろんトールキンはオークを「鯨」の意味にとってはいない。この単語は『ベーオウルフ』にあるのと同じ感覚で用いられているのだ。しかし、トールキンは疑いなくその単語のもうひとつ別の意味を使用した。古英語にいう orcnêas は、ラテン語の orcus――すなわち〝地獄〟や〝死〟を意味する単語を語源としているからだ。現にその意味は、実際に「地獄の屍、怪物、邪霊」といった内容を示す。ここで引用した『ベーオウルフ』の翻訳者は、単語の持つ二つの意味のうち誤って現実に不つりあいな意味を選択してしまったようだ。

(8) この調査にあたって、わたしはJ・R・クラーク・ホールの『コンサイス・アングロ・サクソン辞典』(ケンブリッジ、一九六〇、第四版)を使用した。この資料に注目するにあたっては、トールキン愛読者であるバリー・グリーンの教示に負うところがあった。

(9) ウェールズ語も実り多い資源のひとつになる。トールキンの地名のうち、かなり多数がウェールズ語の地名をモデルにしているようだ。またわたしは「アメリカ・トールキン協会」の会員から、かれのエルフ語は多くがウェールズ語と直接的な類似点をもっている事実を知らされた。

8　人、土地、もの

それはどんな**地図**にも**載**っていない。**現実**の**土地**なぞではない。
ハーマン・メルヴィル『**白鯨**』

場所

トールキンの地勢は、少なくとも読者にはわが地球の先史時代の一状況と頭のなかで理解できるものだが、わたしたちが現に住む地球とはまったく、あるいはほとんど類縁性をもたない。しかしこの仕掛けは、深い洞察の結果というよりもむしろ便法のためなのだ。つまり『指輪物語』の世界をどこか別の星に設定してしまうと、たとえばエドガー・ライス・バローズが火星（バルスーム）を舞台にした小説のなかで行なったように、星世界の動植物に関する完全な大系を考えださ

ねばならなくなる。というよりもむしろ、トールキンは自作の物語を神話時代に設定する単純な手立てを使ったのだ。こうした二つの対照的な手法は、後の章で論じる多数の史詩ファンタジーの作家たちによってみごとに実践されている。『邪竜ウロボロス』の舞台を水星にもとめたE・R・エディスンは、この点を説明する必要からあれだけの不器用な筋立てを用意しなければならなくなった。しかもかれの小説は内部的な自己矛盾のために混乱が見られる（たとえば水星の住民たちがサッフォーやヘリックやダン、そしてウェブスターやシェイクスピアから引用している点）。

トールキンが使ったこのディレンマ解決法は多くのファンタジー作家に好んで用いられた。ロバート・E・ハワードの冒険ファンタジー（剣と魔法[1]なるサブジャンルとして知られるが、厳密にいえば後の章で論じる、モリス＝ダンセイニ＝エディスン＝トールキン系列の史詩ファンタジーには属さない）もまた、アトランティスが沈んでから数千年後、満足な歴史がまだ出ないころの、エジプトとカルディアのウルが勃興するにはまだ数千年を閲しなければならない時代を作品の舞台としている。

しかしトールキンが語る中つ国の地図は、大枠で北東ヨーロッパのそれと一致しているにしても、それをもってヨーロッパの台地図と比較し史実レベルの問題をおのおのチェックすることまではできない。しかし、それらに一種の学術的な興味をかもしだす要素がないわけではない。

トールキン版の先史観に従えば、中つ国に起きた最初の出来ごとは、はるか古代にエルフ小

人が二つの大民族に分かれた事件ということになるだろう。クエンディと呼ばれるエルフ小人は二つの集団に分裂した。そのうちの第一ばんめは、最西端の地に「不死の領域」をもとめて西方へ進んだ、エルダーの三血族である。第二ばんめは、トールキンの作品にその名前をみつけだすことはできないけれど、「西のエルフ」という存在であって、この三部作とは直接かかわりを持たない。エルフたちの分裂は、「古い日々」と呼ばれる遥かな遠い時代に起こった。それによると、エルフ族の元来の棲がモルドールのはるか東のどこかに存在していることは確からしい。しかしこの解釈は成立し得ないかもしれない、またわたしが解釈まちがいを犯している可能性もある。

古い「西のエルフ」たちは三つの血族から成り立っている。ノルドール族、シンダール族(灰色のエルフ)、そしてトールキンが名前を挙げた様子の見えない第三の種族がそれだ。かれらは敢えて中つ国を横断して海へ出る。岸から西に向けて出航し、手はじめに〝あらゆる人間の土地のうち最も西方の世界〟ヌメノールに上陸し、つづいてエレセアの島に寄り、最後にヴァリノールと呼ばれているらしい〝不死の領域〟そのものに到達する。そしてエルフたちは、中つ国に邪悪な勢力が興ったのを知ってヴァリノール軍を結成し、世界の救出をめざして中つ国に帰還するそのときまで、ずっとその土地で暮らすことになる。戦いにあって、かれらはサンゴロドリムを破りモルゴスを制圧するが、〈第一紀〉の歴史はそこで終幕となる。ノルドール族とシンダール族の大部分は最西端の土地に帰ったが、一部のエルフは人間の土地の彼方に残った。これらが、三部作の展開でわたしたちの出会うエルフ小人である。そして『指輪物

語』の最後で、残ったかれらはヴァリノールへ戻ろうとする。物語の結末では、ガンダルフとビルボとフロドがかれらとともに天国から旅立つ。

この物語のほとんどは、古代のアイルランドの神話文学に語られた妖精（ようせい）族の歴史の一部とたしかに似ている。これらの妖精はレプリコーンやプーカといった伝統的な妖精ではなく、英雄的でしかも王や神にさえ似た、人間を超える美しさと賢さをもつ種族であり、古いアイルランドの神話記述者がトゥアハ・デ・ダナーンと呼んだものたちだ。かれらの歴史は、いくつかのひどく古いケルト原典のなかに、ともかく断片の形で残されている。今日知られているもののうち最も古いのは、〝ヴュルツブルク文書〟と呼ばれ、紀元七〇〇年ごろに遡（さかのぼ）る。こうした古文書集成のいくつかは、トールキンの〝西境の赤表紙本〟（三部作が書かれる元資料となったと想定される本）を思い出させる名をもっている——たとえば『レカンの黄色い本』や『レカンの偉大な書』など、ともに成立年代は十四世紀後半か十五世紀初頭に遡る。

トゥアハ・デ・ダナーン（女神ダンの息子たち）の歴史は、『侵略者の書』に記されているが、ひとつにまとまった文献ではなく、『レンスターの書』や『パリモートの書』など他の幾つかの書物に散在している。『侵略者の書』の原典は、アイルランドの研究家マイクル・オクレリーが他人の協力を得て一六三〇年ごろ一冊に編纂（へんさん）した。

物語を手短かに説明すると、こうだ。「トゥアハは故地であった天国のような〝別世界（アザーワールド）〟を追われ、ファーボルクと呼ばれる種族がアイルランドを支配していた時代に地球へ降りてくる。かれらはファリアス、ゴリアス、フィニアスそしてムリアスなる四つの市（まち）からやって来たが、

その際に四つの魔法の宝物を携えてくる。四つとは、リア・ファイル（宝石）、ルグの剣と槍、神々の坩堝のことだ。ロバート・グレーヴスの『白い女神』に引用された伝説によれば、かれらは紀元前一四七二年[2]に英国の島々に到達したという。有名なモイトゥラの戦いで、かれらトゥアハ族はファーボルクを征服し、その土地を手に入れた。後になりミレシアという異民族の侵入を受けているあいだ（グレーヴス氏は紀元前一二六八年のことだというが）に、トゥアハ族はタイルテンの戦いに破れ、その神聖な地位を失うことになって勢力を減じ、塚や丘や森に隠れ棲むただの守護精霊――アイルランド伝説にいう〝ジー〟――になりさがってしまう。その結果、かれらはともに人間の世界を去って、遠い昔かれらが追われたケルト伝説中の楽園ティール・ナ・ヌオーグに帰還しようと企てる」

　これはトールキンに出てくる古いエルフ族の歴史ときわめてよく似ている。トゥアハはギリシア諸島のあたりからこの世界にはいって、そこから西に向かいヨーロッパ沿岸に達すると、さらに海を渡ってブリテン諸島に上陸した。これはトールキンの妖精たちがとった行動とそっくりだ。とすれば、わたしたちがトゥアハをトールキンのエルフたち[3]と同一視する限り、ヌメノールとエレセアはブリテン島とアイルランドに相当することになる。

　しかしトールキンの言及したヌメノールについては、もっと確かな手掛かりがある。かれの説明によると、かれらヌメノール人は最後の王〝黄金王ファラゾーン〟治世のもとで、サウロンの誘いにのり、ヴァラールの手で長らく押しつけてこられた禁令に挑んで、〝禁じられた領域〟に領土をもとめようとする。ところが――「アル＝ファラゾンが至福の地アマンの岸辺を

踏むや、ヴァラールはかれらの保護神の役を降り、至上神を求めた。かくて世界は変えられた。ヌメノール国は覆(くつが)えって、大海の水にのまれ、不死の国はこの世の圏外に永遠に移された」（『指輪物語』追補編A-I、瀬田貞二・田中明子訳）。

換言すれば、ヌメノールとは、プラトンが南部スペインの洋上はるか大西洋のただなかにあるとした「失われた大陸」アトランティスを意味する名辞だ。

ヴァリノールそのものは現実の世界とまったくかかわりをもたず、ケルト神話に語られる「他の土地から離れた」ティール・ナ・ヌオーグと同じように、世界から切り離されている。「そして〝不死の土地〟は永遠に世界の環(わ)から外された」と、言及がある。エルフたちの故地ヴァリノールは、ティール・ナ・ヌオーグに等しい。

ここまでくると、結論は避けられないものになる。つまりヴァリノールはフェアリーランドなのだ。

地名に関する最後の覚え書き。ゴンドールの領土は、おそらく『古エッダ』の第三十一連に謳(うた)われたヴァルキューレの一人〝ゴンドゥル〟（翻訳『エッダ』では「巫女の予言」第三十連にゲンドゥルとある）から来ている名辞だろう。しかし、トールキンがその名を地図帳から拾いあげた（多くのファンタジー作家が用いた手(トリック)だが）と考えたほうが、あんがい正しい推測かもしれない。なぜならゴンドールはエチオピアの一地名だからだ。

民族

ここでトールキンの敵対者たちについてすこし眺めてみることにしよう。もちろんアラゴルンは完璧な愛国的英雄である。アーサー王の場合と同じように、かれの背景と家系は不明瞭で不確かなものだが、後に王家の血を引くものと分かる。ガウラ国のアマディスのように、物語のなかのかれは色々な個所で色々な名を帯びる。[4] またジークフリート同様、かつては折れていたが今は新しい名を与えられ鋳直された魔法の剣が、この英雄の武器となる。

しかしフロドは、毛色の変わった英雄である。かれは王家に生まれついたわけではないが、その名高い英雄的な業績を、遠い〝風吹きすさぶトロイアの轟然たる原野〟でうち立てるべく運命づけられる。シェイクスピアのいいかたを借りれば、フロドは〝体に偉大さが突きささった〟人物のひとり——数々の出来ごとを通して英雄的地位に昇っていく普通人なのだ。わたしたちもまた英雄とは無縁な平凡人であるから、この人物へは容易に感情移入していける。しかしフロドもまた悲惨で苦しみを背負う人である。他人が背負うにはあまりに恐しすぎる重荷を、文句もいわずに担う人物である。その意味で、かれはキリストに似る。しかしトールキンは見え透いた原型を持ちだすほど単純な作家ではない。フロドはすこしずつ、しかも苦労して、英雄になる方法を学んでゆく。かれは完全でも純粋でもない。事実、かれは三つの愚かしい罪を犯し、どの場合にも二度と元の体には戻りきれないほどの深傷を、罰として負わされる。かれ

の最初の過ちは愚かな行為であるが、その罰として「風見が丘」でナイフ傷を受けることになる。第二ばんめは過信、そのおかげでシェロブの毒を舐めなければならぬ羽目におちいる。第三ばんめは、「滅びの亀裂」の縁で指輪を投げ棄てる意志力を発揮し得なかった脆弱さだ。そして三つの過ちのうち最悪であるこの罪に対しては、当然ながらもっとも恐るべき罰が下される[5]——ゴクリが指輪を奪おうとしてかれの指輪指を食いちぎってしまうことだ。というわけで、アラゴルンが遍歴英雄の典型そのものであり模範でもあるのに対し、フロドのほうは、苦しみの環境によって自分のなかに勇気と強さの源をもとめさせられた凡人の役割を担う。

　ブラッドリー女史は指摘する、「遍歴文学では英雄と対照的な狂言回しの脇役を付けるのが伝統になっている。ところがサムは、しばしば機知を見せるけれど、本質的にはけっして道化役者ではない。それも『魔法の横笛』におけるパパゲノの場合にいう意味での道化役者では、決してない」。サムが周辺との対照でそう見えるほどには、道化的な要素はかれの本質にはないのだ。なぜなら、かれは質素で愚鈍で正直で、しかも忠義あふれる賢明な人柄であるが、農村生まれの無教養な階層に属し、そんなかれの周辺に潜むユーモアは真のユーモアというよりもむしろ、不恰好、不器用のそれに近いからなのだ。かれの質素で敏感で率直な喋りかたが、かれの遭遇する英雄的な事件や、かれの対照として現われる勇敢で高貴で王の器量をもつ人々との比較のうえで、どことなく滑稽に見えるのだ。また単純で常識的で実践的なサムが——これは何度もあることだが——勇敢で英雄的で猛だけしい人柄にみずから変身するときも、滑稽に見えてくる。そのサムをいわゆるサンチョ・パンサのような人物と割り切ってしまうことは、

明らかな過ちだろう。なぜならサンチョはもちろん常識的でしかも実際的な能力を身につけているが、かれ自身の言葉や態度や行ないに、あのラ・マンチャの精妙な紳士が持つ謎めいた騎士道精神のナンセンスぶりと比べてまったく道化じみた要素を潜ませているからだ。

いっぽうガンダルフは、はるかに原型的な人物——賢い老人、親切な魔法使い（ユンクの象徴を用いているわけだが）——に思える。かれの粗っぽい貌(かんばせ)は、文学に現われるかれ以外の魔法使い——E・R・エディスンのジミアムヴィア三部作におけるヴァンダーマスト博士や、フレッチャー・プラットの驚くべき物語『一角獣の泉』におけるメリボウ博士、あるいはまたT・H・ホワイトのアーサー王物語風散文叙事詩『昔と未来の王』における老マーリンやキャベル作『地球のすがた』におけるミラモン・ラグオールなどを、思い出させる。しかしかれは単なる妖術使い以上の存在だ。英雄を窮地から救うために妖術を使うことのできる、英雄の賢明な道連れとなるのだ。きわめて深い真正な意味で、ガンダルフは作品の実質的なヒーロー、真に中心的な役割を演じている。三部作すべてを通じて、ガンダルフは——そしてガンダルフただ一人が——あらゆる点で必要とされる情報を完璧に持ちあわせているのだ。ほかの登場人物たちがすこしずつ学んでいくことがらを、かれはすでに洩(も)れなく心得ている。木の鬚(トリーベアード)やエントやトム・ボンバディルや、指輪のほんとうの重要性を、知っている。そういう問題を他の人々に説明する役は、したがっていつもガンダルフなのだ。アラゴルンと同じように、ガンダルフは高貴な生まれであり、神秘な家系に連らなる貴族である。またフロドと同じように、率直で悪戯(いたずら)好きで、ユーモアと歓(よろこ)びにあふれた真の人間である。そしてフロドのように、ガンダ

ルフはキリスト風な苦悶を味わう。なぜなら物語の進展のなかで、ガンダルフは殺され、死を越えて生の彼方にあるさらに偉大な領域に達し、以前よりもずっと強い魔力を得て人間らしい弱さと愚かしさを切り棄て、ふたたび人間の土地に還ってくるからだ。

最初——誕生祝いが催され、花火をいじくりまわし、ビルボとお茶を飲もうと立ち寄った——ガンダルフは、小うるさくて見栄張りの、どことなく滑稽な、小柄で弱々しい老人に見える。そこでこの人物を、絶体絶命の窮地やここぞという場面に巡りあわせて（三部作を通じてはわずかであるが）途轍もない力と権威をもつ堂々として輝かしい姿を示したときの、あの真のガンダルフ像と、どう結びあわせるかが問題となる。そういう場面にあって——たとえばガンダルフが、モリアの鉱山から出る橋の上で恐るべき敵バルログと対決する場面など——かれは単なる魔法使い以上の存在になるように見える。いや、人間以上に見えるといってもいい。わたしたちは、この白や灰色の衣の下におそらく潜んでいるはずの〈神性〉を垣間見るのだ。

ガンダルフに関するトールキンの情報を、さらに突っこんでみよう。追補編Aの年代記は、ビルボの誕生祝いの時点でかれがすでに二千年ほども中つ国に暮らしてきたことを述べている。そしてこれは、かれの生涯のほんの一ページに過ぎないのだ。なぜなら、追補はこう付け加えている——。

イスタリすなわち魔法使たちが中つ国に現われた。後世になって伝えられるところでは、かれらはさい果ての西の地から来た使者であり、サウロンの力に抗し、かれに抵抗する意

志を持つ者たちすべてを結び合わせるために遣わされたということである……それゆえかれらは人間の姿に身をやつしてやって来た。といってもかれらは初めから全然若くはなく、年をとるのも緩慢であった。そして知的にも技能的にもさまざまな能力を持っていた。かれらはその本当の名前をごく僅かな者にしか明かさず、自分たちにつけられた名前を用いていた。

（追補編B、瀬田貞二・田中明子訳）

傍点はわたしが加えておいた。トールキンが「真の名」という個所を複数でなく単数で表現しているところをみると、どうやらかれは個人名以外の名を考えていたようだ。[6] かれらはしかし、わずかな人間にはその真の名を知られている。

もしガンダルフが前述の引用どおりヴァリノールから中つ国にやって来たのなら、当然ながらフェアリーの王族の一員ということになるだろう――換言すれば、この人物は人間の姿をしたエルフなのだ。しかしガンダルフはどうみても妖精らしくない。トールキンはエルフたちとその性格を簡潔な言葉で説明し、特徴づけているが、ガンダルフだけはどうもエルフらしくないのだ。それではいったい、かれは何者なのか？

高級エルフのほかに、ヴァラールがヴァリノール周辺に暮らしている。だからガンダルフは〝至上神〟によって世界を守護する役めを負わされた神々の一員かもしれない。かれは多くの別名で呼ばれ、庄の住民には〝灰色のガンダルフ〟で通っている。エルフたちに対しては、灰

色の遍歴者〝ミスランダー〟であり、ロセアリムはかれを〝ストームロウ〟〝グレイヘイム〟〝白い乗手〟と呼んでいる。

北欧神話は、ガンダルフという完全に同一の名を持つ人物のことを述べている。この人物もまた、人間界に降りてくるとき、灰色のあごひげを貯え襤褸をまとい、杖をついて歩く老放浪者に変装して現われる。さらにこの人物は多くの別名を持ち、『古エッダ』では「老いた者」とか「放浪者」とか、イグ、指揮官ヘルヤン、ジークファサー、フロプト、トヴェギ、高貴なるホルなどと呼ばれる。かれは主神オーディンその人である。

『エッダ』にみえる〝ガンダルフ〟なる単語は〝魔法のエルフ〟を意味する。ガンダルフをヴァリノール生まれと考えれば、なるほど納得できる名だ。北欧神話のオーディンもまた、『エッダ』にある「バルドルの夢」第二連によれば、魔法使いとして人間のあいだに立ち現われる。「かくてオーシンは老いたる妖術師（翻訳『エッダ』では「神」の意に解している）として発てり」と、ある。その連につづく次の一連では、かれを〝魔法の父〟とも呼んでいる。また『エッダ』のほかの部分を開くと、オーディンを〝魔法の神〟と称えている個所が見つかる。

わたしは、灰色の魔法使いガンダルフ——数千年も前に西端から中つ国へやってきた人物だが、人間の姿をして人間でなく、土地土地でおのおの違った名で呼ばれ、死を経て以前よりも強大な存在として復活できる人物——が、アスガルズの王でありヴァラールの一員である神々の父オーディンのいわば〝トールキン版〟ではないか、と考えている。おそらくわたしたちは、『シルマリリオン』が出版されたあかつきに、かれの真の姿をいくばくか知ることだ

ろう。

名前についてひとこと。三部作中でも最も興味ぶかい独創的な登場人物といえば、陽気で歌好きな、年をとらない小さな自然の精霊トム・ボンバディルだろう。かれの名はボアブディル（イスラム伝説に出てくる名高い人物）に驚くほど似ている。ワシントン・アーヴィングの奇妙な紀行文とムーア人伝説を集めた著書『アルハンブラ物語』（一八三二）には、ボアブディルのことが数多く出ている。ボアブディル（かれは本当の名をアブー・アブダラーという）は、グラナダを支配した最後のムーア人王だ。領土をカスティラ国のフェルディナンドに渡し、自分が支配していた偉大なる市（まち）を最後に見て、アフリカへ二度と戻らぬ旅に出た人物である。以後かれは、ムーア人のロマンチックな伝説に、物憂（ものう）い忘れがたい人物として語られるようになった。

もの

三部作第一巻で、白い会議がエルロンドのやかたで催されたとき、エルフの血を半分受けたやかたの主（あるじ）は、かつてゴンドール国の絶頂期にミナス・アノルに咲きほこった白い樹の伝説を語っている。「王の宮廷には、一本の白い木が生えていた。イシルドゥアが大海原のかなたより持ち来（きた）ったかの木の種から育ったものである。この木の種はその前にはエレスセアから来たのである。さらにその前はといえば、もともとは、この世界の太初の時代に先だって、さいは

ての西方世界より、もたらされたものである」（瀬田貞二・田中明子訳）。ゴンドールの樹は枯れ落ちてからすでに久しい。ところが三部作の終わりで、アラゴルンがみずから王国樹立を宣言したとき、ガンダルフはかれを山頂に連れて行き、下にひろがるかれの王国を見せる場面があり、そこでアラゴルンは叫ぶ、「噴水の庭にあるかの木は今も枯れたままで、花実（はなみ）をつけません。現状を変えるという兆候はいつ見られるのでしょう」（瀬田貞二・田中明子訳）と。するとガンダルフはかれに、雪の縁に伸び出た樹の若芽を見せる。それはゴンドールの土地に高く、山なすような高さを誇って直立していた。それは正しく、王位と豊饒（ほうじょう）と力を示す古い神秘なシンボル、すなわちゴンドールと西方世界のあいだに結ばれた護符の鎖たる、白い樹の若芽だ。

『チュートン神話』第三巻のなかで、ヴィクトル・リュードベリはゴンドールの白い樹によく似た伝説を記している。かれは次のように述べる、「スエーデン、デンマークそしてドイツに広く分布する民間伝承は、平凡な人々の口を借りて今日まで保存されてきた。……北欧とドイツの両方に当てはまるこれら伝承の大きな共通点は……最大の混乱が迫ったり世界の終わりが近づいたり、審判の日がやって来たりする場合に……あるいは最後の日のトランペットが鳴りわたるときに、邪悪な勢力（アンチクリスト）との大きな闘いがおこなわれ、萎えていた巨大な老木がふたたび緑をとりもどし、幸せな時代がはじまることだ」（傍点著者）

三部作の追補編Aで、トールキンは中つ国の第一紀に起こった出来ごとを要約している。かれはベリンとルシエンの話を語る。二人がどうやって「力を合わせて、モルゴスの鉄の王冠からシルマリルを一個もぎ取った」（瀬田貞二・田中明子訳）かを。この鉄の王冠については、三

部作にもいくつか言及があるが、『シルマリリオン』のなかでもっと詳しい話が聞けることはまちがいない。

トールキンはたぶん、ローマ皇帝コンスタンティヌスの有名な鉄の王冠に関する話を読んでいたことだろう。そしてそれは、かれの母セント・ヘレナが息子のために作らせたものだ。シルマリルのような魔法の宝石こそ埋めこまれなかったけれど、コンスタンティヌスの鉄の王冠はきわめて稀れ（まれ）な副飾品をもってはいた。なぜならセント・ヘレナがその環（わ）のなかに、キリストはりつけのとき用いられた聖なる釘（くぎ）の一本を嵌（は）めこんだからだ。鉄の王冠は西ローマ帝国（フェイズ）崩壊後も保存された。それは後に、法皇グレゴリウス一世の手で、ロンバルドの地を約束の地に変えたテオドリンデの情熱を愛（め）でる意味から彼女に贈られ、やがて中世には「ロンバルディアの鉄の王冠」という名で知られるようになった。シャルルマーニュ大帝やシギスムンド、チャールズ五世、そしてナポレオン皇帝の戴冠（たいかん）式に用いられたのも、この王冠だった。おそらく王冠は、信じられぬほど豊かな歴史的意味合いを秘めた古代の遺品のうち、貴重きわまるばかりでなく最も異常な宝物のひとつとして、今も保存されているはずだ。

原注

（1）この用語は、段平（だんびら）などをふるい邪悪な魔術師や超自然的な怪物に立ち向かう、筋肉隆々たる野蛮人ヒーローを扱った、単純で直截（ちょくせつ）的なパルプ雑誌の活劇小説に当てはめるものとして作られた。このサブジャンルは、多かれ少なかれ、ロバート・E・ハワード（一九〇六―一九三六）が「ウィアード・テールズ」誌に発表した『キンメリア人コナン』のシリーズ小説によって創りあげられた。多くの後出作家がハワードの系譜を継ぐ模作や補作を発表している。例を挙げれば『トリトンの指輪』（一九五三）のL・スプレイグ・デ・キャンプ、『アトランティスのエラーク王子』シリーズを書いた故ヘンリー・カットナー、そしてこの点では『レムリアのソンガー』を描く六冊の長編を発表しているわたし自身も含まれる。『剣と魔法』なる用語は、おそらく現役作家のうちでは最高のこの種の英雄冒険ファンタジーを産みだしている、フリッツ・ライバーによって、いわゆる英雄ファンタジーのサブジャンルとして区別させる意図から一九六一年ごろ考案された。〝血と雷鳴〟と〝外套（がいとう）と短剣〟との語呂（ごろ）合わせから出てきたものであることは、明らかだ。

（2）グレーヴス氏の本は、古代伝承と異国の聞き伝えに関する珍品を集めつくしたファンタスティックな作品であり、前述の実例に似た珍しい〝史実〟の情報を満載している。かれはゼウスがティターン人を征服した年代を紀元前一五一五年としており、アルゴ船の航海を紀元前一二二五年、またトロイアの崩壊を紀元前一一八三年と記している。

（3）今日の歴史家たちは、トゥアハ・デ・ダナーン移民に関する、この古いケルト神話に、いくばくかの歴史的真実が隠されているふしが見えるとしている。そう考えないと理解しえない言及がいくつか実在するのだ。たとえば、カラテペの二国語併用石碑に彫り刻まれた神秘な「ダヌナ」民族や、あろうことかラメセスIII世治下まで年代を下る寺院碑文に記された「ダナニアン」と呼ばれる民族などだ。ホメロスはまさに「ダナオイ」なる神秘な民族のことを記録している。こうした言及がもしも意味のあるものであれば、グレーヴス氏が指摘する紀元前一四七二年という数字は、かれらのブリテン島上陸年代として大きく的を外れてはいないようだ。レナード・コットネルの『失われた都市』に言及されている、紀元前十三世紀後半ごろヨーロッパの某所から移民してきた神秘な〝海の民族〟に関する文章を、参照のこと。かれらはそのころ、うち続く海陸の戦闘でエジプト人に破れたが、エジプトの戦勝はラメセスIII世時代の寺院碑文に記念として彫り刻まれている。

（4）トールキンの英雄は、デュナダン、馳夫（はせお）、アラゴルン、エレサールおよびエルフストーンと、種々の名で呼ばれる。アマディスもまた生涯の色々な時期に、海の子、ベルテネブロス、緑の騎士、ギリシアの騎士などと呼ばれる。

（5）これらの点については、SFファンタジー作家でトールキン愛好家でもあるマリオン・ジマー・ブラッドリーと、三部作に関する、よく考察された彼女の長編評論『人間と妖精、および英雄崇拝』とに、多くを負っている。なお一九六一年に初版が出た同著は、一九六六年六月三十日付けの「ニーカス」誌第16号に再録された。

（6）この点に関しては、わたしの誤解があるかもしれない。トールキンが手を加え

たバランタイン版では、この部分が複数で表現されている。これは意識的な変更かもしれないし、単なる誤植、あるいはハードカバー版で起きた誤植の訂正かもしれない。正確なところはだれにも分からないが、わたしはそのことを、完璧を期するという意味から書き添えておく。

9 『指輪物語』はどのようにして書かれたか

妖精（フェアリ）というものは、小鬼（エルフ）や精霊（フェイ）、小人や魔女やトロルや巨人、あるいは竜などの外にも、たくさんの存在を含んでいる。それは海も太陽も月も、空も大地も、そのなかにあるすべてのものを包括している。樹も鳥も、水も石も、葡萄（ぶどう）酒もパンも、そしてわたしたち自身、すなわち現（うつ）し身の人間さえも。

J・R・R・トールキン『妖精物語について』

オクスフォードの同僚のなかでトールキンが親交を結んだ人たちは、C・S・リュイスのまわりに集ってひとつのサークルを作りあげていた。そこにはW・H・リュイス（C・Sの兄弟）も参加していた。また、アメリカの読者には（不幸なことだと思うのだが）オカルトと神秘思想に取材した何冊かの幻想小説のほうが、アーサー王の詩を扱った二冊の魅惑的な著書よりも

よく知られている作家、チャールズ・ウィリアムズもいた。そのほかにもジョン・ウェインやロイ・キャンベル、そしてデヴィッド・セシルといった趣味を同じくする会員がいた。かれらは肩の張らない非公式なグループをつくり、みずからを〝インクリングズ〟(暗示の意)と呼んで、毎週木曜日の夕食後に、モードリン・カレッジにあるC・S・リュイスの部屋に集まった。『指輪物語』(あるいは、かれらグループのいいかたによると〝トールキンの新しいホビット〟)という新作のことを最初に聞いたのは、この幸運なグループ員たちだった。事実、かれらは作品ができあがったことを知らされたばかりでなく、著者が一ページずつ大声で朗読するのものの内容そのものにも、接することができた。なぜなら、会話の流れがとだえた折りに、おのおの執筆中の物語を朗読し合うことが、〝インクリングズ〟たちのすてきな習慣だったからだ(ついでにいうと、この会話の流れは、現実も非現実も区別のない話題がつくりだす偶然の森を、ゆっくりとただよっていく。「ビールからベーオウルフへ、テルトゥリアヌス(カルタゴの神学者)へ、退屈な話へ、中世王制の契約説や珍しい地名の話へ」と当時を述懐するW・H・リュイスは、一九六六年にハーコート・ブレイスから刊行した編纂本『C・S・リュイス書簡集』の序文で記している)。

トールキン教授は四十四歳のときから『指輪物語』を書きはじめた。そして三部作のバランタイン版序文によると、「構想は……一九三六年から四九年のあいだに、暇をみつけては」書き進められた。結果的に『指輪物語』に与えられた世界的名声を一方に置きながら、この十三年間に交されたC・S・リュイスの手紙にあるごく気軽な言及を〝盗み聞き〟するのは、とて

も愉快なことだ。たとえば一九三九年十一月に弟に書き送った覚え書きにある気楽な一文を、ながめてみよう。かれがつづったこの種の覚え書きのなかでも、典型的なものだ。

木曜日にインクリングズの集会があった――運わるく、おまえとコグヒルが欠席したが。イーストゲートで食事をした。ダイスンがあんなにしゃべりまくるのを初めて見た――〝まさに冗談の大洪水〟。そのあとに出た晩餐(ばんさん)のメニューは次の通りだ。トールキンの新しいホビットの一章とチャールズ・ウィリアムズのキリスト降誕劇（いつもに似あわず、かれにしては意味をなさないもので、みんなもそういっていた）、それからわたしが〝苦悩の問題〟に関する本から採った一章。

もうひとつ、同じ年の十二月三日にW・H・リュイスに宛てた手紙はどうだろう。

木曜の例会がなかったから……わたしはトールキンの家に出掛けた。ジン・ライムを飲み、おたがいに最近書きあげた数章――かれは新しいホビットから――を読みあったりして、非常に楽しい宵を過ごした。

『指輪物語』は極度に長い文学作品といえる。ごく控えめに見積もっても、三部作で五十万語――なんと百万語の半分――を超える。だからトールキンが脱稿までに十三年を要したのも不

思議ではない。

この期間のほとんどにわたって、インクリングズの会員たちは物語が大声で朗読されるのを聞いている。三部作全部をトールキンが読んで聞かせたのかどうかは分からないが、かなりの部分はかれみずから読みあげたにちがいない。C・S・リュイスがそのことに一九三九年の書簡で、はじめて触れている。リュイス書簡集の序文を書いたW・H・リュイスは、一九四六年までのあいだトールキンが「ほとんどの例会で」『指輪物語』を朗読していたことを述懐している。したがってインクリングズたちは、すくなくとも八年間、その物語に耳を傾けていたことになるわけだ。

もちろん会員たちは物語について討論もし、批評もくだしたろうけれど、三部作ができあがっていく過程でこれといった影響を作品に与えた人物が一人もいなかったことは、確実なようだ。関係した人物はだれも、この点についてはひどく達観していた。三部作の最終巻が出てから四年後、C・S・リュイスは一九五九年五月十五日付けの手紙のなかで、インクリングズたち相互の影響について質問したチャールズ・モアマンに答えて、次のように書いている。

チャールズ・ウィリアムズは、たしかにわたしに影響を及ぼしたし、またわたしもたぶんかれに影響を及ぼしたはずだ。けれどその後はもう空白で埋めなければいけないだろう。トールキンに影響を及ぼした人物は、ひとりもいなかった——毒蛇（バンダースナッチ）に影響を及ぼそうとむきになるのと変わらないからだ。わたしたちはかれの作品に耳を傾けたけれど、ただ

激励してやるくらいしかできなかった。かれは批評に対して二通りの反応しか示さない。作品をはじめから書き直すか、それとも批評をまったく無視するか、そのどちらかだ。

しかしトールキン教授は、おそらく『ペレランドラ』『マラカンドラ――沈黙の惑星を離れて』そして『サルカンドラ――かの忌わしき砦』の作者（C・S・リュイスを指す）にかすかな影響を与えている。モアマン氏（リュイスの長編『サルカンドラ』に出てくるひどく曖昧な神秘的要素について、そのいくつかの起源を訊ねる手紙を書いた）に応える一九五二年十月二日付けのもうひとつの手紙で、リュイスはこう書いている。「ヌミノールというのは、ヌメノールのつづり違いです。これは〝本物の西洋神話〟に似せた、J・R・R・トールキン教授の創作になる厖大な空想神話に属するある断片なのです。その当時わたしたちは、その神話の主要部分が教授の執筆されているロマンスを通じて公けにされる日の近いことを、みんなで祈っていました。が、いまではその希望も遠く退いてしまっています」

以上の書簡は『指輪物語』第一巻が出る二年前に書かれたものであるから、書面にしたがえばトールキンは脱稿近くになって一時執筆をやめていたことになる。

ヘンリー・レズニクがトールキンにインタビューを申し込み、チャールズ・ウィリアムズとジョージ・マクドナルドが[1]『指輪物語』に〝きわめて甚大な影響〟を与えたとする風聞について質したとき、教授はこういっている。

いいや、それはまったく間違いだね。ウィリアムズからは何の影響も受けていない。それどころか、かれのことはよく知らなかったくらいだ。その点について、ひとつ話してさしあげられることがある。リュイスがわたしにいったことを、今ひとつ思いだしたのでね——もちろん、リュイスはご存じのとおり大きな影響を受けていたが——かれはこういった、「きみには呆れたよ、だれもきみに影響を与えるなんて出来っこない。ぼくもやってみたけれど、結果はこのとおりだ」とね。

それからマクドナルドに関しても、トールキンは同じインタビューのなかで「自分にはジョージ・マクドナルドの本がどうしても我慢ならない代物だと、今でも思っている」と述べている。

トールキンが今までのところで唯ひとつ認めるかもしれない影響といえば（もちろん、北欧神話は除いての話だけれど）、H・R・ハガードの『洞窟の女王』だろう。

三部作の第一巻は『旅の仲間』と題され、退官の年も近い一九五四年、トールキン六十二歳の年にジョージ・アレン&アンウィン社からイギリス版として出版された。献辞は〝インクリングズ〟に宛てられ、「かれらがすでに辛抱づよくこの朗読を聞いてくれたことのために、しかもかれらの尊い祖先にホビット族の血が流れているのではなかろうかと疑いたくなるほどの興味を示してくれた、そのことのために」と記されている。

第二巻『二つの塔』もまた、同じ年に出版された。最終巻『王の帰還』は一九五五年に出た。各書評はおおむね好評だった。「ガーディアン」誌はトールキンを〝生まれながらのストーリイ・テラー〟と呼び、「ニュー・ステイツマン&ネーション」誌は〝あらゆる色彩とアクションと偉大さを併せもつ、絢爛（けんらん）たる語り口の物語〟と評した。「タイム&タイド」誌はC・S・リュイスの文章で、〝剣のように刺し、冷たい鉄のように燃える美が、ここにある。ここにあなたの心を破る本がある……想像を絶するすばらしさが〟と賛美を寄せた。

しかし書評の熱狂ぶりのうしろに、ある種の当惑が探りだせるようだ。リュイス氏はこの作品を、著名なイタリアの物語作家ルドヴィコ・アリオスト（『狂えるオルランド』の著者）と比較した。ミッチスン女史は「真にすばらしい超科学小説」としながらも「読者はマロリーと同じくこの物語を真面目に受けとるべきだろう」と述べた。ほかの評者はその本を、スペンサーやミルトンやダンテ、それにグリム兄弟などと比較した。こうした書評すべてから受けるわたしの印象を述べれば、次のようになる。なるほど三部作の特徴と功績は疑いなく確かだけれど、その本に備わったまさに圧倒するような複雑さのせいで、読者はその本が正確にどのジャンルに属するのかを決めかねたろう、と。そこで、寓話（ぐうわ）だの諷刺（ふうし）だの、大河児童文学だの英雄譚（たん）だの、あるいはロマンスやファンタジー、果ては〝超科学小説〟だのという評価が出てくるのだ。ほとんどの人が認めたひとつのポイントは、これだけの規模と形式をもつ物語はエドマンド・スペンサーの『妖精女王』以来、ほとんど書かれることがなかった、という点だった（シェイクスピアと同時代のエリザベス期詩人スペンサーは、一五九〇年に三万五千行に及ぶ

ロマンスの最初の部分を出版した)。この指摘は、ここ三世紀半のあいだトールキン以外に英雄譚スケールのファンタジーに手を染めた作家がいなかったことを意味している。ただし、それが事実ではないことを本書の第十六章で明らかにしたい。

『指輪物語』は英国でたいへんな成功を収めた。最終巻が英国で刊行された翌年にあたる一九五六年、ホートン・ミフリン社は製本前のコピーをアメリカに輸入した。ところが、文壇の巨匠たちによって広く紹介された割に、アメリカでは三部作は多くの関心を惹(ひ)かなかった。トールキンの作品が、現在あれほどの熱狂をもって迎える何百万読者の関心を克(か)ちえるためには、ペーパーバック版が刊行される九年後を待たねばならなかった。

この現象はある程度まで、ハードカバーとペーパーバックの価格の相違で説明がつく。もちろん、ハードカバー版を買った熱狂的愛好者のグループも、いることはいた。しかし、けた外れに厚く、その上少部数しか印刷されない三部作に、黙って十五ドルを投げ出す人は、どう考えても少数に決まっている。ところが同じ本が一冊一ドル以下で手にはいり、どのペーパーバック・スタンドにも並ぶようになり、おまけに二種類のライバル版が出ておたがいに宣伝を競いあったら、その本は、それを喜んで読んでくれる読者の注意を惹く上で比較にならないほど有利な立場に立てる。『指輪物語』の場合はまさにそうだった。

ペーパーバックになった三部作は、ほとんど時を分かたず、国中の大学構内新刊店でどれよりもよく売れる本となった。アイビー・リーグのベストセラー・リストにあっては、永遠の愛読書とまでいわれたJ・D・サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』やゴールディング『蝿(はえ)の

王』などのヒット作を上まわったのだ。こうして三部作は、それを長らく待ちつづけてきた無数の読者をついに発見したようだ。人びとはそれをただ読んだだけでなく、何度も何度も読み返した。「五回という記録はむしろ当たり前」と、ヘンリー・レズニクは書いている。かれはさらに、三十回完全に読み返したところまでは数えていたが、あとはよく分からなくなったという一読者の話を紹介している。

一九五九年、アメリカでペーパーバックが出版される六年まえ、トールキンはオクスフォードを退官し、ヘディントンの小さな家で夫人と静かな生活を送るようになった。オクスフォードの退官年齢は六十六歳、そしてかれは人生のその地点にとうとうたどり着いたのだった。かれはその後も、功績によってカレッジの評議員をつづけ、今日正式には名誉教授の職にある。

かれはあいかわらず創作をつづけ、また時には学術論文や翻訳も手がけているが、生涯のうち三十五年余を捧げた教壇活動には幕を降ろした。

原注

（1）ジョージ・マクドナルド（一八二四—一九〇五）は、スコットランドの僧職に

あり、ルイス・キャロルの親しい友人だった。かれは英国における児童向けファンタジーの最初にあたる（そして、最良でもある）作品を、いくつか著している。もっとも重要な作品に『北風のうしろの国へ』（一八七一）と『王女と悪鬼(ゴブリン)』がある。しかしこの場合、レズニク氏が言及している作品とは、おそらくこうした児童文学ではなく、マクドナルドが成人向けに書いた二つの傑作寓意ファンタジー『リリス』と『ファンタステス』を指しているように思える。その点、マクドナルドからの影響をきっぱり否定したトールキンは、きわめて率直だったようだ。なぜなら、二作のうちどちらを取っても、三部作にわずかでもその痕跡(こんせき)を発見できるものがないからだ。しかし、マクドナルドの二著は、C・S・リュイスの〝ペレランドラ三部作〟成立にあたって、デヴィッド・リンゼイの注目すべき長編『アルクトゥルスへの旅』（一九二〇）と同じく見過ごせぬ影響を確実に与えている。

C・S・リュイスをふたたび論じたついでに、ペレランドラ三部作の最終巻『サルカンドラ――かの忌まわしき砦』――一九四六年に出版されたことを付け加えておこう。これはトールキン教授が自身の三部作を完結させた年から数えても、わずか三年先に言及している作品だ――が、トールキンのヌメノールと〝真の西方世界〟んじているだけだ。ところが案に相違して、『サルカンドラ――かの忌まわしき砦』は、トールキンに捧げられてはいない。リュイスはその栄誉を、わたしの意見では、かれの小説中でもいちばん深遠でいちばん後まで世に残るべき作品『スクリューテープ書簡』に与えた。『指輪物語』は全体として、リュイスが中心人物であったと思われるインクリングズたちに捧げられている節はあるが、トールキンがリュイスに

直接捧げた作品を探しだすことはできない。

10 今日のトールキン

古代も現代も変わらぬもの、それは書物と武器、
そして非凡な才に恵まれた人びと。
古代も現代も変わらぬもの、それは
すなわち、智ある人びとのあいだで交わされる永遠の話題。

エズラ・パウンド『詩編XI』

『指輪物語』を完成したあと、トールキン教授は、オクスフォードに近い郊外に並ぶ見分けのつかないほどよく似た住宅群の一角に、小さくて地味な家を建て、そこで静かに暮らしていた。しかし最近になって『指輪物語』の名声が惹きおこした騒動のことを考えてあわせて、もうすこしプライバシーが護れる家に移住することにした。子供たちはみんな成人して、いまはそれぞれの仕事と生活に忙しい（長男クリストファー・トールキンは教授の歩んだ道をもういちど

たどり、今はオクスフォードのニュー・カレッジで古代英語の講師をしている)[1]。教授と夫人は二人だけで暮らしている(教授は一九七三年、八十一歳で死亡)。

トールキン教授が退官直後に住んだオクスフォード近くの元の家は、小さくて息苦しく、本棚で埋まっていた。そこで教授はガレージを改造して、雑だけれど機能的な書斎をつくり、その書斎で執筆をおこなった。

わたしの友人でファンタジーとSFの両方を書くアメリカ作家L・スプレイグ・デ・キャンプは、しばらく前にトールキン夫妻と会った。かれのレポートによると、今年七十六歳になった教授は未だにかくしゃくとしており、あいかわらず目が輝き、するどいウィットを持ちあわせている。体重があり猫背だけれど、平均よりもかなり背が高い。もうすっかり薄くなった灰色の髪と、冷静で思慮ぶかく射るような目をしている。心地よいバリトンの声で話し、ときおりパイプを喫い、(デ・キャンプのいうには)〝文字どおり何でも読んでいて、どんな主題にもそつなく会話できる種類の人物〟である。

世間から離れて住み、かれ自身の幻想世界に埋もれているどころか、トールキンは大学や英国だけでなく世界一般に起きる出来ごとに、強い関心を寄せている。毎朝かならず新聞を読む――事実、かれは三紙に目を通している。専門分野ではまだまだ第一人者の位置を保っており、ときおりは専門に関する小文を物したりもしている。最近は『ガウェイン卿と緑の騎士』およびもうひとつの中世詩『真珠』の新訳に取り組んでいる。それらは本書が出版される前に公けになっているはずだ。

しかしながら、『指輪物語』以後のかれの出版物はきわめて少ない。一九六二年に小さな詩集が出た。一部は『指輪物語』から抜いたもの、新しいところでは『トム・ボンバディルの冒険』と題した作品がある。一編の妖精物語『ニグルの木の葉』と評論『妖精物語について』とから成る『樹と葉』は、一九六五年に刊行された。〈初期英語原典協会〉の依頼で、トールキンは『アンクレン・ウィセ』の新版を編纂(へんさん)している。この仕事――タイトルは『女隠者のための案内記』といった意味――は、中世の宗教共同体の女指導者用に作られた精神修養マニュアルだ。当然ながらトールキンの専門分野に直接かかわる作品、つまり英国中西部の文学的言語学的伝統を伝える本なのである。

また小さな薄い本『星を呑んだ鍛冶屋(かじや)』と小粋(こいき)な一冊『道は果てしなく続く』も出ている。後者はドナルド・スワン音楽、トールキン教授作詞による歌譚(かたん)だ。これ以外に、トールキンは最近新しい題材を加え、『指輪物語』のバランタイン版へ序文を寄せている。

これ以後、時間のほとんどは待望久しい『指輪物語』続編の推敲(すいこう)に費やされている。ちなみに、その作品はもう十年前から執筆されている。それが『シルマリルの物語』(田中明子訳、評論社)だ。

この続編(シークエル)――いやむしろ、SFファンの仲間うちで造られた役に立つ新語を使わせてもらえば、前編(プレクエル)(なぜならばこの本は『指輪物語』よりも時代的に以前を舞台にしているからだ)――は、完成も間近いという。気の早い消息筋は『指輪物語』の前編について多くの取り沙汰(ざた)をした――もっとも大部分は、希望的観測や周囲の動静からできあがった風聞に過ぎなかった

けれど。噂ではこの前編も『指輪物語』と同じように三巻立て（トリプル・デカー）小説になる予定ということだった。ところが違う説もあった――むしろ年代記や王家の系譜などオリジナル版の第三巻末尾に収められた付録に比較されるような、ノート類を集大成した百科事典みたいなものになるだろう、というのだ。とにかく古諺（こげん）にあるとおり、「噂千里を走る」という状態にあることは間違いない。

　ところで現在の段階では、『シルマリルの物語』はどうやら『失楽園』に似た本格的な物語になるらしい。アメリカ・トールキン協会の会合で、ニューヨークから来たトールキン崇拝者のハル・リンチがそのように報告している（リンチ氏はこの権威ある言明の基になったニュース・ソースを教えてくれない。会合は一九六七年一月に開かれた）。

問題の『シルマリルの物語』を、トールキンが『ホビットの冒険』よりもさらに前に書いていた事実は、あまり知られていない。これは、前に引用した「ニーカス」誌掲載のトールキン＝レズニク・インタビューから得た情報である。トールキンがレズニクに語ったところでは、最初教授は『シルマリルの物語』を書きあげたのだけれど、それを出版社が拒否したらしいのだ。その後に出たかれの著作が大当たりした今、出版社は『シルマリリオン』を刊行したくて、死ぬほどの思いをしているところだろう。

　それがいまだに出版されない理由は、二つのことがらに由来する。第一に、これは当然の話なのだが、『指輪物語』を書いていくうちに、もともと〝前編〟で設定した空想世界に関する情報が、多くの個所で食い違ってしまったこと。「だから当然、こんどは『指輪物語』のほう

に筋を合わせなければならなくなります」と、トールキンはレズニク氏に語っている。遅滞のもうひとつの理由は、かれの年齢にある。「わたしも今ではすっかり歳をとり、一日の仕事も短くしています」と、かれはいう。「だから二時まではとても仕事をしていられない。昔はこんなことはなかったのだが」

だれもが『シルマリルの物語』の形式に大きな興味をもっている。クライド・S・キルビーという、イリノイ州ホィートン・カレッジの英語学教授を職とする紳士が、一九六六年の夏にはるばるイギリスへ出掛け、トールキン家に滞在して原稿の整理も含めた作業を手伝ったことがあり、その本の正確なかたちと内容についての噂が、そこから色いろと流れ出ている（一説によれば『シルマリルの物語』は四巻に分かれて刊行されるともいう）。実際にその原稿を読んだという一青年は、物語の内容がモルゴスの最初の反乱からゴンドールの建国までの期間を扱っていたと報告している。三部作の追補編Bによると、ゴンドールの建国は〈第二紀〉の三三二〇年に行なわれている。わたしの推測では、しかし問題の本がそうしたあいまいな時期で終わっているとは、ちょっと考えにくい。わたしの推測では、物語はあと百二十一年先まで語られており、エレンディルとギル＝ガラドがサウロンを追放したあと自らも滅んだ時点、またイシルドゥアが指輪を得て〈第二紀〉が終わる三四四一年までを扱っているはずなのだ。このほうが、物語の終わりとしてはずっと論理的だろう。しかし当否の判定は、現物を見るまで待たなければなるまい。どのみち、三部作をこれから読もうとする人たちには、意味もないし役にも立たない討議だろうから。

ついでに、もうひとつお知らせしよう。タイトルの『シルマリルの物語』は、〈中つ国〉第一紀にモルゴスの〈鉄の王冠〉から剝ぎとられた奇妙な力をもつ魔法の宝石の歴史に関係している（単数ではシルマリル、複数でシルマリリとなる）。三部作に付された追補編Aのなかでトールキン教授は、高等エルフと人間の結婚はたった三組しかなかったと述べている。最初の組は第一紀のとき、ゴリアス国はシンゴル・グレイクローク王の娘にしてバラールの女、エルフ王女ルシアン・ティヌヴィエルと、エダインの人間でバラヒアの息子ベレンとが結婚したときだった。ルシアンとベレンは二人して鋼鉄の王冠からシルマリルを外し取った。それが娘エルウィングの手に渡されることになり、娘自身も水夫エアレンディルと結婚することになった。エアレンディルはシルマリルの魔力を自由にあやつって、〈影〉を越え、人間とエルフ双方の使節として「極西」におもむき、モルゴス討伐のために手を貸してほしいと嘆願した。かれ自身はもとの人間の地に戻ることを許されなかった。けれども、かれとかれの船は〈中つ国〉の住民に希望の印として知られる星となって、大空にとどまった。そのほか王冠にはあと二つのシルマリルがあった。追補編A-I（イ）において教授は、〝『シルマリルの物語』に語られているとおり〟と付け加えながら、二つのシルマリリが両方とも〈第一紀〉の終末に失われてしまったとしている。これはおそらく、『シルマリルの物語』（この作品はタイトルから察すると三つの宝石の歴史を扱った物語のようだ）が第一紀を舞台としており、けっして第二紀ではないことを意味するのだろう。

そういうわけで、現在のトールキン教授の生活ぶりを紹介し終わった。今年（一九六九年）

七十六歳、かれはまだかくしゃくとしており、静かな郊外に夫人と二人だけで隠棲生活を送っている。子供たちはみな成人して独立していった——長男は今五十歳、いちばん下の子供でも三十八歳だ。歯に衣を着せぬ、むしろ論争好きな老紳士であるかれは、パイプを愛し、折りに触れては近くをハイキングし、大好きなビールのびんをまんなかにして友だちと四方山話を交すのを好む。

かれは熱狂的な読者の讃辞にとまどいを示し、また悪口には少しばかり退屈を感じる。とりわけ、自分の作品を研究した書物（たとえば本書のようなもの）には迷惑さえ感じている。(2) かれにいわせると、どれも未熟なのだ。この種の集中研究を認めるかどうか訊ねたとき、かれはこう答えた。「生きている限り、認めやしないね」。かれはさらに続けて、そうした研究のいくつかを読んでいる事実を明らかにし、「ほとんどどれも出来が良くないし、たいていの場合心理学的分析にのめりこむか、出典のせんさくに走りがちで、わたしにいわせればむしろ無駄な努力にしか見えない」と語っている（「ニーカス」誌に載ったトールキン＝レズニク・インタビューより引用）。

大学キャンパスやエスプレッソハウスでかれがボブ・ディランのような国民的英雄まがいの人気——それも専門の学術論文ではなく空想文学のために——をかち得ていることが、この高名な学者にとってどれほどの戸惑いになったかは、たやすく想像できるであろう。

原注

（1）クリストファー・トールキンは父の愛読者にとってかなり興味ぶかいと思われる学術論文を、一九六〇年に出版している。ネルソン・アイスランド原典（テキスト）叢書というシリーズの一巻に収めた、『賢王ヘイズレク譚（サーガ）』の翻訳がそれだ。このアイスランド中世英雄譚は、面白いことに、『指輪物語』に出てくる人物名や地名のいくつかに言及している部分を含んでいる。とりわけマークウッドの森（翻訳『指輪物語』では「闇の森」となっている。また翻訳『エッダ』ではミュルクヴィズと発音されている）や、ドゥリンとドワーリンの小人（ドワーフ）など。

（2）ヘンリー・レズニクは記している——「大学で目下（『指輪物語』についての）博士論文を執筆している人が、少なくとも二人いる。それから、わたし自身も、『指輪物語』を扱った修士論文を読んだ」

11 三部作――諷刺か寓話か？

妖精物語の領域は広く深く
そして気高く、さまざまな存在に満ちている。そこには動物と鳥の振るまいのすべてがある。岸のない海、無数の星、魔力そのものの美、そしていつの世にも存在する危険。喜びや悲しみはともに剣よりも鋭い。その領域でおそらく人間は、そこをさまよい歩ける幸運をよく心に嚙みしめるようだ。けれど、まさにその豊かさと奇妙さが、その情景を報告しようとする旅人の舌を封じこむ。そして、その地にとどまる限り、門を閉じないように鍵をなくさないようにするためには、あまり多くを問い質しすぎないことである。

J・R・R・トールキン『妖精物語について』

ボストンの「ヘラルド・トラベラー」誌が「これまでに書かれた最もすばらしい驚異物語の

ひとつ」と呼び、W・H・オーデンが「このジャンルの傑作」と絶讃した作品の実際的な内容を見渡すために、わたしは三・四・五章で、『指輪物語』三部作の要約をこころみた。なぜなら、わたしたちがこの章を出発点としてトールキンの文学的先駆者を探究し、そこに流れる正しい伝統を確認し、物語に含まれるいくつかの興味深い問題を語りあうために、テキストをかなり詳しく探ってみる必要があると考えたからだ。しかし、三・四・五章にまとめた物語の要約を流し読みにするだけで三部作を読んだ気になってはいけないという警告を、ここでもう一度繰り返させてほしい。ところどころ現実のテキストから引用した部分も、あるにはある。しかしトールキン教授の散文は、その風味を充分に味わい文章の旋律を心ゆくまで楽しもうとしたら、直接自分で原典に当たらなければならない種類のものだ。

オーデン氏の評価は問題を惹起(じゃっき)する。正確なところ、『指輪物語』はいったいどのジャンルに属するのだろうか？　たとえばわたしのように、トールキンが「このジャンルでは古今のいかなる作家よりも完全な成功を収めた」とするオーデン氏の意見に賛成したとしても、まだまだわたしたちには三部作のジャンルを認定し分類する仕事が残ってしまう。

この問題に決着をつけることが、まさにこの本の課題であり目的なのだ。事実、三部作の正しい分類は是非とも必要なものだ。というのも、教授を熱烈に愛する讃美者の大多数は、作品を読んで新鮮な印象を得たようで（『指輪物語』の魅力は人間的条件のあらゆる部分にわたっているから、年齢に関係はない）、『指輪物語』がユニークであり近代文学では先例を見ないものだという誤った意見に傾いているからである。たしかに、この本のどこかですでに引用した

書評家のなかには、この分野でこれだけの文学レベルをもって書きあげられた作品はスペンサー、アリオストらを輩出した〝善き古き時代〟以来ひとつも現われなかった、と信じて疑わない人々がいる。だが、これは明らかに正しくない。

『指輪物語』は、おそらくほかの何よりも多くスペンサーの作品と比較されている。つまり、スペンサーの傑作『妖精女王』と題されたひどく長大な詩譚（したん）のことだが、これは詩文ロマンスでありアレゴリでもある。ところが三部作はどう考えても諷刺やアレゴリではない。そうではなく、純粋で素朴なロマンスなのだ。トールキンを寓話ロマンの巨匠たちと同列に論じることは、おたがいにその深遠さと豊饒（ほうじょう）さとスタイルの複雑さと背景の詳細さにある種の類似性が認められるから、簡単でしかも合理的な考えかたといえる。けれどそれでは皮相的にすぎる。トールキンはただひたすら物語を語るだけだし、象徴的な意味深さを大声で宣伝したりもしない。『指輪物語』は、ほんとうに単純に一冊のファンタジーなのだ。そしてファンタジーは、それ自体、昨今はひどく評判の悪い小説（フィクション）の一分野である。もっとも、かつては物語芸術に敬意を集める権威ある地位が与えられたことも、あるにはあったが。〝真実めかした話〟とさげすむことなく、またその無限の可能性を効果的に利用しようともしなかった文学者は、いやたとえ三文文士といえども、文学史のなかにほとんど見当たらない。事実、英国や大陸の文壇に巨歩を印した第一級作家のほとんどがその分野に筆を染めることを回避しなかったがために、ファンタジーが世界文学の主要な分野のひとつとされたこともあったのだ。[1] ラブレー、チョーサー、ゲーテ、ミルトン、セルバンテス、スウィフト、シェイクスピア、ヴォルテール、バイロン、

アリオスト、キーツ、フローベール、スペンサー、ダンテ、マーロウ、そしてブロンテ姉妹のうちの一方、あるいは両方が、ファンタジーを書いた――もちろんスティーヴンスン、キプリング、ドイル、ワイルド、ハガードあるいはアナトール・フランスらはいうにおよばない。

しかし（これは正論として主張できるだろうが）、スウィフト、セルバンテス、スペンサー、そしてバンヤンらは同時に寓話であり諷刺でもある形式のファンタジーを書いたのだから、なぜ『指輪物語』もその種の文学とみなしてはいけないのか、という疑問は出てくるだろう。表面的に見てトールキンの三部作がある意味で寓意的であるという評価は、たしかに正当かもしれない。なるほど、物語のプロットをいちばん簡単な言葉に要約すると、善対悪の闘い（あるいは光と闇の闘い）を表現している。また読者のなかには、西方世界の勢力と東方モルドールの闘いに、西欧民主主義とソ連全体主義の冷戦の寓意――それも今日の核兵器を、何より重要で信じがたいほど危険な指輪のシンボルとして――をみつけだした者もいる。しかしその伝でいくと、マックス・ブランド（アメリカの大衆小説作家）の西部劇のような善玉対悪玉の対決を描く活劇物語も同じ解釈が可能になって、結局この論点は意味のないものになってしまう。意味のある要因となるのは、著者みずから述べている創作意図なのかもしれない。スペンサーの『妖精女王』は、悪徳に対する善の勝利を寓意の形に結びつけたエリザベス期イギリスの政治家に関する諷刺であることが、明確にされている。政治的解釈のほうは、エリザベス期政治史の細部を深く学んだ専門の学者以外にはほとんど意味をなさないものになってしまったけれど、道徳的な意味は今でもはっきりしている――スペンサーは文字通り教訓で読者の鼻をこす

るのだ。

もともとの構想によると、『妖精女王』は十二[2]の冒険譚に分かれていたとのことだ。それぞれの冒険は、アリストテレスの言う〈十二の美徳〉——聖性、寛容、慇懃、正義など——がそれに敵対する悪徳を死闘のすえに制圧するまでを謳いあげていた。

そのシンボリズムは詩編に登場する人物たちを通じて表現される。たとえば聖性は聖ジョージとも考えられる赤十字の騎士に代表されている。そしてカリドレ卿は慇懃を表わし、グィオン卿は寛容を表わす、といった具合に。詩編全体のヒーローはアーサー王子だが、まだアーサー王になってはいない。かれは十二の美徳すべてを一人の英雄の形に包みこんだ総合体として表わされる。

詩編のテキスト内ではっきり述べられていることであるから、寓意の意味についてはこれくらいでいいのだろう。シンボリズムの第二段階、つまり当時の政界で活動した同時代人たちをそれぞれの「徳」の役柄に結びつけることだが、ここまでくると明確さはずっと頼りないものになる。アーテガル卿は、グレイ・ド・ウィルトン卿なる人物を暗にほのめかし、(慇懃の役柄を得た)カリドレ卿は、実生活でスペンサーの庇護者であった宮廷詩人フィリップ・シドニー卿を意味しているようだ、などなど。標題となった妖精女王はグロリアナというが、これはもちろんスペンサーが詩編を捧げたその人、エリザベス一世を示している。それから全美徳の典型とも言えるアーサー王子は、おそらくジョン・ヘイウォード[3]が主張したようにレスター伯爵を意味している可能性が大きい。

こうした細工味の強い極めて複雑なシンボリズムのごった煮は、もしも読者がその観点を摑むのに失敗すると、著者の側からすれば完全な時間の浪費にもなりかねないことになる。これがスペンサーに起こった出来事となのだ。かれが生きていたエリザベス期にあってすら、人々は、スペンサーがあれほど「曖昧模糊」とした秘かな当てこすりを達成するために用いた「寓意のからくり」の意図するところを、読み取れはしなかったのだ。詩編の最初の三冊を苦心のすえ読み通したウォルター卿は、（印象ぶかく）次のようにいって、詩人にその詳しい解説をもとめざるを得なかった。すなわち「すばらしい作品ですな。しかし一体これは何を意味しているのです？」と。その質問に応えて、スペンサーは一五八九年一月二十三日付けの書簡をしたためたが、そのなかで詩編の大きな狙いと目的とを次のように説明している。「全巻の大きな狙いというのは」かれはウォルター・ローリィ卿にそう書き送っている、「紳士や貴族がたに有徳で高雅な教養を身につけていただくことです」

『妖精女王』は、多くの崇拝者——とりわけシェリーやキーツやバイロンや、近いところでT・S・エリオット、C・S・リュイスなど——を持っている。にもかかわらずスペンサーの問題は、生活や行動の寓意的な解釈が当時すでに時代後れもはなはだしかった事実を下敷きにしている。『妖精女王』は、すでにその絶頂期をきわめて文学界から消え去ろうとしていたこの文学ジャンルの、最後の爆発にすぎなかったのだ。(4)

もしトールキン教授が、『指輪物語』を描く際にそうした政治的道徳的な伏線をシンボリズムの手法で実現しようと考えていたのなら、たとえば三部作を三十回読み返したあとついに読

み返した回数を数え切れなくなったという婦人をはじめとする、多くの読者のうちでもとりわけ賢くて労力を惜しまなかった読者の目からさえ、そうした寓意を隠し通したという意味において、狙いは途方もなく成功したといえるだろう。

事実、教授はしばしばこの点を質問者によく問われるのだ。かれはそのときいつも強い調子で、『指輪物語』は「額面通りのことしか意味していない」と否定している。かれはあるところで確乎とした調子で述べている、「一般的にせよ個別的にせよ、あるいは話題的なもの道徳的なもの、宗教的なものや政治的なものを問わず、あそこには寓意的意図など何ひとつない」と。

また、三部作のバランタイン版に寄せた新しい序文のなかで、かれはさらに作品全体の意図について次のように述べている。

わたしはどんな形にせよ寓話というものが嫌いだ。物事が分かる歳になってその存在を嗅ぎだすのに充分な注意力が備わったころから、ずっとそうだった。わたしは真実であれ虚偽であれ、いろいろなかたちで読者の考えや経験に応用できるような歴史を好む。ただ多くの人は「応用できること」と「寓意」とを混同しているようだ。しかし一方は読者の自由意志に根ざしており、もう一方は著者の意図的な優越のうえに成り立っているのだ。

作家はもちろん、自分の実体験から何の影響も受けずにいることなど出来るはずがない。しかし物語の萌芽が経験の土壌をどういう風に利用するかという問題は、手に負えぬくら

い複雑だ。物語成立の過程を規定する試みは、せいぜいのところ、不充分で仮定の域を出ない証拠から得られた推論でしかない。（傍点は筆者）

とくに三部作に窺える（うかが）という政治的なシンボリズム（要するに読者や評者の何人かが指摘した、モルドール対ゴンドールの闘いと東西冷戦のあいだに見られる類似性のことだが）に抗弁して、トールキンは、第三巻にある庄の大掃除と近代英国の政治状況との関係に触れながら、片方がもう片方の一側面を反映していることを主張する一読者と対談した際、さらにこう述べている――「そんなことはない。いかなる寓意もいかなる現代政治への言及も行なわないこと、が、プロットのいちばん重要なところなのだから……」（傍点は筆者）。これでもまだ充分に納得できない読者に対しては、著者自身の口にしばしば昇るきっぱりした否定の言葉だけでなく、三部作の諷刺あるいは寓話的解釈に対抗する一層固い防御を提示することが必要だろう。そこでC・S・リュイスの書簡のひとつを引用させてもらおう。そこには、より実り多い探究に移る前にまず押えておきたい、この話題についての論議がある。

一九五六年九月二十二日付けでピーター・ミルウォード師に宛てた書簡において、C・S・リュイスはこう書いている。

トールキンの本は寓話ではない――それはかれが好まない文学形式だ。この問題に関してかれの心を最もよく知るには、『チャールズ・ウィリアムズに贈るエッセイ集』に収め

られた、かれの『妖精物語について』を読んでみるのがいちばんだろう。物語芸術についてかれが抱いた根本理念は〝準創造(サブクリエイション)〟——二義的世界を創ること——なのだ。読者が「子供のための楽しい話」と呼ぶものは、かれにとって寓話よりもはるかに真面目なのだ。しかしかれの見解を知るためにそのエッセイを読むこと、これは必須だ。

『指輪物語』が諷刺でも寓意でもないという結論を得たところで、トールキン教授のエッセイに戻り、〝準創造〟に関するかれの考えを眺めていくことにしよう。そうすることで、『指輪物語』の属するジャンルとその本質とを解明する手掛かりが得られるかもしれないから。

原注

(1) これは私見にすぎないが、『ハムレット』は幽霊物語(ハムレットの父の霊が王子に動機をあたえ、物語の筋を動かすのだから)といえる。いっぽう『マクベス』は、魔女やバンコーの呪わしい亡霊が宴(うたげ)を行なう場面があるので、恐怖小説の要素を持つ。そして『大嵐』と『真夏の夜の夢』の二つは、あらすじの点だけから見て、単に妖精物語である。

（2）古典文学の衰退以後に書かれた英雄譚の例に洩れず（文学史家のなかには『妖精女王』を真正な英国叙事詩とする人もいるが、これは正しくない）スペンサーの詩編は完結していない。しかし、キーツの『ハイペリオン』やバイロンの『ドン・ファン』など多くの近代叙事詩がたどった運命とはちがって——スペンサーの場合は何か理由があって、未完のまま残されたり放棄されたりしたのではなく、（通説によれば）ただ一部分だけが伝わっているだけで、後半は火災のために消失したのだ。しかし断片とはいえ、その物語は英語で書かれた最も長い詩編のひとつに数えられている。

（3）エリザベス二世即位を記念して出版された『妖精女王』ヘリテージ・プレス版の序文で、かれはこの物語を指して、今日ではごく少数の人しか読んで楽しめなくなった「古典」のひとつと評していることを、付け加えなければならない。わたし自身も全編を読み通してみたが、完全に読破するのにたっぷり一年かかった。読みつづけるのに非常な精神力を働かさなければならないこともしばしばだった。これはスペンサーの語り口の極端な複雑さと、かれが用いた仰々しい擬古文体——一五八〇年にしてすでに古めかしい用語だった"whyleare"とか"ypright"とか"agraste"とか"noriture"、"algates"などの使用——におのおの原因がある。

（4）ジョン・バンヤンはこの手法をもっと単純でもっと読みやすい形にして復活させようと試みたけれど、その実践である散文ロマン『天路歴訪』は、およそ文学的価値や本来の興味から出たのではない十九世紀末の大歓迎騒動を除けば、まず成功とはいいがたかった。

12　妖精物語に関するトールキンの理論

妖精物語（フェアリー・テール）——
(1)妖精に関する物語。(2)想像的で信じがたい陳述や説明。
『アメリカン・カレッジ・ディクショナリ』

前章で引用したC・S・リュイスの書簡に出てきたエッセイは、はじめアンドルー・ラング記念講演のために用意された。トールキン教授が（『樹と葉』のなかで）述べるところによると、『妖精物語について』は一九三八年セント・アンドルーズ大学で今よりもずっと短い形の講義として公表されている。後にすこし書き足され、一九四七年にオクスフォード大で出版されたチャールズ・ウィリアムズを記念するエッセイ集に収められた。それから十七年して、細かい点でいくらか手を加えた新稿がふたたび出版された（この版には「ダブリン・レビュー」誌から採った『ニグルの木の葉』と題された短編も併載されている）。新版は『樹と葉』と題

され、英国におけるトールキンの出版社ジョージ・アレン&アンウィンから一九六四年に出版された。アメリカ版はホートン・ミフリン社から一九六五年に出版されている。

この最も新しい版のなかで、トールキンは新たに序文を書き添えている。そこでかれは、「とくに『指輪物語』を楽しんでいただけた方がたには、いくばくかの面白味がまだまだ見つかるはずの」エッセイと評している。なぜならこのエッセイは、『指輪物語』の第一稿が書かれたころと同時期（一九三八―九）「すなわち『指輪物語』がようやく膨みだし、ホビットたちばかりでなく自分自身にとってさえ途方もなく思えるまだ未知の国を舞台にした労苦と冒険の展望が、ようやくひろがりだしたころ」に書かれたものだからだ。

エッセイはたしかに、物語執筆中の作家の心を覗くのに価値ある手引きとなる。またC・S・リュイスがミルウォード師への手紙のなかで賢明にも指摘したとおり、エッセイはそれ自身でも熟読の値打ちを有している。

エッセイの冒頭で、トールキンはまず、俗に妖精物語と呼ばれる作品のほとんどが妖精を登場人物としてはいない事実を明らかにする。妖精物語を読んでいる平均的な人々は、その分野の典型的な例を挙げろと求められた場合に、たいていは『長靴をはいた猫』とか『赤ずきん』といった――作品にまったく妖精が姿を見せないという点で注目に値する妖精物語を挙げるだろう。教授はこの線をさらに推し進めて、わたしたちがふつう妖精物語と呼んでいる物語（もちろん全部ではないけれど）は、妖精の世界そのものを扱うことはあっても妖精を主人公にすることが現実問題としてそれほどないのだ、と主張する。かれはこんないいかたをする――

「良い〝妖精物語〟の大部分は危険な領域や闇の道をたどる人々の冒険を描いている」この自明に近い考えかたは、トールキンがその並外れた長さにもかかわらず、疑いもなく『指輪物語』を正当な妖精物語と規定しようとした明らかな事実を思いださせる。

かれはさらに、健全な妖精物語に見られる夢幻的驚異的な味わいが真実でなければならないという主張を提示する。つまり、著者は物語の成り立ち構成を「すべては夢」[1]として責任遁れしてはならないのだ——物語に登場させた魔法や奇跡を、奇妙な幻や錯覚のせいにしてしまってはならないのだ。真正な妖精物語は真実として描かれること、それが重要なのだ、とかれは述べる。

妖精物語や妖精の起源にかかわる興味ぶかいテーマを不要なものだと簡単に省いて、かれは妖精の問題をさらに深く考察しつづける。妖精物語と神話と宗教の係わりに全集中力を傾け、またほんのわずかながら歴史と神話の係わりにも目を向け、最終的に、歴史は煎じ詰めれば神話や伝説が作られたのと同じ素材から出来あがっているから両者が似かようことがあっても不思議ではない、という面白い結論にたどり着いている。

そういうわけで、妖精物語は何よりもまず子供のために書かれるという古い考え——おそらく全てのファンタジー愛好者がわたし同様心から反撥するにちがいない概念が裁かれる。幸せなことに、教授はこの耳障りな説を一蹴して、妖精物語が子守唄にすり替えられたのは英国の歴史にたまたま起きた偶然の出来ごとにすぎないと説明する。さらにつづけて、この古い概念は良い妖精文学にとって有害になったとも指摘する。この手の物語の語り手（あるいは再話す

る語り手）は、本来の聞き手を子供と思いこんできた。これがその語り手をして、役にも立たない二流作品の山を子供たちに押しつけても平気でいられる状態をつくりださせたのだ。なぜなら著者たちは、幼な心の信じやすさ――といって悪ければ、子供が今読んでいる物語をすっかり信じこむ傾向を有すること――を勘定にいれられるからだ。

コールリジはこうした精神のありかたを〝積極的な不信状態〟と呼んだ。それが詩であろうと物語であろうと、あるいは何であろうと、およそファンタジー文学に数えられる作品に接する読者の愉しみにとって、これは絶対に必須なものだ。ところがトールキンは幼年読者の盲信性にかかわるこの点を否定し、ファンタジーを創造するためのより高度な規準を主張する。どこから見ても完全でリアルで自己充足的な空想世界を創る作者の手腕は、真の（そして効果を得る）妖精物語あるいはファンタジーに備わる一層重大な要素なのだ。

かれがいうように、「ほんとうに起こるのは、その物語作者が成功せる〈準創造者〉であることが」傑作妖精物語のなかで立証されることなのだ。「かれはあなたの心がはいりこめる第二世界を創りあげる。そのなかでは、かれが語ることはすべて〝真実〟なのだ。それはその世界の法則に副うのだ」

次に教授は準創造についてのかれの理論を展開する。かれの信ずるところによれば、それは妖精物語の領域に必須というよりも、広くすべての芸術宇宙に当てはまるという。あらゆる芸術家は第二世界の創造に巻きこまれるのだ。その世界は自己充足的であって、しかもその世界の自然法則と調和していなければならない。たとえその法則が、しばしば今わたしたちが日常

を送っている世界の法則と途方もなく掛け離れようとも。トールキン流にいう準創造——健全で確乎とした第二世界の建設——は、全芸術の到達点ともいえる。そしてそれは、ファンタジーを媒介とするとき最高のかたちで達成される。

ファンタジーは妖精の持つ魔法の力に対して熱い思いを馳せる。かれはそう考える。そして真のファンタジーの成功作は、他のいかなる芸術よりも真の魔力に近づいている。(2)

かれはつづけてファンタジーの価値と重要さを論じる——それは、わたしたちを取りまく自然界の美しさと驚きとを、わたしたちにもう一度注目させる力になるのだ、と。本当に奇跡としかいえない驚異を、わたしたちは驚く前に受けいれてしまう。またかれはファンタジーが創りだされる素材にも目を向ける——いかにしてファンタジーが拡大し、現実世界あるいは第一義的世界のありがたみを低く見つもらせるかを示す素材に。

ファンタジーは第一義的世界から創りだされるが、良い創作者はかれの素材を愛する。その場合かれは、創造の技術だけが描写できる土や石や森に対する知識と感覚とを、併せ持っている。グラム（『エッダ』に語られる竜退治の英雄シグルドがもつ剣）を鋳型で固めることで、冷たい鉄が現われた。ペガソスを創ることによって、馬は高貴になった。太陽と月の樹々のなかでは、根も幹も、花も実も輝きをまとって現われる。

真のファンタジーの紋章、そこに与えられる本道正流の御璽、それをもって他のまがいもの

や偽物と一線を画する印——それは〝歓び〟を性質として持つことだ。創造者がみずから作りあげたものに籠めた、創造者の歓び。それも思い通りに出来あがったときの歓び。準創造者の魔力の虜になって、心配りの行き届いた愛らしい第二世界にしばし遊ぶ、読者の歓び。

この〝歓び〟の性質は、物語の内部に流れる心の一貫性に大きく依存する。「第二世界を築きあげる作家はだれでも……こうした第二世界が有する特異なその性質が（どんな些細なところまでもとは言わないが）〝現実〟から創られたものであることを、あるいは〝現実〟に流れこむものであることを、希う」

現実、内的な一貫性、〝真実味〟——しかしこうした要素なり特質は、ふつうわたしたちが非現実的なものから創られていると感じるファンタジーと、どういうふうに手をつなぎ肩を並べあえるのだろう？「ファンタジーの成功作に見られる〝歓び〟というこの奇妙な性質は、こうして、人目に触れずにいた現実性や真実をふいに垣間見ることと言い換え得るのだ」

もしもこのエッセイがファンタジー作家としてのトールキン教授の哲学を正しく反映しているなら、おそらくわたしたちは、かれの作品に潜む内的な性質の幾分かを理解しだせるだろう。だからこの際、『指輪物語』を諷刺や寓話と規定することは、きっぱりと否定しなければならない。この作品には隠された意味などないからだ。それは一編の幻想小説、物語、創造物、トールキン独特の用語法でいうところの妖精物語以外のなにものでもない。

では、かれ自身の三部作がファンタジーの成功作に必要な前述の要件にどの程度まで副っているだろうか？　たとえば、ファンタジーを「真実として描かなければならない」とするかれ

の主張を頭に置きながら、かれがこの規準をどうやって全うしたかを検べることができる。『指輪物語』は真実の歴史として描かれた。さらに作者は、物語で触れなかったその世界に関する事実情報を含む手のこんだ付録で本文を取り囲むことによって、かれが抱いた目算を完璧に実現させた。かれの中つ国語は豊富な語彙やアルファベットで道具立てをそろえている。数世紀にわたるデータを網羅した、歴史の要約を一瞥させる前期の年代記にも手間を惜しまない。王と王家の系図はかれの物語の主要登場人物を支え、背景に流れる歴史を提供する。

もちろんこれは、第二世界の準創造者がみずから創る宇宙を、ごく細部に至るまで完璧で現実的で自己充足的なものにしなければいけないとするかれの信念に、まったく一致している。かれは子供のために書いたりはしないし、その歴史と世界とをできるだけ信じられるようにするための〝積極的な不信状態〟にもほとんど意を注がない。トールキン愛読者のほとんどが何より魅惑を感じるひとつの要素は、全ページにくまなく流れる確信と権威の雰囲気だ。読者にとって、中つ国はリアルで完全で、真実存在する場所なのだ。

かれの最後の論争点――いわゆる〝歓び〟という欠くことのできない性質は、潜み隠れて表に出ない真実をふいに垣間見ることを通じて、わたしたちの目に触れるべきだとする問題――これについてはどうだろう？　かれが何を意味しているかをはっきりさせることはかなり難しいけれど、わたしは満足できる――すくなくとも自分にとって満足できる解釈を用意してある。教授がみずからの第二世界を本物の北欧神話のテキストと結びつける話をしているわけではないこと、それは確かなようだ。そういう問題ではなく、かれは、自分の世界が正式な歴史のは

じまる以前の地球の一時期に外ならないことを、わたしたちに納得させようとしているのだ。かれはドワーフやエルフやトロルやドラゴンといった完全に北欧やドイツ文学からの借りものを使うけれど、それがかれの目論見とは思えない。隠れ潜む現実（リアリティ）という言葉によって、かれはおそらく人間本性の永遠の真理を意味しようとしたにちがいない。すくなくとも表面的に三部作が幻想的冒険の興味あふれる物語である一方、そこには道徳の匂いが明らかに嗅（か）ぎだせる。これらの人はすべて相応の罰を受ける。公正無私な人、大食らいの人、誇り高い人、権力に飢えた人、これらの人は、思いもよらないほど嫉妬（しっと）ぶかい人、必死に働く人、正直な人、そして徳の高い人は、思いもよらないほどすばらしいお返しを受ける。ボロミアは死ぬが、それはかれが悪人だからではなく、かれの野望と誇りが自分の内的な気高さを押えてしまうほど強くなったからなのだ。

文学のアイディアが道徳を教えることにあるという考えは、なるほど古くさいかもしれないが、もしそうなら古今の世界的文学の大多数もまた「古めかしい」と呼ばれなければ、バランスが取れなくなる。

では以上の諸点を胸にしまったうえで、三部作に見うけられる〝奇態さ〟――アルファベットや言語学的な増補記述や系譜や要約の歴史などをわざわざ添付する仕掛け――が、実は単なる学者趣味の反映ではなく、本物で正当なファンタジー作品をこの著者流に規定するために是非必要なものだったことを、確認したい。

こんどは、かれがいうところの妖精物語に目を向けよう。しかしトールキンは、辞書に出ている範疇（はんちゅう）をはるかに踏み越え、通常その言葉に与えられる正統的な意味を、大いに拡大する。

かれはそれを広げて、芸術の全世界を含めてしまったのだ。

この問題はもうひとつ別の疑問を抱かせる。もしも『指輪物語』が幻想小説（ファンタジー・ノベル）なら、当然次のような規定の問題がもうひとつ浮かびあがってくる。〝ファンタジー〟という用語にそれほど広い意味を持たせ得るのか、という問題だ。トールキン三部作とは、そもそもどんな種類のファンタジーなのだろう？　ジェイムズ・スティーヴンスの『黄金のつぼ』みたいな風がわりな物語に属するのか、それともH・P・ラヴクラフトの『インスマスの影』みたいな超自然的恐怖小説に属するのか？　あるいはロバート・E・ハワード描く『コナン』物語のような血沸き肉躍るヒロイック・ファンタジーか、それともジェイムズ・ブランチ・キャベルの『ジャーゲン』に通じる皮肉なシンボリズムに属するのか？　いや、H・R・ハガードの『洞窟（どうくつ）の女王』のような冒険小説やロード・ダンセイニの『ヤン河をめぐりて』に似た精妙な伝説物語に属するのか？　それともジョージ・マクドナルドの『ファンタステス』のような夢の文学、アーサー王やギリシア神話の時代に材をもとめたロバート・グレイヴズの『わが船の友ヘラクレス』みたいな近代〝歴史〟小説の神話化に属するのだろうか？

というのも、ファンタジーはホメロスやスウィフトやカフカからポオ、ミルトン、そして『ネジの回転』などに至るすべての作品を網羅する万能の用語であるからだ。SFはファンタジーの一分野でもある。ゴシック風恐怖小説やL・フランク・ボームのアメリカ児童文学の傑作『オズの魔法使い』とその四十冊にも達する続編もまた、ファンタジーである。『ドラキュラ』と『ユートピア』の両方を含むほど広汎（こうはん）なジャンルは、当然ながら再定義が必要になる。

三部作はなによりもまず英雄詩に近しい存在といえる。サイズから見ても、概念から見ても、語り口の絢爛（けんらん）さと激しい流れから見ても、英雄が実際よりもずっと華ばなしく描かれているという事実からしても、それは確かにホメロス的だ。こうして『指輪物語』を「英雄ファンタジー」と分類することは、まず誤謬（ごびゅう）とはいえないだろう。事実、そうしたジャンルが現に存在する。そしてその源泉はギリシアやローマの英雄叙事詩にまで遡（さかのぼ）れる。しかしこの定義はまだまだ不完全だ。トールキンは古典的叙事詩の伝統ばかりでなく他種の文学からも素材を引いてくる。かれは伝説の多くや北欧神話の形式やドイツ民話や伝承の多く、そして中世ロマンスや聖杯や英雄物語、果ては他の幻想小説から、ある程度まで素材を吸収している。

『指輪物語』の形式とテーマを完全に理解するために、いわば叙事ファンタジーとしてこの作品を〝すみからすみまで〟知るために、わたしたちはこれらの伝統をその根源にまで遡っていく必要があるだろう。そしてその概念がどう発展し成長し、ついにトールキンが明らかに伴（とも）とするような英雄叙事詩的幻想小説――エピック・ファンタジー――のジャンルに大成したかを知ることが。

原注

（1）もちろんアリスの一部を妖精物語と主張するいかなる考えも、これで不適当になろう。そしてアリスも一般ファンタジーや夢の文学の類縁たる地位を獲得することだろう。

（2）ファンタジーは、トールキンに従えば、それ自体の拠って立つ基本的法則を観察できないか、あるいはその実験を真面目に扱いそこなった場合に成功の覚束なくなる種類の文学だという。かれはこのことを、アンドルー・ラングの二つのパントフリア・ロマンス『プリジオ王子』と『リカルド王子』を引いて説明する。トールキンは二人の主人公について、別の成人した人の目でひそかに笑うか（何よりも恐るべきことに）暖かく見つめるか、そのどちらかだと性格付けしている。かれは書いている――「アンドルー・ラングがクスクス笑ってしまうからといって非難はしない。しかしかれは自分自身に笑っているに違いない。しかもかれが、子供の聞き手の頭越しに賢い大人たちの顔へ目を向けすぎたのも確かなのだ――それはパントフリア年代記の非常に重大な欠陥にさえなってしまっている」と。

13　古典叙事詩のなかのファンタジー

ヘレネのために戦った王たちは亡霊のごとく消え去り
またかれらの戦も今は終わった、
かれらの欲望さえも、永遠に。
しかしヘレネの心の琴を爪弾いた男はその指を当て、
琴をかき鳴らす。
ヘレネのその手が今は埃となり、その唇も黙して語らぬというのに

J・U・ニコルスン『歌』

『指輪物語』には二つの大きなテーマがある。サウロンの不気味な力に対抗する西方世界の将軍たちが繰りひろげる闘いのテーマ、そして恐るべきサウロンの魔力を秘める護符を運ぶ英雄たちの小さな一群が、それを破壊できる場所に持っていくまでの遍歴、この二つだ。トールキ

ンの作品には、これら二つのプロットが、ちょうど花輪のように、巧みに編みあげられている。古典叙事詩のなかにあっては、闘いと遍歴の二大テーマは、例外的にこれらのテーマのどちらも用いていない作品もあるにはあるが、混用されることなく明確に区分されている。この傾向は叙事詩の系譜を創造したホメロスその人にいちばん典型的に現われる。かれの『イリアス』はトロア戦争に取材しており、いっぽう『オデュセイア』は故郷をもとめる一人の英雄の放浪と冒険にかかわる物語になっている。『指輪物語』の源流を究めようとするわたしたち自身の遍歴は、まず最初に、ホメロスが創り、ホメロスが生きた世界へとわたしたちを運んでいく。

叙事詩の世界

〝叙事詩〟は、英雄的業績や事件の経緯を物語る、典雅なスタイルを持った長くて重厚な詩と定義されてきた。けれどこの新しい言葉はラテン語の〝エピクス〟から出ており、それはさらに「語り、物語あるいは歌」を意味する〝エポス〟を原型とするギリシア語〝エピコス〟に由来している。

叙事詩を著した初期の作者たちは、その言葉の現代的な使いかたとはひどく異なった用法を心得ていた。初期の人びとにとって、叙事詩は誦(うた)われるものを意味し（抒情詩が歌われる場合の〝歌う〟とはおもむきを異にする）、形の定まった〝振り(アクション)〟をまるで持たず自由な動きで上

演されるだけのドラマとは、違っていた。アリストテレスは叙事詩に要求される最小限の必須条件として、高貴な主題、有機的な内的一貫性、そして秩序だった筋運びを挙げている。

ギリシアにおける叙事詩文学の勃興期は紀元前八世紀ごろにはじまり、おおよそ前六五〇年ごろに終わった。その当時人類はまだみずからが作りだした幻想世界のなかに暮らしていた。すなわち、世界と宇宙におけるその位置、あるいは自然については、まだほんのわずかな事実しか発見されていなかったのだ。人びとが身のまわりで見かけるすべてのものは、みなかれらの勝手な空想を通して解釈された。揺籃期にあっては、たしかに人間が世界を創造したといってもいい過ぎではなかった。なぜなら、空想の世界図を描きあげるファンタジー作家と同じように、人びとはその時期独特の世界像を創りあげていたのだ。世界はテーブルの表面のように平らだった。空は、逆さにした鉢のように世界を覆いこんでいた。あらゆるものが、みずからの尾を噛む巨大な蛇に似た大河に取り巻かれていた。太陽も月も星も、空を形づくる水晶のような層に嵌めこまれており、さらに空の成りたちは、まるで細工こまやかな中国の手毬のように層に層を重ね、おのおのの層がきわめて手のこんだ同心円の重なりを作りあげていた。

人間はあらゆる種類の神人神獣たちと世界を共有していた。もちろん、いつも十二種類ほどの神がいて、それぞれの神ははっきりと限定された支配範囲を持ち、ある神は海の支配者、ある神は風の王というふうに役割を担っていた。それから、人間と神のあいだをとりもつ〝神人〟と呼ばれる種類がいた。樹や川などに住む平和な自然霊もいれば、大地や空気や火や水の〝四大精霊〟のなかに住む、さらに物質らしくない存在もいた。それから幽霊もいた。かれら

は影のような地下世界に住まうと説く者もおり、また、かれらは人間としての一生を終え、ほかの生命体となってこの世に帰ってくるのだと主張する者もいた。初期の人間にとっては、どんな甲虫もベゴニア（園芸用の植物）も、かれらの曾祖母や魔物の魂が住みついているかもしれない特別な生きものであり得た。

次に動物がいる。現実の世界はまことに不都合にできているもので、サソリやコブラや鮫、そして人食い虎などが出没する。けれど原始社会の創造的な空想力はさらに進んで、どこにもある小暗い茂みや空ろな丘にひそむもっと恐ろしい獣や空想の恐怖を生み出した。たとえば鋼鉄のような鱗とこうもりのような肢翼をもち、騎士の攻撃にも炎と石つぶてで応戦する準備を固めている竜がいる。あるいは鷲とライオンと蛇の部分ぶぶんを繋ぎあわせたグリフィン、そしてワイバーン、ファイアドレイク、ヒュドラ、ヒポグリフ、スフィンクス、バジリスク——あんまり醜いので、それを一目でも見た者は死んでしまうという小さなトカゲ——などがいる。それから同種類の生きもので前に挙げなかったものたちも、今日では闘いのマントに刺繍されているのをよく目にする。さらに世界の遠い場所には——たとえばジャヴァやボルネオのあたりには——空高く飛ぶ鳥もその影が触れただけで石のように落ちてしまうほど強い毒をもつ、恐ろしいユーパスの樹が生えていた。もちろん、こうした神や幽霊や鬼女たちは、テーブルの表面としての世界が現実の自然界と似ていないように、いささかも現実味を帯びた存在ではないけれど、だからといって、思いつくままに空想の花や動物たちの系譜をふくらませていく人間を妨害したりはしなかった。そのうちのどれが真実か真実でないかなどと、そんな詮索は筋

ちがいだった。

たとえば、他のいかなる元騎兵隊長にもひけを取らないほど実用主義者である、あの生真面目で落ち着きはらった老プリニウスの場合を考えてみよう。かれはその著『博物誌』の第七巻のなかで、完璧なまでの真面目さをあらわして、サイクロプスとラストリゴネス、そしてアリマスピ（〝額のまんなかにひとつだけ目をもつことで有名な〟民族）のことを紹介している。そして最後に挙げた民族は、グリフィンと長い闘いをつづけている。かれはさらに、〝足を後方に折り曲げて脚部のうしろに付ける〟アバリモンの住民、蛇さえも一口嚙んだだけで死んでしまうほど強力な毒を体にもつオフィオゲネス、〝雌雄両方の性機能をかわるがわる実行することができ〟しかも右に雌の乳房、左に雄の胸をもったマキレイス、片目に二つの瞳をもち、おまけに馬にそっくりで、けっして溺れることのないポンテゥスのテビイ族、そして一本の脚と巨大な足をもち〝暑い日には仰向けに寝ころんで……足を日傘代わりに使う〟というモノコリ、あるいは傘足民族などについて語る。もちろん、首がまったくなくて、その両眼が肩についていることで二重に注目すべき西の民族や、蛇みたいな鼻孔をもつ〝スキリタエ〟と呼ばれるインドの遊牧民のなかの一部族については、いうまでもない。

叙事詩

そうした世界にあって、人間が「書くこと」を発明し物語を書きつづりだしたとき、かれの

ではない。

叙事詩を考える場合、ともするとギリシアの叙事詩——すなわちホメロス——のことがまず頭に浮かんでしまい勝ちだけれど、ホメロス以前にも、たとえば『ギルガメシュ』のような叙事詩があった。この古代叙事詩は「世界最初の偉大な詩譚（したん）」と呼ばれ、『オデュセイア』や『ヴェーダ』詠歌やアケナトンの『太陽讃』、あるいは聖書に収められている伝説や逸話などよりも最低千年は古い。今日『ギルガメシュ』はずっと後期の訳本として、アッシリアの王であってしかも世界最初の文献（石碑に書かれたものだ）収集家だったアシュル＝バニ＝パルの私的な書庫から発見されたものが残っている（この王を指して、ギリシア人はなぜか〝サルダナポリス〟と呼んでいる）。アシュル＝バニ＝パルは紀元前七世紀に国を統治した人物だが、問題の詩譚はそれよりもさらに年代をさかのぼる——おそらく前二千年を超える昔にどこかで創られたものだろうが、しかしこの作品はファンタジーだ。

ウルクの王ギルガメシュは異常な家系の出だ。たとえばかれの父はノトゥセラを顔色なからしめるような人物で、なんと千二百年間王として君臨した。ギルガメシュ自身はロバート・E・ハワードの描く蛮人コナンやヘラクレスのように怪物と戦い危険な旅に挑む〝スーパーヒーロー〟だ。かれは、獅子の貌（かんばせ）と竜の爪をもつ狂暴な巨人「ハムバラ」と戦う。にもかかわらずかれはこの相手を、あっという間に片づけてしまう。かずかずの旅のなかで、この英雄は三途（ステイックス）の川のシュメール版ともいえる死の川クルの暗い水面を横切り、神の庭に忍びこんだりす

る。このほかにも、シュメール、バビロニア、アッシリアの産になる叙事詩はかなりあるが、すべて忘れ去られ永いあいだ人目にも触れずに来た結果、最近になってようやく再発掘されている。

わずかだけれど専門家のなかには、ホメロスの詩譚にギルガメシュの影響の痕跡（こんせき）がたどれる、と主張する人もいる。今日分かっている限りでは、ギリシア叙事詩はホメロスに始まるのだ。あるいはそれ以前に叙事詩があったかもしれないけれど、今日まで伝わってはいない。このホメロスなる人物は、どうも正体がよく分からない。なるほど一部の権威はかれの生地[1]をスミルナやキオスやコロフォン、あるいはサラミス、ロドス、アテナイなどにもとめる裏付けを提示しているけれど、けっきょくかれがどこで生まれたかを知る者はひとりもいない。そして、かれが活躍した時期を正確に知っている者もいない。推定は、（歴史家テオポムプスにより指示された）紀元前六八五年というかなり適正な生年月日から前一一五九年というとても信じられない年号（フィロストラトゥスの説）にまでわたっている。簡単に言えば、わたしたちはホメロスが何者で、またいつ生まれたかを正確にいえない、ということだ。しかしホメロスの詩といわれている前六世紀後半制作の権威あるアテナイ保存による原典（テキスト）がある。もっともホメロスが『イリアス』と『オデュセイア』だけしか書かなかったとする確実な証拠もない。

ところでその二編の叙事詩は、ともにファンタジーだ。『イリアス』はトロイア攻略戦を描いている――というよりも、むしろその戦いの一エピソードを描いている。アカイア軍の指導者アガメムノン王と、かれの部下だった最も偉大な戦士アキレウスとのあいだに争いを引きお

こした誤解が、そのエピソードだ。物語のなかで、オリンピアの神々は、歴史をあやつり英雄たちを次から次に運命の牙から護りぬく——これがファンタジーの中心的部分だ——ことに一生懸命力を尽くす。いっぽう『オデュセイア』では、英雄のひとりが戦場から故郷に帰りつくまでの経緯を物語る。オデュセウスの放浪をたどりながら、ホメロスはめくるめく幻想の土地へとむかい、カリプソの魔法の島々や阿片吸飲者の島キルケをめぐる道案内つきの大旅行に読者を招待する。

双方ひどくかけ離れた内容のものだが、偉大な詩編であることにちがいはない。おそらく『イリアス』は文学における最初の心理小説であり、『オデュセイア』は正統的な熱血英雄譚——エズラ・パウンドのすばらしいいい方にしたがえば、「冒険物語としては第一級」というわけだが——である。

ホメロスは——たとえかれが一人だったとしても、あるいは複数だったとしても——想像力豊かな才能ある最上級の作家だった。しかもかれの叙事詩は後に世に出る詩人たちに、計り知れない影響を与えた。いや、その影響があまり大きかったので、多くの作家がかれの足跡に随ってホメロス型の詩をたくさん産みだした。詩人たちは次々に、ホメロスが触れなかった厖大なトロイア戦争の逸話に関心を向けた。こうして多くの詩編がホメロス叙事詩に付け加えられていった。あるものは二大叙事詩以前の出来ごとを詠い、またあるものは二つの叙事詩の隙間を埋め、さらにホメロスの詩以降の歴史を採りあげて。この作業は何世紀にもわたって続けられ、とうとう、(ギリシア人が知っていた) 宇宙創生からオデュセウスの二人の息子テレゴノ

スとテレマコスの結婚におよぶ宇宙の全歴史を余すところなく記した、少なくとも十六編から成る叙事詩によって作りあげられた、宇宙誌に関する厖大な韻文の百科事典ができあがってしまった。

俗に「史詩大系(エピック・サイクル)」と呼ばれるこの詩編すべてのうち、今日まで伝わっているのは『イリアス』と『オデュセイア』だけだ。ホメロスひとりを除けば、時は他のすべての叙事詩人が産んだ作品に重い手をのせてしまっている。プロクロスのような古代の学者が簡単な粗筋なり原典から直接引いた一、二行の引用なりを、折にふれて残してくれたものを除くと、全作品が埋もれてしまっている。[2]

史詩大系はとくべつな順序のもとに組みあげられたのではなかった。時代をへだてて、何人かの異質な作家たちがそれぞれの断片を残したにすぎない。ヘレニズム期になって、この史詩大系は、おそらくエフェソスのゼノドトゥスによって前三世紀ごろ年代順に編纂(へんさん)された。アレキサンドリア期の学者はその順序に従って史詩大系に接したわけだ。

最初に来るのが『ティタノマキア』(ティターン族の戦い)であって、これはコリントのエウメルスか、またはミレトゥスのアルクティヌスが作者だといわれる。物語は天界と地球の結合を語り、その結合からティターン族がどのようにして躍りでたかを採りあげ、途方もない戦いにまで及んでいる。現在この詩からは二行だけが伝わっており、主題に関する言及が六つほど実在する。

つづいてテーバイの伝説的な史誌を扱った三編の詩が来る。そのうちの第一作は『オイディ

ポディア』と題され、著者はキナエトンと噂されている。もとは六千六百の詩から成っていたこの作品のうち、今日伝わるのはわずかに一行だけだ。そして第二作めが『テバイス』、ときにホメロス、アンティマコス、コロフォンまたはクラロスが作者だと囁かれる作品だ。それはテーバイに挑んだ七人の物語で、二十一行が今日も残っている。三ばんめは『エピゴノイ』といい、作者はホメロスともアンティマコスともテオスともいわれている。もともと七千の詩から出来あがっていた作品だが、今はたった一行が残されているだけだ。ソフォクレスが自作の戯曲を書く際にその粗筋をたどってくれたおかげで、この三つのテーバイ叙事詩の内容については、かなりよく分かっている。

その次に、キュプロスのスタシノスあるいはサラミスのヘゲシアス（一説にはヘゲシノス）の手になる『キプリア』に始まる『トロイア史詩大系』が来る。十一冊の本に書きとめられたその詩は、トロイア戦争がどういうふうに始まったかを語る——黄金のリンゴ、パリスの審判、ヘレネの掠奪などなどの物語が、アカイア軍の召集と戦に発展していき、『イリアス』の語り始めまでをカバーする。おおよそ五十三行が今も残り、文法学者プロクルスはその詩の梗概を一千語も費やして紹介している。したがって、大ざっぱにいうと『キプリア』の内容や素材や書き方に関することは、ホメロス関係を除くほかのどんな叙事詩よりもよく知られている。

『キプリア』につづくのが『イリアス』だ。そして『イリアス』のあとには、しばしば『ティタノマキア』の著者ではないかとさえいわれるアルクティノスその人が書いたらしい『アエティオピス』がつづく。これは五巻から成り、『イリアス』の結末で語られた物語を引き継いで

いる。『イリアス』のなかでは、パトロクロスとヘクトールならびにそれ以外の英雄が何人か殺された。そこでアルクティノスは新しい英雄団を登場させる――はじめがアマゾン族ペンテシレイアという戦闘の神アレスの娘、そしてヘファエストゥス神が創った甲冑（かっちゅう）に身を固めたエチオピア王メムノンが、ほかの英雄たち数人と登場する。アルクティノスは前七七六年に生きていた。ただ二行が現存するだけだが、プロクロスが物語の粗筋を記録している。

次が、前六六〇年ごろ活躍したピィルラ（あるいはミティレネ）のレスケス（またはレスケオス）の手になる『イリアスミクラ』。この作品は一名『小イリアス』ともいい、トロイア史詩の最後の部分を含んでいる。すなわち、オデュセウスがアキレウス軍に降伏し、トロイアの木馬が作られ、ギリシア人がわざと退却し、あとに残ったトロイア人が巨大な木馬を引きこむために防壁を叩きこわす場面が描かれる。すでに〝新しい英雄団〟（アマゾン族ペンテシレイアとエチオピア王メムノン）が『アエティオピス』のなかで作者のアルクティノスによって抹殺されたために、レスケスはその空隙（くうげき）を埋めあわせる意味でさらに新しい英雄を産みだした。かれはアキレウスの息子ネオプトレモスを登場させ、さらにその上の人物としてヘラクレスの孫であるエウリピロスを紹介する！　この叙事詩からは、三十三行の引用が伝わっているが、それ以上残っていないことが残念だ。

『小イリアス』のあとに、『イリウペルシス』（トロイアの掠奪）が来る。これは二巻から成り、今日十二行の原文が残っている。アルクティノスはまたこの作品の著者だともいわれている。そして本詩編はトロイアの木馬に託した奇策がどう功を奏したかを語り、トロイアの没落と町

の炎上、奴隷を伴ってのギリシア人の凱旋(がいせん)までを扱っている。これは十二行の原文が残っているだけだ。

『ノストイ』または『帰還』と呼ばれる作品がそのあとにつづく。噂にあがっている作者は、トロエゼンのアギアス（またはハギアス）だが、この叙事詩は『イリアス』の結末と『オデュセイア』の始めのあいだに横たわる十年の空白を、うまく埋めてくれる。ネオプトレモス、メネラオス、そしてネストルといった多くの英雄の運命を語り――さらに妻の恋人アエギストゥスに殺されるアガメムノンの有名な物語や、オレステスの復讐(ふくしゅう)の物語を含んでいる。本来は五巻から成っているが、『ノストイ』の古い解釈学者たちが原典からわずか四行だけ引用している。

もちろん『オデュセイア』は、オデュセウスとかれの帰還の旅とに関する物語を語っている。その粗筋は、わたしが考えても有名でありすぎるから、ここでは繰りかえさない。しかしホメロスが粗筋の糸を何本かこんがらかったままにしておいたという事実だけは指摘しておきたい。かれは、求婚者たちを殺したあと何が起こったか一言もつまびらかにしていないし、オデュセウスが最後にどうなるかをこれっぽっちも暗示していないのだ。キレーネのエウガモン（前五六八年ごろの人）は二巻からなる自作の詩編、オデュセウスがトレスプロテイアの戦に巻きこまれた経緯を物語る『テレゴニア』で、こうした質問に答えようとしている。アレス神がオデュセウス軍を全滅させたとき、かれはテスプロテア人の女王カリディィスとのあいだに息子ポリポエテスをもうけて、イタカへ帰る。いっぽう『オデュセイア』のキルケが登場するところで

かれを父として生まれた息子テレゴノスは、長らく行方不明となっている父を捜しにやって来て、軍団をイタカに上陸させる。オデュセウスはその軍勢を迎え討ち、おたがいに血のつながりを知らぬままちょうどソホラーブとルスタムの行き違いの場合のように、息子に殺される。テレゴノスは歎き悲しみ、父の亡骸をキルケの魔法島に運び帰る。ペネロペとテレマコスを伴として。島では、テレマコスがキルケと結ばれ、テレゴノスはペネロペをめとり、全員が永遠に幸せな日々を送る。なぜなら、キルケがかれら全員を文字通り不死の存在にしたからだ。

この物語はトロイア史詩大系の結末となる。けれど正確な順序を定めがたい叙事詩が、ほかにいくつか残っている。たとえば『フォカイス』『アムフィアラウスの探検』、そして『オエカリアス・アロシス』（オエカリアの掠奪）――三冊ともホメロスが著者だというが――それに現在六行の原典引用文が保存されている『マルギテス』などだ。また、すでに失われた叙事詩や、コリントスのエウメレスによる詩（かれはまた前出の『ティタノマキア』を書いたと噂される作家たちのうちのひとりだ）で『コリンティアカ』なる題のつけられた詩がリストアップされている。わたしたちはその内容をほとんど知らされない。もしかしたら天馬ペガソスを飼い慣らしキマイラと闘ったベレロフォンの物語が含まれていたのかもしれない。ベレロフォンの故郷の町がコリントスであったことを考えあわせると――それにこの詩の題名にも注意しよう――わたしたちはこの失われた叙事詩の粗筋について、かなり正確な推測をつけることができる。そして叙事詩はたしかに神話的なコリントス史にまでかかわっている。『ヘラクレイア』なる題の、歴史家ヘロドトスの叔父にあたるパンアシスが書いたという前六世紀の作品もある。

ギリシア期の叙事詩の時代は、ちょうどそのころ終わりを告げた。

ギリシアはフィリッポスとアレクサンドロスのマケドニア王国のようにさらに新しい別の国が興るにつれて衰退していき、アレクサンドリアは一代で世界の覇権を握ったが、そう思った瞬間にはもう衰退しはじめていた。

なかば神格化した帝国の建設者アレクサンドロスは、前三二三年にわずか三十三歳で肺炎に倒れ、バビロンの土となった。すると、三大陸のかなりの部分を占領していた帝国は、あっという間に何人かの副将の手に落ちた。かれらはお互いに帝国の全領土を奪い取ることに汲々(きゅうきゅう)とするあまり、帝国の分裂に心を向けようとしなかった。ところが情況をやっと理解したかれら(当時の呼びかたで)後継者たちは、一転して自分の分けまえを手に入れることに腐心しすぎて、もういちど帝国を統合する努力をそそぐ暇(いとま)を失った。

しかしギリシア期が終わるまえに、ひとつの力強い文学の伝統が確立した。J・R・R・トールキンの作品に見える要素のうちのいくつかは、こうした史詩にまでさかのぼることができるのだ。それは、獰猛(どうもう)で不可思議な怪物や奇妙な民族が住み、人間を超えた力をもつ神々が支配する、この世ならぬ闘いと空想の土地をかかえる広大な風景、すなわち世界観のことだ。純粋に空想が創りあげた風景のただ中に展開する物語の概念は、こうして生まれた。

古典文学の残り大部分は、まったく別の概念を追っている。個人的な恋愛抒情詩(じょじょうし)、厳正な歴史書、美学評論、書簡、ひとつの都市や国にまつわる半ば空想的な歴史をベースにした戯曲——これですべてだ。想像力は叙事詩のなかだけで自由に活動することができた。そして、勇敢

な戦士が不気味な都や正体不明の怪物のまっただ中でつくる武勲の冒険談にかかわるこれら長詩のなかに、ファンタジーの概念が生まれた。

原注

（1）いっぽうでは、ホメロスがキメ、イタカ、イオス、ピロスあるいはスパルタで生まれたとする説を完璧に立証できると主張する学者もいる。さらに、エジプトとバビロニアをホメロスの生国と主張する人々さえ登場している。

（2）手短かに述べると、一三五行だけが時の塵埃（じんあい）から拾い上げられたにすぎない。このわずかな引用と参照文は全部まとめて、ヒュー・G・エヴリン＝ホワイト編纂（へんさん）になるハイネマン社刊『ヘシオドス、ホメロス詠歌およびホメロス関係文献』という一巻本に収められている。

14 武勲の歌におけるファンタジー

オリヴィエがいう「異教徒の軍勢は多く、いっぽうわれわれフランク人は数えるほどもおらぬ。同志ロランよ、なんじの角笛をどうか奏でてくれ！　もしシャルルが聞いたら、かれは軍団をすぐ引き帰させるだろう」

ロランが答える「われも愚かだった。フランスではドゥース族がわが名声を潰すであろう。われは剣デュランダルとともに雄々しく討ちかかるだろう、黄金の柄まで剣を血のなかに沈めよう。獰猛な異教徒はなんじの路にまでやって来ないだろう。今はこの生命を賭けてもいい、かれらはみんな縛られたと」

C・S・モンクリーフ訳『ロランの歌』

アレクサンドロス大王の帝国が崩壊し、ほかの国ぐににも大きな衝撃を受けるところが出て

きたとき、プトレマイオスはエジプトを掴み、またバビロニアはセレウコスにゆずった。それに詩人たちは、敵や味方の軍が押し寄せる道すじからすこしでも離れるほうに忙しく、より以上の作品を書きあげる暇がなかった。

しかしプトレマイオスと、かれのあとエジプトの王位についた人たちは、良い史詩に傾ける耳をもっていた。初期のプトレマイオスはエジプトの新しい主都アレクサンドリアに巨大な図書館を建て、全ての史詩大系を集めはじめた。本はここに集められ、古代世界で最古最大を誇る書庫（アシュル＝バニ＝パルの図書館は数に入れていない。もっともこれは比較で見れば小さいものだ）の主任司書官をしていたゼノドトゥスによって、年代順に整理し直された。

アポロニオス・ロディウス（〝ロードス〟のアポロニオス）、かれはゼノドトゥスの後を継いで司書官長になった人物だが、詩人カリマコスと学問上の論争に捲きこまれた。これはアルクティノスやレスケスなど多数の史詩作家が活動した時代からかなり後世に下った、前三世紀の出来ごとだ。カリマコスは、史詩の精神がギリシア人から失われたとする意見をもっていた。事実、かれは、古い史詩に匹敵する長さのある詩などもう書けないとまで主張した。おそらくかれの感じでは、英雄詩譚の将来はエピリア――たとえばヘシオドスの『ヘルクレスの楯』のように数百行で終わる擬史詩の方向にむくだろうと予想できたのだろう。それに対してアポロニオスは反駁した。かれは、史詩がもう書けなくなる理由などないとして、真向から反論した。アポロニオスは自分の主張を証明するために、みずからイヤソンとアルゴ船団と金羊毛探索の物語を書きあげた。『アルゴナウティカ』は、ホメロス以後に書かれた最初のギリシア叙

事詩で、しかも現在まで伝わっている。けれど不幸なことに、この問題でカリマコスに同調した人びとには次のように論駁する手段が残っていた。すなわち、叙事詩級の長詩を書くことはテクニック的に可能かもしれないけれど、ややもすると結果は不満足なものになりがちだ、という批判だ。悲しいかな、『アルゴナウティカ』はわざとらしい神話への言及や衒学的(ペダンチック)な注釈に満ち満ちており、叙事詩というにはすこしばかり短かすぎた。四巻をもって完結するその作品はおよそ七千行から成り、いっぽう『イリアード』は一万五千行を超えていた。イヤソンの物語はたしかに円熟した素材だったけれど、この作品に限っては失敗作だった。登場人物さえ活気がなかった。ただひとり生きいきしているのはメデアだけで、ロンギノスやクインティリアヌスは凡作と評した。

しかしながら、カトゥルスの同時代人アタスのウァロという人物が、みずから長大なアルゴ船の物語を書きあげたとき、それを徹底的に引き写して足りない部分を補った。こういう手法は、ウェルギリウスその人でさえ『アエネアス』第四巻で行なったし、現存する世界最古のアルゴ船物語をラテン語で書き残したウァレリウス・フラックスもまた同じ手を使った。紀元後九三年にその著を執筆したウァレリウスは、ローマの未来を予測したという有名な神託集を受けもつ学窓に出入りするローマ人司祭だった。さらにずっと後世になって、紀元後一五七二年ごろロンサールがフランスの〝国民史詩〟『フランシアド』を書きあげるにあたって、ロードスのアポロニオスを模倣した。

ロードス島の詩人が叙事詩の執筆が可能であることを証明するや、何人かのギリシア人が同

じ仕事に手を染めようとした。その仕事に実質的な試みを行なった最後の人びとのうちのひとり——優雅な叙事詩言語としてのギリシア語が衰え滅ぶのを止めるには、いささか遅すぎたけれど——は、クイントゥス・スミルナエウスだった。かれはみずからの構想をもとめて、古い叙事詩作家にまっすぐさかのぼっていったのだ。

スミルナのクイントゥスは、自作の『ポストメリカ』（あるいは〝ホメロスのあとに〟——すなわち『イリアード』のあとに起こった出来ごと）のなかで、たとえばミレトスのアルクティノス作『アエティオプス』やミティレーネのレスケス作『イリアスミクラ』（別名〝小イリアード〟）や、やはりアルクティノスの作といわれる『イリウペルシス』など、すでに述べた大系的叙事詩のいくつかに見られるのと大筋において同じ領域をほぼ余さずに触れた。なるほど、クイントゥスは執筆の際に、今は失われたけれど往時はまだ残っていた古代叙事詩のテキストを目の前にひろげていた可能性も、充分にある。

クイントゥスは、アポロニオスが正しいことを証明したばかりではない——叙事詩を古い型式で書きあげ得ることを証明しただけでなく、『アルゴナウティカ』への批判が失敗を結果論から予測する誤りを犯したものであることを、立証した。手短かにいえば、クイントゥスの叙事詩は、色彩と興奮と目をみはるような幻想に満ち、広がりと速度をもって語られ細部にもよく目の届いた、きわめてみごとな詩であるばかりでなく、その上血沸き肉躍る物語を語るのだ。[1]

見るところ、その作品は英雄譚の素材——血だまりのできた戦場や、英雄たちの息づまるような一騎討ちや、海上の嵐、墓から現われる超自然的な亡霊、不気味な予言などなど——と結

びついているようにみえる。

にもかかわらず、ギリシア叙事詩の時代はまさに過ぎ去ろうとしていた。叙事詩を書く意欲はリウィウス・アンドロニカスを経てローマに渡った。そしてかれは紀元前三世紀の後半に『オデュセイア』をラテン語の韻律に翻訳した――これはローマ世界における叙事詩の始まりとみなされる出来ごとだった。すこし遅れて、ナエウィウスが第一次カルタゴ戦役に材を取って叙事詩を書きあげた。その次に、およそ一世紀遅れてエンヌウスが出た。

ラテン詩は、前二四〇年ごろエンヌウスに始まったと確実にいえる。かれの『年代記（アンナル）』は原初からかれ自身の時代にまで及ぶローマの歴史をあとづけた。叙事詩としてむしろ未熟だけれど、韻文の表現媒体としてラテン語のもつ可能性を大胆に探究している。そしてかれ以後の作家は、その多くをこの先駆的作品に負っているのだ。

長い史詩を書くことはもう不可能だと主張したカリマコスと、将来は新しい形の詩エピリアのほうにあると同調する人たちは、しばしの天下を握った。だれもがエピリアに手をつけようとした。監察官カトーは『リディア』および『ディアナ』という作品を書いた。カルウスは『イオ』を、カトゥルスは『ペレウスとテティスの結婚』を、キンナは『ズィミルナ』を、といった工合（ぐあい）に、みんながみんな古代神話から筋立てを引きつつ。けれど、大まかにいえばカトゥルス（紀元前八七―前五四）の同時代人といっても差し支えない人物に、ルクレティウスという叙事詩詩人（前九九―前五五）がいた。『レルム・ナテュラ』と呼ばれる教訓詩の作者だ。そのあとに偉大なウェルギリウス（前七〇―前一九）が出て、なんとかホメロスの崇高美に匹

敵するものを書こうと努力し、それに近い成果を得た。かれはホメロスを真似て、叙事詩の冒頭を物語のまんなか（in mediares）から書き起こした。それにつづく回想場面（フラッシュバック）で物語本来のはじめを要約するのだ。またかれは、オデュセウスが老予言者ティレシアスの霊を喚（よ）びだす場面のある『オデュセイア』第十一巻で描かれたような、いわゆる口寄せ（ネキウリア）の有名な場面を、真似てもいる。かれはそれ以外のホメロス調――たとえば船のカタログや神々の評議といったものをも、利用している。また大系詩の例に従って、あの『アエネイアス』をトロイア物語に接ぎ木してもいる。ホメロスの『イリアード』第二巻にほんのわずかに紹介されるアエネイアスという脇役を、自分の叙事詩のヒーローに据えながら。

次にマニリウス（前二〇―紀元後二五）とルカン（三九―六五）が出た。ルカンの叙事詩は毒々しく血みどろだけれども、歴史的ではあって、戦いの勝敗を決した戦場パルサリスにちなんで現在では『パルサリア』と呼ばれている、ポムペイとローマ皇帝の内戦を描いた作品だ（ただし本当のタイトルは『内戦について』*De Beiio Civili* という）。それからスタティウス（四〇―九五）が出て、ウェルギリウスを綿密に模した『テバイド』という作品を残した。かれは『アキレウス』(2)を書きたしたが、一巻と半分まで終えたところで死んでしまった。

ローマの叙事詩作家がホメロスかウェルギリウス、あるいはその両方を模倣したにしては、出来あがった作品が圧倒的な成功を収めるところまで行かなかったのは、どうしたわけだろう。これらの詩の大部分は、断言してもいいがギリシアのそれとは比較にならない。ギリシア人たちはほとんど〝飛翔（ひしょう）〟に近い軽やかさと透明な想像力にめぐまれていたが、ローマ人は重厚な

大部分が退屈な描写で占められているのだ。実際、退屈なラテン叙事詩ほど退屈な読み物はない！(3)筆運びをするし書き方も実際的で、

ローマ帝国が衰退しはじめると、叙事詩——真面目な芸術形態としての、固定化された古典的な叙事詩——は衰退を示しだし、カロリンガ王朝後のヨーロッパにふたたび甦るまで失われてしまった。

文明が崩壊し帝国が堕落してゆくのにつれて、叙事詩文学の大部分は完全にすがたを消した。大系詩のようなものは、もう取り返しのつかない状態になったのもある。またスミルナのクイントゥスが書いた『ポストメリカ』のように、しばらく置き忘れられ、カラバリアにあるオトラントの修道院図書室で朽ち果てようとしていたところを、十五世紀にやっと法皇ベサリオンに発見されたという写本の例もある。

叙事詩の概念がいくつかの良い見本を通してヨーロッパ各地に浸透したとき、この文化的な交流が刺激となって興味ぶかい作品が実を結んだ。しかしスタティウス以降、英雄叙事詩は一三四一年にペトラルカが『アフリカ』を書いて復活の狼火をあげるまで、衰退の一途をたどった。ただローマ以後のヨーロッパ新興国はそれぞれに古代からの伝統的な英雄文学を残しており、そうした国ぐにの力が強くなるにしたがって、かれらの古い英雄譚も文章に書きとめられるようになり、古い叙事詩にはほとんど影響されない新型式の叙事詩文学を生みだした。

この土着文学は、七世紀の末にノーサンブリアで創られたと覚しい原型を十一世紀のウェセックス地方で用いられていた口語により記述したアングロ・サクソン叙事詩、『ベーオウルフ』

を含んでいた。『ベーオウルフ』はすばらしい詩編であり――英国文学最初の傑作と評価されている――しかも恐ろしい妖魔(ようま)トロルや魔法の剣や魔法の鎧(よろい)、それに火を吹く竜などがたくさん登場するくせに、なんと奇妙にも現実の出来ごとに材を取った第一級の冒険物語でもある。ベーオウルフ自身についてはあいにく、五二〇年ごろフランク族とフリースラント族（オランダ北部地方に住んだ民族）を相手に現実に行なわれた戦闘の際、首長ハイゲラクとともに戦ったという事実以外なにひとつ知られていないが、今では実在の人物と考えられている。

フランスは四千行余からなる著者不明の十一世紀フランス叙事詩『ロランの歌』を生みだしたが、これはあらゆる見地から観てフランス文学における最初の秀詩と呼ばれてきた。ベーオウルフ同様、ロランも歴史的な人物と考えられている――なぜなら史実は、七七八年八月十五日におこったロンスヴァールの歴史的な戦いで死んだブルトン境界のロラン伯爵について、語っているからだ。ベーオウルフもロランも因縁ぶかい剣――つまり歴史や家名にからんだ有名な魔法の武器（ベーオウルフのフルンティング、ロランのデュランダルは、かつてトロイアのヘクトールが所有していた武器だ）を携えている。『ロランの歌』と、それにつづく無数のフランス叙事詩は、俗に〝武勲の歌(シャンソン・ド・ジェスト)〟と呼ばれている。これらの作品はカロリンガ神話として取り扱われる詩譚(したん)の中心部分をかたちづくっている。レオン・ゴーティエは全部で百十編のリストを編纂(へんさん)した。

神話にしたがえば、ロランはシャルルマーニュ大帝に仕えた十二人の勇士あるいは十二人の貴族――ちょうど円卓の騎士がアーサー王のもとで力を合わせたように、かれらの王の周囲に

集った忠誠厚い英雄的騎士団——の一員とされる。十二人の貴族の名前に関しては、権威のあいだでそれぞれ意見が分かれる。『ロランの歌』自体にもかれらの名が挙がっている（第六十四章）——まずシャルルマーニュ王の甥（おい）であるロランの良き友であり相棒であるオリヴィエ、ランスの大主教テュルパン、ジェラン、ジェリエ伯爵、ルションのジェラール、ガスコーニュのアンジェリエ、サンソン公爵、誇り高きアンセイス、オトン、ゴーティエ伯爵、そしてベランジェ(4)。

『ロランの歌』がこれら主人公たちの大半を殺してしまっているために、フランス叙事詩はスタートしたそばから終わりを告げるかに思えたけれども、事実はそうならなかった。なぜなら『ロラン』が中世版のベストセラーに数えあげられるや、トルヴァレス（吟遊詩人）がロラン以前の時代を舞台にした叙事詩を——本書ですでに述べたギリシア叙事詩によく似た——〝前編（プレクエル）〟というかたちで創りだした。多くの作品が英雄たちの若かりし時代を取りあつかったが、そのなかには『幼きロラン』や『幼きオジェ』などがある。貴族たちそれぞれに関する叙事詩も、また多数ある——『デンマーク人、騎士オジェ』（一一九二—一二〇〇年のあいだに作られた）、『ルッションの人ジェラール』（推定一一六〇—一一七〇頃作）、『ギャラン・ド・モングレーヌ』（十三世紀後半作）といった、いわば詩の型式で書かれた伝記群がそれだ。また叙事詩のなかには、シャルルマーニュ大帝をあつかったものがあり、さらに大帝の息子をあつかったものもある（例としては一一三〇年以降に作られた『ルイの戴冠（たいかん）』がある）。

まもなく詩人の全党派が『歌』の全大系を創作しはじめた。『オレンジ公ウィリアム』の大

系詩が全部で八編の叙事詩になった。『モニュレーヌのギャラン』史詩は約十六編の詩で構成され、『アイメリ・ド・ナルボーヌ』（オレンジ公ウィリアムの父）に関する大系詩はすくなくとも八編以上の詩編となって生まれた。実例はそのほかにもある。このカロリンガ伝説の周囲から生まれたフランス叙事詩は百編を下らないけれど、真の傑作である『ロランの歌』と一、二の例外を除けば、ほとんど英訳されていない。[5]

シャルルマーニュ大帝――フランク王カルルは、カルルス・マグヌス（チャールズ大帝すなわちシャルルマーニュ）と呼ばれた――は、もちろん実在した。かれは歴史に現われる皇帝であり、七四二年に生まれ八一四年に死んだ、メロヴィンガ王朝最後の王チルデリヒ三世の後を継いだ小ピピンの嫡子である。シャルルマーニュは大支配者の一人であって、短命ではあったけれど光輝に満ちあふれたカロリンガ帝国を築き、フランス全土をはじめスラブやバルカン地方の主要区域はいうにおよばず、今日ドイツと呼ばれる地方のほぼ全域とイタリアの半分を支配する王になった。その帝国は、かれの死後長くはつづかなかったにせよ、ひとつの伝説をつくり、平穏と力の黄金時代として回顧されるようになった。当然ながら伝説はシャルルマーニュの記録[6]に手を伸ばしはじめるわけで、およそ一、二世紀あとには、ここからひとつの完全な叙事詩文学が生まれでることになった。

もちろん、同様の文学的動向は世界のあちこちでもおころうとしていた。たとえば十一世紀なかごろにまでさかのぼるスペインの作家不詳の国民的叙事詩『ポエマ・デ・ミオ・シド』のような国民文学が、中核になる作品として確立しつつあった。この英雄詩（スペイン人たちは

このジャンルを〝武勲の歌（シャンソン・ド・ジェスト）〟と呼ぶ）は伝説に材を取ったのではなく、ローマ人ルカンの『パルサリア』のようにもっと近世の歴史的事実を題材としている。叙事詩は〝戦将（カンペアドール）エル・シド〟の行ないを謳（うた）っているが、この人物は本名をルイ・ディアス・デ・ビバール（一〇四〇？—一〇九九）という実在の剣士で、フランク王国の貴族ロランのようにムーア人との闘いで討ち死にした。

ポルトガルもまたかれらの国民叙事詩のために史実からその主題を得た。この作品『ルシアード』(7)は、ヴァスコ・ダ・ガマの英雄的な発見航海の物語を織りこんだ、ポルトガル人民の歴史にかかわる英雄譚であり、作者はルイス・デ・カメオンス（一五二四？—一五八〇）である。

この『ルシアード』はウェルギリウスを模した叙事詩ではあったが、すでに古典的叙事詩の時代は終わりを告げていた。土着的な伝承の歴史から想を得て土着の言語で書いた、土着の叙事詩が生まれようとしていた。フランスのシャンソンともども、これらの歌譚は古典詩の復活というよりも、むしろ芸術的産物としては低次元への下落を示す叙事詩の堕落と腐敗の実例と見たほうがよさそうだ。『ロランの歌』で到達した高位の足跡以来、フランス詩は堕落の一途をたどって、ついに韻文で書いた年代記にまで落ちてしまった。けっきょく後期の似非（えせ）叙事詩は不満足な出来に終始し、作者の側に大した詩才を要求せず、また読者の側にもミナスキュール（七世紀に発達した草書体の小文字）に関する知識や古典神話の教養も要求せず、ましてや芸術については冷ややかで形骸化した興味で済ませられる程度の、叙事詩型文学の新型式を生みだす刺激剤になりさがった。

言いかえれば、正統派叙事詩は〝歌譚（シャンソン）〟というかたちに堕落し、それはやがてロマンスに引き継がれた。

ルネサンス詩人たちは叙事詩的ファンタジーの発展にどんな寄与をしただろうか？　かれらは古典詩人から、奇妙な生物や珍しい民族やふしぎな怪物たちの住む世界を旅して回る旅人、また戦いを繰りひろげる英雄的主人公のアイディアを拾いあげた。けれどかれらは、このアイディアに対して、トールキンにも表われるいくつかの要素を付加したのだ。因縁ある武器——つまり、ロランのデュランダルやシャルルマーニュのシオイエウス、それにエル・シドのコラダとティゾナのような、家名と史実に結びついた名高い魔剣のことだ。今こうして、異教の神々によるというよりもむしろエルフやフェアリーやドワーフや幽霊たちによって、超自然の要素が加えられた、魔法の護符、魔法の剣や鎧（よろい）、そういったものが人に知られるようになった。これらの要素は、なるほど古典叙事詩やルネサンス期の歌譚（シャンソン）のなかに置いてみると純粋ファンタジーの小道具らしくないけれど、中世後期のロマンスにおいてならこうした小道具はぴたりと当てはまる。そしてわたしたちは次章でロマンスを取りあげることにしたい。

原注

（1）次の実例が物語の趣きをいくばくか示してくれるだろう。これはアーサー・S・ウェイの翻訳による第七巻二九七行めから三一一行にかけての引用である。

心せよ、わが子よ、
トロイアあるいは近隣の浜より故国に向かう海路には、水の危難あり、
いわく転覆、長き波頭に乗る旅人は
太陽が射手座を去りおぼろな山羊座
と交わるとき、しばしば危難に出遭わんと。
荒らぶる風が険悪なる嵐を駆り、
あるいはオリオンが暮れゆく西方に傾き
大洋の河へとゆるやかに没するとき、
心せよ、等しき昼夜のときを。
大海の奈落(ならく)を覆う突風の――
風のみなもとを知るよすがすらなく――
戦のどよめきにも似て猛々(たけだけ)しく吹き荒れるとき
心せよ、プレイアド座の沈みゆくを
プレイアドの星々に満つる力のもと、大海の荒れ狂うとき――しかるに危難は
それにとどまらぬ。

　また他の星々、不運なる人間の恐怖、
　巨(おお)いなる海濤の上を、あるときは昇り、あるときは沈むかのごとく

（2）多くの作家がアキレウス史詩を書こうとした。ゲーテは一七九七年にそのひとつを完成している。

（3）たとえば、シリウス・イタリクス（二六―一〇一）の『カルタゴ戦役(プニカ)』がある。重苦しく読むに耐えない史詩で、第二次カルタゴ戦のさなかを扱っている。シリウスはウェルギリウスの記述を崇拝した（崇拝の度が過ぎて、ナポリにあるウェルギリウスの墓を買いとり、それを保管したほどだ）。かれはウェルギリウスの作品にどっぷりと浸ってはいたけれど、溺(おぼ)れてしまったりはしなかったらしい。『カルタゴ戦役』は、これまでに書かれたうちで最も退屈な作品だ――ちょうどドイツ人が『ホルトゥルス・アニマエ』を指して《自らをして読ましめぬ書(エス・レスト・ズイッヒ・ニヒト・レーゼン)》というように。そして、この作品そのものが興味津々たる主題と、異国情緒あふれる舞台――たとえば、フローベールがみずみずしいロマン『サランボー』でみごとに用いた絢爛(けんらん)たるアフリカの巨都カルタゴのような舞台――を用意しているにもかかわらず、前に述べた評価はまったく正当に当てはまるのだ。もっとも、『カルタゴ戦役』にもひとつだけ誇れるものがある。一万二千行におよぶその長さは、ラテン文学中最長の単独史詩である。

（4）しかし、同じ詩でも別の個所(かしょ)では貴族団の一員としてアンジュのジョフロワ、ネーム公爵、ランスのティボー、デンマーク人オジェ、ガスコーニュのアスラン伯爵、老リシャールとかれの甥(おい)アンリ、ミラン、イヴォン、イヴォワール、オットー、

そして姓名不詳のブルガンディ公爵といった——まったく別の十二人を挙げている。ローランの続編として書かれた多種の〝歌〟は、さらにボルドーのウォンやアンジュのティエリーなヴェラ・ド・モンダディエール、そしてブルガンディ人オーブリとスコットランド人ウィリアムを貴族の一団に含めている。

（5） たとえば『ウィリアム』史詩の冒頭にある『ギョームの歌』（一〇七〇—一〇八〇、あるいはそれよりやや後ごろ制作されたと思われる）など。『ウィリアムの歌』の英詩訳はエドワード・ノーブル・ストーン編で一九五一年に出版されたが、色彩と一種の活力を秘めたすばらしい詩編といえる。以下の例が、その味わいの幾ばくかを知らせてくれるだろう。場面は第百五十四章から抜いたが、そこではテドバルドが武装し、邪悪なパイニム王とともに出陣していくすがたが描かれている。

しかして人々、白き鎖かたびらに身を固め、緑なる兜をば頭にいただき、剣をたばさみ、輝かしき刃吊るしたり。
かの王、剛き盾を帯のまぎわにて鳴らし、馬手に鋭き槍を把り、地に向けて、白き陣旗をうち振りたり。
しかしてかの王の面前に、カスティルの駿馬引きいだされ、かの王あぶみの左より一息にうちまたがり、搦手より出陣せり。つづくは兜いただく一万の兵、アルカンプにデラーメ王をば索めて。

（6） 戦争や遠征のあいまに、かれは五度妻をめとる時間をみつけた（五人の妻はそれぞれヒルデガルド、ルイトガルド、デジデラタ、ファストラダ、およびヒミルト

ルードという。またアデリンダという愛人もいた)。こうした婚姻記録を見ると、かれが五人の息子と四人の娘の父になったことは驚くに値しない。

(7) このタイトルはポルトガル人民自身を意味している。元来は Os Lusíadas と書いて〝ルススの息子たち〟——つまり、ルシタニアン人、あるいはポルトガル人を意味していた。

15　中世ロマンスにおけるファンタジー

人々は多くのロマンスを新たに創った。
強く誠実な、勇気ある騎士の話、
ロランとオリヴィエの話、
そして、それ以外の有名な貴族たちすべての話を、
アレクサンダーとシャルルマーニュの、
アーサー王とガウェインの話を。
テュルパンやデンマーク人オジェに対して、
かれら騎士たちがどれほど礼節をつくしたかを。

ブラッドフォード・B・ブラウトン訳
『獅子(しし)心王リチャードのロマンス』

わたしたちは、ロマンスの言葉――すなわちラテン語を意味するローマの言語から発達した

フランス語やイタリア語やスペイン語など——から書きあげられた物語を、それゆえに〝ロマンス〟と呼んでいる。

ロマンスは中世を通じてきわめて人気のあった文学で、その無数の作品量に物をいわせて、もちろん芸術的な資質の面を見れば他時代の詩歌よりも偉大だとはいえないけれど——規模も影響もギリシア、ローマ型叙事詩文学をはるかに超える英雄物語を結果的に生みだした。(1)

すでに述べたとおり、〝武勲の歌〟（シャンソン・ド・ジェスト）は効果ある手法の一部を英雄物語から借り受け、それをロマンスに引き継いだ。そのなかには実在の人物を誇張した英雄や女主人公や悪漢が、超自然の強烈な要素や、人間の出来ごとに神の力が直接に加わっておこる折り折りの作用や、標準的なプロット・モチーフとしての遍歴と戦闘の二重テーマへの没入などと共に、すがたを現わしている。

しかしロマンスはまた、正式な叙事詩として残らなかったばかりか、まったく異質で真似することもできないような物語の素材を、異種同士の結合体に組みこんでしまった。これらの新しい特徴のひとつが、妖術師（ようじゅつし）または魔法使いの原型にある。魔法使いたちは叙事詩文学の範疇（はんちゅう）ではほとんど完全に知られざる存在であり、かれらを人気者に仕立てたロマンスが発展するまでは、その分野にまったくといっていいほど関わりを持たなかった。（俗にいう）魔法使いが、古典社会ではまだ錬金術師や占い師や占星家や夢占い師といった形にとどまっており、実際にはまだ発生していなかった事実は、あらためていうまでもなかろう。とにかくかれらは、典型的な叙事詩の創造になんの役割も果たさなかったのだ。

もうひとつの新しい要素は、魔法そのものの使用にある。ギリシアやローマの叙事詩には、魔法はほとんど顔を見せていない。そこでは、キマエラやヒュドラやカリブディスやスキュラといったふしぎな生きものや雑種たちが、時折り行なわれる口寄せ（あるいは反対にヘラクレスやオルフェウスのように英雄のほうから奈落へ下っていく場合もある）や、神々と不死の種族の出現や行動と並んで、超自然的要素のすべてを作りあげていた。魔法――言いかえれば魔女や妖術師の持つ力、魔法の武器に呪文や護符を応用すること――は、古典叙事詩の作者にはなじまなかった（当時それはかなりの部分まで宗教的な作品とされた。事実ホメロスはギリシア人にとって、かれらの宗教の〝旧約聖書〟とまでいわれた。シオドスは『労働と日々』ではなく『神統記』を通して一種の〝新約聖書〟(2) 的役割を果たし、またウェルギリウスは最終的に、今日わたしたちが「霊感を得た予言者的作家」と呼ぶ存在とみなされるに至った）。

ここでわたしが叙事詩のロマンスへの〝堕落〟と呼んだ現象が、筋立ての細部にまでも反映していたことを、理解していただけるだろう。結局、魔法は宗教の堕落したものであり、そのなかでは祈りが呪文に変わっている（ここでもし読者のなかに、以上述べたとおり魔法使いは本来叙事詩に登場する主人公ではなかったとする断定的ないいかたに対して『オデュセイア』に出てくる魔女キルケや、同じ叙事詩の〝奈落へ下る〟場面でオデュセウスが対話する魔道士ティレシアスの影などを採りあげて反論を挑む人がいれば、どうか次のことを思い出していただきたい。キルケは、魔女であろうとなかろうと、太陽神ヘリオスの娘で彼女自身も神であったこと。それから盲目の口寄せ師ティレシアスはアポロンの神託を予言する人物だったこと

を)。

ロマンスは折りに触れてトロイアの物語を借用したりするけれども、その筋立ては決まって、アーサー王伝説やシャルルマーニュと十二人の貴族などヨーロッパ伝承から材を得たか、またはアレクサンドロス大王の途方もない歴史(中世の作家にとってアレクサンドロスは奇跡を行なう騎士風な英雄であった)から話の種を借りているのだ。そのロマンスの頂点に、かつて著されたファンタジーのうちでもずば抜けて愉快な作品のひとつ『ガウラ国のアマディス』が存在している。古今を通じて最も影響を与えた本のひとつだ――実際のところ、影響が大きすぎて、あらゆる文芸がここから生まれたとさえいえるくらいだ。そしてその影響は、現代文学にすら見つけることができる。

『アマディス』の作者と成立年代、および原典に使用された言語――スペイン語かポルトガル語であることは確かだが――については、いまだに論争のさなかにある。伝えられている所を信じれば、作者は一三八五年に没したポルトガル公フェルディナンドの御代に活躍したヴァスコ・デ・ロベリアなるポルトガル人であるとされる。しかし昨今の研究者たちは、一二五八年から八五年のあいだポルトガル王宮に出入りしていたガリシア(スペイン北西部)人騎士ジョアオ・デ・ロベイラとする方向に傾きつつある。もっとも、一五〇〇年ごろまで散文のかたちで伝わったこの驚くべき作品のすさまじい迫力と豊かさについては、疑うべくもない。アリオストもモンテーニュも称讃(しょうさん)したが、セルバンテスは〝かつて書かれた類書中飛び抜けた作品〟とまで絶讃している。いっぽうイタリアの叙事詩作者トルクァト・タッソーは〝今読める類書のうち

でも、これは最も美しく、またおそらく最も有益な作品だろう〟と評している。

『アマディス』の世界はただすばらしいの一語に尽きる。驚くほど大胆でしかも精緻（せいち）な紋様を施した、きめ細やかで絢爛（けんらん）としたつづれ織り、とでもいうべきか。月影の蒼（あお）さを宿す大理石づくりの奇妙な王宮は、氷の彫刻もさながらに白く輝き、神秘な紫の闇に閉ざされた魔法の森の小暗い境界にそびえている。そしてそこは邪悪な魔術師や明日の生命も知れぬ荒らくれの盗賊どもが住むところだ。ビロードの牧場は絹の天幕をいだいてその輝きを高め、大気は金を被（かぶ）せた旗竿（はたざお）にきらめいている。そしてそこには、宝石を嵌（は）めこんだ黄金の王冠のただなかで光沢を放つ鋼鉄の甲冑（かっちゅう）がある。城をいただく丘の下には、深く危険な谷間が走り、はるか彼方（かなた）には竜が出没する山々の青い鋸（のこぎり）のような峰がそびえたつ。その遠い孤峰や、白い霧に包まれた海に浮かぶ地図にもない暗い小島には、醜い大男が住む。『アマディス』の物語は、色彩と細部に意を注いで気魄（きはく）と技術の粋（すい）を傾けた途方もない寄せ集め（ヴァラエティ）のひとつだ。騎士アマディスは、ガウラ国の王ペリオンと、ブルターニュのガリンターを父にもつ娘ユリゼナとのあいだに生まれたが、自分が王家の血筋につらなることも知らずに一人の孤独なスコットランド人騎士に育てられる。かれは英国王リスアルテの宮廷で武勇の誉れ高い英雄のひとりになるが、やがて美女オリアナと恋に落ちる。奇怪な力がかれの周囲を動きまわる。かれは善の力と悪の力——いっぽうはヴェールに姿を隠し、絶大な魔力を誇る神秘な方士「未知なるウルガンダ」が代表し、もういっぽうは狡猾（こうかつ）で真に天才的な悪役といえる魔術師アルケラウスが代表している——の争いの焦点に立つ。

『ガウラ国のアマディス』全四巻は、騎士の探索、危険な航海、恐るべき闘いと侵略、策謀と奸計(かんけい)などに満ちみちている。最後になってアマディスとオリアナは結ばれ、かれ自身は永らく会えなかった両親と再会する。そして物語はアルケラウスの死という劇的な終幕を迎える。

まったくよく出来あがった話だ。危険と魔法と謎とに満ちみち、これ以前には類似の作品も見当たらないほど新鮮で、しかもすでに公表されていたどんな物語よりも勝れていたから、その作品は途轍(とてつ)もなく有名になってしまった。一五〇八年に今日も残っているスペイン語版を出版したモンタルボは、熱気にまかせて五巻めの物語を書き、原典の四巻本にあった物語をそこでそっくり再話させた。この五巻めの本『エスプランディアン』は、アマディスの英雄的な息子の冒険を扱っている。また、原典に出てきた人物の変曲に過ぎないとはいえ、新しい登場人物も紹介している——たとえば魔法使いアルケラウスに代わってかれの母親アルコベーンが登場するが、彼女は〝オカルト諸学の秘技に深く通じた魔女〟である。こうしてモンタルボはさらに、アルケラウスの兄マトロエドを舞台に引きだす。

エスプランディアンはビザンチウムの王女レオノリナと恋に落ちるが、強力な敵が暗躍する——例を挙げれば、美しいけれど猛(たけ)だけしいアマゾン族の女王。彼女は王女に闘いを挑み、その闘いのさなかに、急降下爆撃機のように町のうえを翔(と)び、地に住む不幸わせな市民の頭に火と煙を吹く、訓練された五十ものグリフォン（ギリシャ神話に語られる神獣の一種）の大群を引き出す。

モンタルボは『エスプランディアン』を脱稿し、それを『アマディス』の一部として出版し終えもしないうちから、さらに荒唐無稽な続編を、果てしなく膨らんでゆくその原典に付け加

えた。アマディスの甥（おい）フロリザンドの冒険を扱った第六巻めの本も出た。こうして一五二六年には七巻め八巻めの本が出版される騒ぎとなったが、こちらのほうはファン・ディアスという人物の作とされている。この二冊は、ギリシアのリシュアルテ（エスプランディアンの息子で、しかもアマディスの孫に当たる）と相棒のペリオン（ディアスはこの人物を、アマディスとオリアナのあいだにできた晩年の第二子と設定している）とに関する物語だ。第九巻め『ギリシアのアマディス』は、それからわずか九年後に出版されたもので、原典の主人公アマディスの孫とバビロンの女王ニクウエアに対するかれの愛とを描いている。この二人のあいだにできた息子フロリゼルは、つづく第十巻の仇役（かたきやく）であるが、ちなみにこの第十巻はさらに家系の新しい子孫を紹介する。たとえばフロリゼルの妹でアマゾン族の血を受けた、喧嘩（けんか）好きで卑しいアラストラクサレがそうだ。加えて、強力な野女ジルフェアの手で燃える宮殿に閉じこめられてしまう皇子アナスタラクスと情熱的なロマンスを展開する、シルヴィア叔母もいる。そして最後には全員が結ばれ、フロリゼルは、この果てしない超物語の十一巻、十二巻めのヒロインとなる娘ダイアナをもうける――ダイアナは、原典のアマディスから見て「孫のまた孫」に当たるわけだ。

　第十一巻『コルコスのアゲシラン』では、主人公が失踪（しっそう）した恋人ダイアナをもとめて世界を訪ね歩く旅に出る。その旅の途中で、かれはガラマンテス国の盲（めし）いた不幸な老王に仕える。しかも王は、目が見えないために鼻先から食べものをかすめとっていく悪い竜をやりこめられない身をはかなんで、死の断食をしている最中だった。物語全体は『狂えるオルランド』（三十

三章、一〇二節）にある場面をそのまま盗用したものといえる。『狂えるオルランド』では、エチオピア王セナプスが同じような不運に心を痛め、またかれの毎日の食事は、アトルフォが来て救ってくれるまで、いつもハーピー(3)の群れに邪魔される。

このシリーズの最終巻ともいえる第十二巻は、ギリシアのアマディスとフィニステアなる女性とのあいだに生まれた息子シルヴィオ・デ・ラ・セルバを描いている。しかし物語は、ギリシアのローゲルとその子スフェラモンドの冒険を追っていく。それからアゲシランの息子でアストルのアマディスという人物が登場する、などなど。

一冊の本から出発して書棚半分を占めようかという超大作に発展した『ガウラ国のアマディス』は、長さにしてトールキン三部作完全版の三倍、筋の複雑さでは十倍にも匹敵するにちがいない。ところが物語はそれで終わったわけではなく、その証拠にオリジナル・ストーリイから生まれた上記の雪だるま式〝続巻〟に加えて、無数の単純な模造品が生まれている。ヨーロッパの出版社から、ロマンスはまるで雨後のたけのこのように続ぞくと生みだされるのだ。例を挙げれば『イングランドのパルメラン』『白いティランテ』『プラター』『プリマレオン』『森のパルテノペクス』『オリヴァン・ド・ロウラ』『ギリシアのベリアヌス』『ヒルカニアのフェリクスマルテ』などなど、枚挙にいとまがない。

新しい作家はこぞって、他人の作品を蹴ちらそうとして驚異に驚異を重ね、誇張をさらに押しすすめ、前年に出たロマンスよりもいっそう雑然として捉えがたい筋立てを生みだす始末だ

った。しまいにはお互いがお互いの筋を流用しあうようになり、その文芸運動全体がどうにも救いようのない混乱におちいるほど状況は悪化した。

これら続編や模作の大部分は、スペインかポルトガル、あるいはカタルーニア産のものである。当時の人々にはたいへん人気があったけれど、質的には高くない。語り口と想像力の豊かさなど、あらゆる点で『アマディス』がそれらを圧倒している。ミゲール・デ・セルバンテスのように厳格この上ないロマンスの批評家（かれは『ドン・キホーテ』のなかで愚にもつかない連作群全体を情容赦なく皮肉った）でさえも、『アマディス』を選んで褒めそやした。第一部第七章には、田舎の副牧師と床屋がドン・キホーテの図書室を荒らしまわって、不健全な本をみんな放りだしてしまう場面が出てくる。ラ・マンチャの才能ある紳士が集めた全書籍のなかで、火に投げこまれずにすんだのはたった三冊の本だ。『白いティランテ』はその〝風変わりな面白さ〟のために『イングランドのパルメラン』はその価値と、セルバンテスが著者をポルトガル王と勘ちがいしたために、そして三冊のうちイの一番に『アマディス』が選ばれる。床屋の口を通してセルバンテスは、『アマディス』を次のような言葉で称讃している、「これは今までに書かれた同趣向の物語のうちで最高のものだ」と。

ロベイラの傑作を模倣した作家たちが犯した過ちのひとつは、アマディスその人を抹殺できなかったことだ。かれはそれほど当時の読者に圧倒的な人気を博していた。その年老いた英雄が功成り名を遂げることを心優しく許してやる代わりに、かれらは、なるほどいつもアマディスを脇役に追いやったけれども、かれを活かしつづけた。かれはペルシアの国民叙事詩『シャ

ー・ナーマ』に出てくるザールとルスタムのように、力を失った世代のために活動しつづける。『シャー・ナーマ』では、ザールの息子ルスタムが成人してソホラーブの父になってからもずっと（ちなみにソホラーブはまた一子をもうけ、その子も成長して結婚し、息子を持つ。詩人フィルダウシはすでに退位した一族の開祖ザールを生かしつづけ、ザールは結局二百年もこの世にとどまることになる。ここには身につまされるものがある――作者は偉大な年老いた英雄を殺すに忍びなかったのだ――しかし、だからといってそれが佳作[4]を生む力になるわけではない）。

騎士道ロマンスのイベリア派が博した途方もない人気は、イタリアではほとんど互角の相手にめぐり会う。そこには、イベリアに比肩し得る英雄詩作者の一群が、同時代かやや後世に現われた。

初期イタリアのロマンス作家にあって最も重要な人物はルイジ・プルシ（一四三二―一四八四）であって、『モルガンテ・マギオレ』と呼ばれるバーレスク風の英雄詩を著している。この作品は当時の読者に人気があったけれど、幻想文学史にはこれといった足跡を残さなかった。それはむしろ、次につづくさらに偉大で真摯(しんし)なロマンス作家マテオ・マリア・ボイアルド伯爵の登場する道を切りひらいた点に功績を見いだせる。ボイアルド（あるいはボヤルド）はカロリンガ朝の血を引き、当時かれのパトロンだったエルコール・デステ公爵と語らい宮廷の慰みとして『オルランド・インナモラト』（恋するオルランド）というロマンスを書きあげた。かれはその筋立てを、テュルパン司教（あるいは歴史家の呼びかたにしたがえば〝準テュルパ

ン』の『法外無類な年代記』から得た。このロマンスはボイアルドの死により未完のまま残されたが、ルドヴィコ・アリオスト（一四七四―一五三三）が偉大なロマン詩『狂えるオルランド』を書いたとき、物語はかれに拾いあげられた。アマディスの原典四冊と同じように、わたしたちは偉大な『狂えるオルランド』を論じることで真の傑作を取り上げることになる。ただ残念なことに、詩編そのものは数次にわたって英訳されたにもかかわらず、現在は抄訳本が手にはいるだけだ。

シャルルマーニュの黄金時代に対するアリオストの受けとりかたは、『ロランの歌』の場合と遠く呼応している。十二貴族のあいだに新しい顔が輝き、新しい個性が筋を複雑にする。シナ帝国の娘アンジェリカはオルランドの愛を克ち得るが、やがてかれを追いやり狂気におとしてしまう。アストルフォは魔法使いアタランテスに借りたヒポグリフにまたがり、オルランドの正気を取りもどすために月へ飛翔していく。女性剣士プラダマンテと小人の魔法使いマラギ、タタール人マンドロカルド、そしてその他の英雄、また新鮮な興奮と目をみはるような光景――たとえばアフリカにあるプレスター・ジョンの王国へアストルフォが訪れ、そこにナイル川の源を見、王宮の芝を食む飼い慣らされた一角獣の群れを観察する類の光景――で物語を満たしこんだ。スペンサーもヴォルテールも、そしてゲーテも、アリオストの豊かな想像力とその色彩や演劇のセンスに、すっかり魅了されてしまった。

ロマンスの分野全体はきわめて急速に没落する運命にあった。その理由の一部は、どのロマンス作家も同僚を凌駕するために一層荒らびた手法を考えなければいけなかった点にあり、さ

らに、一国家の伝承集成が一文化圏から他の文化圏に急激に移植され、そこで強引に、不自然に、土着伝承に接ぎ木されたことも理由の一部になった。

たとえば、この衰弱現象はイタリア派がアーサー王物語風なロマンスを書きだしたときに起こった。アーサー王物語はそれ自体ある種の連合体であり、ケルトやウェールズや英仏の伝承から種々の要素を吸収して成長した雑種といえる。この素材に目をつけた派手好みのイタリア人が、ほかの伝説をそこにからめとり、マーリンとシャルルマーニュとアマディスを同じ物語に混ぜあわせ、真に異質な筋立て[5]を融合剤として注入したとき、驚くべき異色作が幾つか生みだされた。その驚嘆すべき文学上の前菜(スマーガスボード)（スカンジナヴィア式の前菜で、使用する材料の種類が多い）が生んだ実例に、『ペルセフォレスト』という奇妙な作品がある。これは、アレクサンドロス大王の伝説的な功績に聖杯探索とプレスター・ジョン伝承をつなぎあわせた、厖大(ぼうだい)で不恰好(ぶかっこう)な散文譚(たん)である。幸いなことに（と、わたしは思うのだが）『ペルセフォレスト』が現代英語に移された記録はない。

アリオストの偉大な詩そのものにしても、それが天才的想像力の産物であるかどうかは別にして、どこか奇妙な混合物であることを否めない。タイトルからしてホメロスの『アキレウスの怒り』を連想させる。また登場人物も一部はシャルルマーニュのフランスから、あるいはアーサー王の英国から、そして別の一部を故国イタリアの民間伝承から得ている。しかも登場人物たちはタタールからアフリカへ、支那から月へ[6]——もちろん月からの帰還もふくめて——まるでミュンヒハウゼン男爵の先駆ともいうかたちで、お互いを追いかけまわしながら狂ったように世界を駆ける。力強いけれど少しばかり風変わりなこの詩編は、エリザベス女王の廷臣で

あり教え子でもあったジョン・ハリントン卿（一五六〇―一六一二）の手で英詩に翻訳された。その翻訳がアリオストの死後五十八年後に早くも出版されていることは、作品の人気を知るうえで絶好の目安になる。ハリントンによる英詩への翻訳は、たとえばベン・ジョンスンがある友人に「ジョン・ハリントンの『アリオスト』は翻訳のなかで最悪の出来だ」と評したように、しばしば問題を喚起してきた。

このときまでには、ロマンス文学全体はすでに救いようのない混乱に落ちこみ（溺れ死んだとまではいわないが）、やがてエドマンド・スペンサーによる最後の一撃を待つばかりとなった。アリオストは当時イタリア詩に広く用いられていた伝統的な八行詩を用いたが、これは場面の急速な転回を助け、動きの多い物語の要求にはみごとに合致しており、挿話にも自然な限定を与えた。この性格に加えて、アリオストの皮肉で冷やかな恋愛の描きかたと、かれ独特のウィットと活気ある話術の才が、のちに続くスペンサーを真似た複雑な物語よりも、作品をはるかに親しみやすくしているようだ。一五二二年から九九年まで生きたというスペンサーは、アリオストのイタリア産異常物語のスタイル、形態、素材のほとんどすべてを借り受け、イタリア人の登場人物などすべてをアーサー王の英国に植え直した。そしてこのころロマンスの全系譜はその生命を失っていた。このすぐ後に生まれるセルバンテスのみごとな諷刺文学[7]による〝とどめの一撃〟も、現実的にはほとんど必要がなかったわけだ。

タッソーやアリオストほか数人の詩人は、しかし文学史上に永遠の足跡を残した。この騎士道神話には近接の美学も影響を受けた。絵画の分野では、十七世紀フランスの画家プッサンが

『リナルドとアルミダ』（一六三五）など油彩水彩の連作を仕上げた。これはレニングラードのエルミタージュ博物館やモスクワのプーシキン博物館やルーヴルなどに保存されている。またアルコナティなどのオペラ作者は華麗な歌劇『オルランド』を書いたが、かれらイタリア人の趣味によく合う華やかなブラヴューラ楽劇のような出し物のための豊かな素材を、このイタリア産ロマンスのなかに見いだしたのは当然だった。影響はまだ消えてはいない。オディロン・ルドン（一八四〇—一九一六）のような現代画家までが、現在ニューヨーク近代美術館に保存されている『ロジェとアンジェリカ』のような有名なパステル画のインスピレーションを、イタリア・ロマンスから得たのだ。

原注

（1）　これはわたしの想像だが、人々は散文の叙事詩（ロマンス）を、正統的な韻を踏む書きかたよりはるかに御しやすいことを理由に、書くようになったのではないだろうか。もともと定型をもつ韻文は労力を要する仕事であり、成功するにはかなりの才能を必要とする。ちょうどアレクサンダー・ポープがいみじくも「詩は散文にうつろってゆく」と表現したように。

（2）古代ギリシアの宗教は驚くほど文明化しており、また極端にソフィストケートされ、しかも寛容にできていた。聖書などもなかったし（これはユダヤ教やキリスト教などオリエント地方の宗教に共通の特徴なのだが）、啓示された教条もはっきりした道を示さず、語るべきほどの聖職階層的な教会構造もなかった。オリンピア神話は、おおむね詩人や戯曲家のための霊感の源として機能し、国家と国体を保持するための少しばかり超自然的な権威付けを得るのにも利用された。ギリシアでは、キリスト教ヨーロッパの〝文明〟人と違って、異端の罪で火刑に処される者などひとりもいなかった。同郷人のために犠牲となったソクラテスは、かれの宗教的な正統説離れよりもむしろ、頽廃的なモラルを若者に吹きこんだことで罰を受けたのだ。

（3）事実から見ると、アリオスト自身はその部分のアイディアすべてを、ロードス島のアポロニオスが著した『アルゴ船団』に出てくるフィネウスとハーピーたちの物語から得た。結局、良いアイディアはどこまでも良いアイディアなのであって――当時にあってもその話はすでに完全に近い伝説として成立しており、再話や再利用や繰り返しのためにまちがいなく使える状態にあった。ある作者の技倆や個性が明確になるのは、口誦文学の場合によく似て、まさに物語ることにあったのだ。

（4）『アマディス』の続編が作品的に数段落ちるとする見方は、一般に承認されている。『アマディス』の散文決定訳を完成させた英国詩人ロバート・サウジーは、原典にあまりに不器用に結びついた続編群を英訳することを、賢明にもいっさい避けた。かれはむしろはっきりと指摘している――およそ文学の世界である作品が全然別の人物に引き継がれ続編としても成功した例は、ボイアルドの『恋するオルラン

ド』以外に見当たらない、と。

(5) たとえば『アラビアン・ナイト』の精霊(ジニー)や妖精(ペリ)、また遠い時代の伝説の反映など。オルランドの剣はもとトロイアのヘクトールが所有していた。ボイアルドは伝記の小道具のひとつに、聖書の英雄サムソンが着けていた鎧(よろい)グラドソを加えている。以上は一例に過ぎない。

(6) 〝失われたものの土地〟の一種として描かれる。そこでは地球で棄て去られたものがすべて保存されている。そこへ騎士アストルフォがロランの正気を見つけに、魔術師アタランテスの飼っていたヒポグリフを駆ってやって来る。英雄は〝正気を失って〟いるのだから、それが月にあるはずだと推測したアストルフォは、賢明であり、また事実その通りだった。

(7) 『ドン・キホーテ』の第一部は一六〇五年に出版され、残りは一六一五年に出版された。

16 ファンタジーを創った人々

ああ！　幸と不幸の織りなす異常なる生涯
わが若き素足が灰色なる静けき最愛の家を出でよりこの方、過ごせし生涯
だが今はまこと、重荷をばうち棄てん。
うたかたと消えし野望の記憶を
胸を貫く悲しみが齎せし至上の歓喜を。
忘れがたしとは言え、過去は過去、
いまだ果てなき生涯の展けたりき彼の日。
ああ！　しかるに今このとき、われ
頁を繰らんとするとき

ウィリアム・モリス『イヤソンの生涯』第十七巻

英雄あるいは歴史ファンタジーのあらゆる要素は、こうして創られ実際に作品に用いられた。魔法が効果をあらわし〝神や亡霊やゴルゴン〟が住む想像の世界あるいは土地の概念も――放浪する冒険者や遍歴の英雄および対立する勢力の闘争という二つ一組(ひとくみ)のテーマも――叙事詩の絢爛(けんらん)さと大舞台すべてを備えた幻想文学の実作すらも。あとはこれらすべての要素を叙事詩やサーガやロマンスから引き出し、それを現代小説として再紹介する少数の作家を俟(ま)つばかりだ。

先駆者

ウィリアム・モリスは、この人がいなければ世界はもっと貧しく退屈なところになっていたろうと考えられる、何人かの奇態なイギリス人のひとりだった。かれは一八三四年に生まれた。ヴィクトリア女王が王位につく三年前である。夢想家であり同時に実践家でもある、洗練された美感覚をもつ感性豊かな英国紳士は、また政治改革家でもあり、勤勉で現実的な精神をもつ企業家でもあった。かれは、産業革命が人の生活を変えはじめた難しい時代に生きた。モリスが目を向けるところには、どこにも煙を吐きだす醜い工場やうす汚ないスラムの町並があった。イギリスの緑の原と風変わりな古い町が、進歩の名のもとに汚され破壊された。

かれの時代に魔法が完全に失われたために、モリスは中世のノスタルジアを愛(お)しんで過去を振り返った。かれは中世を、自然のままの郊外と華やかな町に満ち、高貴な王族と屈強の樵(きこり)と寛大な婦人と賢明な王たちの生きた牧歌風なユートピアとして捉(とら)えた。換言すれば、かれは中

世をおよそ現実のそれとはかけ離れたものとして見たのだ。事実、その時代は迷信と無智と、貧困と疫病と、果てしない戦乱と残忍な迫害の時代だった——人間の権利や尊厳になぞ心を向けない時代だった。ところがモリスにとっては、薔薇（ばら）と黄金の世界に見えたのだ。だからかれは中世を回復しようとした。いや、すくなくとも価値のあったものをそこからたくさん掬（すく）いあげようとした。

かれは社会主義の先駆者、俗にいう社会改革運動家となった。労働者が工場所有者の奴隷と化していることを告発した。かれは伝統的な工芸の復活を夢見た。ダンテ・ガブリエル・ロセッティや著名なラファエル前派の画家でモリスの古い学友だったエドワード・バーンジョーンズ卿（きょう）など親しい芸術家たちと語らい、建築、彫刻、彫金から始まってステンドグラス窓の設計、壁掛け、家具、壁紙に至るあらゆる分野に手を染めた。挿絵やデザイン、さらには自分の本の印刷まで実行した。

しかしモリスの変人ぶりは天才と紙一重のところにあった。その証拠に、かれが手がけた分野でしばしば卓越した才能を発揮した。たとえば印刷家としては、十九世紀に造られた手造り本の最高峰のひとつと評価される「ケルムスコット・チョーサー」を生みだした。また詩人としては二十四歳のときに、現在ヴィクトリア詩の宝と認められている『グゥイネヴィアの弁護』を書いた。翻訳家としては『ヴェルスンガ詩譚（サーガ）』『ガンラウグ詩譚』『グリッテルの詩譚』また創作叙事詩『ウルフィング族のシグルド』[1]などを通じて、英国の全世代にアイスランド産サーガのすばらしさを紹介した。

詩作を除いても、モリスはまた小説家であった。かれがこの研究に取りあつかわれるのも、この方面においてである。なぜなら、中世の光輝あふれる幻景に目を向けながら、モリスは古いロマンスや聖杯探究を発見し、それらをみずからの中世を舞台にした小説のスタイルと素材に利用したからだ。この手法には、とくべつ珍しいところはなかった。ウィリアム・モリスが生まれる二年前に死んだウォルター・スコット卿は、『アイヴァンホー』や『ケニルワース』や『護符』のような小説を通じて、歴史ロマンスに恒久的な人気を克ち得させる手助けをした。これらの本は中世――それもエリザベス女王時代の英国か十字軍の時代――に舞台を設定していた。しかしモリスがスコットと袂を分かつ点は、かれの中世ロマンスに歴史的な中世を舞台として与えるのではなく、想像の中世を舞台として与えたことだ。ウィリアム・モリスの小説は、アマディスやティランテやパルメランなどのロマンスがしばしば地図にない領域に迷いこんだように、かれ自身の作りだした世界で展開する。これは決定的な改革だった。なぜなら、かれの小説はスコット流の好古趣味的なロマンチシズムの多くと、また時にはホレス・ウォルポールやゴシック作家の不気味な恐怖感までも結合させている一方、根本的に歴史小説でも超自然小説でもない小説であろうとしたからだ――かれは英雄幻想譚を創造したのだ。

かれの散文スタイルは、基本的に他の小説家たちとは異っていた。簡潔で活力にあふれ、新鮮さと美の要素――古いロマンスや聖杯探究から直接範をもとめた騎士道と光輝の意気高い英雄時代の春風みたいな香わしさ――を備えていた。トマス・マロリー卿の作品に見うけられるおぼろな魅惑と奇妙な神秘感をそのまま漂わせているのも、モリスの小説である。かれは英国

の散文小説の系譜に属してはいないが、かれ自身の系譜を創りだした。かれの作品は、奇妙で不気味で危険に満ちた、魔法と英雄的行為の世界に設定される。そこはときに田園の趣きをたたえ、ときに小暗い恐怖を漂わせ、しかしいつも知識を超えた新鮮で独自な、どんな地図にも出ていないおぼろなロマンチックな土地と、どんな歴史にも語られていない時代とに属する時間や空間の彼方の世界である。

モリスが中世散文を模倣したといっても、それはけっして凝りすぎたわけではない。簡潔で質素で、一種耳に谺（こだま）するような抒情味（じょじょうみ）ある旋律は、『この世の果ての泉』の第一章から引いた例を見ても分かるとおり、きわめて読みやすい。

今やついに、この若者たちにとって父の建てた王国が息苦しく思われるようになった。かれらは他の人びとの生きかた、生きる苦労というものを知りたいと願った。なぜなら、かれらは王の息子らであったけれど、世界の富をほとんど手にしていなかったからだ。かれらが持つものと言えば、わずかに美味な食事と飲みもの、それもけっして少なからざる量だけ。それから最上級の部屋、歓（よろこ）びを分かちあう友、くちづけを交しあう娘たち、そしてこれ以上はない優しい人々、いつでも好きにふるまえる自由、頭上には天国、そして足もとには下から支えてくれる大地、牧草地に畑、森に清らかな流れに、アプミーヅの小さな丘だけだ。ただアプミーヅとは、この土地と王国の名ではあったが。

モリスがなしとげたことは、古い時代の物語を当時のスタイルと慣習にしたがわせることで、スコットをはじめ歴史小説家を超えることだったのだ。『ウルフィングの家』（一八八九）、『世界のかなたの森』（一八九五）、『この世の果ての泉』（一八九六）、『極楽島の水』（一八九七）、のような小説のなかで、かれは、驚異の街や奇妙な獣にあふれ、強大な魔法使いや勇敢な無法者が住み、長く危険な探索や奇妙な冒険におもむく勇気と忠節をもちあわせた若い修業騎士のいる、広大でしかもふしぎな世界像を創りだした。なぜなら、はるかに遠い時代の言葉や語り口を借り受けることで、ウィリアム・モリスはまたそんな時代の超自然観や魔法をも借り受けたからだ。そしてそうすることを通じて、かれはファンタジーの基礎を築いた。

ホメロス時代の詩人が自作のなかの神や怪物を信じていたことを、どうか忘れないでほしい。古典叙事詩を現代の読者がファンタジーとして読むことに口を挟みはしないが、しかしそれを書いた人々は、けっして意識的にファンタジーを書こうとしたわけではなかった。これは〝武勲の歌〟（シャンソン・ド・ジェスト）の作者や中世ロマンス作者の場合にも、ずっと小規模ながら当てはまる。かれらはおそらく魔法の剣や人喰い鬼や空飛ぶグリフォンを頭から信じていたわけではないのだろうが、しかし意識的に幻想物語を書きはしなかった。けっきょく『ガウラ国のアマディス』の作者は竜を見たこともなければプレスター・ジョンの国に出掛けたわけでもなかったけれど、やはりその時代の意識を脱せない人間だった。すなわち、たとえかれらの時代に巨人や火竜がいなくとも、そうした物語の舞台となった古い時代にやはりそうした生きものが存在しなかった証拠にはならない、と考えていたのだ。しかしモリスは教養ある英国人だった。かれは意識的に中

世ロマンスを仕立てあげた。竜が生物学的に存在不可能な生物であることを承知していたが、物語のなかには平気で登場させた。竜は英雄ファンタジーにふさわしいのだ。

モリスの小説は厖大であり、ときには二巻にも及ぶことがある。『この世の果ての泉』は内輪に見積もっても全部で三十万語近くはあるにちがいない。目的といい概念といい叙事詩そのものであって、しかも色彩豊かで厳かに書きつづられたモリスの物語は、トールキン三部作と明白な類縁関係をもつ英雄的冒険と偉大な行為を語っている。

貴族作家

ウィリアム・モリスが一八九六年に没したとき、かれの文学を直接に受け継ぐことになる若いアイルランド貴族エドワード・ジョン・モアトン・ドラックス・プランケット卿は、まだ十八歳の青年だった。かれは英国圏で最古を誇る男爵家のひとつに生まれ、ノルマン侵寇にまでさかのぼる家系の嫡子となった。かれの家系の第十八代男爵ロード・ダンセイニとして、かれは小説、戯曲、自伝、評論、詩、短編集、ホレスの頌詩翻訳など無数の作品を発表して著名な作家となった。

ロード・ダンセイニはいかにもアングロ・アイリッシュの貴族にふさわしい性格の持ち主で、熱心なスポーツマンであり著名な芸術家でもあった。背が高く（六フィートを三、四インチ超える）、背筋をまっすぐに伸ばした軍人らしい姿勢を保ち、イートンとサンダーストを卒業し

た。そのあとブーア戦争と第一次大戦にあたっては、コールドストリーム近衛連隊の将校として参戦した。かれは生涯の一時期をアイルランドのミーズ郡にあるロマンチックな十二世紀のノルマン城で暮らし、別の一時期をイングランドはケントの古い荘園に暮らした――そうでないときは、アフリカへ狩猟に出掛けたり世界中を旅して回った。残した著作は全部で六十余冊にのぼる。

英雄幻想譚の可能性を充分に開花させた最初の作家がウィリアム・モリスだとすれば、ロード・ダンセイニは第二ばんめの作家である。かれは長編というかたちでは僅かな作品しか残しておらず、そのうち最大の傑作は『エルフランドの王女』(一九二四)である。が、かれの作品で重要なものはほとんど短編小説畑で著した英雄幻想譚に限られる。短編ファンタジーを集めた処女集は『ペガーナの神々』で、一九〇五年に出版されたが、すぐあとに『驚異の書』『夢想家の話』『時と神々』『三半球からの物語』などの短編集がつづいた。現代幻想文学を深く知ろうと考える読者は、これらの作品を見のがすわけにはいかない。ダンセイニは生まれついてのストーリイ・テラーであるばかりでなく、読んで愉しいみごとな散文スタイルをも駆使する巨匠である。

かれ最高のファンタジーには「サクノス以外には破るあたわぬ堅砦」「ヴェレランの剣」「われはいかにして、予言に語られたごとくあり得べからざる市へ至ったか」「宝石盗人タンゴブリンドの平穏ならざる物語」のようなタイトルが付されている。この精妙な小話群は、〝この世の縁〟にある途方もない土地や、すくなくとも〝われわれの知る原を越えた〟土地を舞台と

し、アイスランド英雄譚（サーガ）や中世ロマンスから素材を得、また部分的にはヘロドトスの驚異物語や聖書に霊感を得てもいる。

たとえば「サクノス以外には破るあたわぬ堅砦」において、若い英雄レオスリックは一匹の竜を殺して、その死体からサクノスという剣を抜き取る。この剣があれば（と、主人公はアラスリオンの魔法使いに教えられる）名高い妖術師（ようじゅつし）の砦（とりで）を圧倒し攻め落とすことができるのだ。「カルカッソネ」においては、勇敢な征服王アルンのカモラクが、ある吟遊詩人から遠い彼方（かなた）にある豪華な都の歌を聞いて、ある夜全軍を集めると、その都をみつけ手に入れるために進軍を開始する。「ヴェレランの剣」では、はるか昔に死んだメリムナの英雄たち――〝ヴェレラン、スーレナード、モムモレク、ロロリイ、アカナクス、そして若いイライネ〟が、シレジア山脈の彼方からやって来た蛮族に立ち向かい、輝かしい最愛の都を護りとおす物語が語られる。また「ギベリンの宝蔵」には、騎士アルデリクが手なずけた竜にまたがって〝通り抜けられぬ森〟に踏みこみ、世界の縁に至ろうとする奮戦ぶりが描かれる。そこには信じられぬような宝物が奇妙な護衛の手で護られている。しかしまず、ダンセイニ散文の味わいを紹介させてほしい。

ギベリン族は、周知のように、なによりも人間を好物としている。その邪悪な塔はこの世界（テラ・コグニタ）に、つまり我々の知っている土地に一本の架け橋でつながれている。その財宝はまったく無尽蔵で、どんなに貪欲（どんよく）でも歯が立たないほどである。一つの穴倉にはエメラル

ドが、別の穴倉にはサファイアがしまわれている。さらに、黄金を穴の中いっぱいに満たしておき、必要なときに掘り返すのである。（佐藤正明訳）

あるいは「人馬の花嫁（ケンタウロス）」から、こんな一節を引こう。

彼はまた、あの名高い銀の角笛、ケンタウロスのクラリオンを手にしていた。それはかつて人間の都市を十七も攻め落とした際に一族の士気を鼓舞し、またケンタウロス族があの伝説的な戦いを開始し、神々の砦トルデンブラーナを攻撃した二十年ものあいだにわたって、星を散りばめた夜の壁にリンと鳴り響いたものだった。その戦いで、彼らの武勇はゆめゆめ神々に劣るものではなかったが、神々が追いつめられて最後の武器庫から持ち出したあの究極的な奇跡を前にしては所詮（しょせん）抗（あらが）うすべもなく、まき上る塵（ちり）の中を余儀なく退却したものだった。（山田修訳）

今日指導的役割を果たしているファンタジー作家で批評家でもあるL・スプレイグ・デ・キャンプは、おそらくロード・ダンセイニこそ今世紀前半にあって最大の影響を後進のファンタジー作家に及ぼした人物だろう、と書いている。ダンセイニの衝撃に対する当を得た評価だと思う。なぜならかれは、モリスよりもはるかに勝（すぐ）れた〝作家のための作家〟だったからだ。ダンセイニの作品は広く出版され、また再版も出され、かれの戯曲にはダブリンのアベイ座で上

演されニューヨークに輸出されたものさえあったけれど、広汎にわたる読者を獲得することはなかったし、ベストセラーに類似した作品を書いたりもしなかった。かれの朗々とした水晶のような散文体は、長く珍奇で魔術めき、記憶をくすぐるような固有名詞を散りばめ、ときには筋立てを覆い隠してしまうほど凝ったスタイルで語られるが――こうした特質は広い読者層に訴える機会を摘み取ったともいえよう。

しかし次の一、二世代に与えたかれの影響はすさまじかった。アメリカ作家H・P・ラヴクラフトは、「夢の国セレファイス」「サルナスに訪れし運命」など数多くの短編を通じて盛んにダンセイニを模倣し、作家としてかれに深く傾注しはじめた。この時期の総括として、ラヴクラフトはダンセイニ風の長編ファンタジー『未知なるカダスを索めて』を完成した。クラーク・アシュトン・スミスやロバート・E・ハワード(〝キンメリア人コナン〟や〝カル王〟の創造者)、そしてジャック・ヴァンスなど他のファンタジー作家も、ダンセイニの強い影響の跡をその作品にはっきりと表わしている。

ロマンス作家

ウィリアム・モリスが没した年、ロード・ダンセイニがまだ十八歳の若者だった年に、モリスとダンセイニの系譜に結果として連らなることになるもう一人の作家が生きていた。エリック・リュッカー・エディスンは当時十四歳の少年であった。一八八二年、ヨークシャーはアデ

ルに生をうけたかれは、イギリス通産省の官吏として世に出た。一九三〇年から三七年にかけて、貿易部の副監査官を務めたが、E・R・エディスンはウィリアム・モリスが十九世紀を愛さなかったように、二十世紀に愛着を感じていなかった。かれの愛着は偉大な北欧神話や英雄譚にあり、一九三七年に五十五歳で退官したあとは、残りすくない余生――十年にも満たなかった――を、英語で書かれた最も注目すべき散文ロマンスを数編創りだすために費やした。

かれの処女作『邪竜ウロボロス』は一九二二年に出版された。そこには、スカンジナヴィア神話に対するかれの愛と英雄譚（サーガ）の影響、そしておそらくはウィリアム・モリスの影響さえ見てとれる。エディスンの想像力が生んだ力強く色彩華やかな世界に展開する、英雄的冒険のみごとな大長編だ。舞台は、あの水星をぼんやりと示す世界だが、わたしたちはそれを真面目に取りあげすぎてはいけない。

遍歴と戦争の二重テーマをもつ筋立ては、トールキンのそれにきわめて近い。物語はデーモンランドの王族とウィッチランドのゴライス十二世とのあいだに起きた大戦を描いている。「ニューヨーク・タイムズ」の書評家オーヴィル・プレスコットは次のように述べて、この本の主だった欠陥を指摘している。

これが想像的世界に展開するロマンチックな叙事詩ということだったので、エディスンは物語の本筋にはいる前に舞台を設定し、種々説明を加える必要を感じた。しかしかれの方法はこの点で不器用に過ぎた。英国紳士を魔法の夢のなかで惑星たる水星に送りこみ、

そこで出来ごとを観察させるというのだ。これはいかにも造りものじみて自然さに欠ける。だがエディスンは冒頭の二十ページ以降この地球生まれの観察者のことをすっかり忘れてしまうから、先を読まれる読者はこの余分な存在にわずらわされることもないだろう。

不気味にして偉大なるゴライス王に敵対する主だった人物は、デーモンランドの王族三兄弟である。名をそれぞれジャス、ゴルドリィ・ブルスコそしてスピットファイアという。またかれらの手に負えぬいとこに、ブランドホ・ダハ卿がいる。力ある妖術師ゴライスはかれの邪悪な魔術を使って、ゴルドリィ・ブルスコを拉致する命令を発し、かれを巨大な山コシュトラ・ピヴラルカに幽閉してしまう。かれの血縁者たちは王を救出するための探索に出発する。いっぽうウィッチランド軍は王族のいなくなった敵国にすさまじい攻撃をかける。

おぞましい怪物マンティコアを相手にした目をみはる戦闘場面をもって完璧の出来を示す、このみごとな展開において、英雄たちはコシュトラ・ピヴラルカの輝く峰に登り、〝神々の養い子〟たる女王ソフォニスバの助けを得ようとする。彼女は何百年もコシュトラ・ベロルンに住み、けっして歳をとらないのだ。彼女はジャス卿に、ただヒポグリフの背にまたがることだけが幽閉された兄を救う道だと告げる。こうして英雄たちは救出を試みる。だがそれも空しく、王を救えぬままデーモンランドに帰ることになるが、そこにはヒポグリフの卵がひとつ存在し、とある湖の底に沈んでいることを知らされる。

こうした冒険のあいだ、ゴライス王に仕える冷血漢コリニウスは、火と剣によって敵の領土

を荒らしまわっていた。王族の妹メヴリアンは、陰気で憂鬱でしかも謀叛の心を抱くグロ卿の手助けを得て、ゴライスに仕える非情な将軍の魔手から辛うじて遁れる。デーモンの王族は帰り、ウィッチランド軍をその要塞から追い払い、ついにゴルドリィ・ブルスコの救出にも成功する。やがてデーモンランドの支配者たちはゴライスに宣戦し、敵の首府カルセを包囲してしまう。結果として、エディスンが嵐のように烈しい朗々とした散文力をここぞとばかりに傾注した稀れにみる躍動的な戦闘場面のなかで、かれらはウィッチランドの王を破り、輝かしい勝利を手中にする。

しかし勝利は空しかった。デーモンランドの将軍たちは今、英雄的な逞しさと戦闘力を傾けるにふさわしい捌け口を失った。したがって結末では、偉大な神々が英雄たちに途方もない奇跡を与える。時間が逆もどりし、タイトルになった――終わりも始まりもない環の象徴、自分の尾を嚙む竜ウロボロスのように――物語がふたたび始まるのだ。

エディスンの高貴でロマンチックな叙事詩を語るページは、朗々たる会話、描写と詩文のみごとな文章、戦闘と冒険の光輝あふれる場面に満ちみちている。それに登場する人物は真にホメロス的であり、実際の人間よりもはるかに規模が大きい。オーヴィル・プレスコットが指摘するように、「これらのページには、勇気と高貴さと忠誠がほとんど当然のものとして描かれている。女たちは美しく、男たちの庇護を当然のように享受する。そして栄光は、それに生命を賭けるだけの価値をもっている」。悪役たちすら、かれらの悪役ぶりにおいて偉大なのだ。

『邪竜』は、学問的な付録や年代記に足を取られたとはいえ、四六二ページの長編としては相

当な成功を収めた。英国版が出たあと、一九二六年にはニューヨークで米国版が出版され、一九五二年にハードカバーの再版が出て、一九六七年にはバランタイン社によるペーパーバック版として復活した。

エディスンは次にジミアムヴィア三部作の執筆にとりかかった。『女主人のなかの女主人』（一九三五）、『メミゾンの魚料理』（一九四一）、『メゼンティアの門』（一九五八）から成る三部作である。『メゼンティアの門』は一九四五年にエディスンが没したため未完で終わったが、すでに書きあがっていた部分に草稿やかなり広範囲な覚え書きを加えて一巻に編集され、かれの死後十三年めに、現在のタイトルを付して公刊された。

ジミアムヴィア三部作は力作『邪竜』に比べると成功しなかった、いやすくなくとも『邪竜』ほどおもしろい読みものではなかった。『邪竜』は本質的な情念に直接訴えかけ、畳みかけるような力を持っていた。光輝に満ち心を揺する冒険そのものを描いていたからだ。ところがジミアムヴィア三部作は二重のテーマを含んでいる。もちろんこの作品も冒険を描いてはいるが、同時に複雑で観念的な哲学をシンボリックに顕示させることに拘泥しすぎていた。『邪竜』は、闘いと英雄的行為にかかわる疾風怒濤（しっぷうどとう）の色彩豊かな物語だ。いっぽう三部作は陰謀と陰謀が火花を散らす政治の権謀術数を描く。『邪竜』がホメロス的であるのに対して、三部作はマキァベリ的であり、大多数の読者はマキァベリよりもホメロスを好んで読む。

三部作の主人公は女神アフロディテで、多かれ少なかれ同時に現われる何人かの化身として姿を現わす。最初は野望に燃えるバルガナクス公爵の美人フィオリンダとして、次は女王アン

ティオペとして、それからメミゾンの公爵夫人、バルガナクスの母親、さらに『邪竜』の冒頭でわずかに姿を現わす冒険者レッシンガムの、はるか昔に死んだ妻として。もうひとり三部作の主人公と考え得るのはメゼンティアス王だが、かれは第一作で主役を演じたあと、残り二冊[2]では舞台を退いたかすでに死んだかして顔を出さなくなる。ただし後にこの王が主神ゼウスの化身だったことが分かる。

こうした欠陥にもかかわらず、ジミアムヴィア三部作は称讃者（しょうさんしゃ）を得ている。そこには数多くの長所があり、すばらしいファンタジーの要素もいくつかある。魔術師ヴンダーマスト博士のおぼろな人物像は美しい幻想的な効果を表わしており、また三部作の展開はみごとな独創的概念を提示してくれる。たとえば、舞台となるジミアムヴィアの土地は、デーモンランドの三王が『邪竜』のなかでコシュトラ・ピヴラルカの峰に登ったとき、遠くかすかに窺（うかが）えた土地だ。かれらはその場面でジミアムヴィアについて手短かに語りあうが、そこでは水星のウィッチやデーモンたちにとって、ジミアムヴィアが魅惑的な楽園にも似た土地らしく設定されている。

三部作に接した読者は、ジミアムヴィアが『邪竜』の世界にあってたしかに天国あるいはヴァルハラ（北欧神話に語られる英雄たちの楽土・原語発音ではワルハラ）であることを発見するわけだが、奇妙なことにエディスンは三部作の冒頭で、女神アフロディテが死んだ冒険者レッシンガムをその地に受け入れることを語るだけで、あとはほとんどこの完全に愛らしい概念を発展させようとしなかった。死後、この天国のような領域に受け入れられたレッシンガムは、生まれ変わり（あるいはそれに近い体験を経て）、そこで彼女の化身のひとりに愛される恋人となる。物語の展開を明確に掴（つか）むこ

とは難しいし、また読み通すことも容易ではない。その上、三部作の構成と三長編同士のかかわりあいが混乱を示している。つまり作品は必ずしも順序だっていないのだ。最初の二冊は多かれ少なかれお互いに並行して物語を進めており、未完の第三作は前二冊よりも時間的に古い出来ごとを記している。

しかしE・R・エディスンは、現在稀れに見る英語散文体の名手だった。事実わたしは、数ページ読みすすめたところからマキァベリ風の権謀術数を追っていくことをきっぱり諦め、どの登場人物が誰の化身かを推理していくこともやめて、みごとな詩と中世の奇妙な伝承と、耳に珍しい異国の名とあらゆる種類の珍奇な事物や思想を散りばめた、豊かで構造の確かな絢爛たる散文に、ただわが身を任せてしまった。以下の実例は、『邪竜』にある怪物マンティコアと闘う氷河の上の場面から引いてある。

「あいつは風下からわれらの匂いを嗅ぎつけたのだ」とブランドホ・ダハは言った。少しばかり考える暇があった。眩くような断崖を横ぎる手掛かりから手掛かりを、まるで大猿が枝から枝を渡るように身軽に伝って、獣は近づいてきた。その体つきはライオンに近かったが、もっと大きく背丈もあった。赤銅色に染まり、ヤマアラシのように背中に棘があった。貌は、これ以上はないほど醜い顔をした人間のそれだ。目を剝きだし低い皺だらけの額をもち、象のような耳とライオンのそれに似たきたならしいたてがみと巨大な骨張った顎、剛毛のある唇のあいだから薄汚れた血だらけの牙が光る。そいつは峰めざしてまっ

すぐに進み、かれらが立ち向かおうと身構える隙に、かれらの頭上を人の背丈ほど跳び越す大きな弧を描いたとたん、そいつの進む方向が違ったことに気づく暇さえ与えず、ジャスとブランドホ・ダハのあいだを高く超えて峰に降り立った。ブランドホ・ダハは力強い痛撃を繰りだして、そのさそりみたいな尾を斬り裂いた。しかし獣の鉤爪がジャスの肩を襲い、ミヴァルシュを叩きつけ、獅子のようにブランドホ・ダハに飛びかかった。かれは岩場の狭い縁を踏み違えてバランスを失い、岩の上からまっ逆さまに身を投げだし、百フィート下の積雪へ落ちていった。

以上の四長編のほかに、E・R・エディスンは『強者スティルビオルン』（一九二六）と題する感動的な歴史小説を書いている。これは、ヴァイキング期の生活を描くものとしては今までに読んだなかで最も勝れた小説である。エディスンは、ウィリアム・モリスが手掛けた『エールビギョア英雄譚』（かれはこれを序文覚え書きのなかで引用している）を含むスカンジナヴィア神話から、色々な材料を引き出している。ウィリアム・モリスと同じく、かれも『エギルの英雄譚』個人訳のような直接の翻訳も幾つか手掛けている。

エディスンは後出するファンタジー作家に深遠な影響を残し、多くの熱烈な支持者を獲得した。アンソニー・バウチャーもオーヴィル・プレスコットも『邪竜』を高く評価した。ジェイムズ・スティーヴンスやブランチ・キャベル、さらにC・S・リュイスまでを含む幻想作家が法外な誉め言葉を用いてそれを称讃した。

南北戦争と海事関係を専門とするアメリカの歴史家フレッチャー・プラット（一八九七―一九五六）は、エディスンの熱烈な賛美者であり、かれから多くを学んだ。一九四〇年代にL・スプレイグ・デ・キャンプと共作したプラットは、『不条理の国』や『紅玉髄（カーネリア）の立体』のような幻想冒険譚（たん）や、ハロルド・シェイという名の若いアメリカ人科学者が北欧神話やアイルランド伝説やフィンランドの『カレワラ』、そしてアリオストの『オルランド』にかかわる世界など想像の領域を踏破する冒険を描いた三部作を、発表した。また純粋な自作では、叙事詩ファンタジーの分野で二つのすばらしい小古典（マイナー・クラシック）を書き残した。第一作であり最良の出来を示す『一角獣の泉』（一九四八）は、ウィリアム・モリスの影響（プラットはこの人物から主人公たちの名を幾つかと、おそらく『泉』の概念とを借り受けている）と、E・R・エディスン（かれの世界は、英雄譚（サーガ）を摸した散文で書かれた中世スカンジナヴィアの世界そのものといえる）およびロード・ダンセイニの影響を(3)、だれ憚（はばか）ることなく明示している。第二作めの『青い星』（一九五二）は第一作の英雄譚兼戦闘譚型式を排して、マリア・テレジア時代の十八世紀オーストリア帝国によく似た興味津々たる世界に、舞台をもとめている。

つづいてマーヴィン・ピークが登場する。かれの注目すべき三部作『ゴーメンガスト城』について言及しなければ、本章はきわめて公平を欠くものになってしまうだろう。文学上の系譜から見ればトールキンとはやや趣きを異にするとはいえ、かれの三部作は彩り豊かで想像力にあふれ、散文の名手とはいえないまでも、その視野の広さ、深さ、大きさの点で『指輪物語』に比肩し得る。

マーヴィン・ロレンス・ピークは英国の詩人であり劇作家であり小説家であり、しかも挿絵画家（『宝島』『グリム童話集』そして楽しいことに自作への挿絵も含めて）である。驚きに満ち、恐ろしく、なお美しさにあふれた『タイタス・グローン』なる小説を書き残したが、これは一九四六年に英国のアイアー＆スポッティスウッド社から初めて出版された。果てしない荒野に囲まれ、もの寂びしく荒び棄て去られた、霧に包まれた世界に、おどろくほど古く信じられぬほど巨大なゴーメンガスト城がそびえる。だだっぴろく、複雑に入り組み、大地にひろがる、腐りかけた建物。そして小説が語るところによれば、その名も知れぬ暗黒の星にある唯一の物体こそ、その建物なのだという。その内部は、もう数千年このかたゴーメンガストの伯爵が支配してきた。この小説のタイトルになった主人公タイタス自身は、いつの日か、古代石造物の巨大で腐りかけた堆積を支配する第七十七代伯爵となるはずだ。かれは第一巻の厖大なページを通じて、そこに登場する唯一の幼児である。

マーヴィン・ピークが達成したのは、閉鎖世界を構築すること、ミニチュアの世界を造ること、ならびにその巨大な城に暮らす奇妙で畸形で狡猾で醜くて血気盛んで堕落した人々数十人が織りあげる、もつれ節くれだち入り組んだ人間模様を通して、人間の性格の根源に迫ることなのだ。かれは真実、物語と呼べる筋など語りはしないけれど、登場人物それぞれがかかわりあう形態を追いもとめる。蜘蛛の巣だらけで今にも朽ち果てそうな迷路状の回廊と、黴くさい続き間と、奇怪な住人の不気味な勢揃いと、社会慣習の複雑な網目とを含んだ悪夢のような城は、読む者を捲きこみ金縛りにせずにはおかない暗く劇的で込み入った物語を展開させる舞台

を、かたち造る。

またその続編『ゴーメンガスト』は、一九五〇年に続いて出版され、どちらかといえば不出来な第三巻が一九五九年に出て三部作を完成させた。第三巻のタイトルは『タイタス・アローン』という。

ピークはおそらく、霧の立ちこめる荒野や嵐のような情熱を描くブロンテ姉妹に連らなる文学上の後継者なのだろう。しかし『城』を一瞥した限りでは、かれがカフカの末裔であることは確かだ。彩りあざやかで想像力に満ちた散文の構成、元は壮麗だった屋敷の周囲を取りまく荒れるにまかせ見る影もなく汚れすさんだ温室果樹園、それに登場人物たちの邪悪さと奇怪さを加えた特徴は、古いゴシック文学の系譜を思い起こさせるが、もちろんこれは『ドラキュラ』型の小説ではない。しかしかれが、密度の濃い陰鬱な文体にあふれる力と活気と独創性から見て、やはり強いディケンズ臭を帯びていることは否定できない。ひとことでいえば、『ゴーメンガスト』三部作は軽薄な比較では測りがたい作品、実際に読んでみなければいけない作品なのだ。バランタイン社がアメリカで初めて三部作すべてを出版している。

こうして、ウィリアム・モリスやロード・ダンセイニやエリック・リュッカー・エディスン、およびかれらから影響を受けたり現にその影響下にある作家たちは、叙事詩的英雄幻想ロマンスの系譜――あらゆる意味から『指輪物語』をその所属下に置く明確な系譜を、創りあげた。

ウィリアム・モリスが没したとき、ロード・ダンセイニは十八歳の若者であり、E・R・エデ

ィスンは十四歳の少年だった。そしてJ・R・R・トールキンはまだ四歳の幼な子だった。

原注

（1）ジョージ・バーナード・ショオはこれを指して「ホメロス以来の大叙事詩」と呼んだ。ショオが評したほど傑作ではないにしろ、今日でも読む値打ちのある佳作ではある。モリスはまた長大な詩編ロマンス『イヤソンの生涯』（一八六七）を書いたが、これはロードス島のアポロニオスの『アルゴナウティカ』以来最大の金羊毛探索物語の再話である。かれは『オデュセイア』の英訳をも行なっている。

（2）ちなみに、エディスンはこの主人公の名を、ウェルギリウスの『アエネイアス』第八巻に登場する脇役から借りている。トゥスカンの前王である退位した暴君メゼンティウスは、アエネアスの敵と同盟を結ぶようだが、後になってトロイア戦争の折りに戦死してしまう。

（3）序文のなかでプラットは、かれの世界がロード・ダンセイニの戯曲『アルギメネス王と無名兵士』に描かれる世界のわずか数世代ほど下がった時期に当たっていることを、説明している。

あとがき――トールキン以後

ロード・ダンセイニを指して、今世紀前半にあって最も大きな影響を与えたファンタジー作家だとしたL・スプレイグ・デ・キャンプの意見が正しいなら、後半にあって、最も大きな影響を作家たちに与えたのはJ・R・R・トールキンということになるだろう、とわたしは確信する。

イギリスやアメリカでは、数多くの若い作家たちがトールキンの影響をしめす作品を出版しはじめている。こうした人々のうち最も早く世に出たのはキャロール・ケンダルで、一九五九年に『ガメージ・カップ』Gammage Cupと題する児童向けファンタジーの長編を発表した。『ホビットの冒険』から受けた影響[1]は、かなり大きいように見える。ケンダル女史は、高い山々に取り囲まれた自然の要塞(ようさい)のごとき田園の谷間に建つ風変わりな家を栖(すみか)とする、ホビットによく似た小人たちの物語を語る。これらの山々には、かれらの旧敵――吐き気を催すような鬼そっくりの生きものが住んでおり、そのために小さな民族はかれらの手を遁(のが)れて谷間に避難場所をもとめたのだ。その鬼みたいな旧敵が近ごろうるさく動きだしたことから、五人の英雄から成る探検隊が山々に送りこまれる。英雄たちは、敵が近づくと鋭い光を放つ魔法の剣を携えている――この辺はともにいかにもトールキンを思わせるではないか。さらに続編『グロッ

ケンの囁き』（一九六五）でケンダル女史は、巨大で残忍でオーク鬼に似たハルクと呼ばれる民族との闘いに英雄たちを巻きこむ宝石の探索について、物語る。

アラン・ガーナーの著書『ブリジンガメンの魔法の宝石』（一九六〇）は、さらに『指輪物語』の影響を受けたものと覚しい。ピクトや北欧＝英国の伝承から素材を得て、ガーナーは、賢明で年老いた妖術師カデリンと偉大な闇の精霊ナストロンドとのあいだに戦われる英雄的で興奮を喚ぶ大闘争の物語をかたる。その続編『ゴムラスの月』（一九六三）においてガーナーは、背景となる神話としてウェールズやゲールや高地スコットランドの伝承を利用する。これら二つの長編は独創的な生きもの——怪物や、高貴で勇敢なエルフ兵士などに満ちあふれており、熱狂的な読者を獲得している。同じ作者の手になる第三作『エリダー・黄金の国』（一九六五）は、先行の作品となんら関係がないけれど、それでも魔法の半世界とわれらが地球とのあいだを旅する一幕を含んだファンタジーになっている。

トールキン教授の影響をはっきり示す近作長編のうちで最良のものは、おそらく、アメリカ作家ロイド・アリグザンダーの書いたプリディン物語だろう。五冊に及ぶかれのすばらしい、良く書きこまれたウェールズ風の別世界プリディンに関するファンタジーは、『タランと角の王』（一九六四）の出版から出発した。その本が物語の主人公タランを紹介した。かれはそのときまだ幼な子であり、力強く慈愛にあふれた魔法使いに師事している。[2] 続編の『タランと黒い魔法の釜』（一九六五）、『タランとリールの城』（一九六六）のなかで、わたしたちは若者に成長したタランをみつける。シリーズの最終二巻『旅人タラン』（一九六七）と『タラン・新

しき王者』（一九六八）には、成人したかれが登場する。

アリグザンダーは、まだ学者がほとんど手をつけていない分野であるウェールズの神話的な言い伝えに、きわめて深くかかわってきた。かれの主だった資料は、もちろんウェールズ神話の中心になる偉大な原典『マビノギオン』だ。これは世界の名編のひとつに数えられている。アリグザンダーの主人公たちは、この想像力が産んだ中世初期の世界を危険を冒して横断し、邪悪な魔法使いや怪物や残忍な無法者や盗賊や、魔女や鬼女と対決する。かれらは魔法の宝をもとめる。妖精の領域に敢えて足を踏みいれ、ドワーフ小人やそのほか驚くほど風変わりな巨人を含む奇妙な生きものと渡りあう。かれの物語が単なる〝トールキン風〟を脱したものになっているのは、アリグザンダーの作家としての手腕を示す尺度になるだろう。かれは教授の影響を吸収し消化したあと、どの方向にもかれ自身が持って生まれた想像の才を捺しあてた物語を創りだした。プリディン物語は、きわめて熱烈でしかも数多い賛同者を得たが、これはまさしく作品の出来にふさわしい。

わたしの知る範囲では、トールキンの影響を表わした完全に成人向け叙事ファンタジーは、いまのところ発表されていないようだ。しかしわたしは少なくとも、その分野に挑んで制作にはげんでいる二人の作家を知っている。そしてわたし自身も、断続的にではあるがここ十数年を費やして、モリス＝ダンセイニ＝エディスン＝トールキンの系譜に連らなる厖大な長さの叙事ファンタジーと取り組んでいる。まったくいつ完成していつ出版されるものやら見当もつかないけれど、もしも日の目を見ることになれば、それは『キミリウム、獅子王アヴィアアサール

の到来から運命王スフェリデイオンの逝世に至る百王の市』と題されるはずだ。

原注

（1）わたしはいつも疑問に思うのだが、『ホビットの冒険』それ自体も、詩人ウォルター・デ・ラ・メアが書いた奇妙だけれど愛らしい児童向けファンタジー『三匹の高貴な猿』に、影響を受けたのではないだろうか？　同書はトールキンが十八歳だった一九一〇年に初めて出版された。デ・ラ・メアが描く三匹の主人公——好奇心が強くて、一風変わった小さな生きものたちは——ムンザの森に住んでいる。そこの人々はヌーマノッシやら影の女王インマナーラといった奇妙な神性を畏れ敬っている。著者は、ママスルやイムパレーナといった見知らぬ動物を語り、竜の樹やサマラクの蔓やオラコンダや地中の猿、さらに「手探りして進み、ものを貪り食う地中の食人鬼」など、見たこともない生きものについて語る。三匹の英雄はティシュナー谷の王アサシムモンの末裔である。かれらは光り輝く乳白色の石「ティシュナーの魔法石」を携え、遠い領域への危険で不思議な探索に出発する。多くの危険がふりかかる。アラカボア山脈の七つの峰を越える際に、かれらは獰猛な鷲に襲われる。主人公の一匹が、怪物じみた野蛮なオオムガーに捕えられ、しばら

く奴隷にされてしまう。かれらは毛むくじゃらの巨大な山ザルに出食わし、雪狼に追いかけられる。最後の場面ではティシュナーの境界まぎわに立つ奇怪な湖の女が甘言を用いて巧みに取り入り、魔法石を所有者から奪い取ってしまう。この物語と『ホビットの冒険』とのあいだに見える類似点は、ただし筋立てや背景になる神話とのかかわりにあるというよりも、むしろ詩と歌に満ち造語による言葉や語句を散りばめた朗々たる魔法のようなデ・ラ・メア氏の散文にかかわる、そのスタイルや成り立ちにある。

（2）　ロイド・アリグザンダーはわたしにこういった。かれはトールキンとT・H・ホワイトの両方から同じように影響を受けている、と。『タランと角の王』はたしかに『石のなかの剣』（T・H・ホワイトが書いたアーサー王若かりしころの冒険物語）とよく似ている。その本では、若者ワートが魔法使いマーリンに鍛えられる。

解説

いま世界中で読まれている長編ファンタジー『指輪物語』の世界へいざなう小さな案内書をおとどけします。本書「ロード・オブ・ザ・リング『指輪物語』完全読本」は原題を"TOLKIEN : A Look Behind the Lord of The Rings" (1969, Ballantine) といい、著者リン・カーターはSFと冒険ファンタジーの分野で精力的に活動したアメリカの作家です。

リン・カーターはフル・ネームをリンウッド・ヴルーマン・カーター (Linwood Vrooman Carter) といって、一九三〇年の生まれですが、学生時代から怪奇小説の熱烈なファンとして知られていました。とくにアメリカの怪奇小説専門出版社アーカム・ハウスの創立二十周年記念に出版された『閉ざされた部屋』(一九五九) に収録されたラヴクラフト論は好評で、しばらくはアマチュア出版にラヴクラフトやハワードの研究論文を発表していました。しかし、ソンガーという英雄を主人公とした冒険ファンタジーの連作を執筆して小説家に転身したのは一九六五年ごろからで、このソンガー・シリーズは早川書房のSF文庫に関口幸男氏の翻訳で収められています。小説家となって名のあがったカーターは、しかし、昔からつづけてきた怪奇幻想文学研究への愛着を捨て切れず、たまたま

『指輪物語』やE・R・エディスンの『邪竜ウロボロス』を出版してファンタジーに意欲を示しだした中堅SF出版社バランタイン社のお声がかりで、一九六九年から「アダルト・ファンタジー」叢書という復刻シリーズ（後には新作も収められますが）の監修にたずさわることになりました。これが、今日アメリカに定着したファンタジー熱を支える力の一端になったことは否定できません。なぜなら、それまで長らく絶版を余儀なくされていたJ・B・キャベルやジョージ・マクドナルドやロード・ダンセイニらの「幻の名作」が容易に手にはいるようになったのですから。そして本書は、「アダルト・ファンタジー」叢書を創立させたカーターが執筆した、同叢書の別巻ともいうべき手引き書群のうちの一冊、それも最初の一冊にあたります。

（ちなみに、カーターはその後ファンタジーに関する研究書を二冊出しています。
Lovecraft : A Look Behind the "Cthulhu Mythos" (1972, Ballantine)
Imaginary Worlds : The Art of Fantasy (1973, Ballantine)
がそれです）

ところで、本書をひろげているあなたは、当然ながら『指輪物語』とファンタジーを愛するかたにちがいありません。けれどそれは、別にあなただけに限られた現象ではないのです。その証拠にファンタジー、あるいは近年アメリカで主に商策上の理由から採用された言葉を用いれば「アダルト・ファンタジー」は、今日ほとんど世界中の人々に読まれて

いるのですから。それも、従来みられた「逃避文学」とか「児童文学」という、どちらかといえば軽蔑をこめた概念に対する新しい解放をともなって、ファンタジーが有する特別な機能に注目しながら。それにしても、どうしてこんなに急にファンタジーがもてはやされることになったのでしょうか？　たとえばわが国では、成人向けのファンタジーは必ずといっていいほど成功しない、という神話が出版関係者のあいだに囁かれていたほどだったのです。でもそうだからといって、わが国にファンタジーのすぐれた紹介者が存在しなかったわけではありません。ダンセイニやフィオナ・マクラウドなどアイルランド産の幻想小説や戯曲を翻訳した松村みね子氏や、デ・ラ・メアの詩をはじめアルジャナン・ブラックウッドの超自然小説までを紹介した西條八十氏、英国ロマン派の研究者日夏耿之介氏、シュペルヴィエルやドレームらのフランス産ファンタジーを盛んに紹介した堀口大學氏、児童文学畑では巌谷小波氏や「マザー・グース」を翻訳した北原白秋氏ら、ちょっと挙げただけでもファンタジーの先達は十指に余ります。そして何よりも重要なのは、そうした別世界の文学に耳を傾ける読者と、美しい愛蔵本として出版することに熱意を燃やす出版社とが、少ないながら現実に存在していたことなのです。

　それが（おそらく欧州各国の場合にもそうだったのでしょうが）、両次の世界大戦によって急激に事情を一変させることになりました。これらの災禍は、本質的に個人的な活動を頼りにしてきたファンタジー界の紹介者と出版社と読者の側それぞれに、回復できぬ犠牲を強いたのです。物質面ばかりでなく、精神面にとっても、この時代は退行と停滞に甘

んじなければなりませんでした。そういうわけですから、現在ぼくたちの前に現われたファンタジー熱は、「回復（リストレーション）」あるいは「復活」と呼ばれなければなりません。ぼくたち新しい世代が発見したと信じていたファンタジーが実は過去の日本で熱心に語られていた事実を、ぼくたちは「忘れていた」だけだったのです。

　ひるがえって、アメリカやイギリスなどファンタジーの本場でも、環境的には日本と同じ危機に直面しました。ファンタジーに美しい挿絵を配して美本を製作してきた英国の出版社は、色彩印刷の技術ばかりでなく、英国外の国籍をもっていた挿絵画家のすべて――ウィリー・ポガニーやカイ・ニールセンなどの大物もふくめて――を失いました。ただ英米では、その記憶までが失われることがなかったのです。おかげでその分だけ、新世代への引き継ぎは早まりました。本書「ロード・オブ・ザ・リング『指輪物語』完全読本」は、戦後世代によるファンタジー再発見のそんな一例と考えていいと思います。

　さて、本書「ロード・オブ・ザ・リング『指輪物語』完全読本」は古今の作家たちが作りあげてきた別世界と『指輪物語』との〈通底器〉――いわば血縁関係を立証し、同時に『指輪物語』型ファンタジー全般の案内書たるをめざしたものです。内容は平易で楽しいものですから、それについて言を重ねる無駄は省きたいと思いますが、本文でリン・カーターが行なったような「名前さがし」や「原典さがし」の愉（たの）しみは、これで尽きているわけではありません。言い替えればリン・カーターが味わったのと同じ歓（よろこ）びは、依然としてぼくたちにも保障されているのです。その証拠に、たとえばぼくたちはホビットの歴史

に語られる英雄エアレンディルの古名エヴァンデル（流星を意味するゲール語をもととしています）の名を、スウィフトの『書物戦争』（岩波文庫）のなかにみつけることができます。そこには、デカルトやホッブスなど「近代の書物」軍が射出す箭が「エヴァンデルのごとく流星と化し、或は砲戦のごとく星とな」ったと描写されていますし、カーターが語っているヨーロッパの謎の妖精族トゥアハ・デ・ダナーン族についての文章を、思いがけなくもわれらが稲垣足穂氏の作品にみつけたりもします。足穂氏はエッセイ『金色の龕』のなかで「Tuatha de Danann 一族がアイルランドに上陸したのは、ノアの孫娘 Cessair, Partholon, Nened, Fir Domnann, Fir Bolg らが相次いで渡来し、あるいは疫病に、あるいは巨人族 Fonor のために全滅したあとだった」と書き、二ページにもわたって古代インドのアシュラ族どの比較も加えながら妖精族の歴史を語っています。もちろん、こうした思いがけない発見は、『指輪物語』を愛するあなたの歓びを倍にしてくれるでしょう。

もっとも、本書に不満がないとはいえません。たとえばカーターは、『指輪物語』に物語以上の意味も以下の意味も持たせようとしていません。そのために、トールキンが狙った「物語のための物語」の真の効用について、それが逆説的に物語以上の機能――社会一般にブームをまき起こすことなど――を果たすことになった結果を考えにいれそこないました。その意味でカーターの作品は、専門文献としても啓蒙書としてもどっちつかずの感じを抱かせるかもしれません。事実かれは、本書のあと出版したファンタジー論のなかで

「宗教システムがないことが『指輪物語』の欠陥だ」と書いて反論されたりもしました。そしてもう一点、ファンタジーの源流を論じるのなら騎士道ロマンスやヨーロッパの異教的伝統、それもとりわけ「妖精」と呼ばれる存在の解明にも筆を伸ばしてほしかったと思います。そもそも『指輪物語』は、カーター自身も指摘するとおり、「妖精のカタログ」なのですから。けれど、それがただちに基本図書としての本書の楽しさを減じてしまうわけではありません。むしろその楽しさを倍加させるために、本文で論じられている種々のファンタジーや、それに関連する古典のうち翻訳で読めるものに目を通すことが肝要なのではないでしょうか。

なお、リン・カーターは一九八八年に惜しくも亡くなりました。享年は五十八歳だといいますから、残念なことです。

最後に、本書にかかわりのある作品のうちで現在入手できるものを挙げておきます。

（訳者）

a　一般参考文献

①J・R・R・トールキン『ファンタジーの世界』猪熊葉子訳、福音館書店
②T・ブルフィンチ『ギリシャ・ローマ神話——伝説の時代』大久保博訳、角川文庫

③T・ブルフィンチ『中世騎士物語——騎士道の時代』野上弥生子訳、岩波書店
④C・S・ルイス『愛とアレゴリー——ヨーロッパ中世文学の伝統』玉泉八州男訳、筑摩書房
⑤猪熊葉子、神宮輝夫共著『イギリス児童文学の作家たち——ファンタジーとリアリズム』研究社出版
⑥ポール・アザール『本・子ども・大人』矢崎源九郎・横山正矢訳、紀伊國屋書店
⑦荒俣宏『別世界通信』筑摩書房

b　古典関係

①ホメロス『オデュッセイアー』呉茂一訳、岩波文庫（全二冊）
②ホメロス『イリアス』松平千秋訳、岩波文庫（全二冊）
③『ニーベルンゲンの歌』相良守峯訳、岩波文庫（全二冊）
④セルバンテス『ドン・キホーテ』牛島信明訳、岩波文庫（前編三冊、後編三冊）
⑤マロー・ププリウス・ヴェルギリウス『アエネーイス』泉井久之助訳、岩波文庫（全二冊）
⑥『ベーオウルフ』忍足欣四郎訳、岩波文庫
⑦V・G・ネッケル『エッダ』谷口幸男訳、新潮社

⑧『中世文学集』筑摩書房「世界文学大系」所載、「アーサー王物語」などを収める。
⑨フェルダウスィー『王書（シャー・ナーメ）』黒柳恒男訳、大学書林
⑩エドマンド・スペンサー『妖精の女王』和田勇一・福田昇八訳、筑摩書房

C 創作ファンタジー

①J・R・R・トールキン新版『指輪物語』全九冊。瀬田貞二・田中明子訳、評論社文庫
「旅の仲間」（全四冊）
「二つの塔」（全三冊）
「王の帰還」（全二冊）
②J・R・R・トールキン『ホビットの冒険』瀬田貞二訳、岩波書店
③J・R・R・トールキン『トールキン小品集』吉田新一他訳、評論社
④J・R・R・トールキン『シルマリルの物語』田中明子訳、評論社
⑤アラン・ガーナー『ゴムラスの月』久納泰之訳、評論社
⑥アラン・ガーナー『エリダー・黄金の国』滝口直太郎訳、評論社
⑦ロイド・アリグザンダー『プリディン物語』神宮輝夫訳、全五巻。評論社
「タランと角の王」
「タランと黒い魔法の釜」

「タランとリールの城」
「旅人タラン」
「タラン・新しき王者」（他に別巻二冊あり）
⑧ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』脇明子訳、岩波少年文庫
⑨ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』岡田忠軒訳、角川文庫
⑩ケニス・グレアム『ヒキガエルの冒険』（『たのしい川べ』）石井桃子訳、岩波書店
⑪デ・ラ・メア『三匹の高貴な猿』（『箒の柄』所載）脇明子訳、国書刊行会「世界幻想文学大系」
⑫J・M・バリー『ピーターパン』厨川圭子訳、岩波少年文庫
⑬ジョージ・マクドナルド『リリス』荒俣宏訳、ちくま文庫
⑭C・S・リュイス『沈黙の惑星を離れて』中村妙子訳、原書房
⑮チャールズ・ウィリアムズ『万霊節の夜』蜂谷昭雄訳、国書刊行会「世界幻想文学大系」
⑯ウィリアム・モリス『世界のかなたの森』小野二郎訳、晶文社「文学のおくりもの」
⑰P・L・トラヴァース『風にのってきたメアリー・ポピンズ』林容吉訳、岩波書店
⑱P・L・トラヴァース『帰ってきたメアリー・ポピンズ』林容吉訳、岩波書店
⑲P・L・トラヴァース『とびらをあけるメアリー・ポピンズ』林容吉訳、岩波書店
⑳P・L・トラヴァース『公園のメアリー・ポピンズ』林容吉訳、岩波書店

㉑メアリー・ノートン『床下の小人たち』林容吉訳、岩波書店
㉒メアリー・ノートン『野に出た小人たち』林容吉訳、岩波書店
㉓メアリー・ノートン『空をとぶ小人たち』林容吉訳、岩波書店
㉔メアリー・ノートン『川をくだる小人たち』林容吉訳、岩波書店
㉕C・S・ルイス『ナルニア国ものがたり』瀬田貞二訳、全七巻。岩波書店
「ライオンと魔女」
「カスピアン王子のつのぶえ」
「朝びらき丸東の海へ」
「銀のいす」
「馬と少年」
「魔術師のおい」
「さいごの戦い」
㉖フランク・ボーム『オズの魔法使い』佐藤高子訳、ハヤカワ文庫
㉗フランク・ボーム『オズのオズマ姫』佐藤高子訳、ハヤカワ文庫
㉘フランク・ボーム『オズの虹の国』佐藤高子訳、ハヤカワ文庫
㉙フランク・ボーム『オズのエメラルドの都』佐藤高子訳、ハヤカワ文庫
㉚E・R＝エディスン『邪竜ウロボロス』山崎淳訳、月刊ペン社「妖精文庫」（後に『ウロボロス』として東京創元社より再刊）

㉛H・R・ハガード『洞窟の女王』大久保康雄訳、創元推理文庫
㉜R・E・ハワード『コナン』団精二、鏡明訳、全六巻。ハヤカワSF文庫
「冒険者コナン」
「風雲児コナン」
「狂戦士コナン」
「不死鳥コナン」
「大帝王コナン」
「征服王コナン」（他に別巻二冊あり）

リン・カーター／Lin Carter (Linwood Vrooman Carter)

1930年、アメリカ生まれ。1959年に発表した「ラヴクラフト論」で評論家として、また1965年から始まった冒険ファンタジー「ソンガー・シリーズ」で小説家としての地位を固める。1988年没。

荒俣宏／あらまたひろし

1947年、東京生まれ。慶應義塾大学卒。膨大な知識を駆使して、古代文明からサイバー・カルチャーまで多岐なジャンルにわたる文筆活動を展開。『帝都物語』（角川文庫）で一世を風靡（ふうび）する。風水ブームを巻き起こした〝シム・フースイ〞シリーズ（角川ホラー文庫）、ホラーの聖典（バイブル）と名高い『ホラー小説講義』（角川書店）、また安倍晴明を主人公とした『夢々　陰陽師鬼談』、水木しげる氏、京極夏彦氏等と共に執筆した季刊『怪』（角川書店）などが好評。

本書は一九七七年に刊行された『トールキンの世界』（晶文社）を改訳・改訂し、加筆したものである。

ロード・オブ・ザ・リング

『指輪物語』完全読本

リン・カーター＝著

荒俣 宏＝訳



角川文庫 12354

平成十四年二月二十五日　初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集部(〇三)三二三八—八五五五

　　　営業部(〇三)三二三八—八五二一

〒一〇二—八一七七

振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——旭印刷

製本所——e—Bookマニュファクチュアリング

装幀者——杉浦康平

Printed in Japan

カ 10-1　　ISBN4-04-290101-8　C0198

ロード・オブ・ザ・リング

『指輪物語』完全読本

リン・カーター［著］
荒俣 宏［訳］





カ
10-1
Y571

リン・カーター
ロード・オブ・ザ

TOLKIEN:A Look Behind the Lord of the Rings





9784042901013
1920198005719
ISBN4-04-290101-8
C0198 ¥571E
定価：本体571円（税別）

世界を破壊し悪の支
変えてしまう一つの
魔力を滅ぼすために
人の仲間とともに、
指輪を捨てる旅に出
た。頼れるのはたっ
仲間への信頼と友情
亡から救うために、
たちの、長く壮大な
すべての現代ファン
してロールプレーイ
ムの原点『指輪物語
大なストーリーを読
に、エッセンスとポ
かりやすく記した、
ガイドブックの決

ロード・オブ・ザ・リング

『指輪物語』完全読本

リン・カーター［著］
荒俣 宏［訳］



LIN CARTER
TOLKIEN
A LOOK BEHIND THE LORD OF THE RINGS

角川文庫



カ
10-1
Y571

リン・カーター
ロード・オブ・ザ・リング
『指輪物語』完全読本
角川文庫

TOLKIEN:A Look Behind the Lord of the Rings





ISBN4-04-290101-8

C0198 ¥571E

定価：本体571円(税別)

世界を破壊し悪の支配する場に変えてしまう一つの指輪。この魔力を滅ぼすためにフロドは8人の仲間とともに、命を懸けて指輪を捨てる旅に出る決意をした。頼れるのはたったひとつ——仲間への信頼と友情。世界を滅亡から救うために、9人の仲間たちの、長く壮大な旅が始まる…。すべての現代ファンタジー、そしてロールプレーイング・ゲームの原点『指輪物語』。その膨大なストーリーを読み解くために、エッセンスとポイントをわかりやすく記した、『指輪物語』ガイドブックの決定版!!

リン・カーター
Lin Carter（Linwood Vrooman Carter）

1930年、アメリカ生まれ。1959年に発表した「ラヴクラフト論」で評論家として、また1965年から始まった冒険ファンタジー「ソンガー・シリーズ」で小説家としての地位を固める。1988年没。

荒俣 宏（あらまた ひろし）

1947年、東京生まれ。慶應義塾大学卒。膨大な知識を駆使して、古代文明からサイバー・カルチャーまで多岐なジャンルにわたる文筆活動を展開。『帝都物語』（角川文庫）で一世を風靡する。風水ブームを巻き起こした“シム・フースイ”シリーズ（角川ホラー文庫）、ホラーの聖典（バイブル）と名高い『ホラー小説講義』、また安倍晴明を主人公とした『夢々 陰陽師鬼談』、水木しげる氏、京極夏彦氏等と共に執筆した季刊『怪』（以上角川書店）などが好評。

